鳥取県教育文化財団調査報告書 64

一般国道３１３号道路改良事業に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書

鳥取県東伯郡北条町

島古墳群
米里三ノ嵜遺跡
北尾釜谷遺跡
（北尾古墳群）

２０００

財団法人 鳥取県教育文化財団

鳥取県教育分化財団調査報告書 ６４

一般国道３１３号道路改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

鳥取県東伯郡北条町

『島古墳群・米里三ノ宮遺跡　北尾釜谷遺跡（北尾古墳群）』　　２０００　鳥取県教育文化財団

正　誤　表

頁　行	誤	正
P.7・8　Fig3 上・中央図	スケール目盛り　10m	20m
〃　C調査区	図内右上　X1	SX1
P.35　右下図	キャプションなし	Fig.42　SX1墓壙平面図
P.39　Fig.48	右端図	上下逆
P.56　上図	キャプションなし	Fig.14　SK4・10遺構図
P.59　左上図	キャプションなし	Fig.20　SK8遺構図
〃　右上図	キャプションなし	Fig.21　SK12遺構図
P.62　左上図	キャプションなし	Fig.27　SK9遺構図
〃　右上図	キャプションなし	Fig.28　SK11遺構図
〃　右中央図	キャプションなし	Fig.30　SK9出土遺物実測図
P.67　上図	キャプションなし	Fig.8　25号墳遺構平面図

島古墳群５号墳

米里三ノ嵩遺跡

鳥取県教育文化財団調査報告書 64

一般国道３１３号道路改良事業に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書

鳥取県東伯郡北条町

島古墳群
米里三ノ嵜遺跡
北尾釜谷遺跡
(北尾古墳群)

２０００

財団法人 鳥取県教育文化財団

序

北条町は北に日本海を望み、海岸には北条砂丘、東には天神川があり、西には大山を望む自然環境に恵まれた町であります。また、天神川により形成された北条平野には縄文遺跡で有名な島遺跡のほか、米里からは袈裟襷文をもつ弥生時代の銅鐸が出土しています。そして、丘陵には曲(まがり)や土下(はした)をはじめとする県内でも有数の古墳密集地があり、当時の歴史を考えるうえでも大変貴重な資料があります。

当財団では鳥取県の委託を受け、一般国道313号道路（北条倉吉道路）改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査として、北条町内の島古墳群、米里三ノ嵜遺跡、北尾釜谷遺跡（北尾古墳群）の発掘調査を行いました。この国道は北条町で一般国道９号（北条バイパス）から分岐し、倉吉市および関金町を通り、犬挟トンネルを抜けて岡山県にいたる、鳥取県中部を横断する地域高規格道路として、整備が急がれているところです。

発掘調査では、島古墳群で新たに確認した古墳も含め８基の古墳と埋葬施設について、米里三ノ嵜遺跡では、弥生時代から古墳時代にかけての住居跡、貯蔵穴などについての調査を行いました。また北尾釜谷遺跡（北尾古墳群）では新たに４基の古墳や埋葬施設などを確認することができました。

今回、これらの調査結果を報告書にまとめることができましたが、本報告書が教育および学術研究のため広く活用され、郷土の歴史を解き明かしていく一助になることを期待するとともに、埋蔵文化財に対する理解や認識がより深まれば幸いです。

最後に、鳥取県土木部、鳥取県倉吉土木事務所及び調査にご協力いただいた方々に心から感謝し、厚く御礼申し上げます。

平成12年３月

財団法人　鳥取県教育文化財団

理事長　有　田　博　允

例　　言

1．本書は、一般国道313号の道路改良事業に伴う島古墳群・米里三ノ嵜遺跡・北尾釜谷遺跡（北尾古墳群）の埋蔵文化財発掘調査報告書である。北尾釜谷遺跡については、遺跡名に（北尾古墳群）を付した。

2．本報告書に収載した遺跡の所在地は、以下のとおりである。

島古墳群　A区…東伯郡北条町島字岩山910－1、916－15～21、911－1、912－1・2

B区…字岩山912－3・4、916－24

C区…字岩山915、916－30～32、916－34、918

米里三ノ嵜遺跡…東伯郡北条町米里字三ノ嵜616－1、616－5

北尾釜谷遺跡（北尾古墳群）…東伯郡北条町北尾字釜谷713－1・5～7・9・11・28・29・32

3．本調査は、鳥取県の委託により、財団法人鳥取県教育文化財団（中部埋蔵文化財北条調査事務所）が平成11年度に行った。

4．本報告書で示すX、Yの数値は国土座標第V系の座標値である。グリッドを表すのは北西隅の杭である。なお、方位はいずれも座標北を使用した。

5．本報告書で示す基準となる標高は、以下のとおりである。

島古墳群　…KBM.1、H＝14.591　コテイ：1、H＝29.495

米里三ノ嵜遺跡…T11－5、H＝25.518

北尾釜谷遺跡（北尾古墳群）…KBM.5、H＝33.750

6．本報告書に記載の地形図は、国土地理院発行の1/50000「倉吉」（昭和48年測量、平成5年修正測量）、1：10000「北条町管内図」を使用した。

7．島古墳群（島5号墳埋葬施設・島7号墳第二埋葬施設）の人骨の取り上げ・鑑定を鳥取大学医学部井上貴央教授にお願いしたところ、多忙にも関わらず御寄稿いただいた。

8．島古墳群（島7号墳第一埋葬施設）出土の鉄刀に付着した繊維の分析を奈良国立文化財研究所の佐藤昌憲氏と高妻洋成氏にお願いしたところ、多忙にも関わらず御寄稿いただいた。また北尾釜谷遺跡SK6出土の土師器甕口縁部内面の黒色付着物質の分析をお願いしたところ、分析結果を御教示いただいた。

9．棺材および石器の石材鑑定を鳥取大学の赤木三郎名誉教授にお願いし、鑑定結果を御教示いただいた。

10．出土遺物の写真については、奈良国立文化財研究所の牛島茂氏と杉本和樹氏にお願いした。

11．北尾釜谷遺跡SD2出土の炭化物の^{14}C年代測定を業者に委託した。

12．図面、写真等は鳥取県埋蔵文化財センターに保管されているが、出土遺物については北条町教育委員会に移管される。

13．報告書の作成は、調査員が協議のうえ分担して行い、目次に執筆者の氏名を記した。

14．現地調査および報告書の作成に当たって、下記の方々に御指導・御協力を頂いた。

青木勘時　金子裕之　肥塚隆保　三田敦史　清水直樹　谷岡陽一　西尾克己　根鈴智津子　和田晴吾

（五十音順、敬称略）

凡　　例

1．発掘調査時の遺構番号と報告書記載の遺構番号は一致するが、北尾釜谷遺跡における以下のものは変更した

調査時	報告書	調査時	報告書	調査時	報告書
ＳＸ１	ＳＤ２	ＳＸ４	ＳＫ５	ＳＸ７	ＳＸ２
ＳＸ２	ＳＸ１	ＳＸ５	ＳＫ６	ＳＸ８	ＳＸ３
ＳＸ３	ＳＫ４	ＳＸ６	ＳＫ７		

2．本報告書における遺構番号は次のように表わす。

ＳＩ：竪穴住居跡　ＳＸ：古墳以外の埋葬施設　ＳＫ：土坑・袋状土坑　ＳＡ：柵跡　ＳＤ：溝状遺構

Ｐ：柱穴・ピット

3．本報告書における遺物の実測図は下記の縮尺で掲載した。

土器：1/4　金属製品：1/2・1/4　石製品：1/1・1/4

4．遺構の測定値のうち、古墳墳丘の規模は墳裾までの計測値、竪穴住居は壁溝を除いた床面の規模を示す。

5．遺構面における表示は以下のとおりである。

土製品：●　　鉄製品：▲　　石製品：■

6．本報告書における遺物記号は次のように記す。

番号のみ：土器　Ｓ：石器　Ｆ：鉄製品　Ｍ：鏡

7．土器実測図のうち、須恵器は断面黒塗りで表現した。なお遺物実測図中における記号は以下のとおりにする。

→：ケズリの方向（砂粒の動きで判断した）、……：擦り範囲

8．遺跡名には略号を用いた。島古墳群は「シマ」、米里三ノ嵜遺跡は「米三」、北尾釜谷遺跡（北尾古墳群）は「北カマ」である。

遺物には、遺跡名略号、遺構名、取り上げ番号、取り上げ年月日を基本的に明記した。実測した遺物については、実測者番号をシールに記し、それを個体毎に貼り付け、実測原図にもその番号を記した。

9．遺物観察表については以下のとおりとする。

(1)　実測の際に復元した値には※、残存値には△を記した。

(2)　手法の欄に記載されている成形・調整および施文の方向は実測図で表わされた方向である。

(3)　色調については農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『標準土色帳』に基づく。

10．文章中で触れる土器型式名および年代（年代観）は、次のものを参考にした。

弥生土器・土師器…南谷大山編年（鳥取県教育文化財団調査報告書36『南谷大山遺跡II　南谷29号墳』1994）

なお、本文中に記載している弥生土器とは南谷大山IV期以前、土師器は南谷大山Ｖ期以降のものを指す。

天神川編年（鳥取県教育文化財団調査報告書61『長瀬高浜遺跡　園第６遺跡』1999）

須恵器……陶邑・田辺編年（田辺昭三『須恵器大成』　角川書店　1981）

目　　次

序
例　　言
凡　　例
目　　次
挿図目次
挿表目次
図版目次

第１章　調査の経緯 ……八峠　興…… 1
　1　調査に至る経緯 …… 1
　2　調査の経過と方法 …… 1
　3　調査体制…… 2

第２章　位置と環境 ……八峠　興…… 4

第３章　島古墳群の調査 ……岡野雅則…… 6
　1　島古墳群の概要 …… 6
　2　発掘調査の成果
　(1)　Ａ調査区の調査
　　５号墳…… 9
　　９号墳…… 18
　　10号墳…… 21
　　11号墳…… 21
　(2)　Ｂ調査区の調査
　　８号墳…… 22
　(3)　Ｃ調査区の調査
　　７号墳…… 24
　　７号墳周辺の埋葬施設（ＳＸ１～４・８）…… 35
　　12号墳…… 41
　　ＳＸ６…… 42
　　13号墳…… 43
　　ＳＸ５…… 44
　　ＳＤ１…… 45

第４章　米里三ノ嵜遺跡の調査 ……八峠　興…… 46
　1　調査地の概要 …… 46
　2　発掘調査の成果
　(1)　住居跡…… 46

(2) 袋状土坑…… 54
(3) 土坑…… 60
(4) 遺構外出土遺物…… 61

第５章　北尾釜谷遺跡（北尾古墳群）の調査

1　北尾古墳群の概要 ……岡野雅則…… 63
2　発掘調査の成果
(1) 古墳
24号墳……岡野雅則…… 65
ＳＫ２…… 66
25号墳…… 66
26号墳……八峠　興…… 69
27号墳…… 71
(2) 古墳以外の埋葬施設…… 74
(3) 土坑…… 74
(4) 溝状遺構…… 80
(5) 畝状遺構…… 81
(6) 柵跡…… 81
(7) ピット群…… 83

第６章　考察

1　鳥取県内における同棺複数埋葬について ……岡野雅則…… 84
2　弥生時代の集落内における貯蔵穴の役割 ―東伯耆を中心として― ……八峠　興…… 88
3　島古墳群５号墳と７号墳から検出された人骨について……井上貴央…… 94
4　島７号墳第１埋葬施設出土鉄剣に付着した布痕の調査
……高妻洋成・佐藤昌憲…… 99
5　鳥取県、北尾釜谷遺跡における放射性炭素年代測定……株式会社古環境研究所…… 102

ＰＬＡＴＥ（図版）

報告書抄録

挿　図　目　次

Fig. 1　調査区位置図　3

Fig. 2　周辺遺跡分布図　5

島古墳群

Fig. 3　島古墳群調査前全体図　7・8

Fig. 4　A・C調査区遺構全体図　7・8

Fig. 5　5号墳調査前平面図　9

Fig. 6　5号墳盛土除去後平面図　10

Fig. 7　5号墳墳丘・周溝土層断面図　11

Fig. 8　5号墳遺構平面図　12

Fig. 9　5号墳埋葬施設墓壙平面図　12

Fig.10　5号墳埋葬施設遺構図　13

Fig.11　5号墳石棺内床石敷設状況　14

Fig.12　5号墳墓壙内遺物出土状況　14

Fig.13　5号墳埋葬施設平面・土層断面図　15

Fig.14　5号墳埋葬施設墓壙土層断面図　15

Fig.15　5号墳墓壙内出土遺物実測図　16

Fig.16　5号墳棺内出土鉄刀実測図　16

Fig.17　9号墳調査前平面図　18

Fig.18　9号墳遺構平面図　19

Fig.19　9号墳盛土除去後平面図　19

Fig.20　9号墳墳丘土層断面図　20

Fig.21　10・11号墳遺構平面図　21

Fig.22　SX7遺構図　21

Fig.23　11号墳周辺出土遺物実測図　21

Fig.24　5・11号墳周溝土層断面図　21

Fig.25　11号墳石材出土状況　21

Fig.26　8号墳遺構平面図　22

Fig.27　8号墳墳丘土層断面図　22

Fig.28　8号墳出土遺物実測図　23

Fig.29　7号墳調査前平面図　24

Fig.30　7号墳遺構平面図　25・26

Fig.31　7号墳墳丘土層断面図　25・26

Fig.32　7号墳盛土除去後平面図　27

Fig.33　7号墳第一埋葬施設墓壙平面図　28

Fig.34　棺内器台・鏡・刀子出土状況　28

Fig.35　7号墳第一埋葬施設平面・立面図　29

Fig.36　7号墳第一埋葬施設平面・土層断面図　30

Fig.37　7号墳第一埋葬施設木棺内出土状況・遺物実測図　31

Fig.38　7号墳第二埋葬施設平面・立面図　32

Fig.39　7号墳第二埋葬施設平面・土層断面図　33

Fig.40　7号墳第二埋葬施設墓壙平面図　34

Fig.41　SX1平面・立面図　35

Fig.42　SX1墓壙平面図　35

Fig.43　SX1平面・土層断面図　36

Fig.44　SX2遺構図　37

Fig.45　SX2出土遺物実測図　37

Fig.46　SX3平面・立面図　38

Fig.47　SX3平面・土層断面図　38

Fig.48　SX4平面・立面図　39

Fig.49　SX4平面・土層断面図　39

Fig.50　SX8平面・立面図　40

Fig.51　SX8平面・土層断面図　40

Fig.52　12号墳遺構平面図　41

Fig.53　12号墳土層断面図　41

Fig.54　12号墳出土遺物実測図　41

Fig.55　SX6平面・立面図　42

Fig.56　13号墳調査前平面図　43

Fig.57　13号墳遺構平面図　43

Fig.58　13号墳出土遺物実測図　43

Fig.59　13号墳墳丘断面図　43

Fig.60　13号墳埋葬施設遺構図　44

Fig.61　SX5出土遺物実測図　44

Fig.62　SX5平面・立面図　45

Fig.63　ＳＤ１出土遺物実測図　45
Fig.64　ＳＤ１遺構図・遺物出土状況図　45

米里三ノ嵜遺跡

Fig.1　調査前地形測量図　47
Fig.2　遺構全体図　47
Fig.3　ＳＩ１内ＳＫ３土層断面（西から）　48
Fig.4　ＳＩ１、Ｐ７付近土層断面（東から）　48
Fig.5　ＳＩ１遺構図(1)　49
Fig.6　ＳＩ１遺構図(2)　50
Fig.7　ＳＩ１出土遺物実測図　50
Fig.8　ＳＩ２・３遺構図　52
Fig.9　ＳＩ２・３出土遺物実測図　53
Fig.10　ＳＫ１遺構図　55
Fig.11　ＳＫ１出土遺物実測図　55
Fig.12　ＳＫ３遺構図　55
Fig.13　ＳＫ３出土遺物実測図　55
Fig.14　ＳＫ４・10遺構図　56
Fig.15　ＳＫ４・10出土遺物実測図　56
Fig.16　ＳＫ６遺構図　57
Fig.17　ＳＫ６出土遺物実測図　57
Fig.18　ＳＫ７遺構図　58
Fig.19　ＳＫ７出土遺物実測図　58
Fig.20　ＳＫ８遺構図　59
Fig.21　ＳＫ12遺構図　59
Fig.22　ＳＫ８出土遺物実測図　59
Fig.23　ＳＫ２遺構図　61
Fig.24　ＳＫ５遺構図　61
Fig.25　ＳＫ２出土遺物実測図　61
Fig.26　ＳＫ５出土遺物実測図　61
Fig.27　ＳＫ９遺構図　62
Fig.28　ＳＫ11遺構図　62
Fig.29　ＳＫ13遺構図　62
Fig.30　ＳＫ９出土遺物実測図　62
Fig.31　遺構外出土遺物実測図　62

北尾釜谷遺跡（北尾古墳群）

Fig.1　北尾古墳群分布図　63
Fig.2　北尾釜谷遺跡調査前平面図　64
Fig.3　北尾釜谷遺跡遺構全体平面図　64
Fig.4　24号墳遺構図　65
Fig.5　24号墳埋葬施設墓壙平面図　66
Fig.6　ＳＫ２遺構図　66
Fig.7　24号墳出土遺物実測図　66
Fig.8　25号墳遺構平面図　67
Fig.9　25号墳遺物出土状況・土層断面図　67
Fig.10　25号墳周溝内出土遺物実測図　68
Fig.11　26・27号墳、ＳＸ３遺構図　69
Fig.12　26号墳埋葬施設遺構図①　70
Fig.13　26号墳出土遺物実測図　70
Fig.14　26号墳埋葬施設遺構図②　71
Fig.15　27号墳埋葬施設遺構図　72
Fig.16　ＳＸ３遺構図　73
Fig.17　27号墳出土遺物実測図　73
Fig.18　27号墳埋葬施設（南から）　74
Fig.19　ＳＫ６遺物出土状況（南から）　74
Fig.20　ＳＸ１遺構図　75
Fig.21　ＳＸ２遺構図　75
Fig.22　ＳＫ１遺構図　76
Fig.23　ＳＫ３遺構図　76
Fig.24　ＳＫ１出土遺物実測図　76
Fig.25　ＳＫ４遺構図　77
Fig.26　ＳＫ４出土遺物実測図　77
Fig.27　ＳＫ５遺構図　77
Fig.28　ＳＫ７遺構図　77
Fig.29　ＳＫ６遺構図　78
Fig.30　ＳＫ６出土遺物実測図　78
Fig.31　ＳＤ１遺構図　79
Fig.32　ＳＤ２出土遺物実測図　79
Fig.33　ＳＤ２遺構図　80
Fig.34　畝状遺構１遺構図　82

Fig.35　畝状遺構１周辺出土遺物実測図　82
Fig.36　畝状遺構２・ＳＡ２・ピット群２遺構図　82
Fig.37　ＳＡ１・２遺構図　82
Fig.38　ピット群１遺構図　83

挿　表　目　次

Tab.１　周辺遺跡一覧表　5

島古墳群

Tab.２　島古墳群一覧表　6
Tab.３　５号墳出土遺物観察表　16
Tab.４　11号墳出土遺物観察表　21
Tab.５　８号墳出土遺物観察表　23
Tab.６　７号墳第一埋葬施設出土遺物観察表　31
Tab.７　ＳＸ２出土遺物観察表　37
Tab.８　12号墳出土遺物観察表　41
Tab.９　13号墳出土遺物観察表　43
Tab.10　ＳＸ５出土遺物観察表　44
Tab.11　ＳＤ１出土遺物観察表　45

米里三ノ嵩遺跡

Tab.１　ＳＩ１柱穴規模一覧表　46
Tab.２　ＳＩ１出土遺物観察表　51
Tab.３　ＳＩ２・３出土遺物観察表　53
Tab.４　ＳＩ２柱穴規模一覧表　53
Tab.５　ＳＫ１出土遺物観察表　55
Tab.６　ＳＫ３出土遺物観察表　55
Tab.７　ＳＫ４・10出土遺物観察表　56
Tab.８　ＳＫ６出土遺物観察表　57
Tab.９　ＳＫ７出土遺物観察表　58
Tab.10　ＳＫ８出土遺物観察表　59
Tab.11　ＳＫ２出土遺物観察表　61
Tab.12　ＳＫ５出土遺物観察表　61
Tab.13　ＳＫ９出土遺物観察表　62
Tab.14　遺構外出土遺物観察表　62

北尾釜谷遺跡（北尾古墳群）

Tab.１　24号墳出土遺物観察表　66
Tab.２　25号墳出土遺物観察表　68
Tab.３　26号墳出土遺物観察表　70
Tab.４　27号墳出土遺物観察表　73
Tab.５　ＳＫ１出土遺物観察表　76
Tab.６　ＳＫ４出土遺物観察表　76
Tab.７　ＳＫ６出土遺物観察表　78
Tab.８　ＳＤ２出土遺物観察表　79
Tab.９　畝状遺構１規模一覧表　81
Tab.10　畝状遺構２規模一覧表　81
Tab.11　ＳＡ１・２規模一覧表　81
Tab.12　ＳＡ３・ピット群２規模一覧表　81
Tab.13　畝状遺構１周辺出土遺物観察表　81
Tab.14　ピット群１規模一覧表　83

図　版　目　次

島古墳群

ＰＬ．１　調査区周辺空撮（下方が北）
ＰＬ．２　１．調査前空撮（南東から）
　　２．調査前遠景（南東から）
ＰＬ．３　１．５号墳調査前状況（北から）
　　２．５号墳墳丘（北から）
ＰＬ．４　１．５号墳墳丘土層
　　２．５号墳墳丘土層（南東から）
ＰＬ．５　１．５号墳墓壙（北から）
　　２．５号墳周溝（北から）
　　３．５号墳墓壙土層（北から）
ＰＬ．６　５号墳棺内出土状況
ＰＬ．７　１．５号墳棺床板石敷設状況
　　２．５号墳蓋石除去後状況
　　３．５号墳空撮（東から）
ＰＬ．８　１．５号墳蓋石（北西から）
　　２．５号墳土器出土状況（西から）
ＰＬ．９　１．７号墳調査前状況（南から）
　　２．７号墳墳丘（南から）
ＰＬ．10　１．７号墳第一埋葬施設蓋石（北から）
　　２．第一埋葬施設蓋石除去後（北から）
　　３．第一埋葬施設鉄斧出土状況（北から）
ＰＬ．11　１．第一埋葬施設木棺検出状況（北から）
　　２．第一埋葬施設木棺検出状況（南から）
　　３．第一埋葬施設棺内出土状況（北から）
　　４．第一埋葬施設棺内出土状況（南から）
ＰＬ．12　１．第一埋葬施設鏡、器台出土状況(南から)
　　２．第一埋葬施設鏡、器台出土状況(南から)
　　３．第一埋葬施設墓壙（北から）
ＰＬ．13　第一埋葬施設棺内出土状況
ＰＬ．14　第二埋葬施設棺内出土状況
ＰＬ．15　１．７号墳第二埋葬施設蓋石
　　２．第二埋葬施設蓋石除去後
　　３．第二埋葬施設棺内人骨出土状況(西から)
　　４．第二埋葬施設墓壙
ＰＬ．16　１．９号墳調査前状況（北西から）
　　２．９号墳墳丘（北から）
ＰＬ．17　１．９号墳墳丘土層（北から）
　　２．９号墳空撮(北東から)
ＰＬ．18　１．10号墳墳丘（南東から）
　　２．８号墳墳丘（南東から）
ＰＬ．19　１．ＳＸ１（北西から）
　　２．ＳＸ３（北西から）
ＰＬ．20　１．ＳＸ４（北西から）
　　２．ＳＸ２（西から）
　　３．ＳＸ６
　　７号墳周辺概念図
ＰＬ．21　１．12号墳墳丘（南から）
　　２．13号墳埋葬施設（北西から）
　　３．13号墳墳丘（南から）
ＰＬ．22　１．ＳＸ６（北から）
　　２．ＳＸ８（北から）
ＰＬ．23　５号墳墓壙内出土遺物
ＰＬ．24　１．５号墳棺内出土大刀
　　２．ＳＸ２出土遺物
ＰＬ．25　７号墳第一埋葬施設棺内出土遺物
ＰＬ．26　８号墳出土遺物

米里三ノ嵜遺跡

ＰＬ．27　１．調査前空撮（北東から）
　　２．遺構全景（北から）
ＰＬ．28　１．ＳＩ１（北東から）
　　２．ＳＫ４、ＳＫ10（北東から）
ＰＬ．29　１．ＳＩ２、ＳＩ３（北東から）
　　２．ＳＩ２内ＳＫ１土器出土状況(北から)
ＰＬ．30　１．ＳＫ４遺物出土状況
　　２．ＳＫ10遺物出土状況
　　３．ＳＩ１・２、ＳＫ４・10出土遺物
ＰＬ．31　ＳＩ１～３出土遺物
ＰＬ．32　ＳＫ１～９、遺構外出土遺物

北尾釜谷遺跡（北尾古墳群）

ＰＬ．33　１．調査前空撮（南西から）
　　２．遺構全景（南西から）
ＰＬ．34　１．24号墳墳丘（北西から）
　　２．24号墳埋葬施設出土状況（北西から）
　　３．24号墳墓壙（北西から）
ＰＬ．35　１．25号墳墳丘（北西から）
　　２．25号墳周溝内土器出土状況(北西から)
ＰＬ．36　１．25号墳周溝内器台出土状況(北西から)
　　２．25号墳周溝内石材出土状況(北西から)
　　３．26号墳墳丘（北東から）
ＰＬ．37　１．26号墳埋葬施設蓋石除去後(北東から)
　　２．26号墳埋葬施設棺内出土状況(北東から)
　　３．26号墳墓壙（北東から）
　　４．26号墳周溝内土器出土状況(北西から)
ＰＬ．38　１．27号墳墳丘（南西から）
　　２．27号墳周溝内土器出土状況(南西から)
　　３．ＳＸ１（北東から）
ＰＬ．39　１．ＳＫ４（南西から）
　　２．ＳＡ１・２（南西から）
　　３．ＳＸ２蓋石（南西から）
　　４．ＳＸ２墓壙（南西から）
ＰＬ．40　１．畝状遺構１検出状況（北東から）
　　２．畝状遺構１（北東から）
　　３．ＳＤ２（西から）
ＰＬ．41　25号墳出土遺物
ＰＬ．42　１．26号墳出土遺物
　　２．26号墳出土遺物
　　３．24･26･27号墳、ＳＫ１・４、ＳＤ２出土遺物
ＰＬ．43　１．27号墳出土遺物
　　２．27号墳出土遺物
　　３．ＳＫ６出土遺物
　　４．裏面

第１章　調査の経緯

１．調査に至る経緯

鳥取県は東西に長く、日本海沿いには中国山地から延びる河川により形成された平野が存在するものの、県域の多くは中国山地に連なる山間部が占めている。そのため、以前から東西方向のみならず南北方向における交通網の整備が急務となっている。計画されている一般国道313号線（北条倉吉道路）は、鳥取県中部を横断して岡山県と結ぶ地域高規格道路として、その役割が重要視されている。

道路の建設予定地内となるこの北条町は、県内でも有数の古墳密集地である。町内における計画地内では、島古墳群・米里三ノ嵜遺跡・北尾釜谷遺跡（北尾古墳群）などの遺跡や古墳群があるため、建設に先立ち、遺跡の状況を把握するために試掘調査が行われ、それぞれの遺跡で古墳や住居跡などの遺構を確認した。（北条町埋蔵文化財報告書24　『町内遺跡発掘調査報告書』第７集　北条町教育委員会　1998．３、北条町埋蔵文化財報告書28『町内遺跡発掘調査報告書』第８集　北条町教育委員会　1999．３）

その結果を受け、鳥取県土木部道路課は、鳥取県教育委員会事務局文化課と協議を行い、文化庁長官に対し文化財保護法第57条の３に基づく発掘通知を提出した。その結果、発掘調査実施の指示を得たため、財団法人鳥取県教育文化財団（以下、財団）が鳥取県の委託を受けて発掘調査を行うこととなった。財団鳥取県埋蔵文化財センターは文化庁長官に文化財保護法第57条第１項に基づき、発掘調査の実施を届け出た上、平成11年度に中部埋蔵文化財北条調査事務所を設置して２名の担当調査員等を配置し、調査を実施することになった。

２．調査の経過と方法

⑴　島古墳群の調査

島古墳群の調査は３つの地区に分かれており、便宜上南からＡ調査区、Ｂ調査区、Ｃ調査区とした。

調査地は果樹あるいは杉が植樹されており、該当地は急峻な独立丘陵で、土砂を搬出する部分が限られていた。そのため、排土は土砂の落下を防ぐために道路用地境界付近に伐採した木材でしがらみを設けた上、重機およびベルトコンベアーにより調査区外の用地内に排出した。Ｂ・Ｃ調査区の古墳部分については人力で表土を除去したが、古墳に影響のないとみられる範囲については、作業の効率化を図るために重機により表土除去を行った。Ａ区については該当する部分がなく、全て人力で作業を行った。

検出作業は４月16日にＡ調査区から開始し、適宜Ｂ・Ｃ調査区と併行して行い、作業の途中６月19日には主に地元の方々を対象にした現地説明会を実施した。調査はＡ調査区、Ｃ調査区、Ｂ調査区の順に検出作業を終え、その後調査後地形測量を行い、８月６日に全ての調査を終了した。

⑵　米里三ノ嵜遺跡の調査

米里三ノ嵜遺跡の調査は、作業開始当初は島古墳群と併行して調査を行った。排土は道路用地内の調査地北側の崖部分に排出した。主に弥生時代から古墳時代を中心とする竪穴住居および貯蔵穴などの調査を行い、８月30日に検出作業を終了し、遺構全体写真撮影を行った。ただし、北尾釜谷遺跡の調査を引き続き実施することができず、北尾釜谷遺跡の調査開始までの間現場作業は休止し、調査終了後の地形測量も含め、実測作業を行った。

⑶　北尾釜谷遺跡（北尾古墳群）の調査

北尾釜谷遺跡については、当初古墳の調査は予定していなかったが、調査の結果４基の古墳をはじめ、埋葬施設を中心に遺構を調査した。しかし、このうちの２基の古墳（北尾24・25号墳）については、すでに東側の半分近くが県営島地区一般農道建設の際に破壊されていたため、西側部分のみの調査を行った。排土は計画路線延長

上の中央から中央北側よりの崖部分に排出した。

検出作業は10月13日に終了した。遺跡が道路際に位置するため、クレーンにより調査終了後の遺構全体写真を撮影した。その他調査終了後の地形測量や撤収も含め10月22日に全ての作業を終了した。

３．調査体制

調査は下記の体制で実施された。

○調査主体　財団法人鳥取県教育文化財団

理　事　長　　有田　博允（鳥取県教育委員会教育長）
常務理事　　大和谷　朝（鳥取県教育委員会事務局次長）
事務局長　　岡山　宏徳

財団法人鳥取県教育文化財団埋蔵文化財センター

所　　長　　古井　喜紀（県埋蔵文化財センター所長）
次　　長　　八木谷　昇

調整係

係　　長　　松田　潔　（県派遣）
文化財主事　　高垣　陽子（県派遣）

庶務係

係　　長　　前田　潤子（県埋蔵文化財センター庶務係長）
主任事務職員　　矢部　美恵
事務職員　　田中　陽子

○調査担当　財団法人鳥取県教育文化財団 鳥取県埋蔵文化財センター 中部埋蔵文化財北条調査事務所

所　　長　　更田　怜治
主任調査員　　八峠　興　（県派遣）
調　査　員　　岡野　雅則（県派遣）
調査補助員　　河本いづみ
整　理　員　　小椋　美佳

○調査指導　井上貴央　鳥取大学医学部教授、鳥取県教育委員会事務局文化課、鳥取県埋蔵文化財センター

○調査協力　北条町、北条町教育委員会、鳥取県倉吉土木事務所

○発掘調査・整理作業従事者

秋久　勝義	新　豊	荒井　啓一	生田　敏江	井坂　幸枝	市橋貴志子
岩垣　命	大嶋　昌子	大場　茂	尾坂　忠	尾高千代子	勝田美登里
河口　優子	河原　義雄	坂本　俊和	杉本　英雄	津島　時三	角田磨智子
戸崎　巖	西村　巖	浜口みち子	福永　一明	藤田　広子	藤田　恭人
真壁　均	牧田　理恵	松尾　冊子	光井　芳子	村口いつ子	山崎　巖
山下　節子	安田　成行				

（五十音順、敬称略）

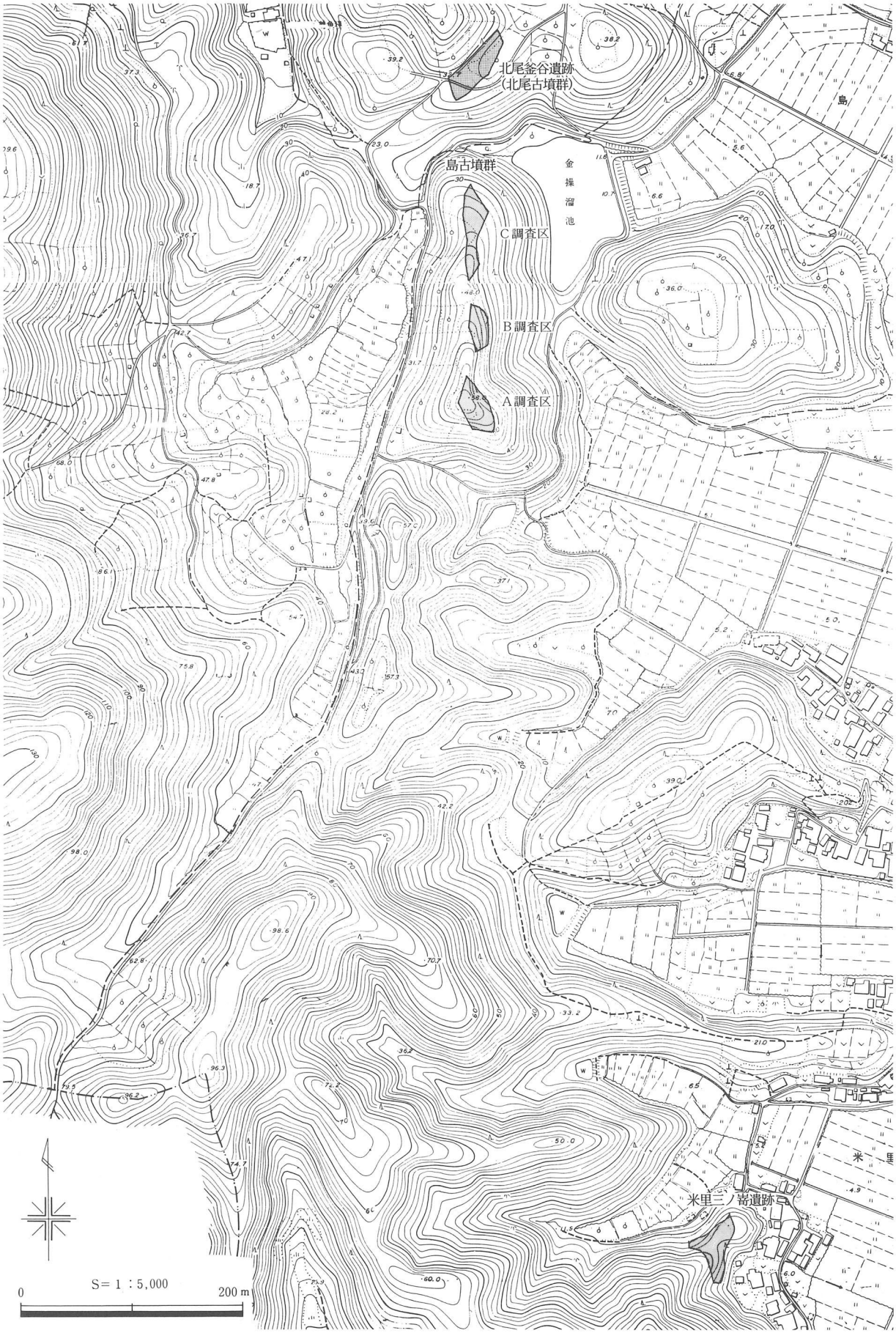


Fig. 1　調査区位置図

第２章　位置と環境

北条町は鳥取県の中部、倉吉市の北隣に位置する。北側は北条砂丘が日本海に接し、東側は天神川を挟んで羽合町に隣接する。今回調査した島古墳群、米里三ノ嵜遺跡、北尾釜谷遺跡（北尾古墳群）は、いずれも北条平野の南端の低丘陵地に立地する。調査地周辺から倉吉平野にかけては県内でも有数の遺跡密集地である。

弥生時代

前期では、天神川下流に位置する長瀬高浜遺跡で短期間の集落がみられ、玉造り工房が確認されているほか、土壙墓や土器棺墓などが調査されている。倉吉平野では、集落は確認されていないが、イキス遺跡（８）で土壙墓群が、向山古墳群宮ノ峰支群（71）で古墳の下にある土壙墓群が調査されている。

中期には、台地上で二条の環濠により集落を区画する後中尾遺跡が出現する。小規模な集落としては北条平野と倉吉の間に位置する中尾遺跡（９）や西前遺跡（11）がある。集落は竪穴住居、掘立柱建物を中心に、貯蔵穴も頻繁にみられる。また、北条平野の南端の米里（２）や、天神川が北条平野に流れ込む際にある小田（10）から中期から後期にかけての銅鐸が出土している。長瀬高浜遺跡では中期の土壙墓群が調査されている。

後期になると、夏谷遺跡（24）のような拠点集落に加え、小規模な集落が丘陵と平野の際付近に急激に増加する。中には短期間でおわるものもあるが、古墳時代まで続くものもある。前者は北条平野の米里三ノ嵜遺跡、曲管峯長谷遺跡（３・４）、倉吉平野では遠藤谷峯遺跡（12）、白市遺跡（13）、両長谷遺跡（14）、大沢前遺跡（18）などの四王寺山の南西部、後者は倉吉平野から四大寺山の東西両側を北に向かい沿うように立地する上神宮ノ前遺跡（23）、コザンコウ遺跡（21）や大山遺跡（22）がある。また、埋葬形態にも大きな変化が現れ、墳丘墓が造られるようになる。阿弥大寺一・二・三号四隅突出型墳丘墓や、墳丘に貼石をもつ柴栗古墳群（16）、丘陵尾根上に位置し、四方に独立した直線状の溝をもつ大谷後ロ谷墳丘墓などがある。

古墳時代

天神川下流域は、山陰で最も早く前期古墳の築造が開始された地域の一つであり、大型の前期古墳として、国分寺古墳（56）や馬ノ山４号墳がある。その他の主な前期の古墳は、上神大将塚古墳（55）、大谷大将塚古墳（58）、向山古墳群の宮ノ峰支群（71）など、おもに向山から四王寺山周辺に分布する。集落は、弥生時代から引き続き営まれたものもあるが、天神川下流域に位置する長瀬高浜遺跡は、前期初頭に突如出現し、中期にかけて大集落を形成する。天神川河床遺跡（５）や徳田沖遺跡（45）においても前～中期の土器が多数採集されており、長瀬高浜遺跡の集落範囲に含まれるものと考えられる。また集落の基本構成に変化が認められ、竪穴住居の平面プランは方形化し、貯蔵穴は概ね前期で消滅する。

中期から後期にかけて、中小規模の古墳が急激に増加する。曲古墳群（46）や土下古墳群（48）、向山古墳群などで1000基近くの古墳群が造られる。北条平野の丘陵上に位置する北尾古墳群、茶臼山古墳群(56)、瀬戸古墳群（53)、砂丘地である長瀬高浜遺跡においても古墳群が形成される。一方、集落の多くは前期から継続しており、夏谷遺跡（24）では最大規模となる。

新たな埋葬施設として横穴式石室が導入され、６Ｃ後半以降の主流となる。北尾・曲古墳群などでは、板状安山岩を使用した小型の石室が採用される。一方、伝統的な箱式石棺による埋葬も引き続き行われている。集落では、西山遺跡（41)、大沢前遺跡（18)、桜木遺跡（42）で新たに集落が営まれる。竪穴住居は方形となり、壁際に溝で仕切られた特殊ピットをもつもの、住居内に仕切り溝をもつものがみられる。また、不入岡遺跡（19）のようにオンドル状遺構をもつものもある。

終末期になると大規模な墳丘をもつ古墳は姿を消し、三明寺古墳（77）や福庭古墳のように切石を組み合わせた石室や、取木遺跡（79）や長谷遺跡（81）のように方墳に横穴式石室をもつ特徴のある古墳がみられるようになる。集落の調査例は少ないが、大道谷遺跡（43）のほか、上神付近の谷畑遺跡やイガミ松遺跡（44)、クズマ遺跡（37）などで、土製模造品を中心とした祭祀遺物が出土している。

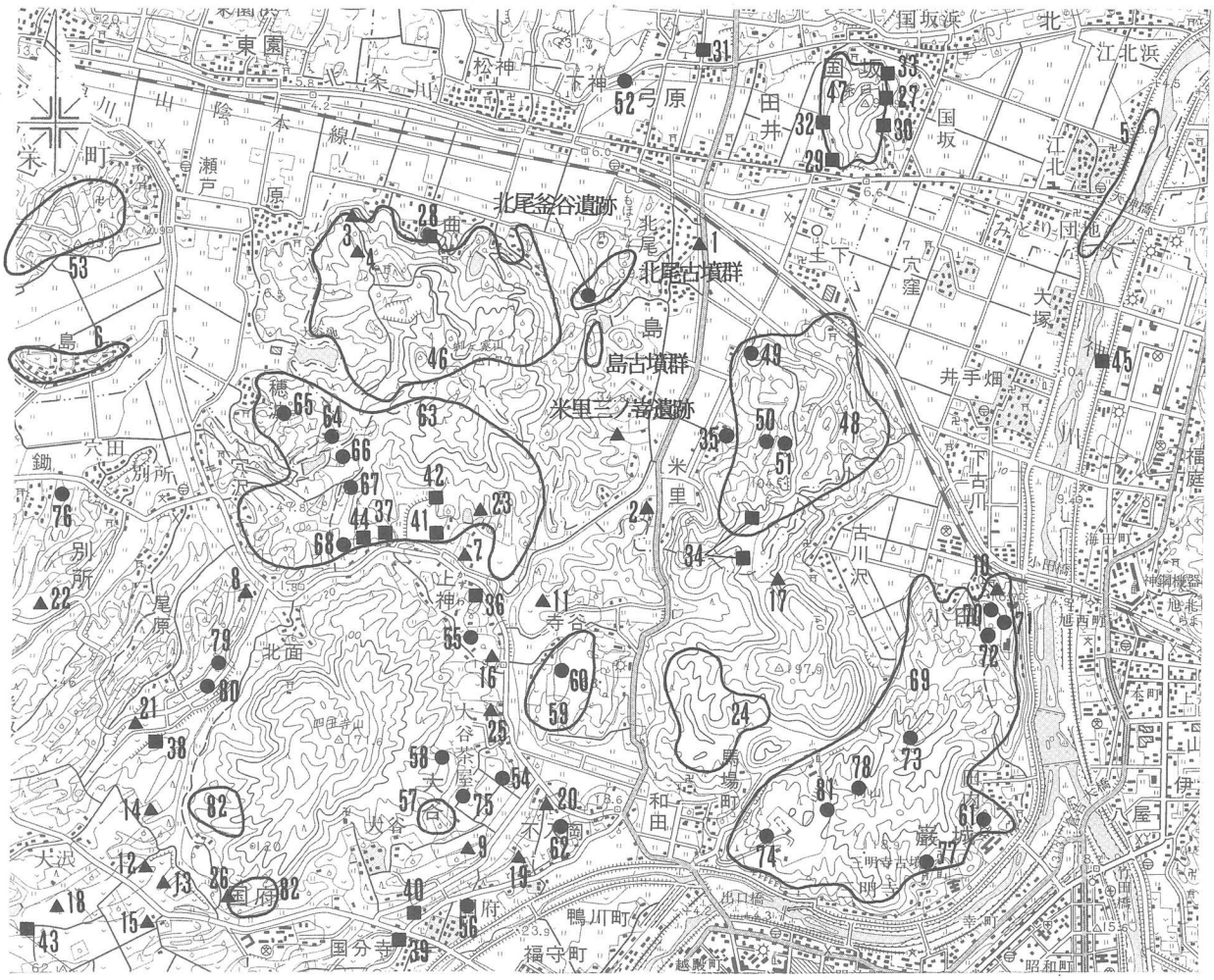


Fig. 2　周辺遺跡分布図　　1：50000

弥生時代▲

	遺　跡　名	時　期	備考
−	米里三ノ嵜遺跡	後期～古墳前期	集落
1	北尾遺跡	弥生～古墳	散布地
2	米里銅鐸出土地	中～後期	袈裟襷文
3	曲管峯長谷遺跡(A区)	後期	竪穴住居
4	曲管峯長谷遺跡(B区)	後期～古墳前期	竪穴住居
5	天神川河床遺跡	古墳時代	散布地
6	島遺跡	弥生～古墳	散布地
7	トドロケ遺跡	弥生時代	玉造
8	イキス遺跡	前期	土壙墓
9	中尾遺跡	前～後期	集落
10	小田銅鐸出土地	中～後期	袈裟襷文
11	西前遺跡	中期～古墳～	集落
12	遠藤谷峯遺跡	後期	集落
13	白市遺跡	後期	集落
14	両長谷遺跡	後期	集落
15	中峰遺跡	後期	土壙墓
16	柴栗古墳群	後期	墳丘墓
17	下張坪遺跡	後期	集落
18	大沢前遺跡	後期	集落
19	不入岡遺跡	後期	集落　墓
20	沢ベリ遺跡(1次)	後期～古墳前期	集落
21	コザンコウ遺跡	後期～古墳前期	集落
22	大山遺跡	後期～古墳前期	集落
23	上神宮ノ前遺跡	後期～古墳前期	集落
24	夏谷遺跡	後期～古墳前期	集落
25	三度舞墳丘墓	後期～古墳前期	墳丘墓
26	大谷後ロ谷墳丘墓	後期～古墳前期	方形墳

古墳時代■

−	米里三ノ嵜遺跡	古墳中期	集落
27	殿屋敷遺跡	前～中期	集落
28	曲第1遺跡	後期	集落
29	用露鼻遺跡	後期	散布地
30	馬場遺跡	後期	散布地

	遺　跡　名	時　期	備　考
31	中浜遺跡	古墳時代	散布地
32	長畑遺跡	古墳時代	散布地
33	宇ノ塚遺跡	古墳時代	散布地
34	米里第1・2遺跡	古墳時代	散布地
35	船渡遺跡	古墳時代	散布地 木製品(梯子)
36	上神猫山遺跡	前期	集落
37	クズマ遺跡	前期	集落
38	道祖神峰遺跡	前期	集落
11	西前遺跡	前期～中期	集落
39	宮ノ下遺跡	前期～後期	集落
40	擲塚遺跡	古墳時代	集落
41	西山遺跡	後期	集落
18	大沢前遺跡	後期	集落
42	桜木遺跡	後期	集落
43	大道谷遺跡	終末期	集落
44	イガミ松遺跡	終末期～	祭祀遺物
45	徳田沖遺跡	古墳時代	散布地

古墳・古墳群●

−	島古墳群	中～後期	13基 円墳
−	北尾釜谷遺跡	前～中期	箱式石棺ほか
−	北尾古墳群	前～中期	27基 方墳 円墳
46	曲古墳群	中～後期	264基 前方後円墳 円墳
47	茶臼山古墳群	中～後期	54基 前方後円墳 円墳
48	土下古墳群	中～後期	297基 前方後円墳 円墳
49	土下129号墳	古墳時代	円墳
50	土下210号墳	古墳時代	円墳
51	土下213号墳	古墳時代	前方後円墳 円墳 埴輪
52	下神1号墳	古墳時代	前方後円墳か
53	瀬戸古墳群	中～後期	36基 円墳
16	柴栗古墳群	前期	方墳・円墳
36	上神猫山遺跡	前～中期	方墳・円墳
54	イザ原古墳群	前～中期	割竹形木棺あり
15	中峰古墳群	前期	方墳
55	上神大将塚古墳	前期	ホウ製三角縁神獣鏡 琴柱形石他

	遺　跡　名	時　期	備　考
56	国分寺古墳	前期	前方後方墳 三角縁五神四獣鏡他
57	大谷古墳群	古墳時代	不明
58	大谷大将塚古墳	前期	前方後円墳　竪穴式石室
59	屋喜山古墳群	前～中期	83基 円墳
60	屋喜山9号墳	中期か	円墳
61	養水古墳群	前～後期	方墳 円墳 竪穴系横口式石室
17	下張坪遺跡	中期	67基 鉄剣・鉄鏃
62	沢ベリ遺跡(2次)	中～後期	帆立貝式 方墳 前方後円墳 円墳
37	クズマ遺跡	中～後期	方墳 円墳 祭祀遺物
63	上神古墳群	中～後期	約200基 円墳
64	上神44号墳	古墳時代	前方後円墳
65	上神45号墳	古墳時代	前方後円墳
66	上神48号墳	後期	前方後円墳
67	上神51号墳	古墳時代	前方後円墳
68	上神119号墳	中期	円墳
41	西山遺跡	中～後期	12基 方墳 円墳
69	向山古墳群	中～後期	約300基
70	向山樋口支群	中～後期	円墳
71	向山宮ノ峰支群	中～後期	前方後円墳 方墳 円墳
72	向山堤谷支群	中～後期	円墳
73	向山6号墳	後期	前方後円墳
74	向山309号墳	後期	円墳 埴輪
75	小林古墳群	後期	円墳
11	西前遺跡	後期	横穴式石室
9	中尾遺跡	後期	横穴式石室
24	夏谷遺跡	後期	方墳 円墳
76	高鼻2号墳	後期	前方後円墳
77	三明寺古墳	終末期	円墳 埴輪
78	三明寺大将塚古墳	古墳時代	
79	取木遺跡	終末期	方墳　横穴式石室
80	一反田遺跡	終末期	横穴式石室
81	長谷遺跡	終末期	方墳　横穴式石室
14	両長谷遺跡	終末期	横穴式石室
82	その他の古墳群	−	−

Tab. 1　周辺遺跡一覧表（弥生・古墳時代）

第３章　島古墳群の調査

１．島古墳群の概要

島古墳群は、北条平野の西側、ほぼ南北にのびる丘陵上に位置する。丘陵の規模は、南北が約400m、東西が100～170mである。最も高い丘陵南側の岩山の標高57mを頂点として、北側へ向かって傾斜しつつ尾根がのびる。

現在は、丘陵の東半分は杉の植林、西半分では梨栽培に利用されている。

今回調査されたものも含めて、13基の古墳と数基の埋葬施設が確認されており、ほぼ南北にのびる尾根上に築造されている。全て円墳と考えられ、このうちの８基を調査した。内部施設は、組み合わせ式の箱式石棺が主流を占め、まれに土壙墓、木棺墓がみられる。石棺石材は、無斑晶板状安山岩と呼ばれ、鳥取県中部地域の箱式石棺に多用されるものである。当古墳群の立地する丘陵上には分布しない石材であるが、採取地は明らかでない。蜘蛛ヶ家山や東方の向山周辺から搬入されたのであろう。

島古墳群は、５～６世紀を中心に築造されている。Ａ調査区を中心とする丘陵北側の古墳は比較的古く、５世紀代を中心に築造されている。

なかでも５世紀前葉の所産である７号墳は、直径約20mと最大規模で、特異な構造の埋葬施設を有する点で特徴的である。墳丘上の二基の埋葬施設のうち、第一埋葬施設は石棺内部に木棺を有し、第二埋葬施設は石棺の周囲を板石で囲繞する。こうした構造の埋葬施設は周辺地域では確認できない。第一埋葬施設の木棺内からは、鉄剣、鉄斧、刀子、小型仿製鏡、土師器の鼓形器台が出土した。第二埋葬施設には、下肢を交差させて埋葬されたとみられる二体の女性が葬られていた。墳丘の周囲には、小型の箱式石棺や土器棺が存在する。７号墳の南側に位置する12、13号墳周辺からも５世紀後葉前後の土師器が出土している。

丘陵の中程から南側にかけては、６世紀代を中心として築造されたと想定される。丘陵頂部に立地する５号墳は、６世紀前葉の築造とみられ、墳頂部の箱式石棺の棺床には板石を敷設する。棺内から大刀、人骨が出土した。周溝の配置や墳丘の形態からは、東から南東側を正面として意識した構造が窺われる。

丘陵中央部に位置する８号墳は、墳裾部の一部のみを調査した。６世紀後半代の築造と考えられ、盛土築造前に構築面上に須恵器の甕を破砕して散布したものと考えられる。

古墳名	墳　形	規模(m)	内部施設	出土遺物	時期	備考
１号墳	円　墳	約12	不明	——	不明	未調査
２号墳	円　墳	約20	不明	——	不明	未調査
３号墳	円　墳	約12	不明	——	不明	未調査
４号墳	円　墳	約10	不明	——	不明	未調査
５号墳	円　墳	16	箱式石棺１	大刀、須恵器甕、土師器台付椀	６世紀前葉	平成11年度調査
６号墳	円　墳	約８	不明	——	不明	未調査
７号墳	円　墳	20	箱式石棺２	鉄剣、刀子、鼓形器台、小型仿製鏡	５世紀前葉	平成11年度調査。第一埋葬施設は、石棺内に木棺をもつ二重構造。
８号墳	円　墳	17	箱式石棺２(伝)	須恵器甕、提瓶	６世紀後半～７世紀初頭	平成11年度調査（墳裾部のみ調査）
９号墳	円　墳	14	箱式石棺(推定)	——	不明	平成11年度調査
10号墳	円　墳	12	不明	——	不明	平成11年度調査（墳裾部のみ調査）
11号墳	円　墳	６	箱式石棺１	——	６世紀後半	平成11年度調査
12号墳	円　墳	12	不明	土師器甕	５世紀後葉	平成11年度調査
13号墳	円　墳	7.5	木棺墓１	土師器壷	５世紀後葉	平成11年度調査

Tab．２　島古墳群一覧表

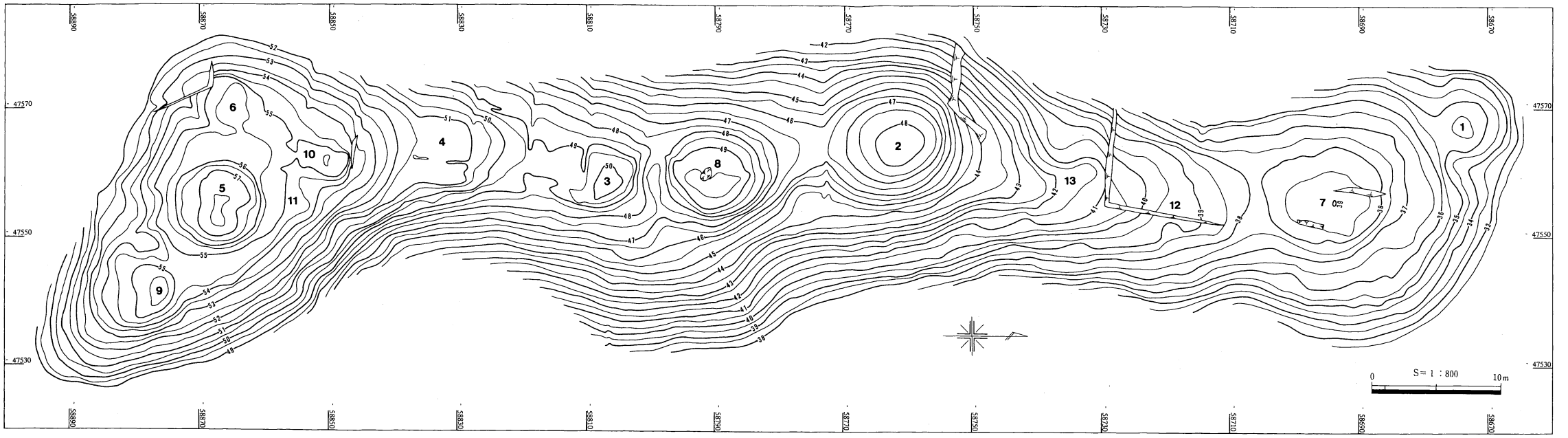
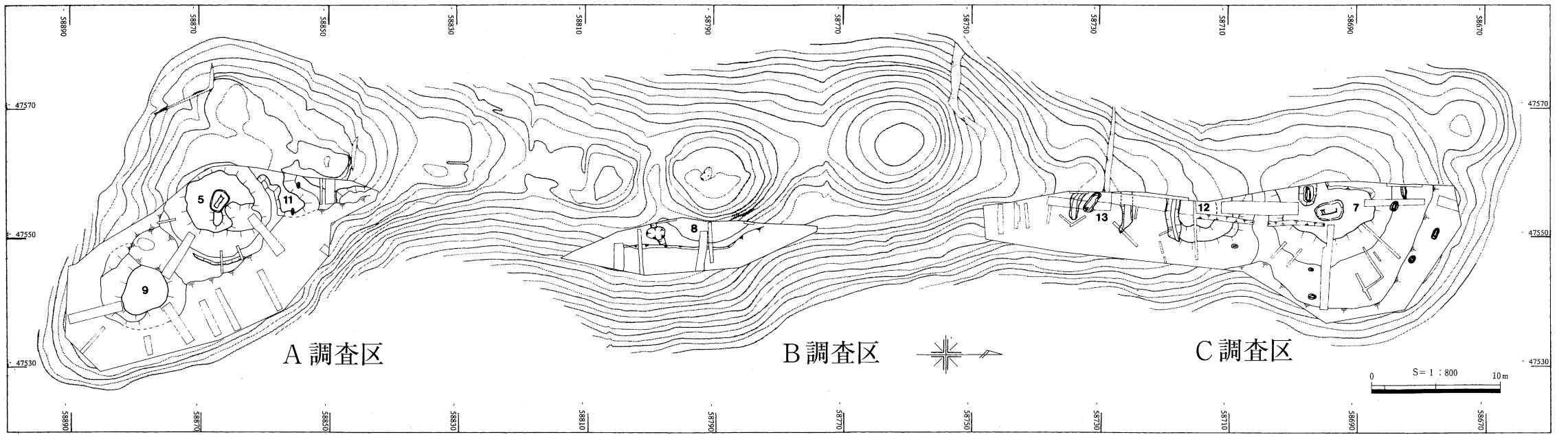
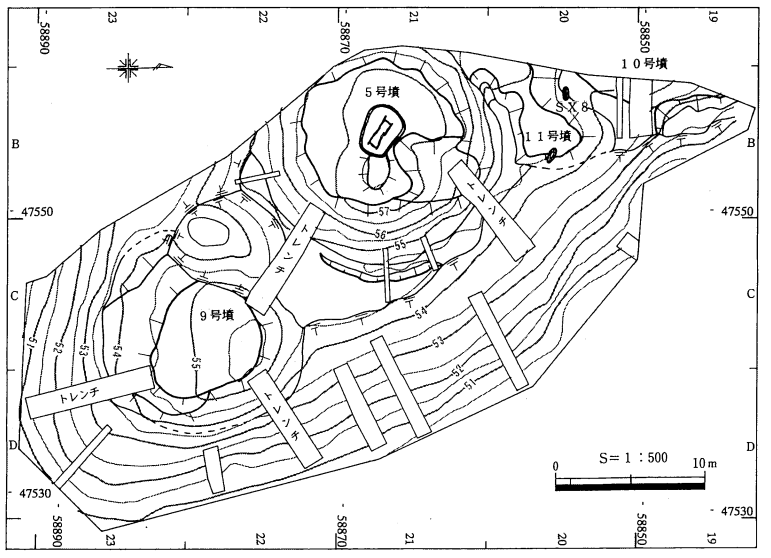
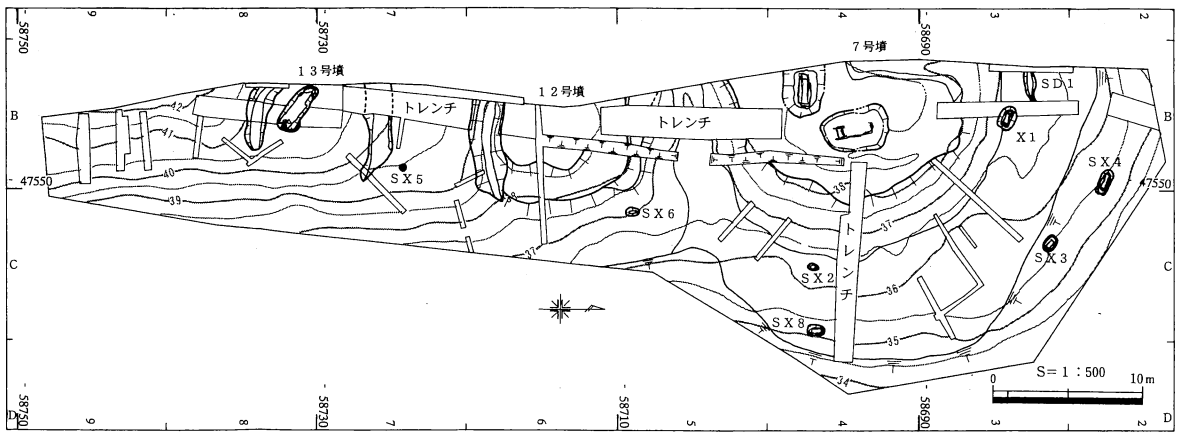


Fig. 3　島古墳群調査前全体図





A 調査区



C 調査区

Fig. 4　A・C調査区遺構全体図

2．発掘調査の成果

(1)　A調査区の調査

5号墳

a．調査前の状況（Fig. 5、PL. 3－1）

墳丘は、岩山の頂に位置し、墳頂部は古墳群の中で最も高い標高57.4mにある。調査前は杉が植林されており、周溝付近のテラスはその作業道として利用されていた。

墳丘の遺存状況は良好で、マウンドが明確に認識できた。直径が15m程度の円墳と判断した。墳頂部は、東側が高いほかは平坦をなしており、多少の削平が窺えた。墳丘の北東側には、植林に伴う作業道の痕跡がみられる。北条平野周辺の古墳群には、板状に剝離する安山岩を石材とする箱式石棺が多用されるが、墳丘の周囲に石材の散乱などが見られないことからも、埋葬施設の残存が予測された。

墳丘の東および北側においてテラス状の地形が認められ、墳丘の削り出しに伴うカットの結果であろうと判断した。

b．盛土基盤面の状況（Fig. 5, 6）

旧地形は、墳丘の盛土直下に認められる炭化物を多量に含有する暗茶褐色土層（⑤層）を古墳築造直前の地表面としてとらえ、この層の状況から判断した。

暗茶褐色土層は、地山である茶褐色のローム質土壌の直上に形成されている。墳丘の東側から南東側にかけて

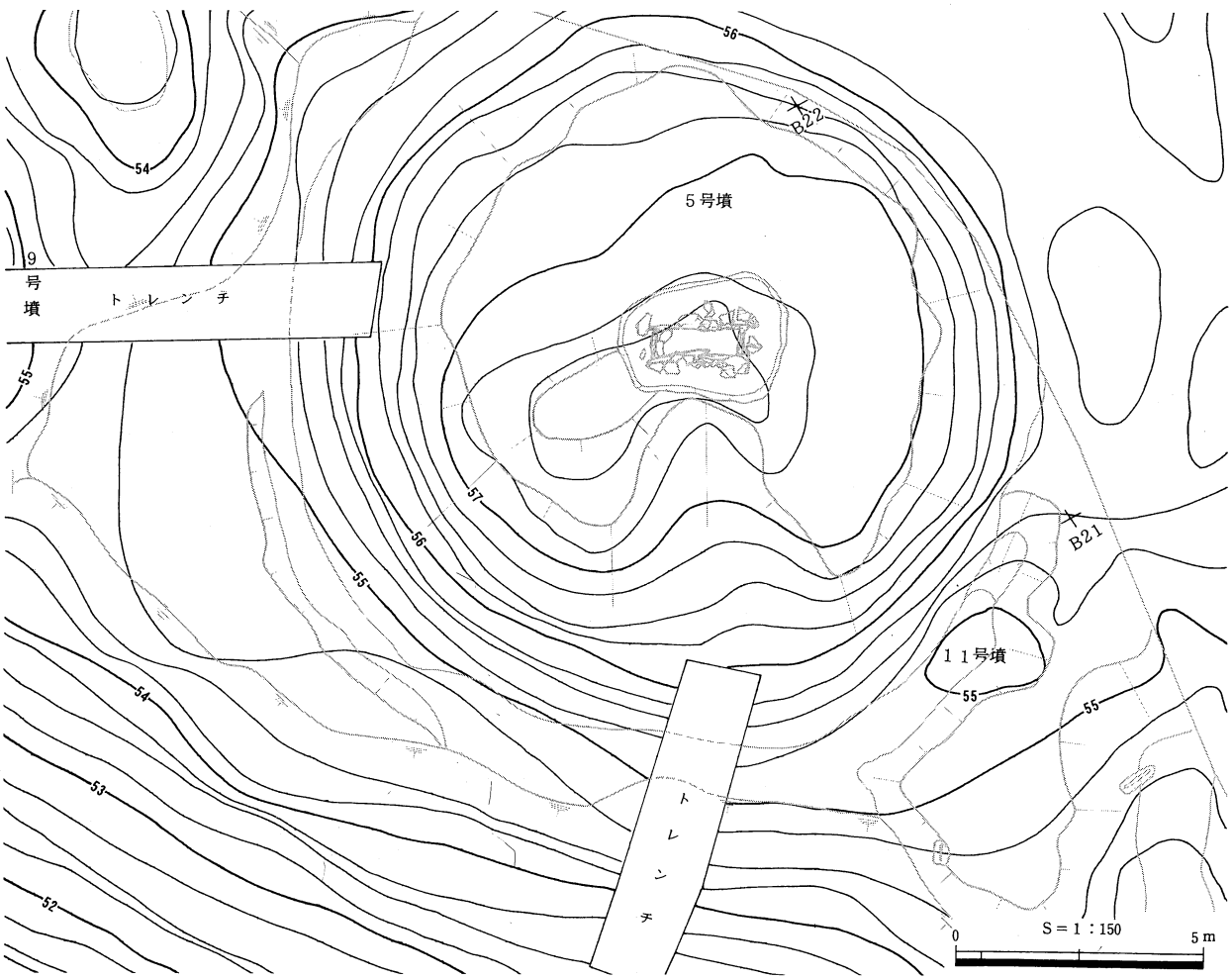


Fig. 5　5号墳調査前平面図

が標高56.3cm程度、その他は標高56.1m程度であり、ほぼ平坦な地形といえる。暗茶褐色土層の存在は、墳丘構築にあたって周囲の草木などを焼く行為が行われた結果と考えられる。土層中に多量に含有される炭化物の密度には、場所による偏差はみられない。

平坦な堆積状況からは、暗茶褐色土層形成前の段階において地ならしが行われたことが考えられる。これは、丘陵の斜面下方からの傾斜がスムーズにたどれるなど周囲の地形から判断して、それは起伏をならす程度の小規模なものであったと推測される。

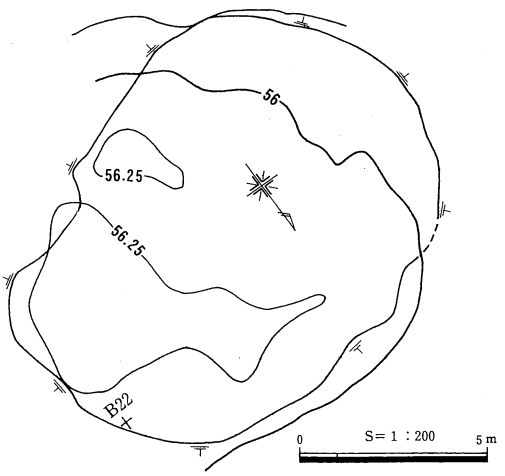


Fig. 6　５号墳盛土除去後平面図

c．墳丘の構造

(1)　形　態（Fig. 8、PL. ３－２，５－２・３）

遺存する墳丘は、墳裾間の直径が東西約16m、南北16.7mの円墳である。最も遺存が良好な墳丘東側では、周溝底部と墳頂部の比高差は2.6mを測る。このうち、約1.3mは地山の削り出しによって形成されている。

盛土は、墳丘中央付近において最も良好に遺存し、最大厚1.2mを測る。９号墳との切り合い部分の周溝は、尾根を切断しており、岩盤が露出する標高55.4m付近まで掘削されている。墳丘東側のテラス上にも、上端での幅が１～1.3m、深さは最大でも13cmの浅い周溝が掘られている。周溝底面からは、埋葬施設の石棺に使用された石材の小片が多く出土した。

墳丘の東から南東側にかけてのみ地山を深く掘削し周溝を配置することからみて、南東側からの視線を意識した構造といえる。

(2)　構築過程（Fig. 7、PL. 4）

墳丘土層断面の観察から、墳丘の構築は次の二段階を経て完成したと考えられる。

［第一段階］

墳丘の構築範囲を設定し、周囲の斜面をテラス状にカットする。墳丘北側から南東側にかけては深く斜面をカットし、東側を中心に浅い周溝を掘削する。発生した排土は、盛土として暗茶褐色土層上に積み上げる。盛土下層を主体にみられるローム質の茶褐色土（①層）がこれにあたる。この際、北東から南東側にかけてのレベル的に低い部分を重点的に盛ることによって墳丘構築面を水平に保つ配慮がなされている。盛土の流出防止を考慮したものと考えられる。こうして標高56.4m付近までの盛土が構築される。

［第二段階］

次に、丘陵斜面下方など古墳の周囲以外から採取したと考えられる数種類の土を盛土として使用する。

墳丘の北側から東側にかけては、風化した花崗岩を多量に含む土（②層）と、茶褐色土に風化した花崗岩を含む土（④層）の二種類を互層に積み上げている。この際、第一段階と同様に、墳丘構築面がほぼ水平に保たれるよう配慮されている。各層は比較的薄く、しまっており、突き固めながら一層ずつ築かれたと考えられる。②層は、墳丘中央付近を重点的に積まれている。また、周辺の地山に多く含まれる10～20cm程度の角礫が盛土中にも混入している。

墳丘西側の盛土は、①層と④層により構成され、各層が比較的厚い。三種類の土を薄く平坦に延ばしながら構築する他の部分と比べると、やや簡素な構造である。これは、墳丘の北側から東側にかけては、深い削り出しや周溝によって盛土が流出しやすい状況となっているのに対して、南側から西側にかけては周溝や大規模な削り出しの存在が想定できず、盛土が流出する危険が少ないことが反映しているものと想定される。

周囲の地形や周溝の配置を総合的に判断して、盛土の流出を防止する合理的な築造がなされたのであろう。

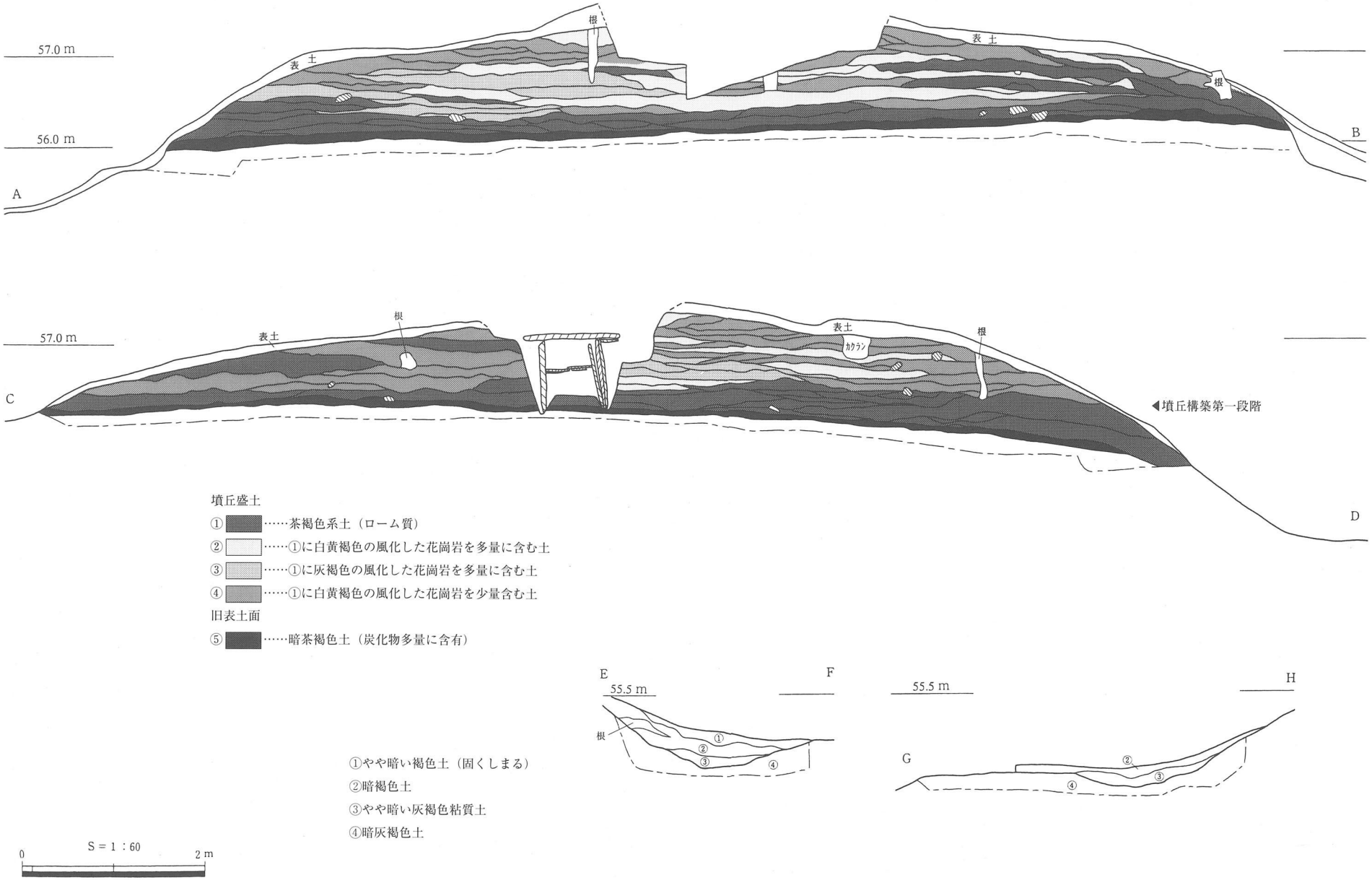


Fig. 7　5号墳墳丘・周溝土層断面図

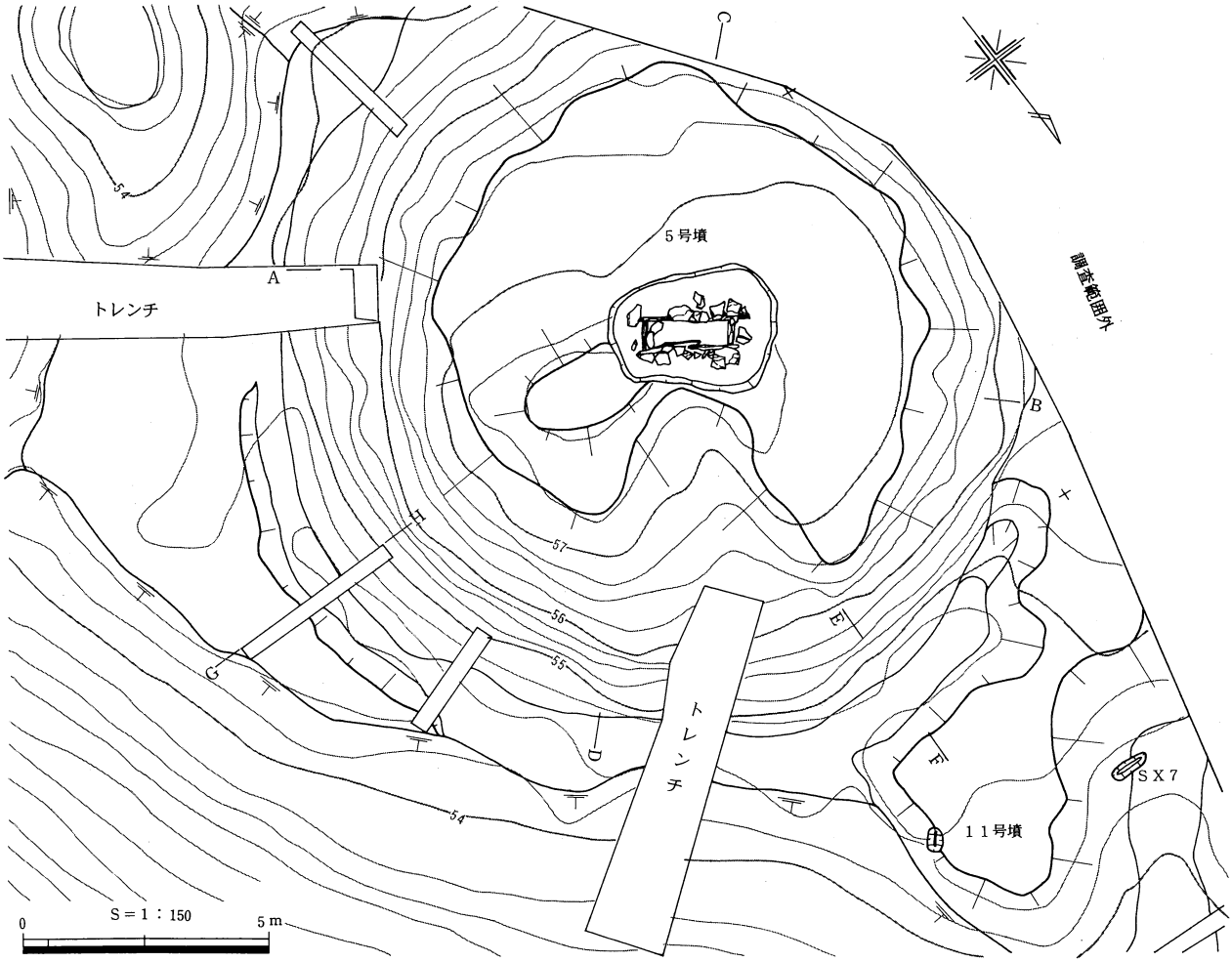


Fig. 8　5号墳遺構平面図

d．埋葬施設の構造

(1)　墓　壙（Fig. 9、PL. 5－1）

墳丘が完成した後に墓壙が掘削される。墳丘のほぼ中央に位置する二段堀りの墓壙である。

上段は、長軸3.4m、短軸は北西側で2.6m、南東側では1.8mの平面楕円形を呈する。底面は、検出面から10～30cm程度の標高57m付近にあり、ほぼ水平をなす。

下段は、一段目のほぼ中央に掘削される。長軸2.8m、短軸1.2mの平面長方形を呈する。盛土の最下層まで深く掘り下げられており、一段目の底面との比高差は最大0.65mを測る。

底面の周囲には石材をはめ込む溝が設けられているが、溝の底面は標高56.2m付近にあり、地山に達している。また、はめ込む石材の形状に合わせて、部分的にやや深く掘られており、頭位方向となる南東側はやや幅広となる。

(2)　石棺の構造

（Fig. 10, 11, 13、PL. 6, 7－1・2, 8－1）

組み合わせ式の箱式石棺である。石棺の内法は、長さ1.7m、幅は南東端で0.6m、北西端では0.5mであり頭位側が広い。主軸は、N－52°－Wである。棺床における標高も、南東

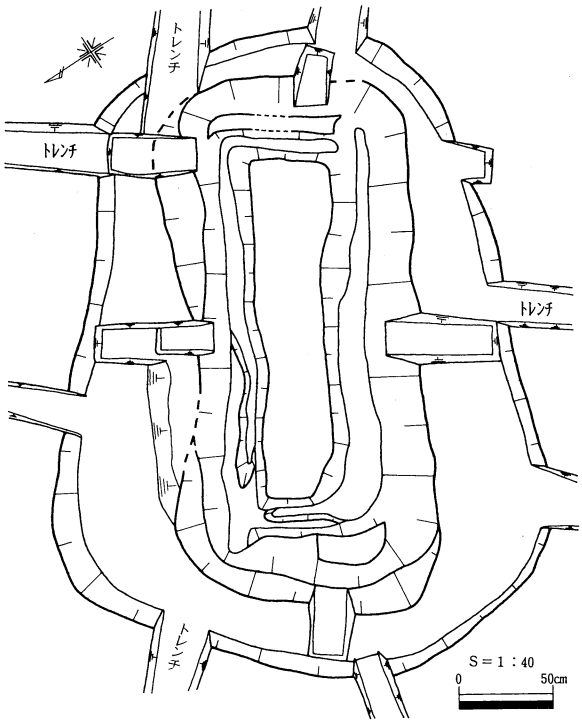


Fig. 9　5号墳埋葬施設墓壙平面図

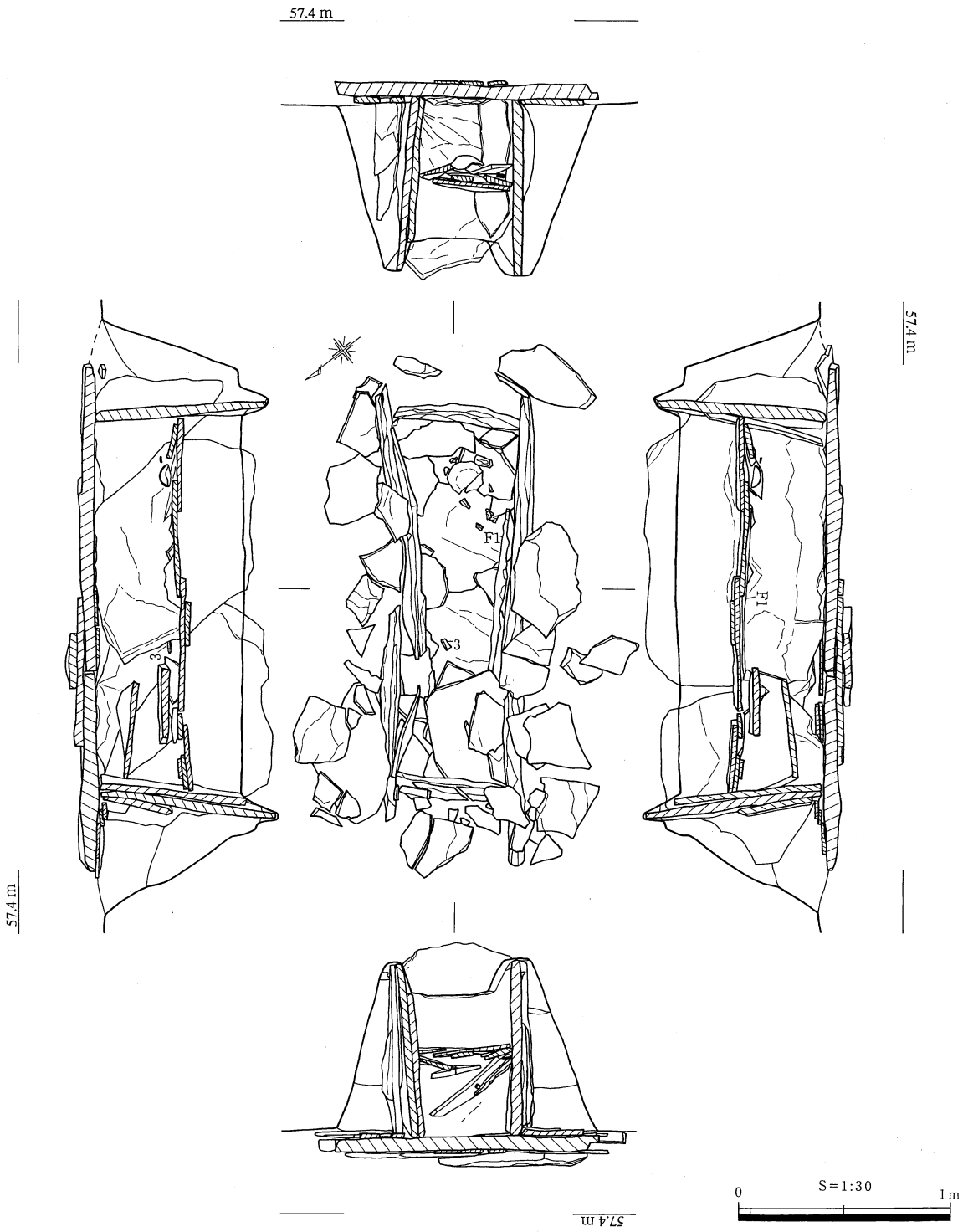


Fig. 10　5号墳埋葬施設遺構図

端が56.7m、北西端では56.6mと頭位側がやや高い。石材は、周辺の古墳群の石棺にも広く採用される無斑晶板状安山岩が使用されている。古墳の立地する丘陵には分布しないが、周辺の丘陵から運搬されたものと考えられる。

側壁は、北東側が二枚、南西側が三枚の板石によって構成される。長軸1～1.4m、単軸0.7m、厚さ4～6㎝程度の大型の石材である。それぞれの石材は互いに一部を重ねつつ配置されるが、北東側の側壁は、三枚のうち中央の一枚が内側に配置され、両端の石材のいずれからも支持されない構造であるため、棺外からの土圧により棺内側に傾斜していた。西側側壁の石材も一部が剝離し、棺内に倒れ込んでいた。小口側両端は、小口壁を挟み込むように配置される。石材の上端は、蓋石と水平に接するよう丁寧に調整が施されている。

小口壁は、長さ0.8～0.9m、幅0.5m程度の石材である。側壁材に挟み込まれる両側および蓋石に接する上面は、丁寧な調整が施されている。

壁体の構築後、棺内および棺外の墓壙内に土を入れ、棺材を固定する。埋土は固く突き固められている。棺内には厚さ20cmの褐色土を充塡し、この上に板石を敷き詰めて棺床としている。床石は、長軸40～60cm、短軸30～40cm程度の大型のものを二枚敷設し、隙間を長軸20～40cmの板石で埋めている。

石棺上面の周辺には、石棺を取り巻くように長さ10～40cm、幅10～20cm程度の板石を敷いている。蓋石が架構される範囲とほぼ一致することから、蓋石の加重を分散する機能を目的とした可能性がある。

蓋石は、長軸1.4m、短軸1.2m、および長軸1.4m、短軸0.9mを測る大型の板石二枚を架し、隙間をやや小振りの石材で塞いでいる。粘土による目張りは施されていない。

墳丘北側から東側にかけての周溝底面からは、石棺石材の小片が多く出土している。このことから、石材はある程度の大きさで墳丘近くまで搬入され、墳丘東側を中心とするテラス周近において微調整を行ったものと考えられる。

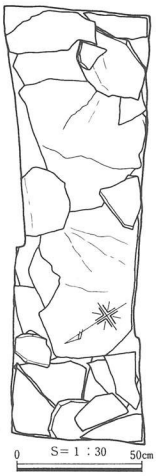


Fig. 11
５号墳石棺内
床石敷設状況

(3)　遺物出土状況（Fig. 10, 12、PL. 6, 8）

棺内　棺内には、厚さ10～20cmにわたって土砂が堆積していた。人骨は、頭骨の一部と足骨の一部のみが遺存し、熟年の男性と鑑定された。棺内北西側では倒壊した側壁の上面において足骨の一部が出土した。水の侵入により移動したものであろうか。棺床の敷石のうち、頭骨直下のものは南西側壁側が５cmほど浮いており、この上に一部が重なる板石との組み合わせにより、断面Ｖ字状の石枕を形成していたと考えられる。

棺内南西側では、側壁にほぼ平行して長さ約80cmの直刀が一振出土した。床面直上からの出土である。中茎を頭位方向、切先を足下へ向けていた。石棺中央のやや北東側において土器片が出土した。床面から約６cm高い位置である。棺内北西側の倒壊した側壁材の下からも小片が出土した。これらの土器片は、一段目の墓壙内から出土した土師器の台付椀３の口縁部に接合した[1]。棺外の個体が原位置を保持するものと考えられることから、石棺密閉後の棺内への混入は考え難い。棺床から浮いていることから、当初から遺体上部に置かれていた可能性がある。

墓壙内　一段目の墓壙底面において、須恵器の瑳５、土師器の台付椀１・２・３・４が出土した。瑳５は、台付椀に乗った状態で、これに隣接する台付椀２個体とともに北西側に倒れた状態であった。南西側の台付椀は口縁部を下に向けた裏返しの状態で出土した。これらの土器は石棺の主軸上にあり、出土状況や墓壙埋土の状況からも原位置を保持しているものと考えられる。

また、台付椀２は、口縁端部が蓋石に接しており、レベルも蓋石の下面より高いことから、これらの土器は蓋

５号墳墓壙土層断面（北西から）

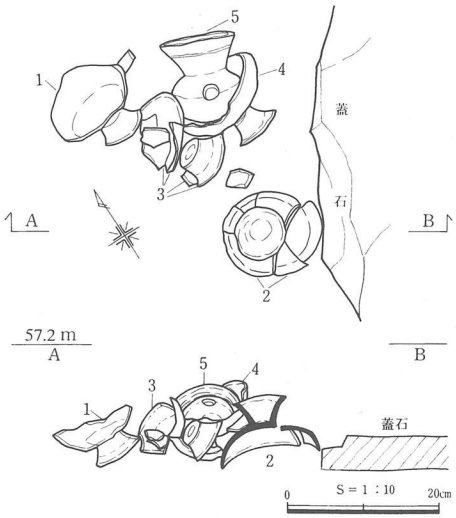


Fig. 12　５号墳墓壙内遺物出土状況

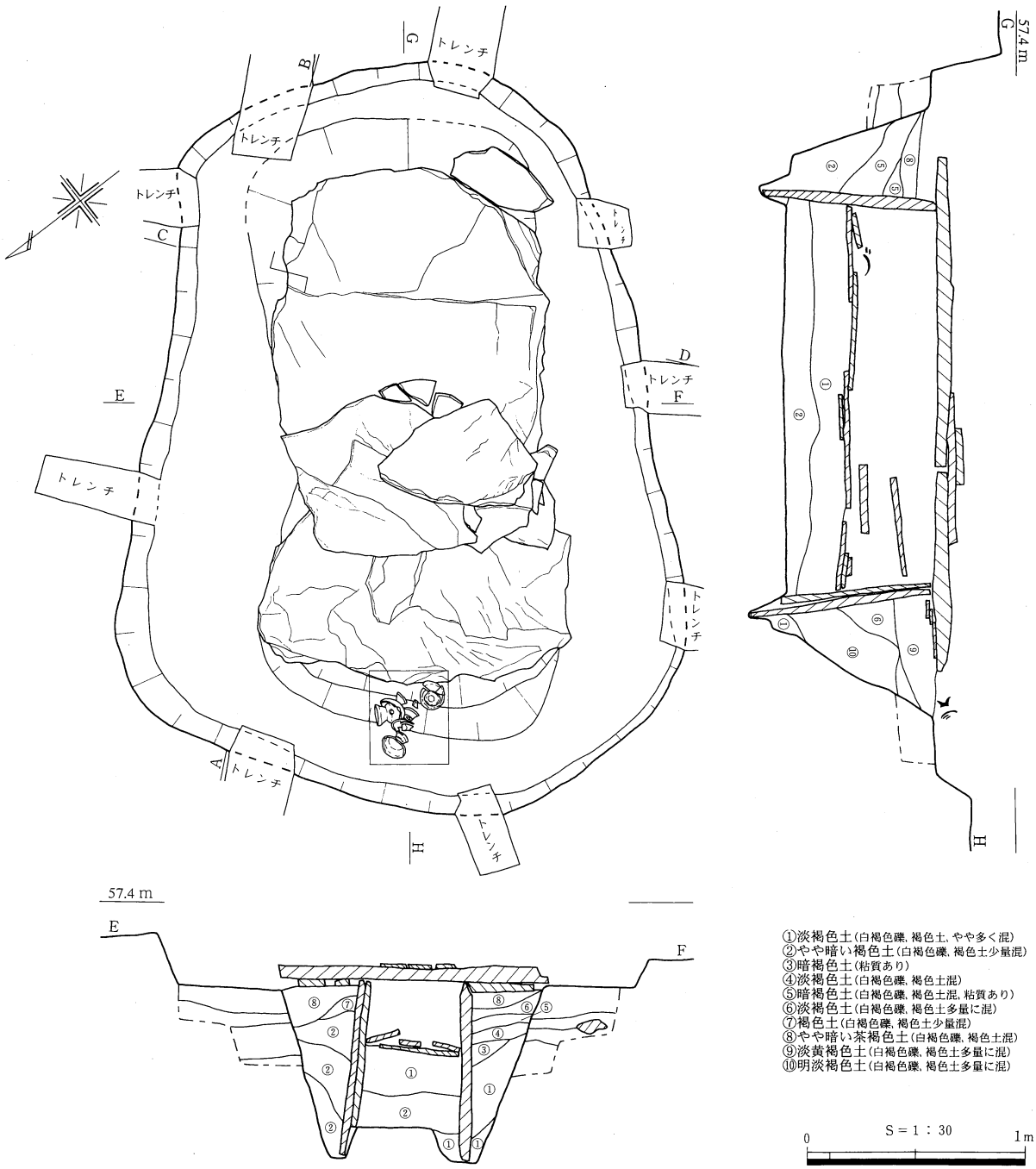


Fig. 13　5号墳埋葬施設平面・土層断面図

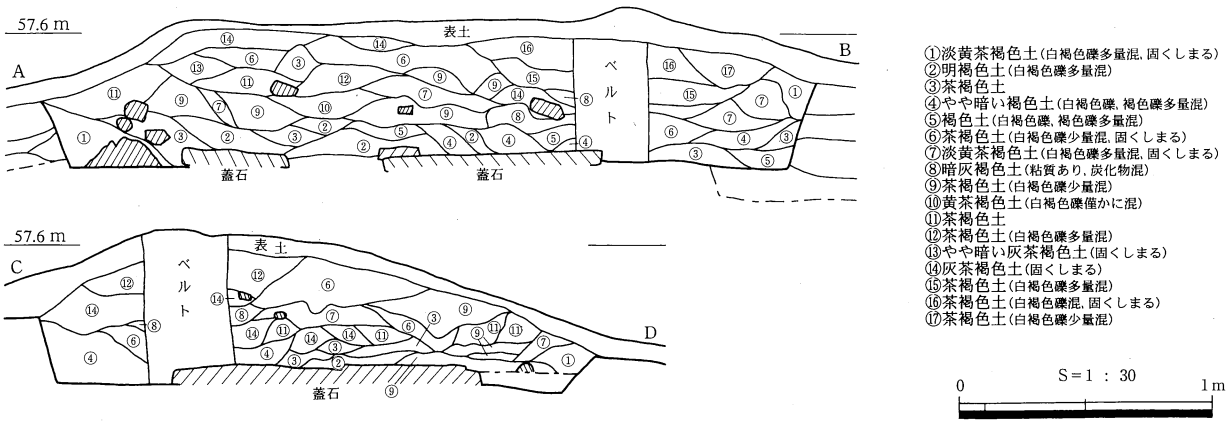


Fig. 14　5号墳埋葬施設墓壙土層断面図

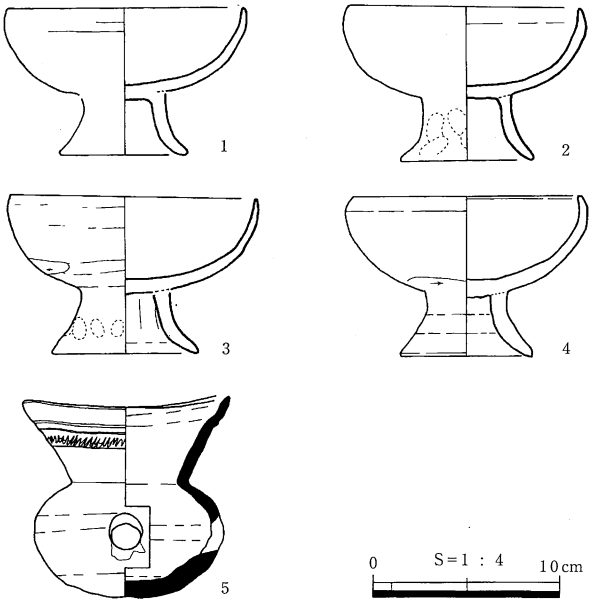


Fig. 15　５号墳墓壙内出土遺物実測図

石が架構された後に置かれたと考えるのが自然と思われる。

(4)　墓壙上段の埋土（Fig. 14）

埋葬過程の最終段階として、墓壙の埋め戻しが行われる。土層は細かい単位で異なる土が入っており、風化した花崗岩を含む褐色系の土をやや乱雑気味に充塡したことが窺える。全体的に墳丘盛土の土と同様であることから、墓壙を掘った土により埋められたものと判断して矛盾ない。また、土が固く締まっていることから、ある程度突き固めながら埋められたものと考えられる。

ｅ．築造時期（Fig. 15, 16、PL. 23）

本墳に追葬が行われていないことから、墓壙内出土の土器群が手掛かりとなる。須恵器の瓿５が陶邑編年のＭＴ15型式併行、６世紀前葉段階と考え得る。これは、土師器や棺内の大刀の編年観からも矛盾しない。

註

(1)　長瀬高浜遺跡ＳＸ52の箱式石棺内からは、多量の土師器片が出土している。
　鳥取県教育文化財団『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書Ｖ』1983

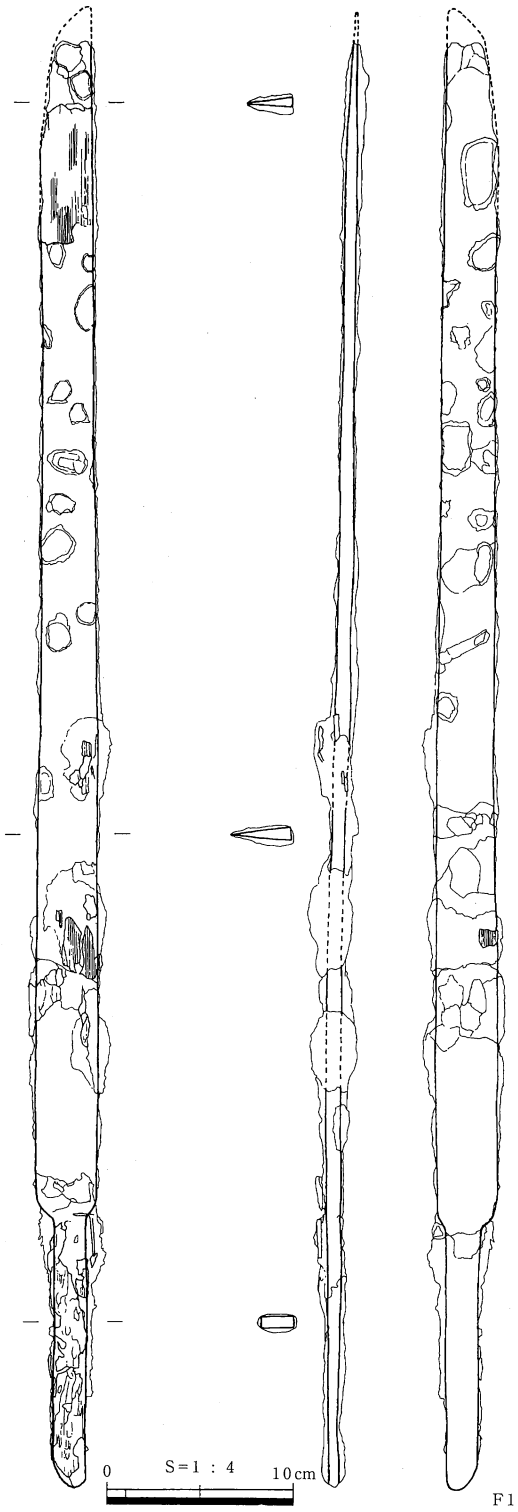


Fig. 16　５号墳棺内出土鉄刀実測図

番号	Fig. PL.	遺構名	出土位置	器　種	法量(cm)	特　　徴	胎　土	色　調	備　考
1	Fig. 15 PL. 23	５号墳	上段墓壙底面	土師器 台付椀	口径12.4 高さ7.8	外面杯部：ケズリ後ヨコナデ、外面脚部：指押さえ後ヨヨコナデ、杯部内面：ナデ	精良、石英粒混	明黄褐色 10YR7/6	口縁一部欠損
2	Fig. 15 PL. 23	５号墳	上段墓壙底面	土師器 台付椀	口径.12 高さ7.2	外面杯部：ケズリ後ヨコナデ、外面脚部：指押さえ後ヨヨコナデ、杯部内面：ナデ	精良、石英粒混	黄橙色 7.5YR7/7	口縁一部欠損
3	Fig. 15 PL. 23	５号墳	上段墓壙底面	土師器 台付椀	口径12.9 高さ7.6	外面杯部：ケズリ後ヨコナデ、外面脚部：指押さえ後ヨヨコナデ、杯部内面：ナデ	精良、石英粒混	浅黄橙色 7.5YR8/6	完存
4	Fig. 15 PL. 23	５号墳	上段墓壙底面	土師器 台付椀	口径12 高さ8.5	外面杯部：ケズリ後ヨコナデ、外面脚部：指押さえ後ヨヨコナデ、杯部内面：ナデ	精良、石英粒混	明黄褐色 10YR6/6	完存
5	Fig. 15 PL. 23	５号墳	上段墓壙底面	須恵器 瓿	口径16 高さ10.5	内外面に自然釉付着。底面に２㎜程度の小礫付着。	砂粒やや多く混	灰色N5	完存
F１	Fig. 16 PL. 24	５号墳	石棺棺床	大刀	全長76.5 幅3.4	鉄製。刀身部、中茎部に木質遺存。	――	――	――

Tab. 3　５号墳出土遺物観察表

5号墳構築過程の復元

以上の所見に基づき、5号墳の構築過程を整理する。

第一工程　選地・基盤整備

傾斜が緩やかで見晴らしの良好な丘陵頂部を選地する。

多少の整地を行う。意図的かどうかは分からないが、周辺の草木を焼き払い炭化物を含有する暗茶褐色土層を形成する。

第二工程　墳丘構築

墳丘東側を中心に斜面をカットし、墳丘の基部を円形に削り出す。テラスには浅い周溝が掘削される。発生した排土は盛土として積み上げる。この際、低い部分を重点的に盛ることにより、盛土構築面が水平となるよう配慮している。

墳丘の削り出しが完成したのち、盛土は周辺の斜面から調達されたと思われる。異なる性質の土を互層にかつ水平に築き上げる。この際、周辺の地形や周溝の位置を勘案しつつ、墳丘北側から南東側にかけては念入りに、墳丘西側ではやや簡略に行う合理的な築造がなされている。

第三工程　埋葬施設の構築

墳丘の完成後に、その中央付近に二段堀りの墓壙を掘削する。いわゆる掘込墓壙a類[1]である。上段は浅く、下段は盛土直下まで達する。この際、石材の大きさを勘案して、墓壙上段の底面と蓋石のレベルが同一となるよう調整して掘削されている。この時点で、すでに石材は搬入され、墳丘東側のテラス付近で整形された状態である。

壁体が構築された後、周囲を突き固めながら棺を固定する。棺内には、20cm程度埋めた後に棺床として板石を敷く。頭位側には二枚の板石をV字状に組み合わせた石枕を置く。

第四工程　遺体の搬入・閉塞

遺体を副葬品とともにを搬入し、南東方向に頭位を向け棺内に安置する。棺内からの土器の出土から、この段階で、後に墓壙内に置かれる土器を使用した祭祀が行われたと考えられる。

蓋石は、おもに大型の石材二枚を用いて行い、小型の石材を補完的に用いる。

密閉後、墓壙内の主軸上に須恵器の瑳1個体、土師器の台付椀4個体をまとめて置く。この段階においてもこれらの土器を使用した祭祀がなされたと想定できる。

墓壙を埋める。墓壙を掘削した土で突き固めながらやや簡略に行う。

およそ以上の四段階を経て本墳は築造されたと考えられる。

註

(1)　墓壙構築法の分類のうち、盛土の完成後に墓壙を掘り込むものをさす。
和田晴吾「葬制の変遷」『古墳時代の王と民衆』(『古代史復元』第6巻) 講談社1989年

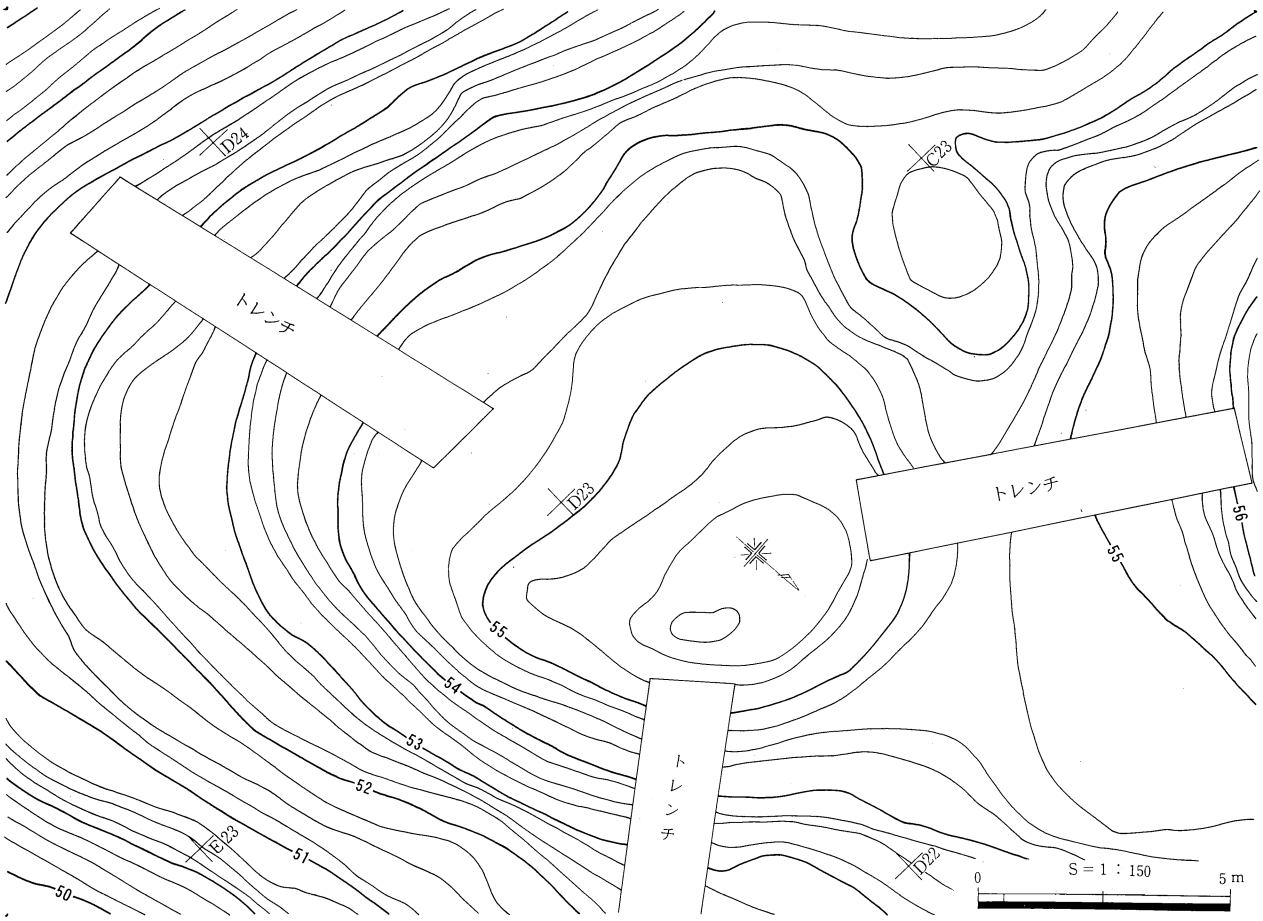


Fig. 17　９号墳調査前平面図

９号墳

a．調査前の状況（Fig. 17、PL. 16）

墳丘は、５号墳が立地する丘陵頂部の南東側に位置する。

調査前は杉が植林されていた。墳丘は、直径12m程度の円墳と想定された。マウンド状の高まりは確認できたものの、墳丘の周囲に斜面をカットしたような痕跡は見受けられない。墳頂部は北東側半分を残して地山の岩盤が露出しており、墳丘が断面台形状を呈するなどかなりの削平が考えられる。また、安山岩の石材の破片もみられ、埋葬施設は破壊された可能性が予測された。

b．盛土基盤面の状況（Fig. 19）

墳丘構築直前の地表面と考えられる盛土直下の暗茶褐色土層（④層）から判断すれば、本墳は５号墳が立地する丘陵頂部から南東方向へ傾斜する尾根を切断して築造されている。そのため、北西側が高く、南東側が低い地形をなしている。墳頂部付近の黒色土層直下が岩盤であり、斜面の傾斜からも、大がかりな墳丘構築面の整地はなされていないと考えられる。

c．墳丘の構造（Fig. 20、PL. 16, 17-1）

墳丘は、北西―南東方向が約12m、北東―南西方向が約14mの円墳である。標高は、墳頂部において55.50mである。最も遺存する墳丘北側における墳頂部と墳裾との比高差は2.4mを測る。盛土は、墳丘の北側から南東側にかけてのみ残存し、西側半分は地山が露出する。

墳丘の周囲は、地山斜面をカットし墳裾部を明確にする程度の簡単な削り出しが行われている。

盛土の築成は、隣接する５号墳の盛土と同様、地山土（①層）、風化した花崗岩を多量に含有する土（②層）、風化した花崗岩を少量含有する土（③層）のおよそ３種類が観察できる。レベル的に低い部分を優先的に積み上

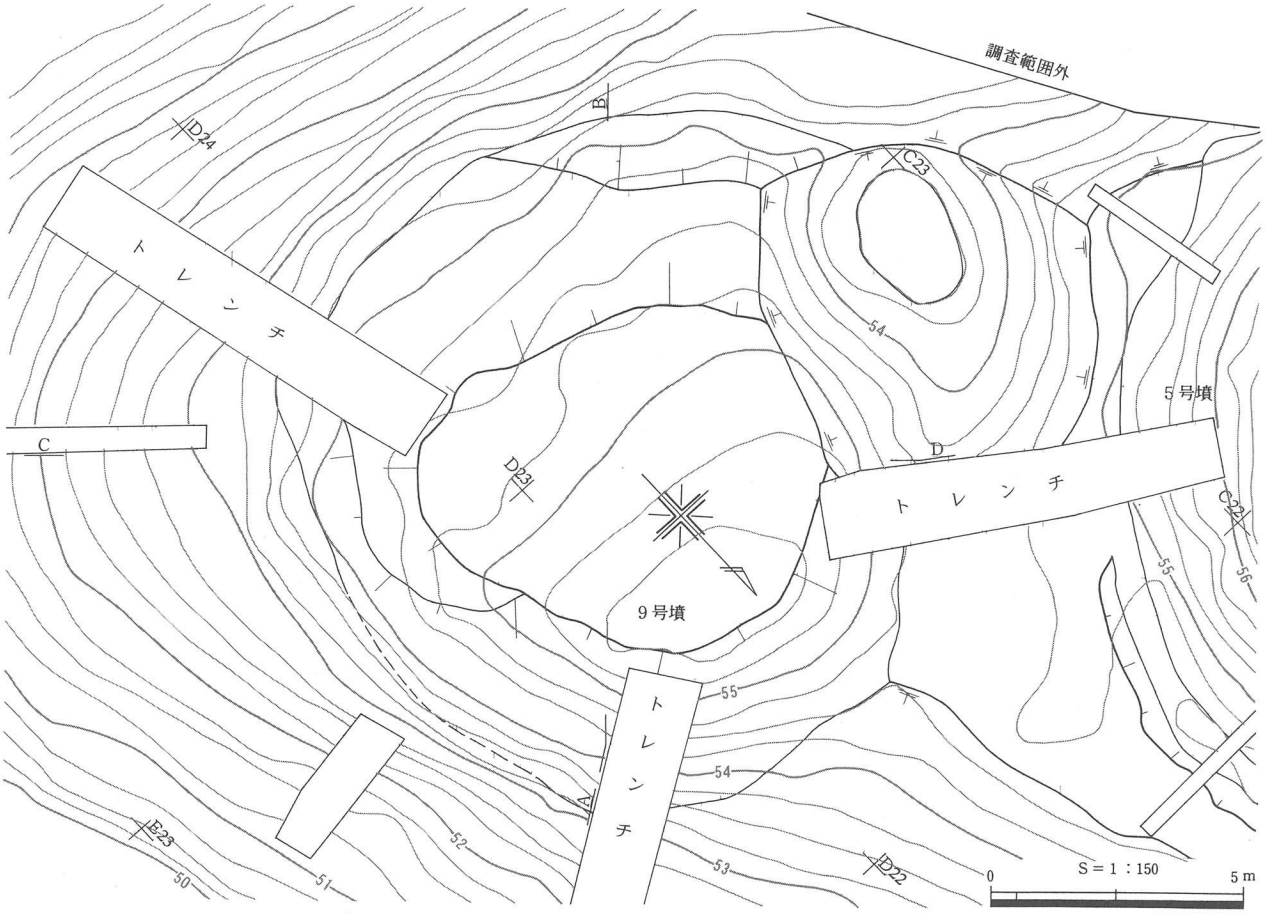


Fig. 18　9号墳遺構平面図

げることにより、構築面を水平に保つ配慮がなされている。②層は、墳丘の中央付近に重点的に使用される。盛土中には地山に多量に含有される5～20cm程度の角礫が多数混入する。

d．築造時期

埋葬施設は検出できなかったが、墳丘上に板状安山岩の石材片が見られることから、本来は箱式石棺を内包していたものと考えられる。墳丘南側の流土中より土師器小片が出土しているが、摩滅が著しく図化できない。隣接する5号墳との切り合い関係は、周溝底部が表土直下にあり、土層断面からは検証できない。

したがって、築造時期は不明である。

9号墳墳丘土層断面（北西から）

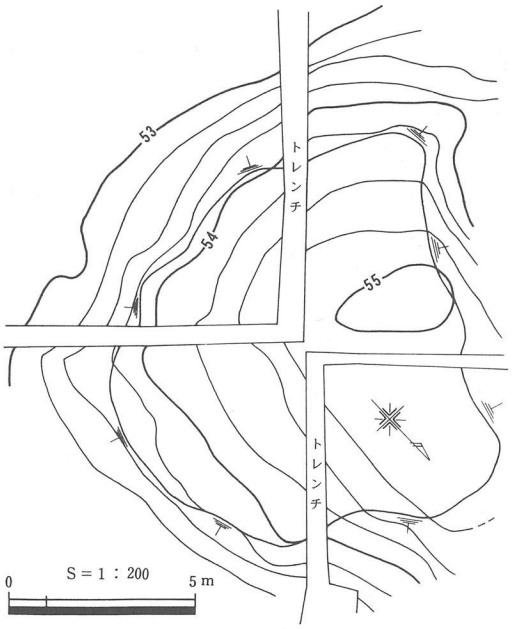


Fig. 19　9号墳盛土除去後平面図

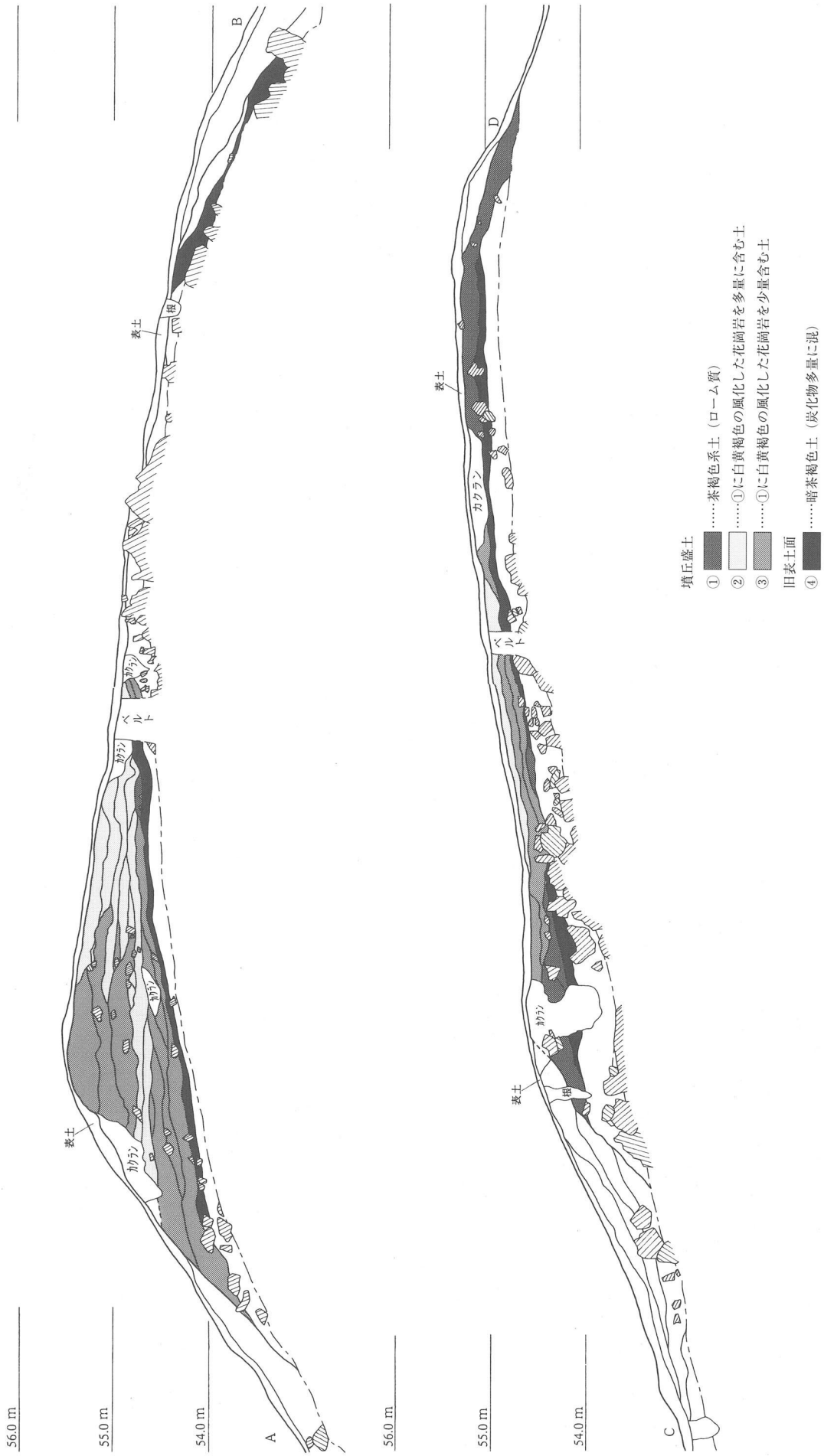


Fig. 20　９号墳墳丘土層断面図

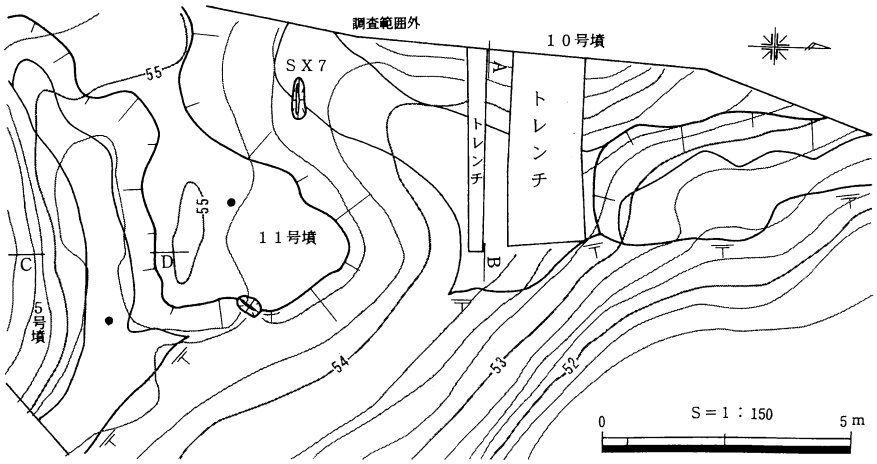


Fig. 21　10・11号墳遺構平面図

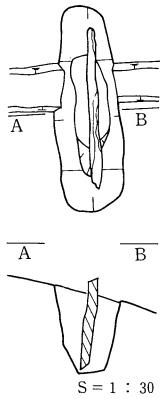


Fig. 22　SX7遺構図

10号墳 (Fig. 21、PL. 18-1)

5号墳からやや北側へ屈曲しつつ下る尾根上に位置する。直径12m程度の円墳と考えられる。墳頂部での標高は、55.5mである。墳丘東側の墳裾と周溝付近のみが調査区である。北側の梨栽培園の造成により、墳丘の一部が破壊され、北側は崖状を呈する。墳丘上には杉が植林されていた。

周囲には周溝が掘削されている。墳丘の東側の一部には掘られていない。周溝底部での幅は1.1～1.6mである。調査区内の墳丘部分は、全て地山による削り出しにより形成されている。

遺物が出土していないため、築造時期は不明である。

SX7 (Fig. 22)

10号墳の周溝底部より、安山岩の石材を検出した。ほぼ東西方向に長軸を持つ。周囲に掘り方をもつことから、石棺が破壊された際に、その一部が残存したものと考えられる。10号墳の周溝内埋葬の一部であろうか。

11号墳 (Fig. 23, 24)

5号墳の北側に位置する。調査前はマウンド状の高まりがみられず、古墳として認識できなかった。墳丘上には、植林の作業に伴って発生したと考えられる角礫が積まれていた。

南西側を除く墳丘周囲に周溝が掘削されるが、南側は5号墳、北側は10号墳と共有する。

南側周溝底部から、5号墳に後出する時期の須恵器6が出土している。また、墳丘上の表土中において須恵器7・8が出土した。これらはいずれも陶邑編年のTK43～TK209型式併行段階（6世紀後半～7世紀初頭）に比定できる。

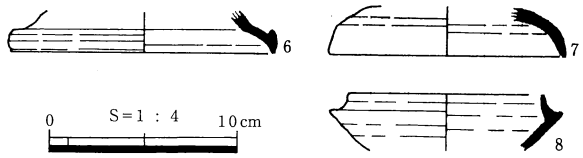


Fig. 23　11号墳周辺出土遺物実測図

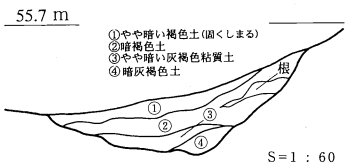


Fig. 24　5・11号墳周溝土層断面図

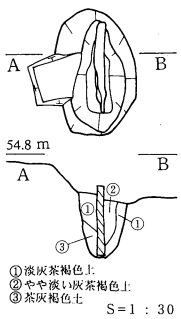


Fig. 25　11号墳石材出土状況

番号	Fig. PL.	遺構名	出土位置	器　種	法量(cm)	特　　徴	胎　土	色　調	備　考
6	Fig. 23	11号墳	周溝内	須恵器高坏	底部径14	脚部片。内外面：ヨコナデ	良。砂粒混。	灰色5Y	脚部破片
7	Fig. 23	遺構外	11号墳周辺	須恵器坏蓋	口径※12.4	内外面：ヨコナデ	良。砂粒混。	灰黄色 6/2	破片
8	Fig. 23	遺構外	11号墳周辺	須恵器坏身	口径※10.2	内外面：ヨコナデ	精良	灰白色 7.5Y	口縁部破片

Tab. 4　11号墳出土遺物観察表

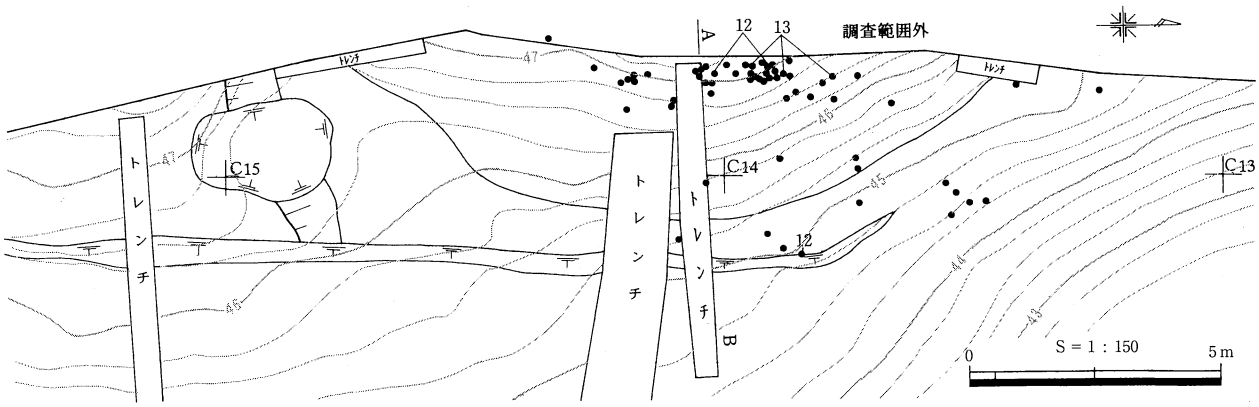


Fig. 26　８号墳遺構平面図

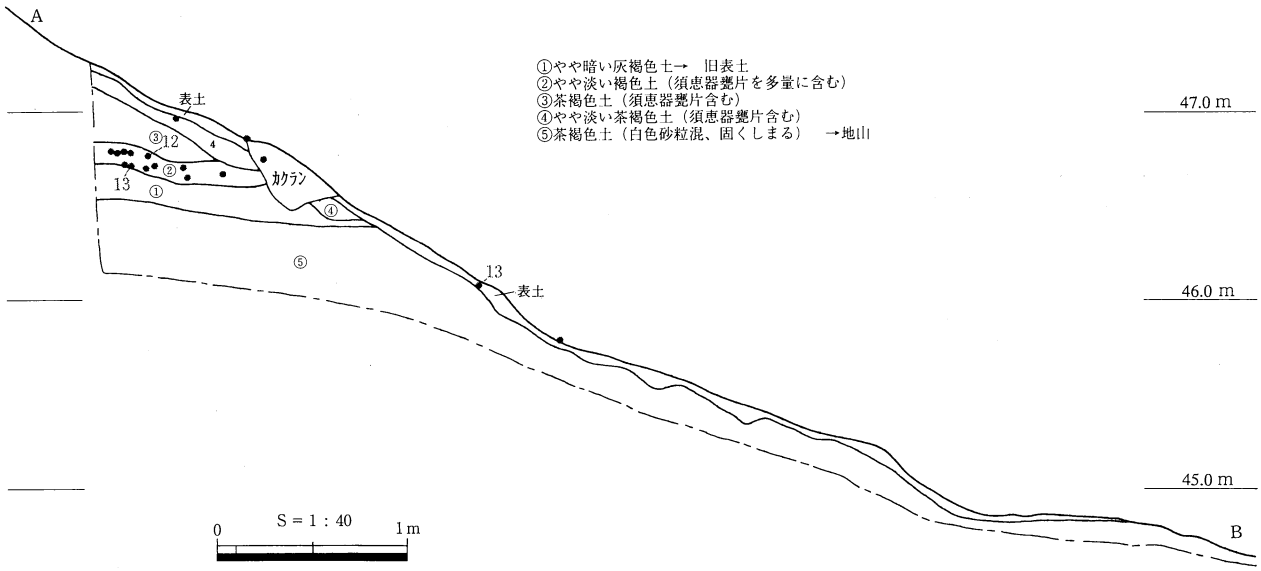


Fig. 27　８号墳墳丘土層断面図

(2)　B調査区の調査

８号墳（Fig. 26, 27, 28、PL. 18—２, 26）

古墳群が立地する丘陵のほぼ中央に位置する。北側には２号墳、南側には３号墳がある。墳丘東側の一部のみが調査地である。墳丘部分には杉が植林されていた。直径17m程度の円墳と想定される。墳頂部での標高は49.80mである。調査区内の墳裾部には、テラス状の平坦地がみられ、地山の削り出しによる墳丘の構築が窺えた。この平坦地を利用して、丘陵を南北に縦断する作業道がつけられていた。

墳丘は、標高46.5m程度までは地山の削り出しによって形成される。地山直上に炭化物を含有する暗灰褐色土（①層）があり、墳丘構築以前の地表面と考えられる。盛土は②、③層の二層が確認できるが、いずれも構築面が水平となるよう意識して築かれたとみられる。

このうち、旧表土直上の③層から多量の須恵器の甕片が出土した。盛土の最下層にあたることから、墳丘構築の際に意図的に破砕してまかれたものとみられる。墳丘周辺の表土中からも須恵器の甕の破片、提瓶の破片が出土している。これには、埋葬施設の撹乱に伴い排出されたものも含まれている可能性がある。

墳丘南東側には、一部浅い周溝を有する。底部の幅は1.5～３mである。地形から見て、尾根を切断しつつ３号墳との境を南西側まで掘削されているものと考えられる。

調査区内では埋葬施設は確認できないが、地元の方の話によると、かつて墳頂部において箱式石棺が出土している。二基の石棺が平行に出土し、棺内から人骨、須恵器が出土したという。南西側の墳裾部には長軸が１m程度

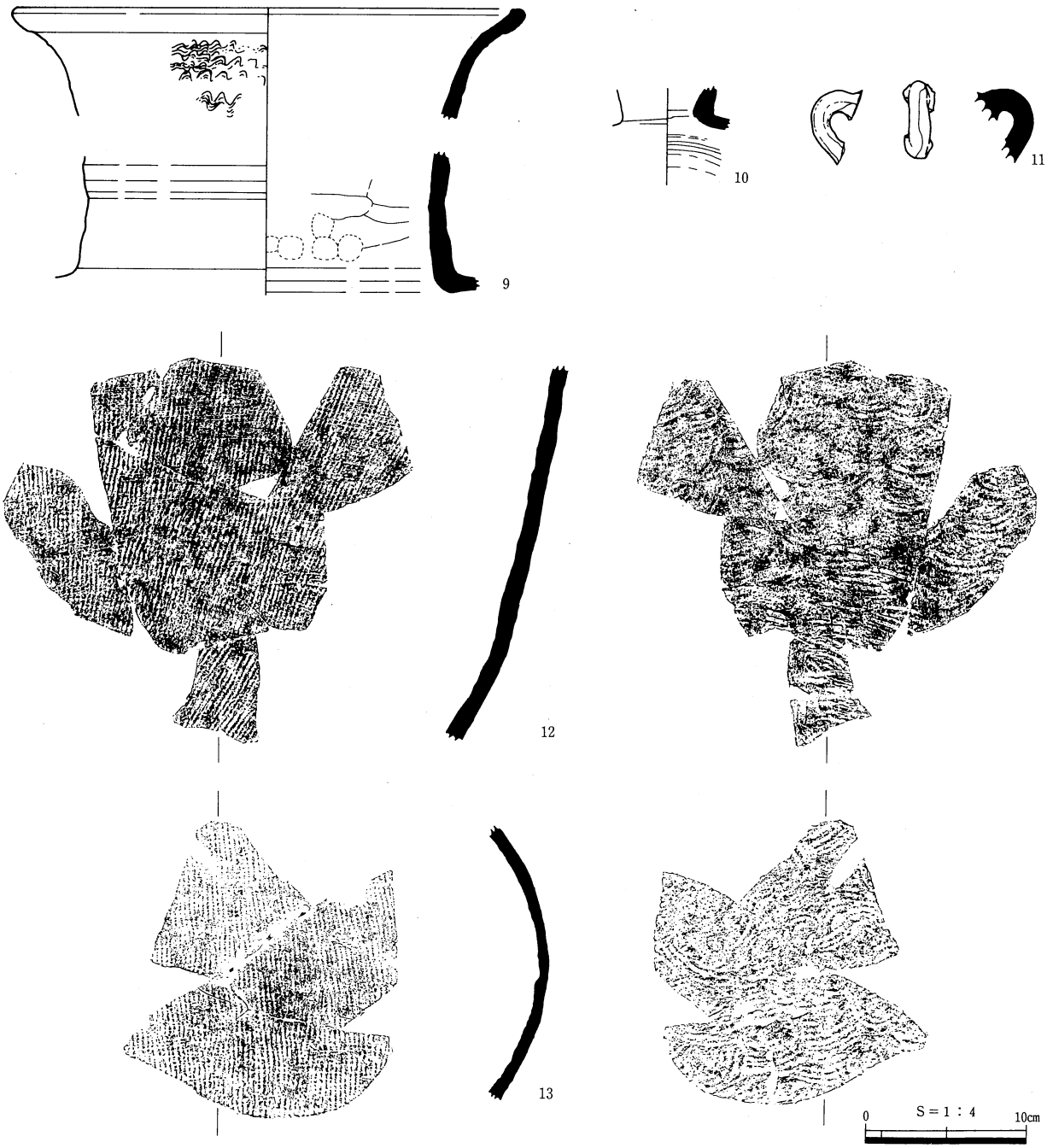


Fig. 28　8号墳出土遺物実測図

番号	Fig. PL.	遺構名	出土位置	器　種	法量(cm)	特　　徴	胎　土	色　調	備　考
9	Fig. 28 PL. 26	8号墳	墳裾部	須恵器甕	口径※30	頸部に波状文。外面：ナデ、内面：ナデ、指頭圧痕	良	灰色 5Y5/1	破片
10	Fig. 28 PL. 26	8号墳	墳裾部	須恵器提瓶	頸部径5.7	内外面：ヨコナデ、胴部外面：カキメ	良	暗灰色 N3/0	破片
11	Fig. 28 PL. 26	8号墳	墳裾部	須恵器提瓶	—	把手	良	灰白色 7.5Y	破片
12	Fig. 28 PL. 26	8号墳	墳裾部	須恵器甕	—	胴部片。外面：平行叩き目、内面：同心円文叩き目。	良	灰色 N6/0	破片
13	Fig. 28 PL. 26	8号墳	墳裾部	須恵器甕	—	胴部片。外面：平行叩き目、内面：同心円文叩き目。	良	灰色 N6/0	破片

Tab. 5　8号墳出土遺物観察表

の板状の安山岩の石材があり、石棺の部材と考えられる。

築造時期は、墳丘内および周辺の表土中から出土した須恵器が手がかりとなる。甕片9・12・13は、6世紀後半の所産と考えられ、提瓶10・11は取手の形状から同様の時期が考えられる。

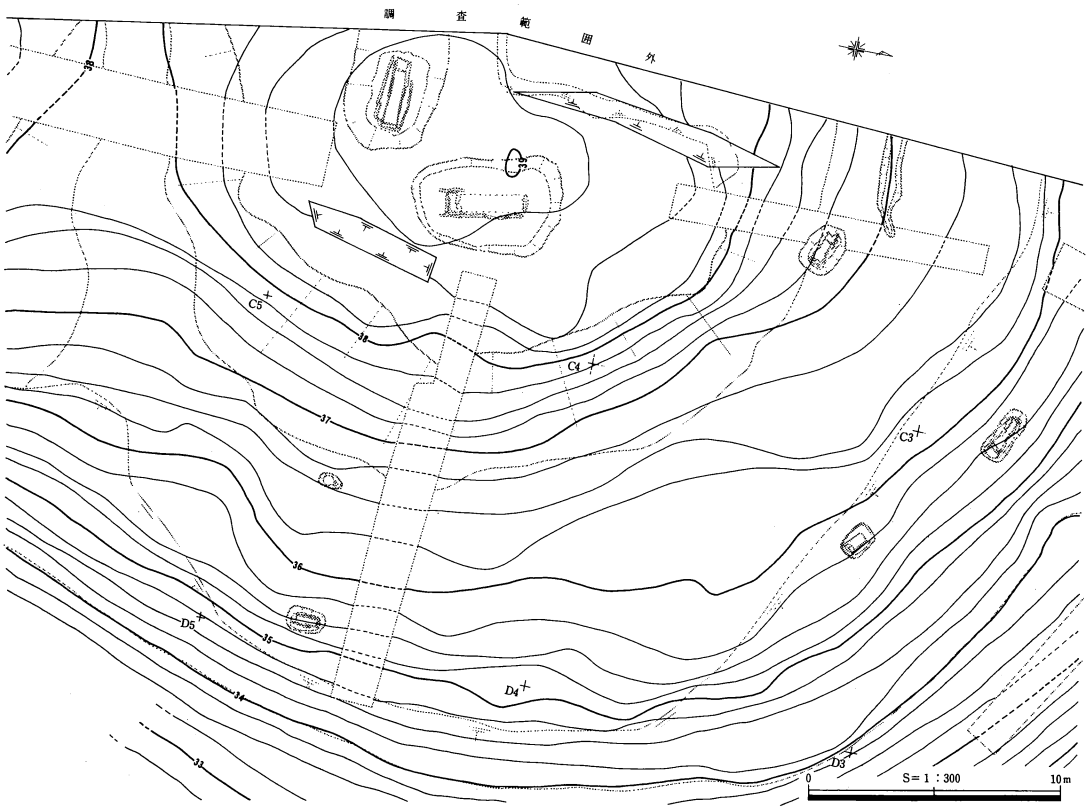


Fig. 29　７号墳調査前平面図

(3)　C調査区の調査

７号墳

a．調査前の状況（Fig. 29、PL. 9-1）

墳丘は、古墳群の立地する尾根の北端に位置する。墳頂部での標高は約38.50mである。墳丘の東半分は杉の植林地に、西半分は梨栽培と雑木林に利用されていた。

マウンド状の高まりが確認でき、直径がおよそ20mの円墳と判断した。墳丘の約3/5が調査区である。墳頂部は平坦で広いことから、かなりの削平を受けているものと予想された。北側から南東側にかけては、墳丘に沿ってテラス状の地形が認められ、墳丘構築時の地山削り出しの結果とみられる。

北条平野周辺では、古墳の埋葬施設として箱式石棺が頻繁に用いられる。この石材として無斑晶板状安山岩が使用されるが、この破片が墳丘の周囲にみられないことから、箱式石棺であるとすれば埋葬施設の残存も考えられた。

b．盛土基盤面の状況（Fig. 32）

旧地形は、盛土直下に認められる炭化物を含有する灰褐色土層を盛土築造直前の地表面と解釈し、この層の面的な状況から判断した。

灰褐色土層は、地山直上に形成されている。標高は墳頂部付近で38.3m前後、墳裾側で約38mであり、ほぼ平坦である。炭化物の含有密度は比較的均一である。

このことから、丘陵尾根の先端部でやや幅が広くなだらかな部分を選地し、墳丘を構築したと考えられる。この際、構築面上を若干整地したことが考えられる。

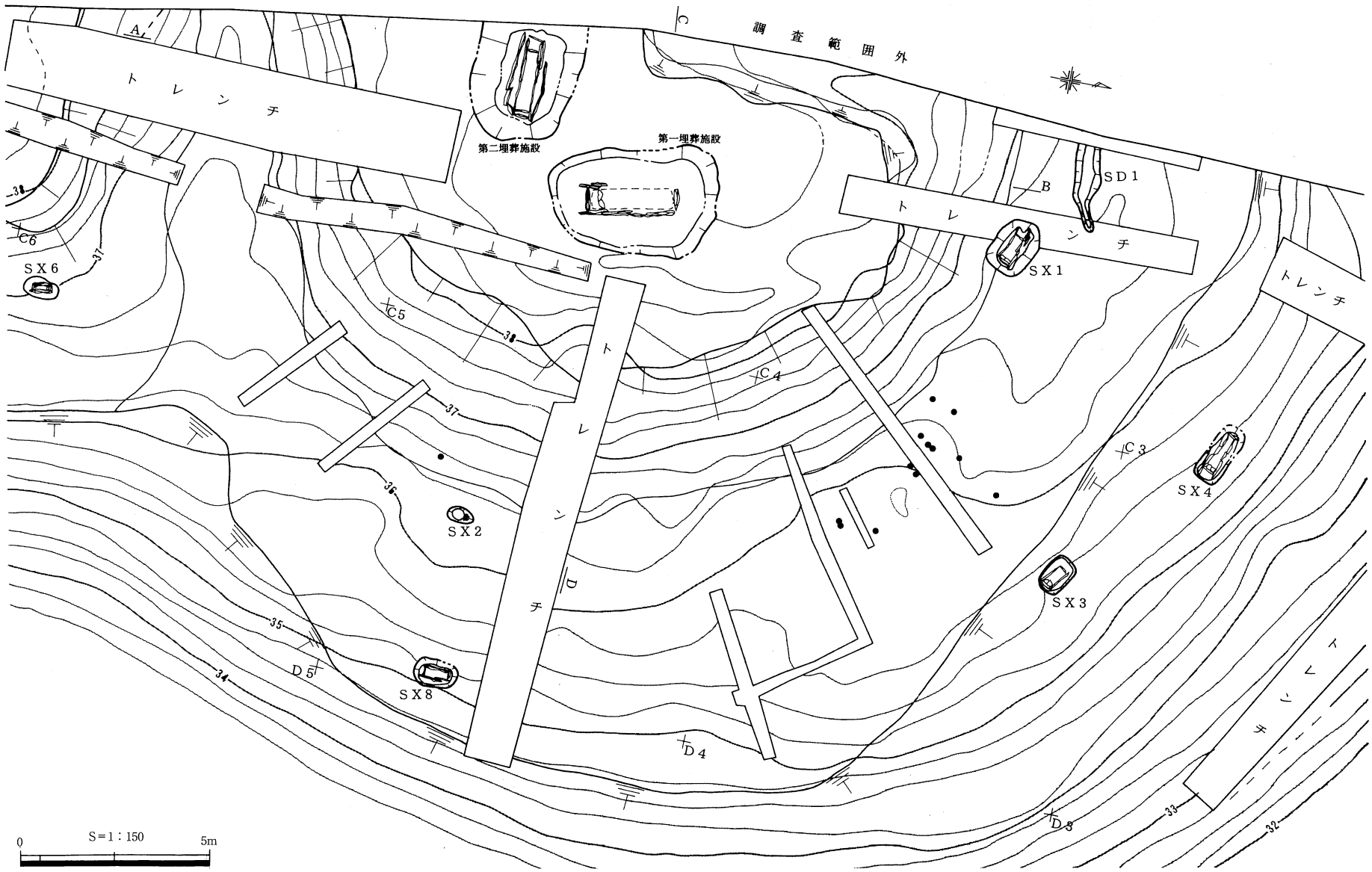


Fig. 30　7号墳遺構平面図

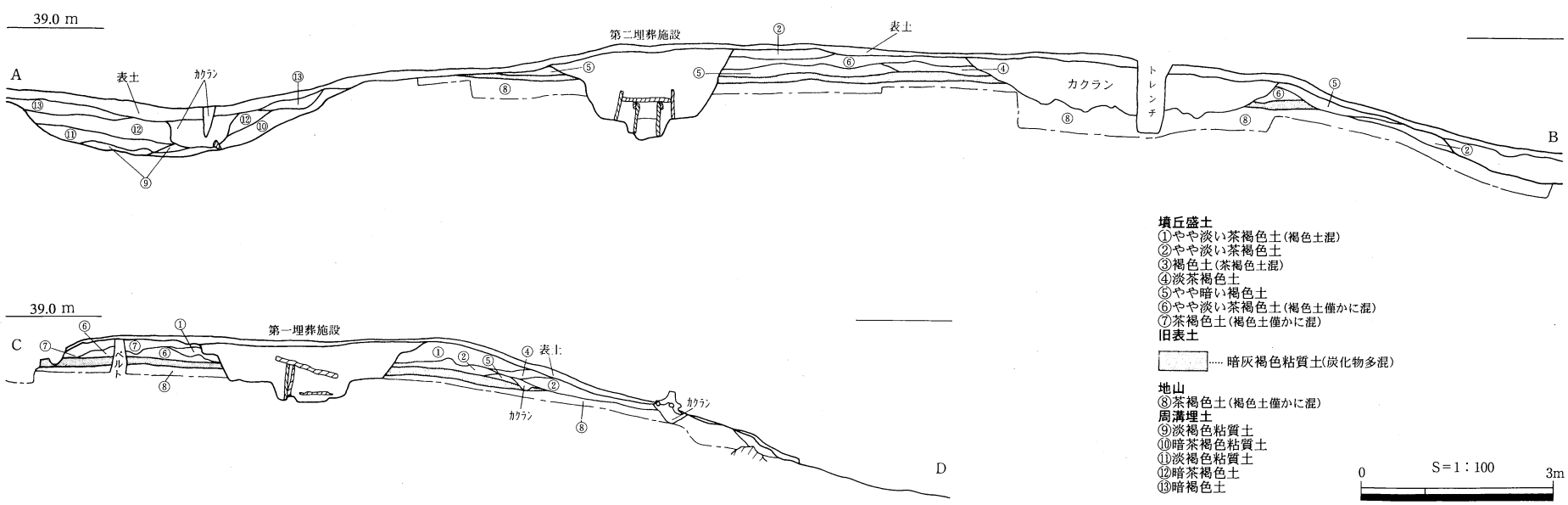


Fig. 31　7号墳墳丘土層断面図

c．墳丘の構造

(Fig. 30, 31、PL. 9-2)

残存する墳丘は、南北が20m、東西も20m程度が想定される円墳である。最も残存する東側墳頂部から墳裾までの高さは約2.3mを測る。このうち、約1.9mが地山斜面のカットにより形成されている。墳丘周囲には、この削り出しにより形成された幅5～9mのテラスがめぐる。このテラス上において数基の小型の埋葬施設が検出された。

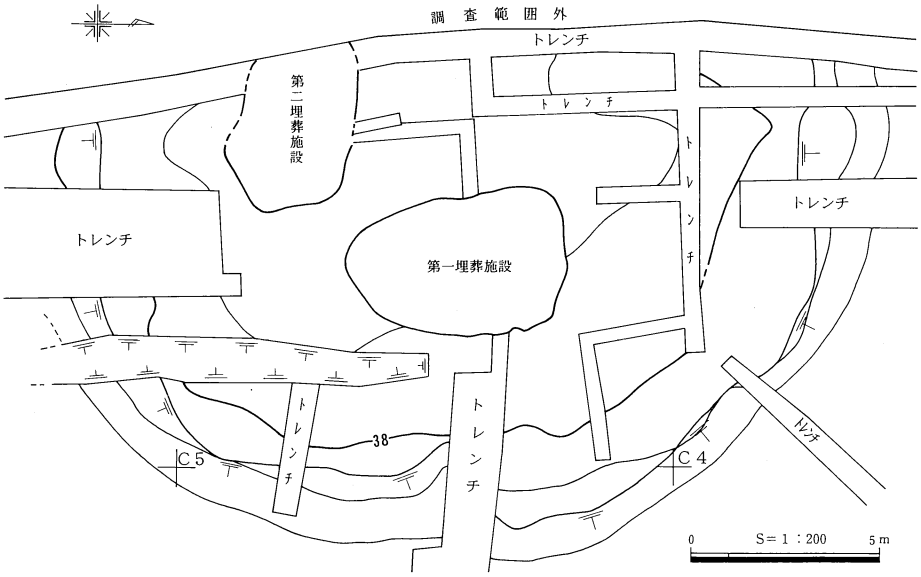


Fig. 32　7号墳盛土除去後平面図

盛土は、厚さ30～40cmが遺存する。基本的に地山土と同質のローム質の茶褐色系土で構成されることから、墳丘削り出しにより発生した排土を使用したと考えられる。他の古墳と同様、墳丘構築面を水平に保ちつつ築成されている。本墳の埋葬施設が、地山を深く掘削して構築されていること、盛土の大部分が流失したにしては墳丘周囲の流土の堆積が薄いことなどを考慮すると、本来的には比較的低い盛土であったと想定できる。

d．埋葬施設の構造

墳丘上より2基の埋葬施設を検出した。

第一埋葬施設

(1) 墓　壙 (Fig. 33、PL. 12-3)

墳頂部の東側に位置する二段堀りの墓壙である。検出面で東西2.8m、南北4.5mの平面楕円形を呈する。底面は標高38.1mでほぼ水平である。底面は地山に達している。二段目は、一段目のほぼ中央に南北を軸に掘削される。南北3.1m、東西1.2mの平面長方形を呈する。一段目の底面からの高さは約30cmである。底面には、石材をはめ込む溝が南側に掘られているが、深さがいずれも2～3cm程度と浅い。

(2) 石　棺 (Fig. 35, 36、PL. 10-1, 13)

構造　組み合わせ式の箱式石棺の内部に木棺を内包する、周辺地域に例がない構造である。石棺の内法は、長さ2.2m、高さは倒壊した側壁の状態から想定すると、約0.6～0.7mで、両小口とも同程度の幅をもつとみられる。主軸はN―12°―Wである。石材は、周辺の古墳群の石棺に多用される無斑晶板状安山岩である。

側板は、東側が4枚、西側は補助的な石材も含めて7枚で構成される。東壁の石材は、長さ80cm、高さ50cm程度の石材3枚を配置し、隙間に比較的小型の石材一枚を置く。倒壊しないよう交互に重ねつつ配置されている。西壁の石材は、東壁と同様に石材4枚を配置し、隙間を小型の石材で補う。交互に重ねられてはいるが、南側の2枚を残して棺内に倒壊していた。倒壊した石材は、木棺検出面の直上でほぼ水平な状態であることから、棺内に多量の土砂が流入しない段階に倒壊したものと考えられる。両側壁はいずれも小口壁を挟み込むよう配置される。小口壁は、幅、高さともに60cm程度の石材である。棺内には倒壊した側壁、天井石と共に流入土が充満していた。

天井石は、長軸1m、短軸60cm程度の石材4～5枚を連続的に架構し、隙間を小型の石材で補完している。南側の一部は、天井石が持ち去られていた。棺内の埋土や落下した蓋石の周辺から白褐色の粘土塊が出土しているこ

とから、本来は粘土の目張りが施されていたものと考えられる。

特徴　構造的特徴として、石棺規模の割には二段目の墓壙が浅く、石材の高さが低いことがあげられる。周辺の古墳群の箱式石棺で一般的な手法として、二段目の墓壙や石材をはめ込む溝を深く掘削し、高さのある石材を深く埋設することが行われる。これは石材の倒壊を防ぐと同時に、石棺全体の安定化にも不可欠であると考えられる。しかし、本埋葬施設の石材は、他の石棺の石材と比較して著しく高さがなく、棺内に石材を固定する埋土をほとんどもたないため、棺外からの土圧に対して構造的に脆弱である。

(3)　木　棺（Fig. 35, 36, 37、PL. 11, 12, 13）

石棺内において木棺の痕跡と考えられる土壙状の掘込みを検出した。土壙の底面における規模は、長さ2.0m、幅45～50cmの平面長方形を呈する。土壙の検出面から底面までは、南端で６cm、北端で約10cmを測る。底面はほぼ水平である。

棺内に土壙状の掘込みを有すること、検出面において土壙の掘り方に沿う形で側板の痕跡と考えられる粘質土を含有する層を帯状に検出したこと、土壙の底面より鉄剣などの副葬品が出土したことなどから、木棺の痕跡と判断した。小口板を挿入する掘込みはみられない。底面の標高は約37.7mでほぼ水平である。

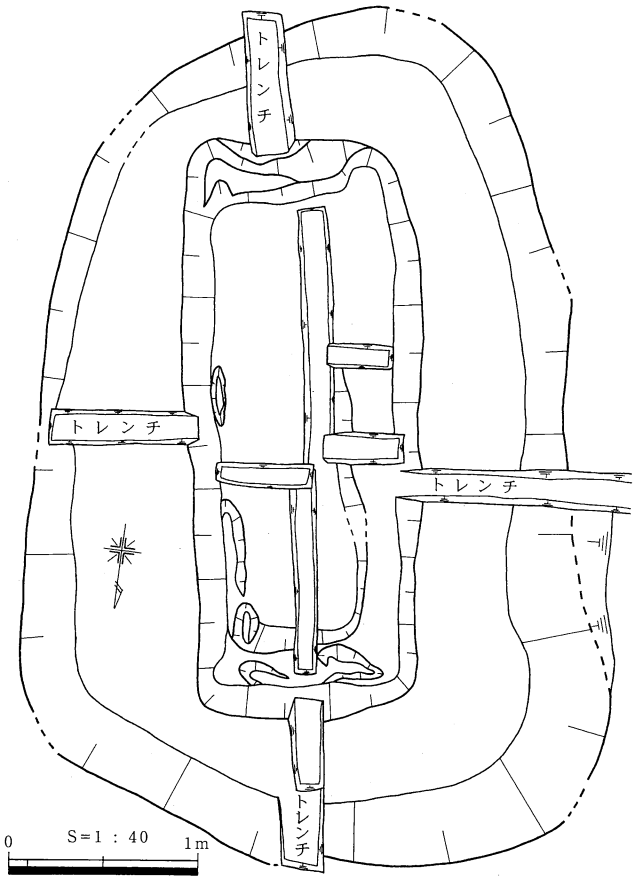


Fig. 33　７号墳第一埋葬施設墓壙平面図

土壙の埋土は、暗茶褐色土を主体とし炭化物を含有するが、西側を除く各辺には側板の痕跡と考えられる褐色の粘質土を含む層（⑮層）がはいる。ただ、西側中央付近では、側板の痕跡は明確に検出できなかった。石棺の側壁が倒壊した際に、内部の木棺の側板も倒壊したためであろう。また、底板の痕跡は明確には窺えない。棺中央の東西方向土層断面において、側板から掘り込み底面に沿い短く伸びる粘質土層を僅かに確認したが、器台や鉄剣が底面直上から出土していることから、木棺は底板を有しない構造であった可能性もある[1]。

以上の所見から木棺は、側板が小口を出ず、小口板も下方へは突出しない箱形のタイプと推察できる。

(4)　木棺内遺物出土状況（Fig. 34, 35, 37、PL. 10-2･3, 11, 12-1･2, 13）

棺内から石枕、鉄斧、鉄剣、鼓形器台、小型仿製鏡、刀子が出土した。木棺内南側より石枕と考えられる石材２枚を検出した。長軸約25cm、幅約10cm程度の石二枚を棺の主軸上で一部が重ねられた状態である。石が重複する部分の下面はほぼ棺底に接する。僅かに石の東西両端が持ち上がることから、本来は先端を木棺の側壁に立てかけて断面Ｖ字状をなしていた石枕が、木棺の腐朽に伴って東西両端が下がり、平坦になったものと考えられる。

石枕の直上から有袋鉄斧F2が出土した。刃先を東に向け、刃部が立った状態である。この部分の天井石は持ち去られており、棺内埋土上部にも一部に撹乱の痕跡が窺われるが、鉄斧の出土したレベルには至っていない。従って、木棺の上面に置かれていたものが、棺の腐朽により落下した可能性がある。

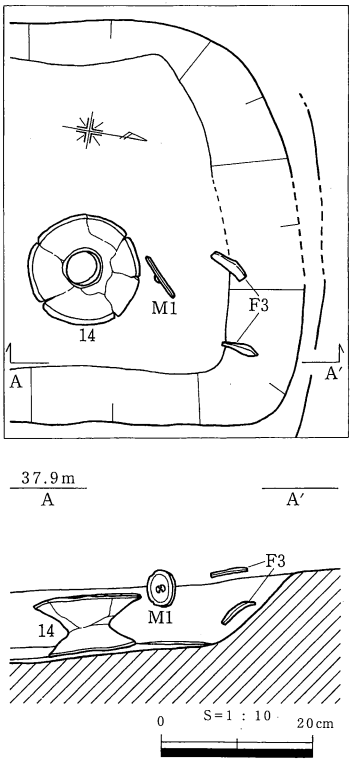


Fig. 34
棺内器台・鏡・刀子出土状況

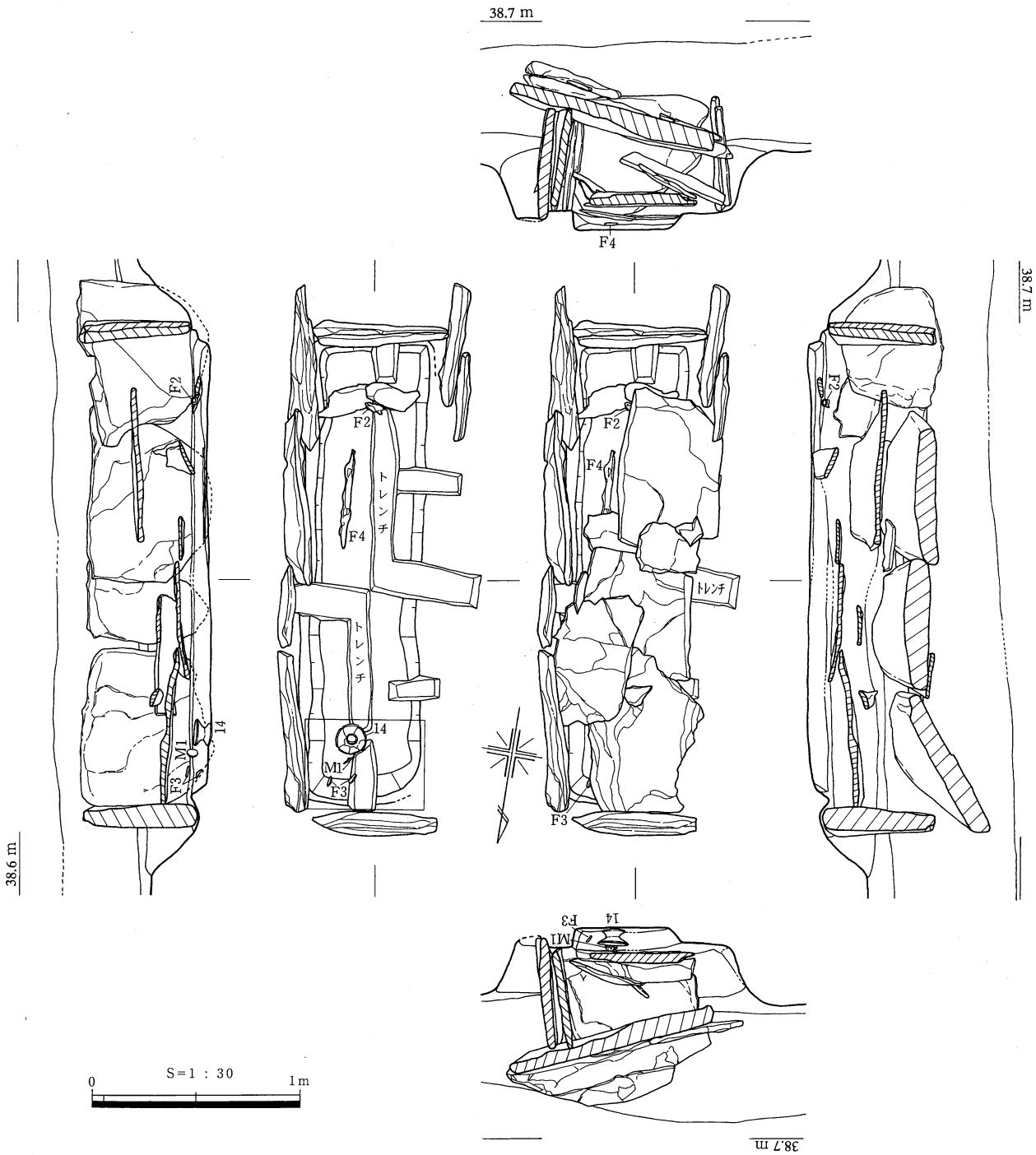
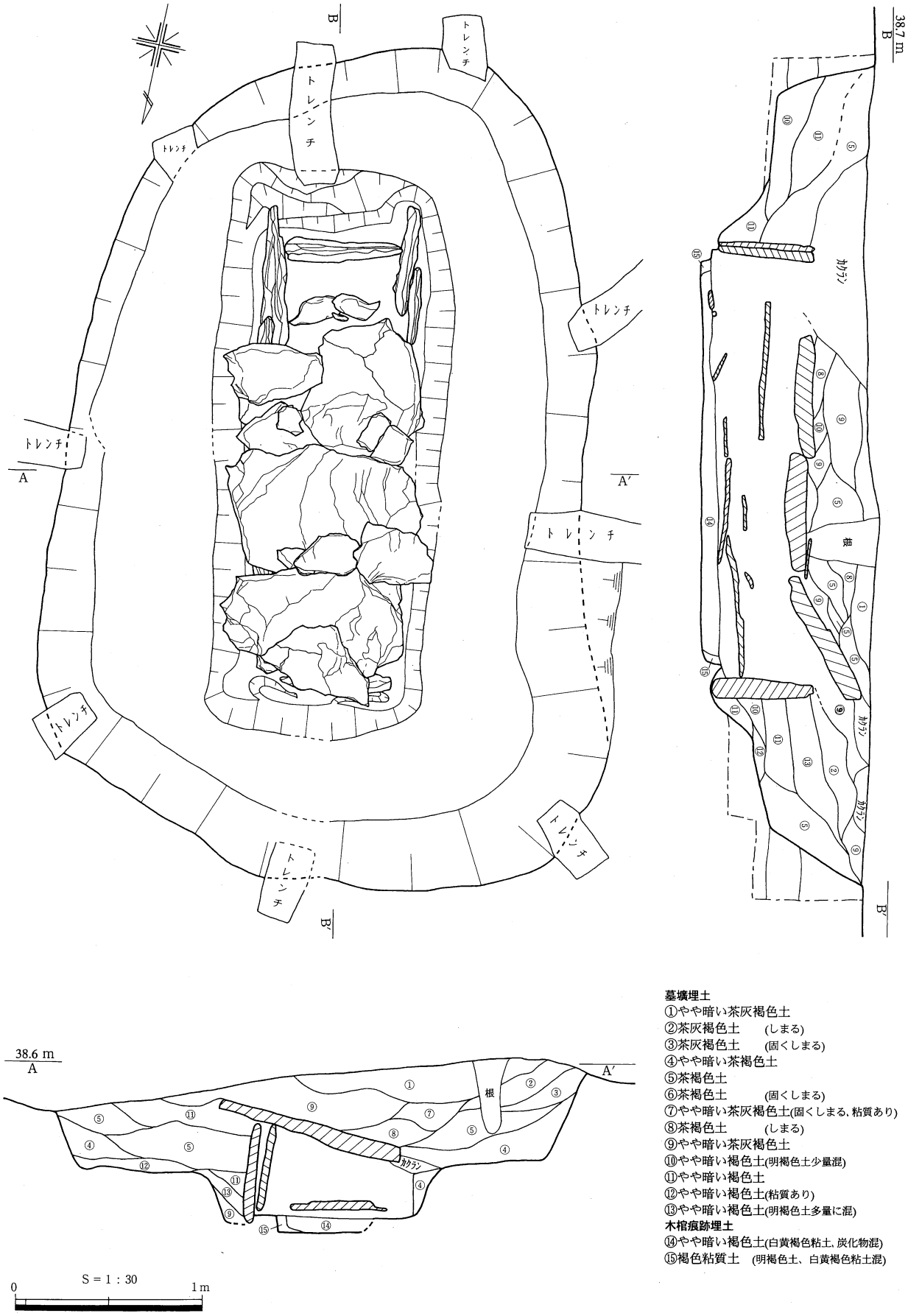


Fig. 35　7号墳第一埋葬施設平面・立面図

棺中央よりやや南東側において鉄剣F 4 が出土した。長さは48cm。木棺の底面直上である。刃部を北側、中茎を南側に向け、棺の主軸とほぼ平行に置かれていた。刃部と中茎の一部に布の痕跡が付着していた。

棺内北側からは鼓形器台14、小型仿製鏡M1、刀子F3が出土した。器台は、石棺主軸よりやや東側に位置し、底面直上から出土した。完形の個体で、口縁はやや北側に傾く。

小型仿製鏡は、器台の北側に位置するが、床面から5cm程度高い位置で出土し、鏡面を北西側に向けて垂直に倒立した状態であった。仿製鏡の北側、木棺の北端付近から刀子F3が出土した。刃部中央で二つに折れており、中茎側は棺底から3cm、刃先側は8cm高い位置である。出土状況から、仿製鏡と刀子は原位置を保持していないことは確実である。遺体の上部に置かれていたものが後に落下した可能性もあるが、隣接する器台が底面直上から出土したことから、当初は木棺の蓋上面に置かれていたものが棺の腐朽により落下した蓋然性が高い。



墓壙埋土
①やや暗い茶灰褐色土
②茶灰褐色土　(しまる)
③茶灰褐色土　(固くしまる)
④やや暗い茶褐色土
⑤茶褐色土
⑥茶褐色土　(固くしまる)
⑦やや暗い茶灰褐色土(固くしまる、粘質あり)
⑧茶褐色土　(しまる)
⑨やや暗い茶灰褐色土
⑩やや暗い褐色土(明褐色土少量混)
⑪やや暗い褐色土
⑫やや暗い褐色土(粘質あり)
⑬やや暗い褐色土(明褐色土多量に混)
木棺痕跡埋土
⑭やや暗い褐色土(白黄褐色粘土、炭化物混)
⑮褐色粘質土　(明褐色土、白黄褐色粘土混)

Fig .36　7号墳第一埋葬施設平面・土層断面図

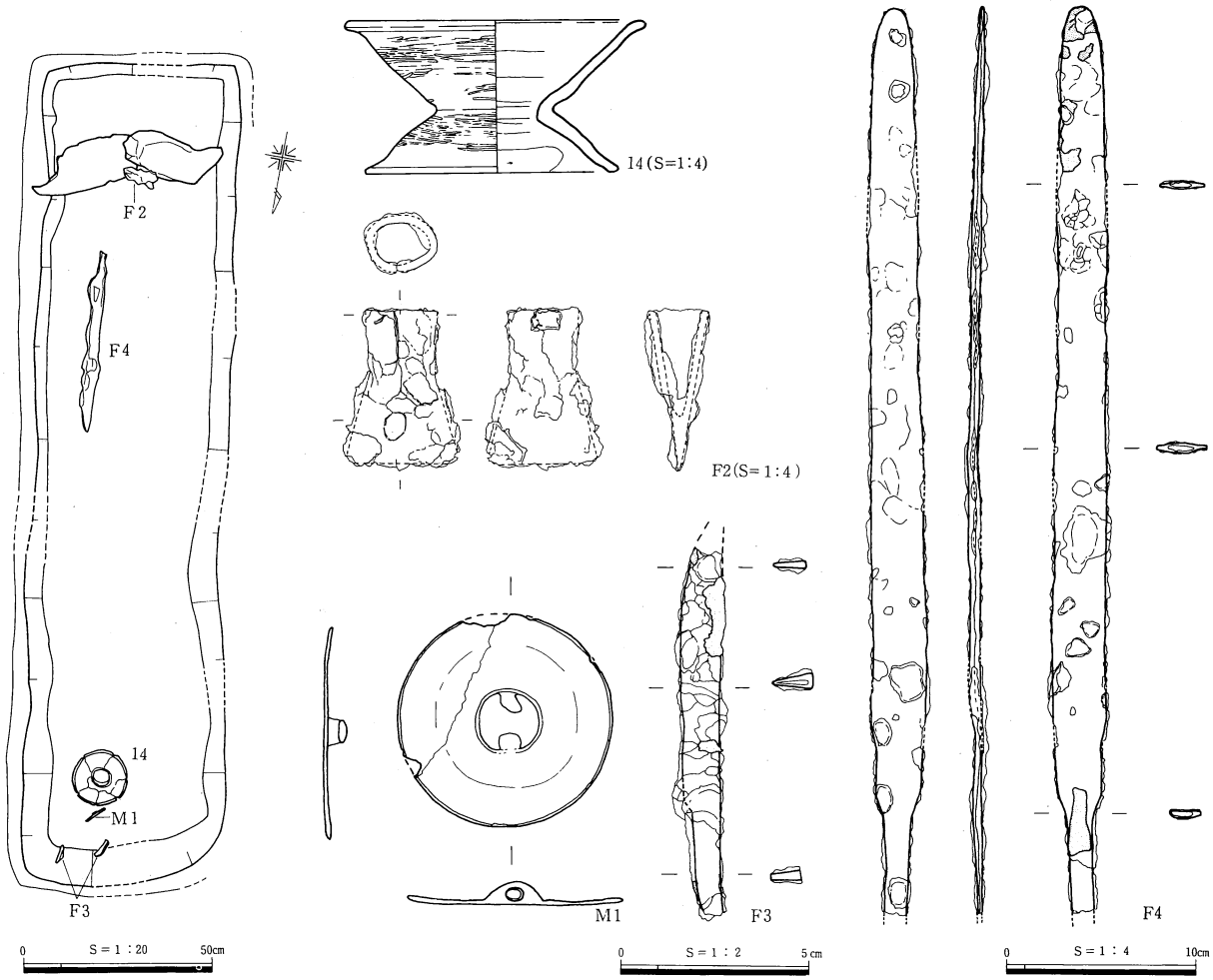


Fig .37　7号墳第一埋葬施設木棺内出土状況・遺物実測図

番号	Fig. PL.	遺構名	出土位置	器　種	法量(cm)	特　　徴	胎　土	色　調	備　考
14	Fig. 37 PL. 25	7号墳	木棺内底面	土師器、器台	口径16 高さ8.2	外面：横方向ミガキ。口縁内面：ケズリ後ナデ。 脚部内面：ケズリ	精良	橙色 5YR6/6	完存
F 2	Fig. 37 PL. 25	7号墳	木棺内	鉄斧	全長8.8 最大幅6.2	袋状鉄斧	——	——	重量：146g
F 3	Fig. 37 PL. 25	7号墳	木棺内	刀子	全長※11	鉄製	——	——	重量：6.4g
F 4	Fig. 37 PL. 25	7号墳	木棺内底面	鉄剣	全長48.6 幅3.2	剣身、中茎部に布目痕	——	——	重量：150g
M 1	Fig. 37 PL. 25	7号墳	木棺内	鏡	直径5.7	銅製。小型仿製鏡	——	——	重量：14g

Tab. 6　7号墳第一埋葬施設出土遺物観察表

(4)　埋葬形態

石枕や鉄剣の配置からみて、被葬者は頭位を南に向けて埋葬されたとみられる。ただ、足元側に小型仿製鏡、刀子、鼓形器台を配置することは、同時期の他の埋葬例からみて特異である。北方に頭位を向け、鼓形器台を枕とする、もう一体が埋葬されていたと考えられる。

(5)　墓壙上段の埋土（Fig. 36）

土層はおもに茶褐色系の土であり、墓壙を掘削した土で埋め戻したと考えても矛盾ない。蓋石直上の埋土は、蓋石の陥没に伴い弓なりに窪んでおり、一部に撹乱がある。ただ、全体的にかなり固くしまる土が入っており、陥没からはかなりの期間が経過しているものと考えられる。蓋石が除去されている南側直上の埋土は撹乱を受けている。

注

(1)　但馬地域では底板を有しない木棺構造が検討されている。
　瀬戸谷晧「弥生の木棺と古墳の木棺」『但馬考古学』6　1991
　瀬戸谷晧「木棺葬古墳の墓壙底施設について」『七面山古墳群・数田北遺跡』1998　八鹿町教育委員会

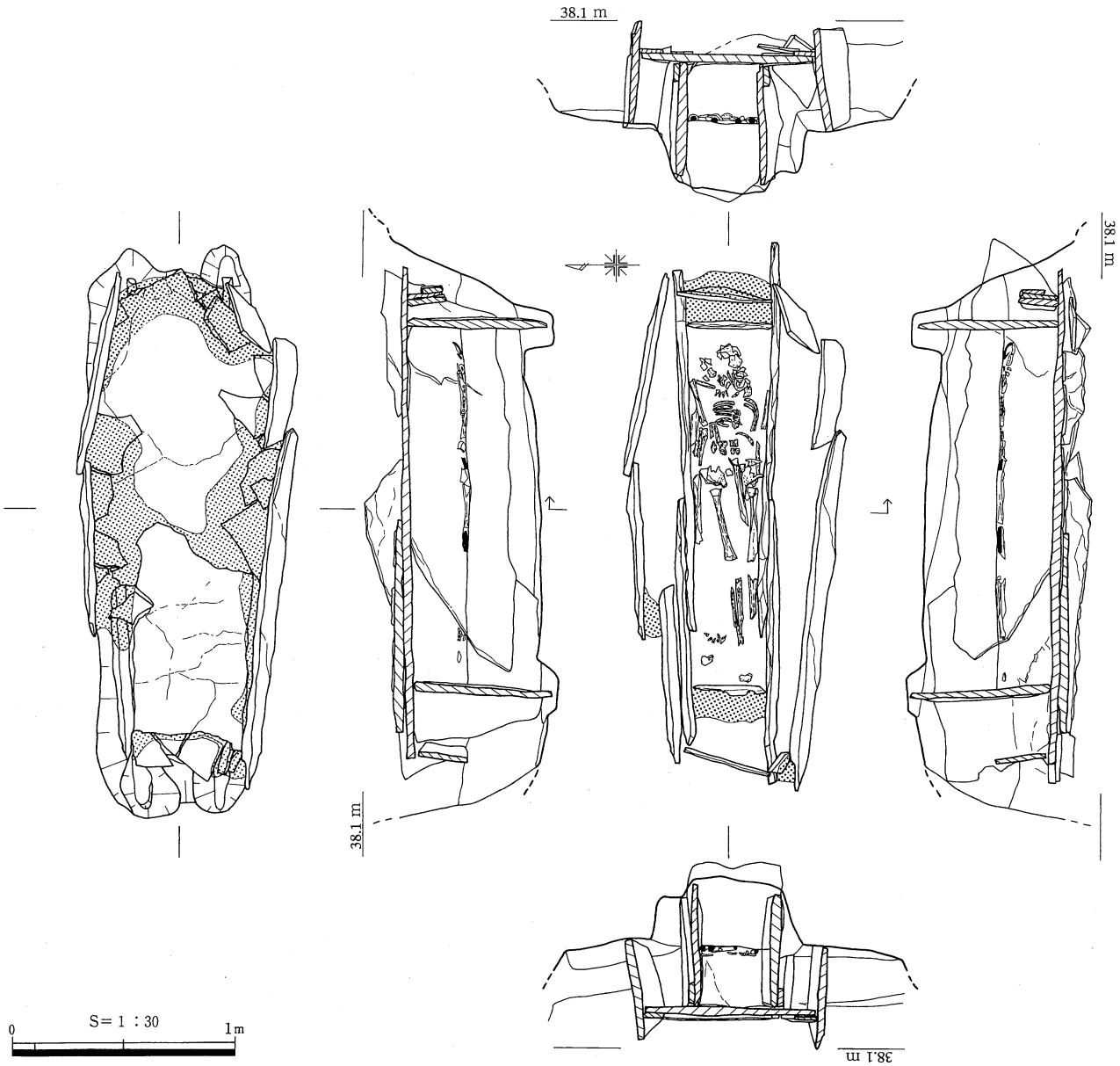


Fig. 38　７号墳第二埋葬施設平面・立面図

第二埋葬施設

(1)　墓　壙（Fig. 40、PL. 15-4）

墳頂部の南側、第一埋葬施設の南西側に位置する。二段堀りの墓壙である。上段は、東西約３m、南北約2.5mの隅丸方形を呈するものと考えられる。底面での標高は約37.70mで、地山を深さ50cm程度掘り下げている。下段は、上段の中央に掘削されるが、南北両側のみに上段の底面を残す。東西約2.7m、南北0.7mの平面長方形をなす。底面には、小口壁を挿入する溝と、側壁をはめ込む浅い溝が掘削されている。墓壙検出面からの深さは1.4mを測る深い墓壙である。

(2)　石　棺（Fig. 38, 39、PL. 14, 15-1･2）

構造　組み合わせ式の箱式石棺である。棺の周囲をさらに板石で囲む特異な構造を呈する。内法は、長さ1.6m、幅は西端で34cm、東端では38cmと東側が若干幅広に造られている。主軸はN－０°－Wである。石材は無斑晶板状安山岩である。

側板は、南北両側壁とも長さ１～1.5m、高さ0.4～0.6m程度の大型の石材を二枚組み合わせて形成している。東側の石材が内側に、西側の石材が外側に重ねられている。東西両端は、小口板を挟み込む。上端は水平となる

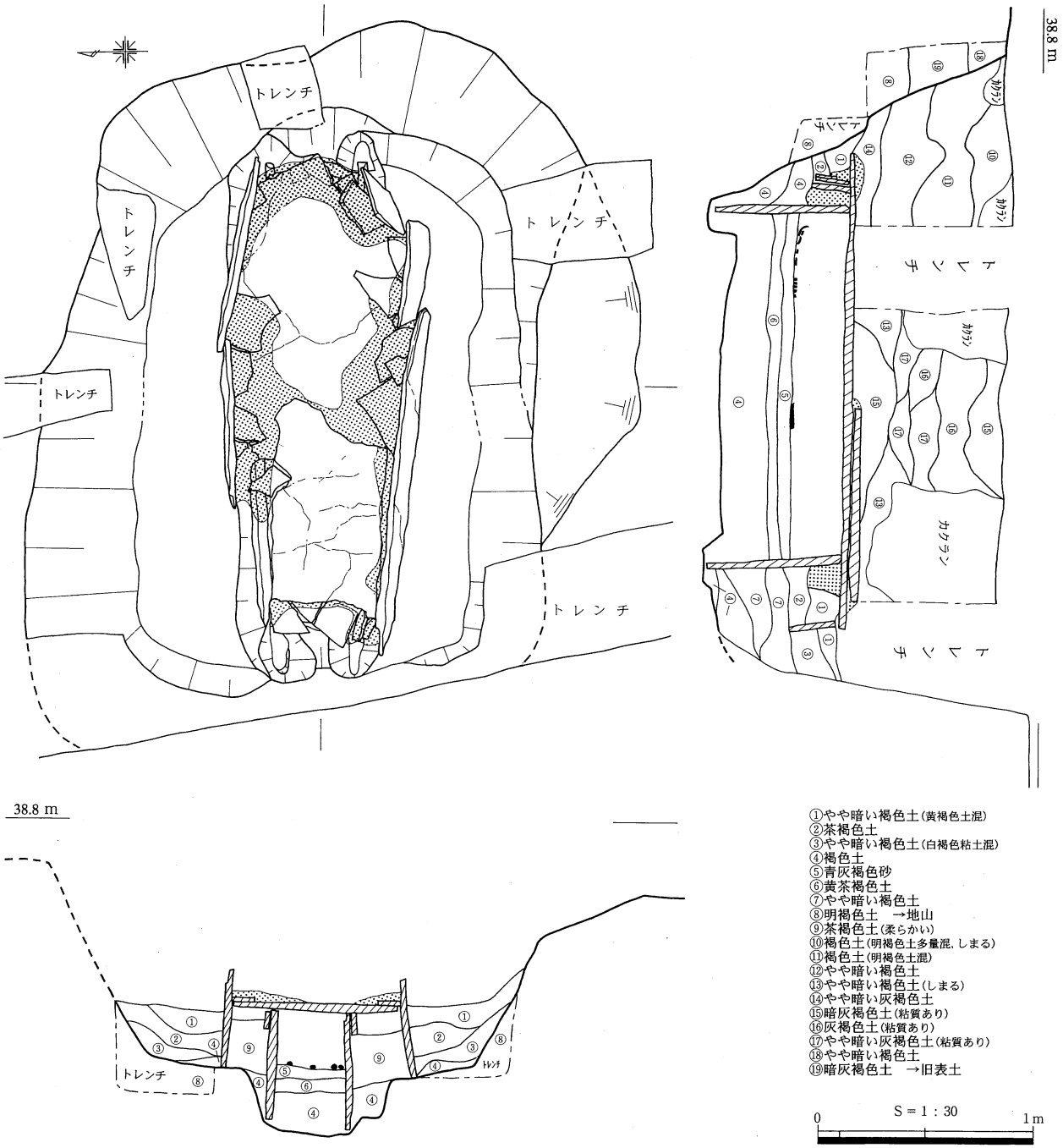


Fig. 39　7号墳第二埋葬施設平面・土層断面図

よう調整が施されている。小口板は、高さ60～70cm、幅50cm程度の石材である。下端は、墓壙底面に設けられた溝に挿入する。上端は丁寧に調整が施されている。両小口板の外側には、小型の石材を用いたもう一枚の小口が配置され、二重構造をなす。内側の小口板との距離は、東側では約10cm、西側では25～30cmである。東側では白色の粘土が充填されていた。西側では内側の小口板に近い10cm程度に粘土が充填されていたが、他の部分は土が入っていた。

棺内は、墓壙底面から20cm程度埋めた後に、厚さ4～6cmにわたって青灰色砂を敷き、棺床とする。棺床の標高は約37.7mでほぼ水平である。

蓋石は長軸2.3m、短軸0.8mの大型の石材を用い、西側の不足部分を長軸1m、短軸0.5mの板石で補う。蓋石の上面は、標高37.9mで水平である。

石棺の周囲は、長軸0.8～1.5m、短軸30～50cm程度の細長い石材で囲まれ、これと蓋石の隙間を白色の粘土で目

張が施される。石材の下端は墓壙上段の底面にある。石材と棺の側壁の間は、下部にかなり軟質の土（⑨層）が入っていたが、本来的には空洞であったと考えられる。側板側の石材が全て棺内側に傾斜していることなどから、これらの石材は蓋石が架構された後に置かれたものと考えられる。

特徴　深い二段堀りの墓壙とともに、蓋石の架構後に棺の周囲を石材で囲うことが構造的特徴である。周辺地域においてこうした形態の石棺は、管見の及ぶ範囲では確認できない。同一墳丘上の二つの埋葬施設が、形態は異なるものの二重構造を有する点は注目される。

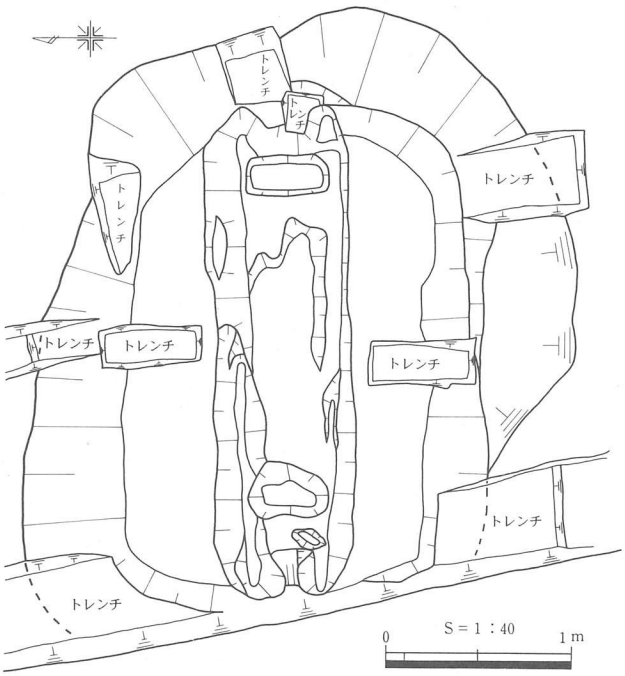


Fig. 40　７号墳第二埋葬施設墓壙平面図

(3)　棺内出土状況

（Fig. 38、PL. 14, 15、考察・井上貴央）

棺内には厚さ２～３cmの土が流入していた。人骨の遺存状況は良好で、二体が確認された。東頭位の一体は、壮年の女性である。頭部付近に赤色顔料が付着する。西頭位の一体は、遺存状況が良好ではなかったが、熟年の女性とみられる。出土状態の検討から、この二体は下肢を交差させた状態で、同時かもしくは近接する時期に埋葬されたと考えられる。

板石による枕はない。副葬品は出土しなかった。

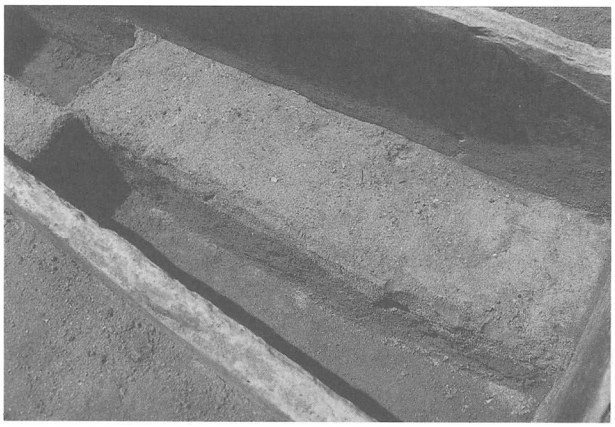
(4)　墓壙の上段の埋土（Fig. 39）

蓋石上方の埋土は、梨栽培の掘り込みにより撹乱を受けていた。茶褐色系の土を主体とし、墓壙を掘削した土で埋め戻したとみて矛盾ない。追葬時の掘り込みは確認できない。埋土は全体的に固く締まっており、ある程度つき固めながら埋められたものと考えられる。

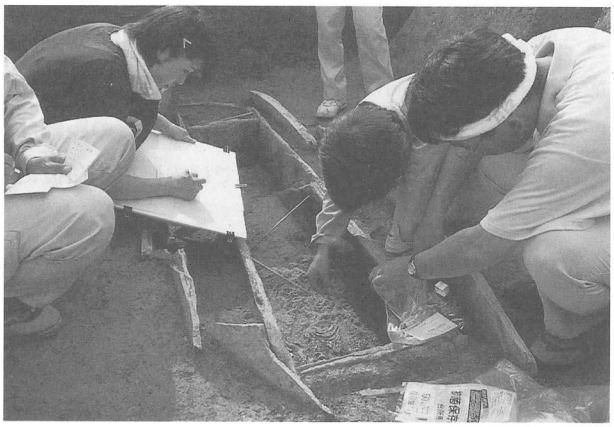
ｅ．築造時期（Fig. 37、PL. 25）

第二埋葬施設内および墳丘上からの出土遺物がないため、第一埋葬施設木棺内の副葬品が手掛かりとなる。最も時期特定が容易な鼓形器台は、天神川編年の天神川Ⅳ～Ⅴ期（古墳時代前期後葉～中期前葉）に比定される。これは、他の遺物の編年観とも矛盾しない。そのほか、墳丘裾部に位置する土器棺（SX2）の土師器の壺および高坏は、天神川Ⅶ～Ⅷ期の所産と考えられ、後出的である。

第一、第二埋葬施設同士の前後関係は不明であるが、本墳は天神川Ⅳ～Ⅴ期に築造されたとみて大過なかろう。



第二埋葬施設棺内青灰色砂敷設状況



第二埋葬施設人骨取上げ状況

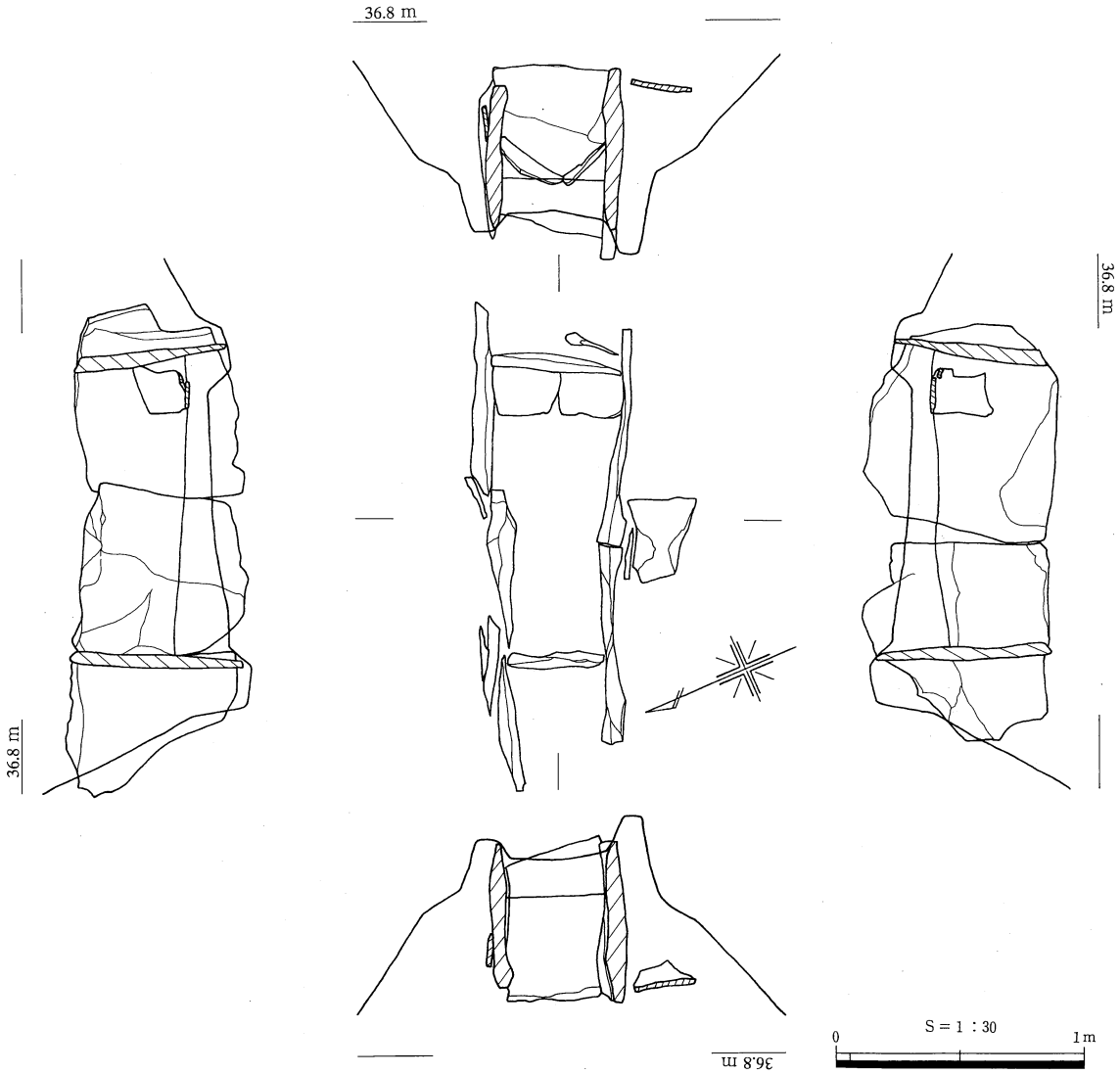


Fig. 41　SX 1 平面・立面図

7号墳周辺の埋葬施設

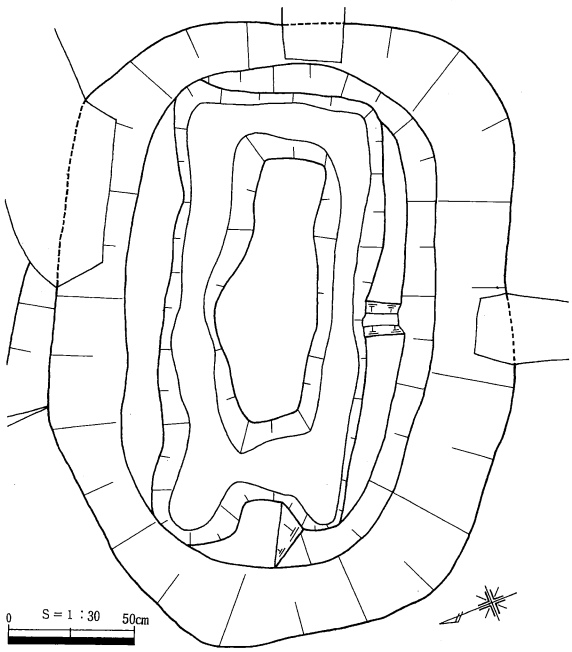
SX 1 (Fig. 41, 42, 43、PL. 19-1)

7号墳の北側墳裾部に位置する。小型の箱式石棺である。

墓壙は、二段堀りである。上段の底面は、長軸2m、短軸1.2mを測る。下段の底面には石材をはめ込む溝が、幅20cm、深さ6～10cm程度に掘られている。

石棺は、無斑晶板状安山岩を石材とする。主軸は、N―66°―Wである。棺の内径は、長さ1.15m、幅は西側で約40cm、石枕のある東側では50cmである。側板は長さ50～70cm程度の石材を並べて形成している。両端は小口壁を挟む込む。小口壁ともに石材上端の調整はなされていない。棺内は、墓壙を10cm程度埋め、厚さ約5cmの青灰色砂を敷き棺床としている。

棺内には土砂が充満していた。棺床での標高は36mでほぼ水平である。棺内東端には、小型の石材二枚を組み合わせて、



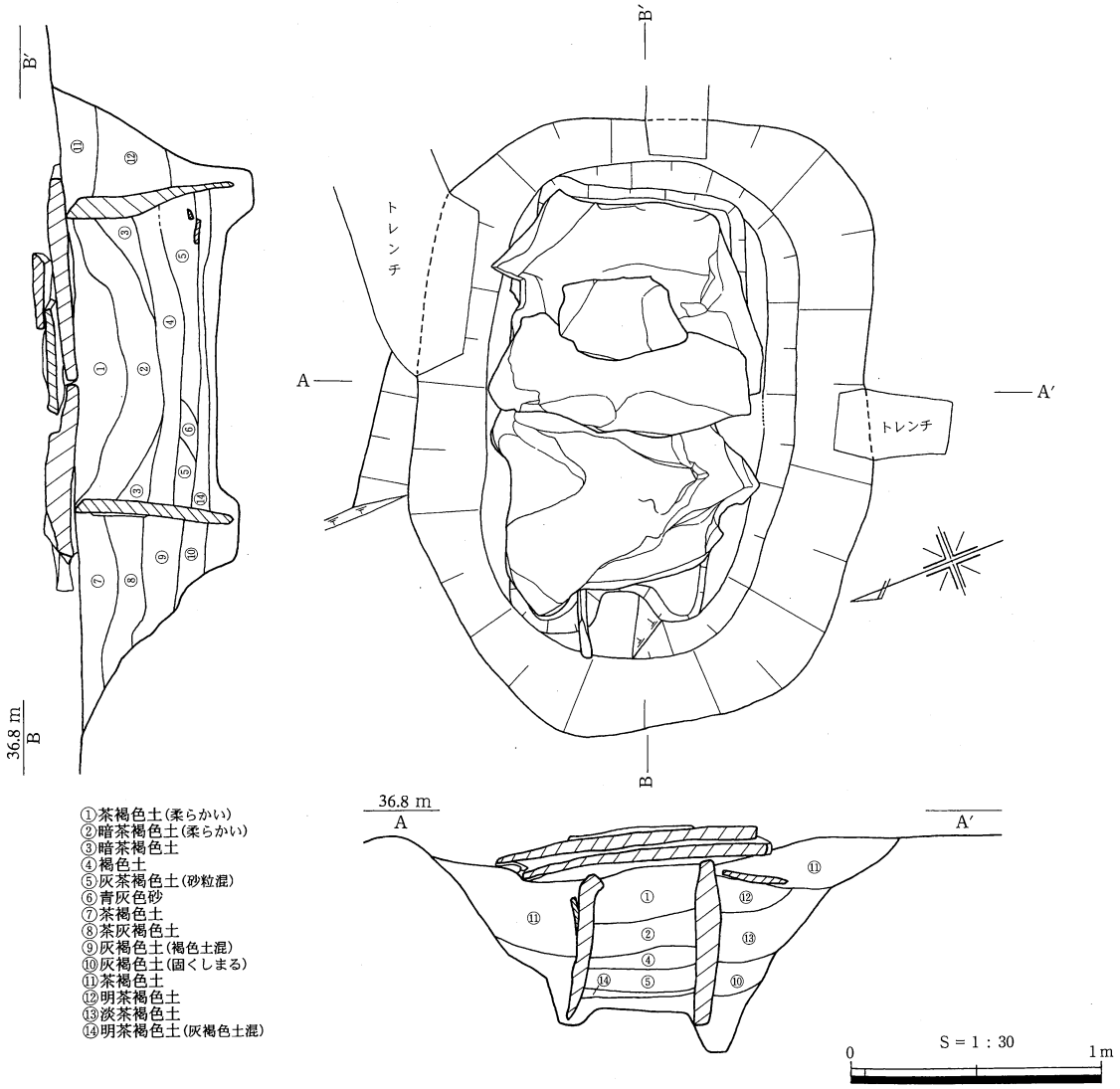


Fig. 43　SX１平面・土層断面図

断面Ｖ字形の石枕を設置する。頭位方向は東であろう。

蓋石は、長軸90cm、短軸70～80cm程度の石材二枚を使用し、隙間をやや小型の石材数枚で補完している。粘土による目張りは施されていない。棺内から人骨・遺物は検出されなかった。

墓壙内の埋土は、各層とも水平に近い堆積を呈しており土が固く締まっていることから、つき固めながら埋めたものと考えられる。地山直上で検出したため、７号墳の築造後まもなくして造られたものと考えられる。

ＳＸ２（Fig. 44, 45、PL. 20-2, 24-2）

７号墳の東側墳裾部に位置し、土器棺と考えられる。

墓壙底面は、長軸0.5m、短軸0.3mの平面楕円形を呈する。南側が広く作られており、棺の形に合わせて掘削したとみられる。底面での標高は、約35.8mである。

墓壙内に大型の壷16を口縁を北北東に向けて寝かせて置く。口縁は、高坏15の口縁と合わせ口状にして蓋をしている。形態から土器棺とみられる。

棺は人力で掘削中に破損したが、内部には土が流入しておらず、発見以前は完形であった。棺内から遺物は出土しなかった。７号墳よりは後出する天神川Ⅶ～Ⅷ期（古墳時代前期後葉～中期前葉）の築造と考えられる。

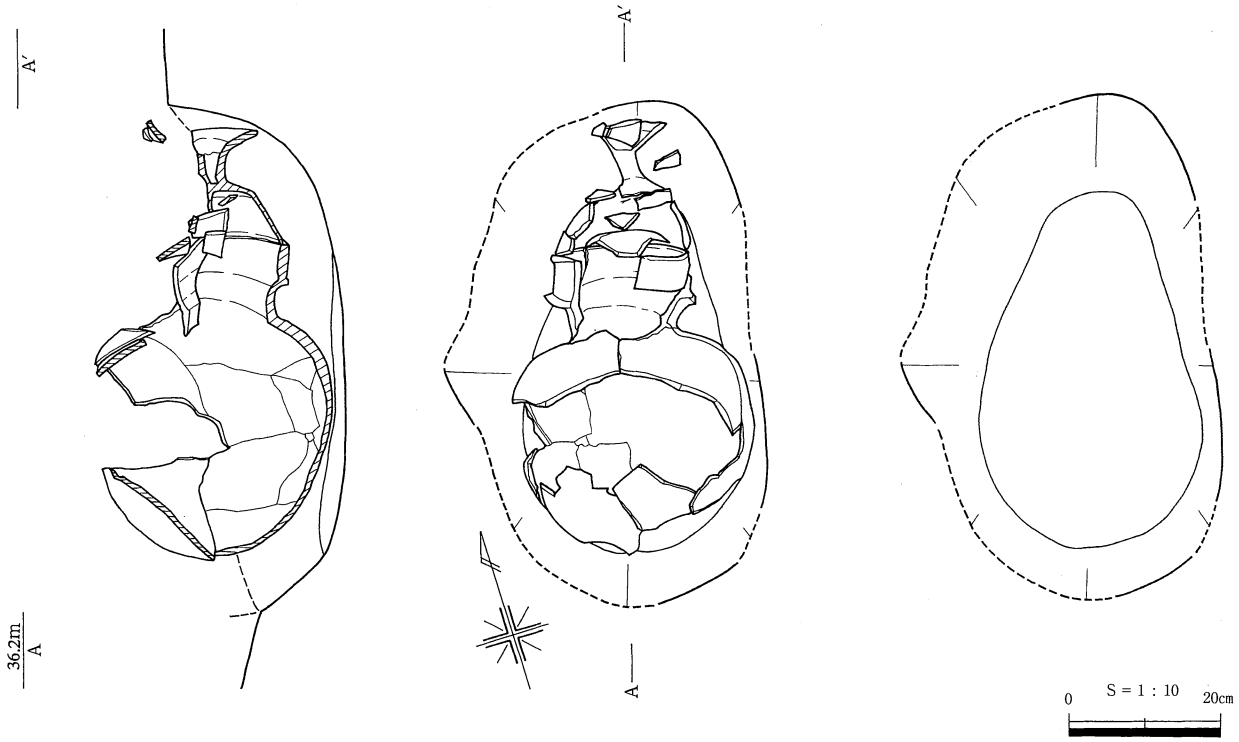


Fig. 44 SX 2 遺構図

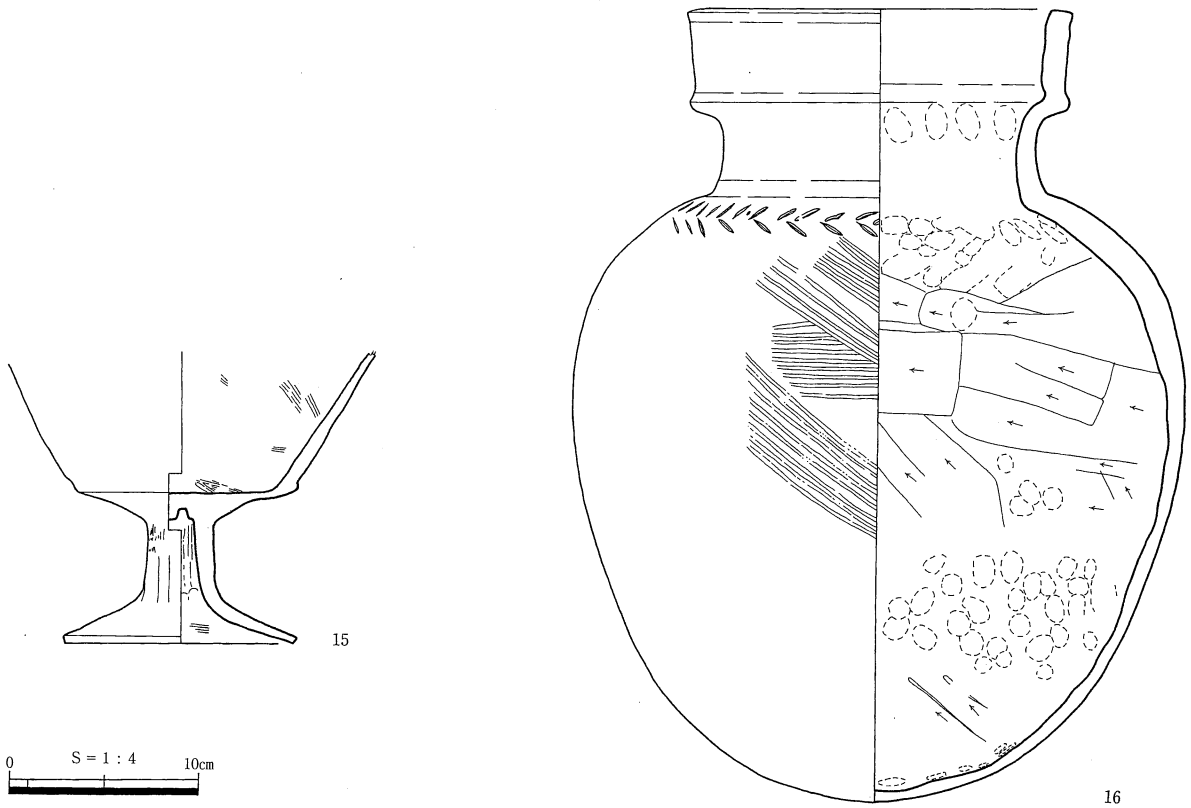


Fig. 45 SX 2 出土遺物実測図

番号	Fig. PL.	遺構名	出土位置	器 種	法量(cm)	特 徴	胎 土	色 調	備 考
15	Fig. 45 PL. 24	SX 2	壷棺(棺身)	土師器、壷	口径20.3 高さ42.1	外面：口縁部ヨコナデ。胴部粗いハケ目。肩部に羽状文。内面：胴部中央左方向ケズリ。肩部・胴部下位に指押さえ。	1～5㎜大の砂粒混。	明褐色 7.5YR5/6	胴部一部欠損
16	Fig. 45 PL. 24	SX 2	壷棺(棺蓋)	土師器、高坏	底径10.1 高さ△15.4	外面：坏部調整不明。脚部縦方向ミガキ。内面：縦方向ミガキ。	砂粒混	浅い橙色 7.5YR8/6	口縁端部欠損

Tab. 7 SX 2 出土遺物観察表

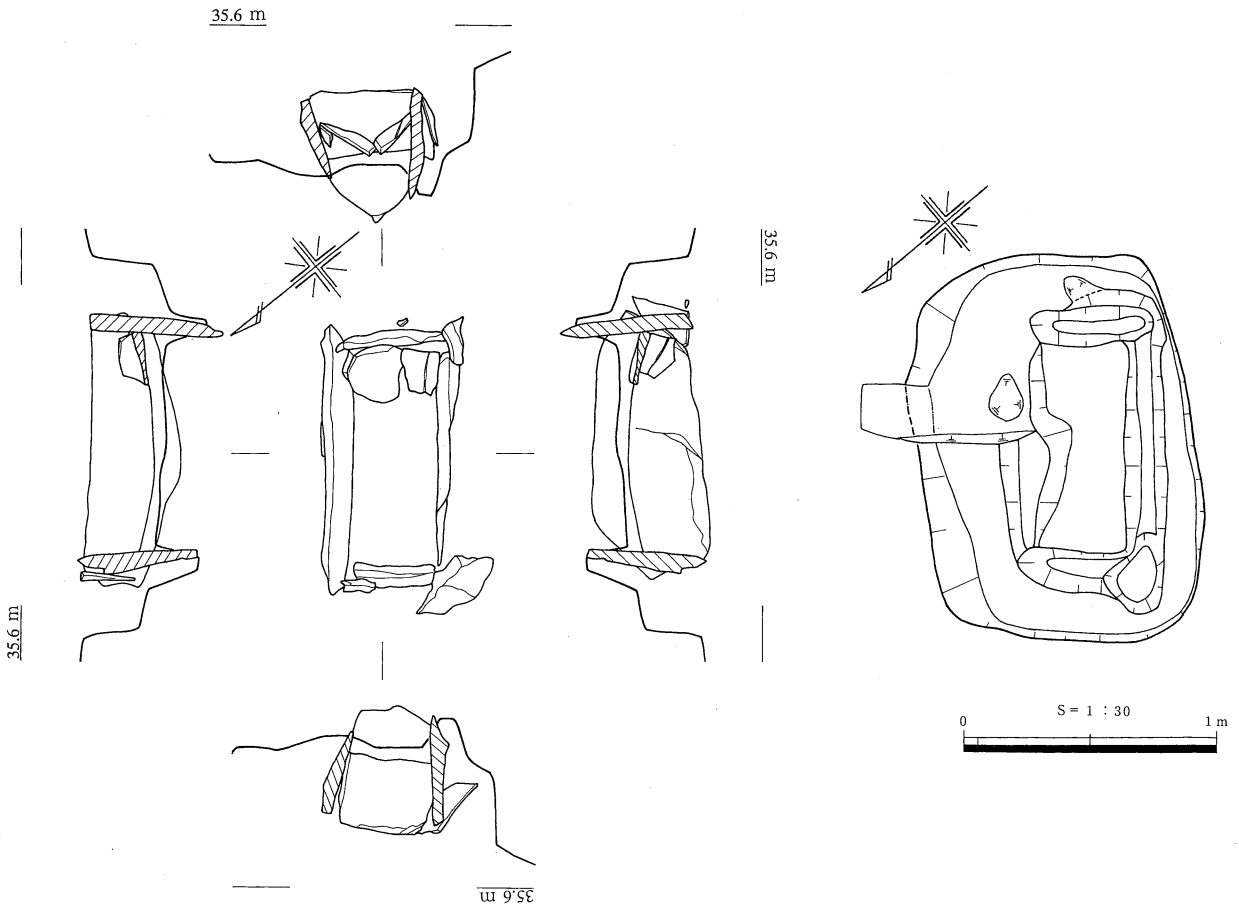


Fig. 46　SX３平面・立面図

ＳＸ３（Fig. 46, 47、PL. 19—２）

７号墳の北東側、７号墳墳裾からは、６メートル北東側に位置する。小型の箱式石棺である。主軸は、N—51°—Wである。

墓壙底面は、長軸1.4m、短軸１mの隅丸方形をなす。周囲には、底部の幅が６～10cm、深さ５～８cmの石材をはめ込む溝がめぐる。小口部分は深さ15cm程度に掘り込む。

石材は無斑晶板状安山岩である。両側壁は、長さ１m、高さ0.3～0.5m程度の石一枚で構成される。両端は小口壁を挟む込む。蓋石は、長軸70cm、短軸50～60cmの石材二枚によってなされる。粘土による目張りは施されていない。

墓壙を厚さ５cm程度埋めて棺床としている。棺床での標高は35.1mで、ほぼ水平である。棺内南東端には小型の石材二枚を組み合わせて、断面Ｖ字状の石枕を設置している。棺内には土砂が充満していた。遺物は出土しなかった。

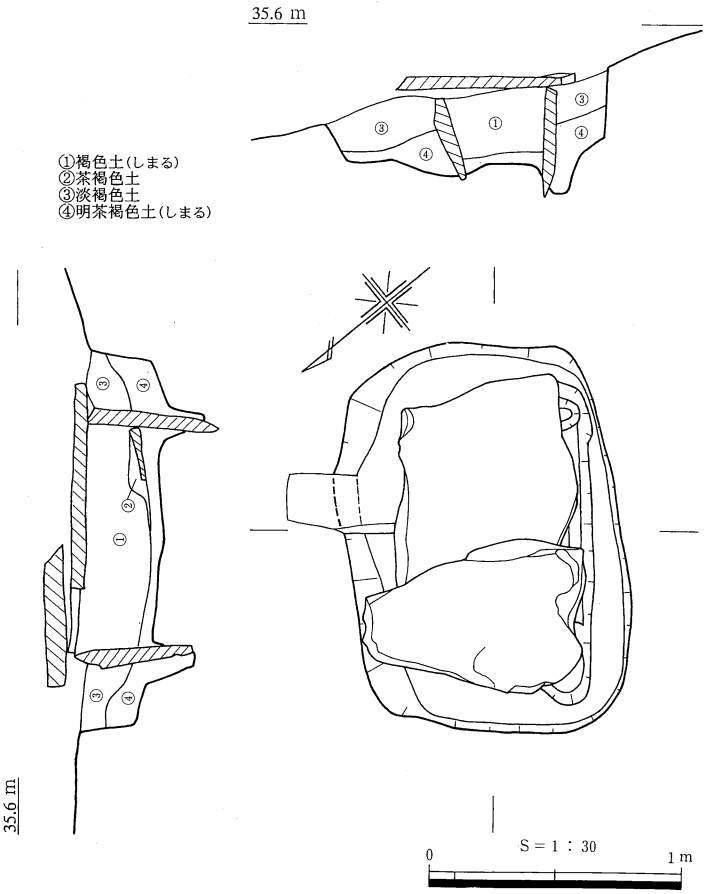


Fig. 47　SX３平面・土層断面図

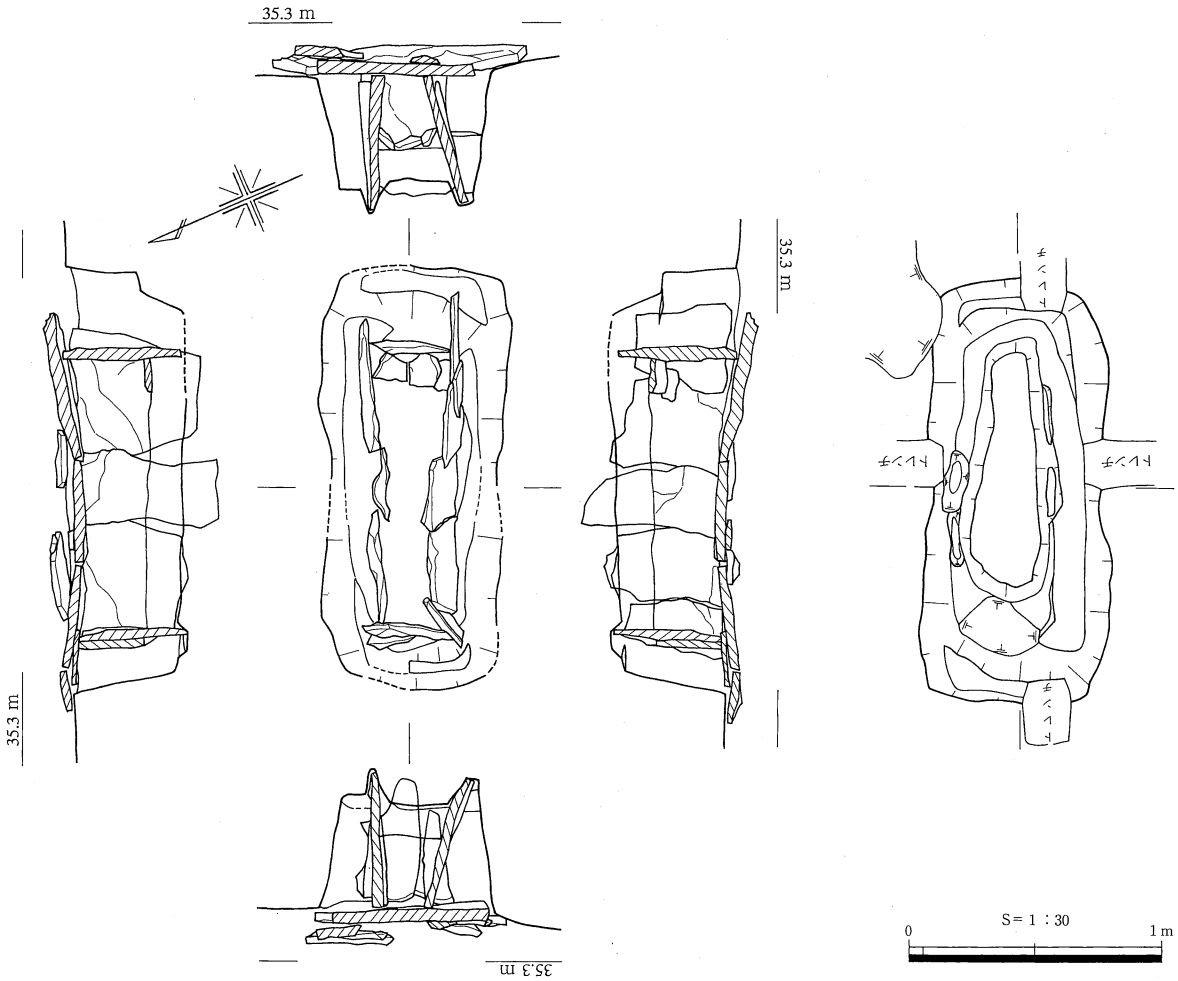


Fig. 48　SX 4 平面・立面図

SX 4 (Fig. 48, 49、PL. 20-4)

7号墳の北東側、地山斜面上に位置する。7号墳墳裾からは7mの距離である。小型の箱式石棺で、石材は無斑晶板状安山岩である。主軸は、N－65°－Eである。

墓壙は、底面において長さ1.4m、幅約0.5mの平面長方形を呈する。底面の四方には幅10cm、深さ6～9cm程度の石材を挿入する溝が掘削されている。

石棺の内径は、長さ1.1m、幅約0.34mである。側壁は、長さ20～50cm、高さ50cm程度の縦に長い石材を3～4枚を並べる。土圧により、西側の側壁は棺内側に傾斜していた。小口側両端は、小口壁を挟み込む。小口壁は、幅30cm、高さ50cmである。

墓壙を厚さ10cm程度埋めて棺床としている。標高は、棺床において34.8mで、ほぼ水平である。東端には、小型の石材三枚を組み合わせた石枕を設置している。断面はV字状を呈する。

蓋石は、長軸0.7～1m、短軸0.4～0.6m程度の石材3枚を架構し、隙間を小型の石材で補完する。棺中央部の蓋石は若干陥没している。粘土による目張りは施されていない。棺内は厚さ20cm程度の土砂が流入していた。

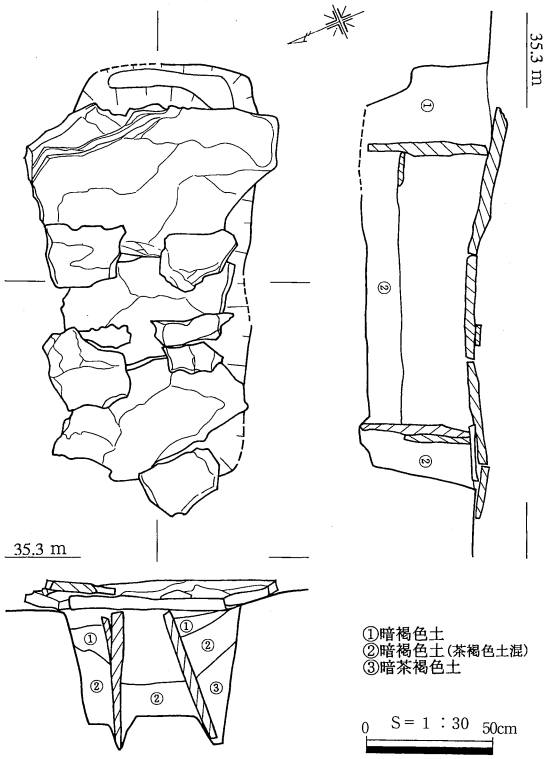


Fig. 49　SX 4 平面・土層断面図

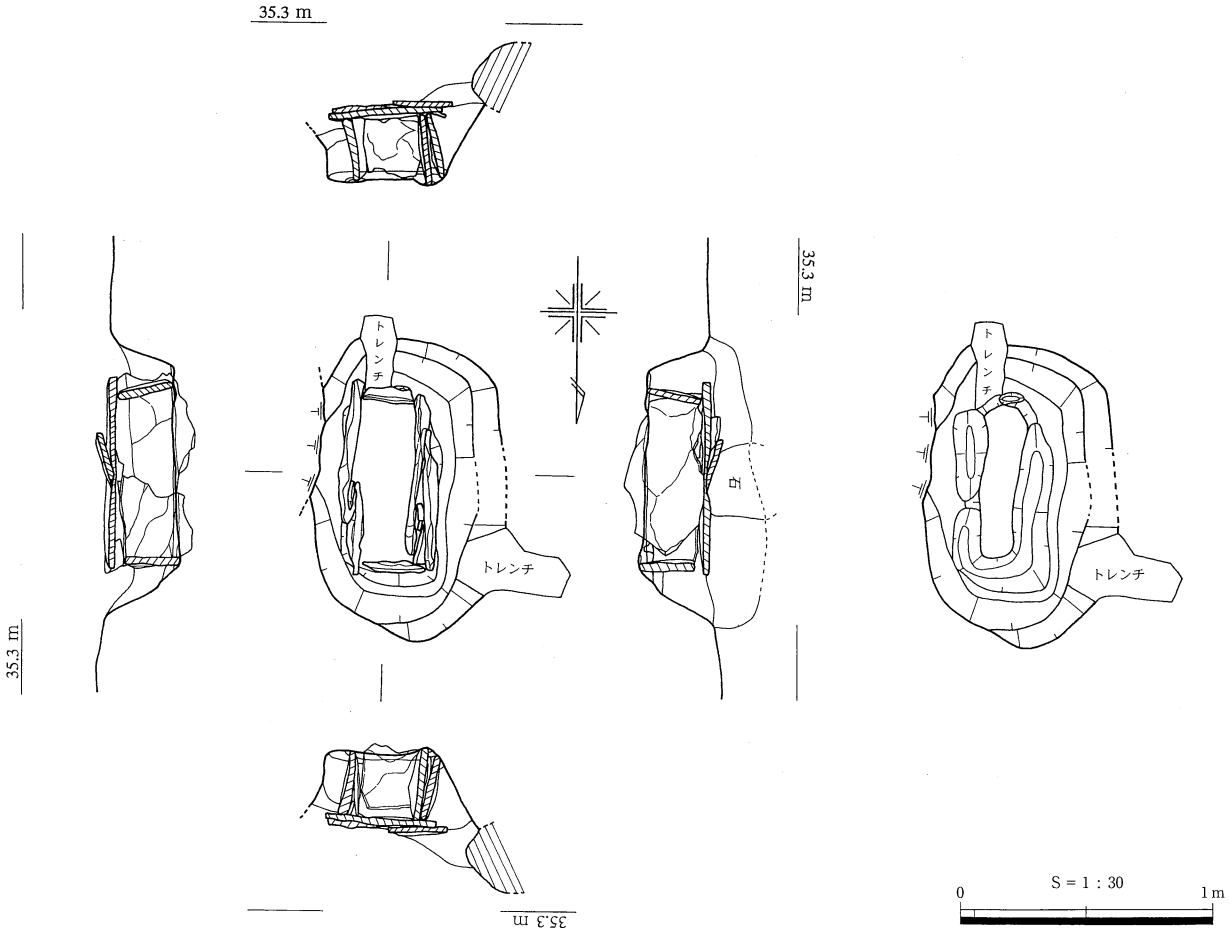


Fig. 50　SX８平面・立面図

ＳＸ８（Fig. 50, 51、PL. 22-2）

７号墳の東側、墳丘構築の際に形成されたテラス上に位置する。小型の箱式石棺である。石材は無斑晶板状安山岩である。

墓壙は、底面が長軸0.75m、短軸0.4mの平面方形をなす。底面の四方には石材を挿入する浅い溝が掘られている。

側壁は各二枚の石材で構成される。両端は小口壁を挟む。石棺の内法は、長さ0.7m、幅0.25mである。墓壙を数cm程度埋めて棺床とする。棺床の標高は34.7mで、ほぼ水平である。棺内には土砂が充満していた。板石による石枕は設置されていない。遺物は出土していない。

蓋石は長軸0.8m短軸0.4mの石材を用い、隙間を小型の石材で補完している。粘土による目張りは施されていない。

７号墳の築造後、まもなくして造られたものと考えられる。

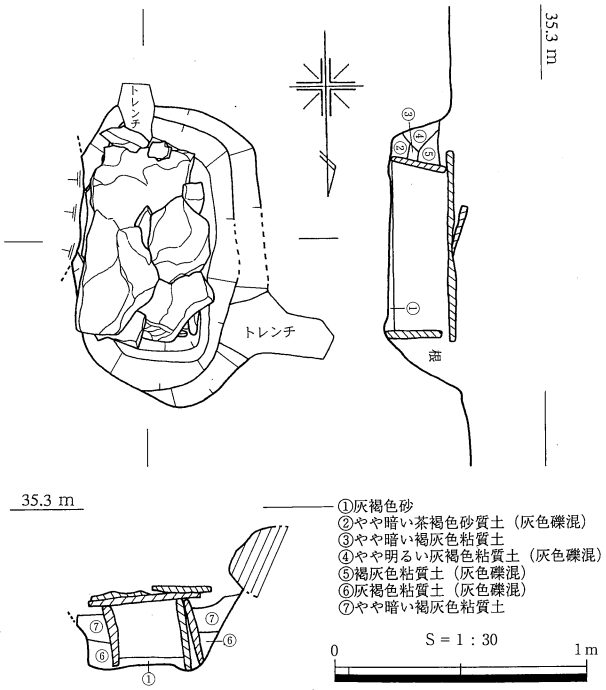


Fig. 51　SX８平面・土層断面図

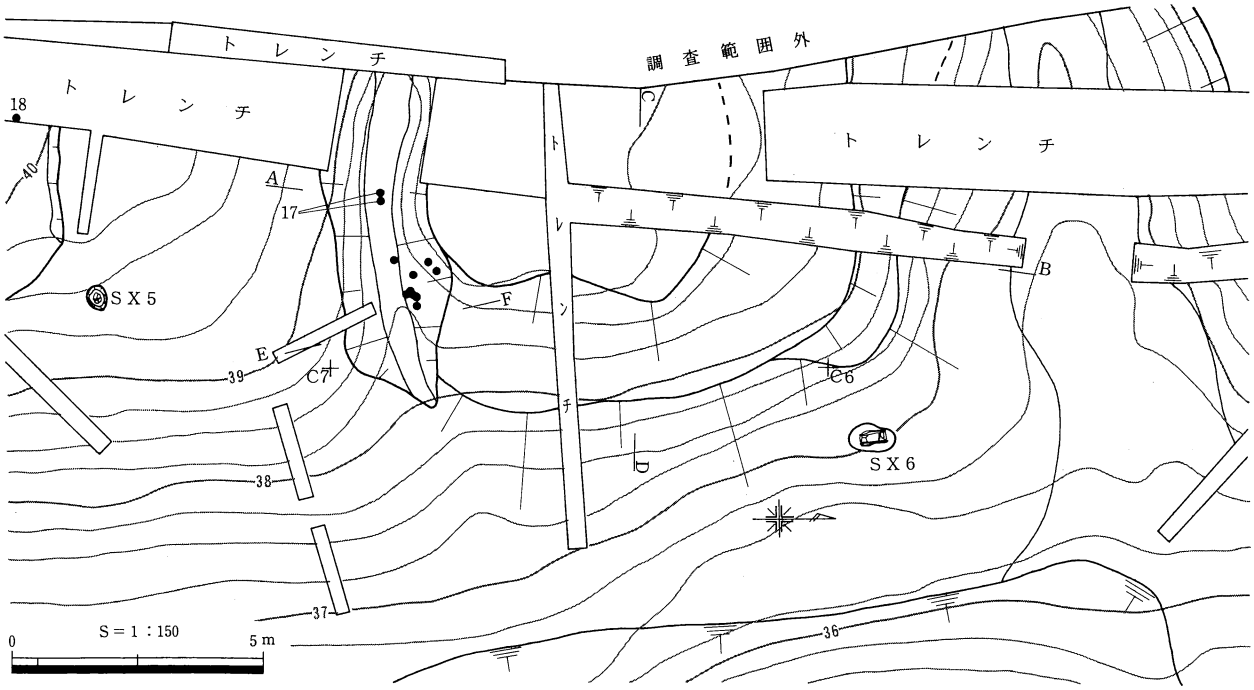


Fig. 52　12号墳遺構平面図

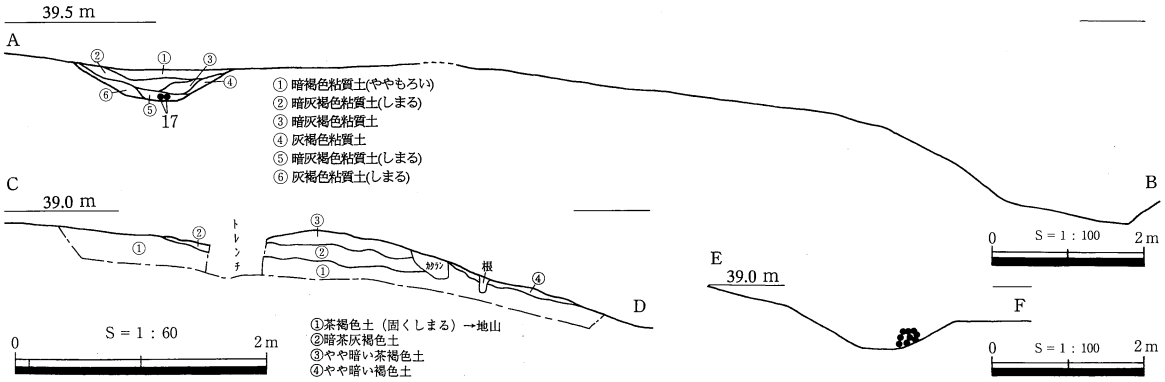


Fig. 53　12号墳土層断面図

12号墳（Fig. 52, 53, 54、PL. 21—1）

7号墳の南側、13号墳の北側の尾根上に立地する。調査前はマウンド状の高まりは確認できず、古墳として認識していなかった。

墳丘は、南北の直径が約12mの円墳である。北側は、7号墳と周溝を共有し、南側は尾根を切断する周溝を掘削している。墳丘の西側約1/3が調査区外であるが、墳丘の東西側は地山斜面をカットし、墳丘を削り出していると考えられる。墳頂部での標高は、約39mである。盛土は、墳頂部東側で旧表土上に厚さ6cm程度の茶褐色土が残存するのみである。

埋葬施設は検出できなかった。

南側の周溝底部から土師器の壺17の破片が散乱した状態で出土した。形態から天神川編年の天神川Ⅷ～Ⅸ期（古墳時代中期後葉）の所産と考えられる。当墳の築造時期とみてよかろう。

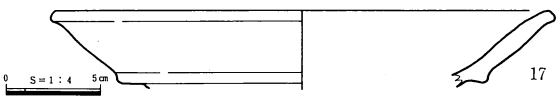


Fig. 54　12号墳出土遺物実測図

番号	Fig. PL.	遺構名	出土位置	器　種	法量(cm)	特　　徴	胎　土	色　調	備　考
17	Fig. 54 PL. 24	12号墳	周溝底部	土師器、壺	口径※26.8	内外面：ヨコナデ	良。砂粒混	橙色 7.5YR6/6	口縁部破片

Tab. 8　12号墳出土遺物観察表

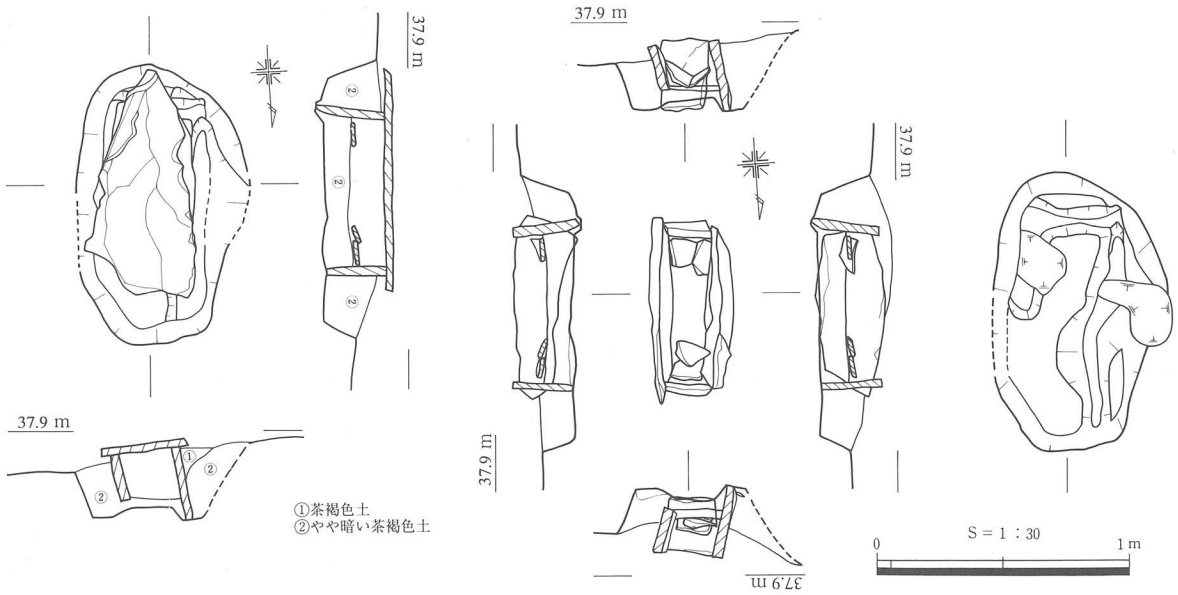


Fig. 55　SX６平面・立面図

ＳＸ６（Fig. 55、PL. 22－１）

12号墳の北東側裾部に位置する小型の箱式石棺である。主軸はＮ－４°－Ｗである。

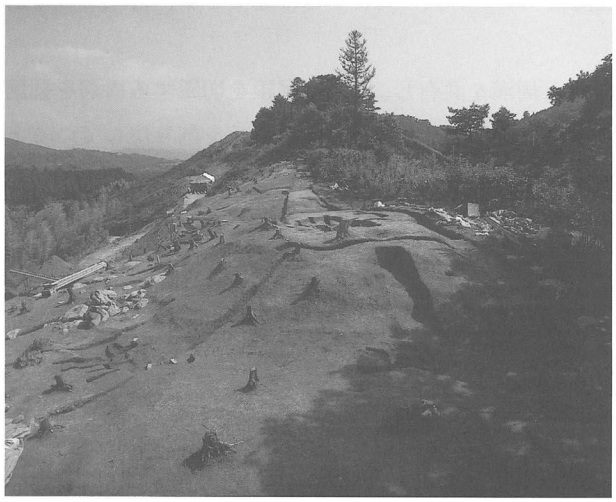
墓壙は、底面が約１m、幅約0.4mの平面長方形を呈する。底面には北東側を除いて石材を挿入する浅い溝が掘られている。

両側板は、長さ60cm、高さ15～20cm程度の石材各一枚によって構成される。両端は小口壁を挟み込む構造である。小口壁は幅20cm、高さ30cm程度の石材である。

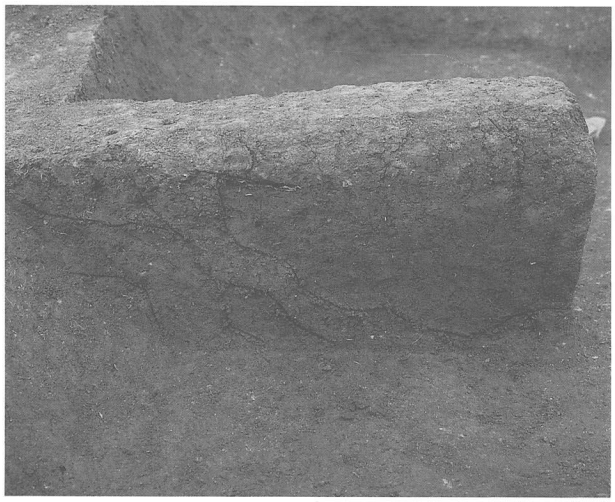
墓壙を約10cm埋めて棺床としている。棺床での標高は37.7mである。棺内には土砂が充満していた。棺内南端には、小型の石材二枚を組み合わせて、断面Ｖ字状の石枕を設置している。北端には、長軸が12～13cmの小型の石材が重ね置かれていた。棺内から遺物は出土しなかった。

蓋石は、長軸80cm、短軸40cmの石材一枚である。粘土による目張りは施されていない。

遺物が出土していないため、築造時期は不明である。



Ｃ調査区（北から）



13号墳埋葬施設土層断面（西から）

13号墳（Fig. 56, 57, 58, 59、PL. 21-3）

12号墳の南側の尾根上に立地する。調査前は地形的な高まりがみられず、古墳として認識できなかった。

直径7.5mの円墳である。墳丘の南北側には、尾根を切断して周溝が掘削されている。西側の一部は未調査であるが、周溝がめぐるものと考えられる。底面での周溝幅は、0.8～1mである。盛土は残存しない。墳丘は周溝掘削と若干の地山整形および盛土によって形成されたと考えられる。埋葬施設が比較的深く掘削されていることからも、本来の盛土は低いものであったとみられる。墳頂部での標高は約40.75mである。

墳頂部南西側で埋葬施設1基を検出した。底面での長さは2.9m、幅は南東側で約0.7m、北西側では0.2～0.3mの不整な長方形を呈する土壙である。土層断面では、木棺の側板や小口の痕跡が明確には窺えないが、南東側では土層が弓なりに陥没するなど木棺墓と解釈できる。

南東端において石枕と考えられる石材を検出した。長短軸ともに20cm程度の安山岩の石材を二枚左右に並べている。断面は僅かに両端が持ち上がるV字形を呈する。

周溝底部から土師器片が数点出土した。甕18より、天神川編年の天神川IX期（古墳時代中期後葉）の所産と考えられる。

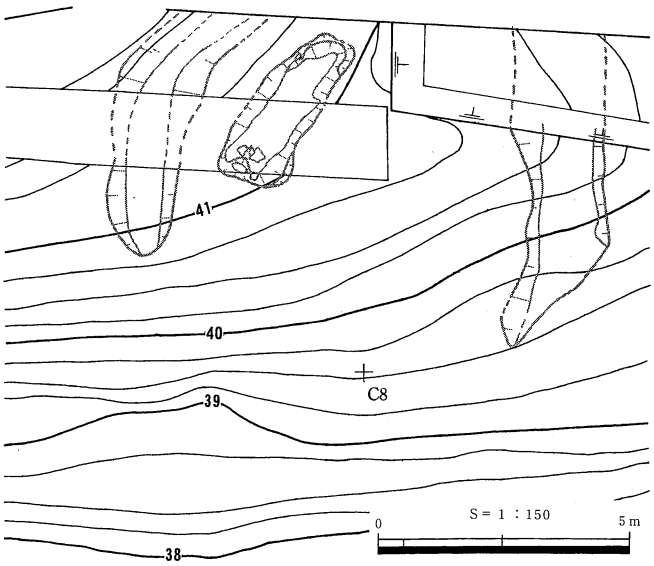


Fig. 56　13号墳調査前平面図

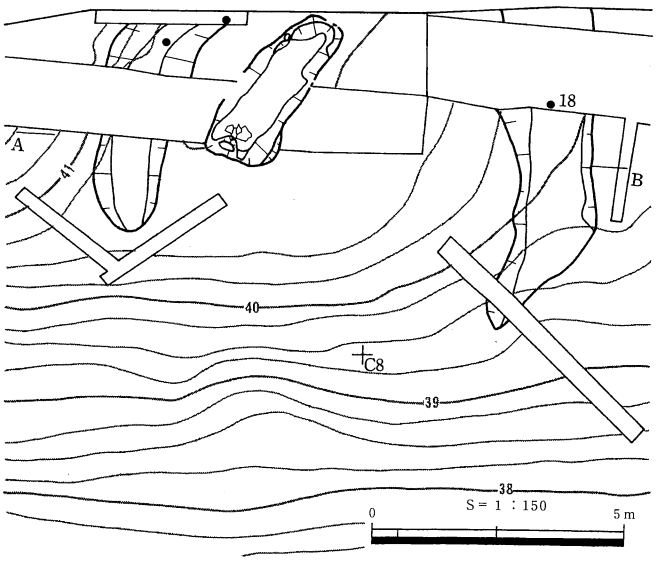


Fig. 57　13号墳遺構平面図

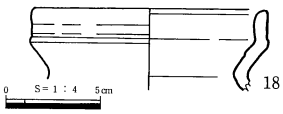


Fig. 58　13号墳出土遺物実測図

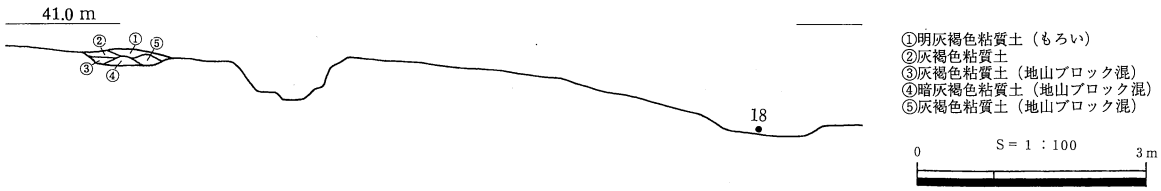


Fig. 59　13号墳墳丘断面図

番号	Fig. PL.	遺構名	出土位置	器　種	法量(cm)	特　　徴	胎　土	色　調	備　考
18	Fig. 58 PL. 24	13号墳	周溝内	土師器、壺	口径※12.4	口縁部内外面ヨコナデ。	砂粒混	橙色 7.5YR6/6	口縁部破片

Tab. 9　13号墳出土遺物観察表

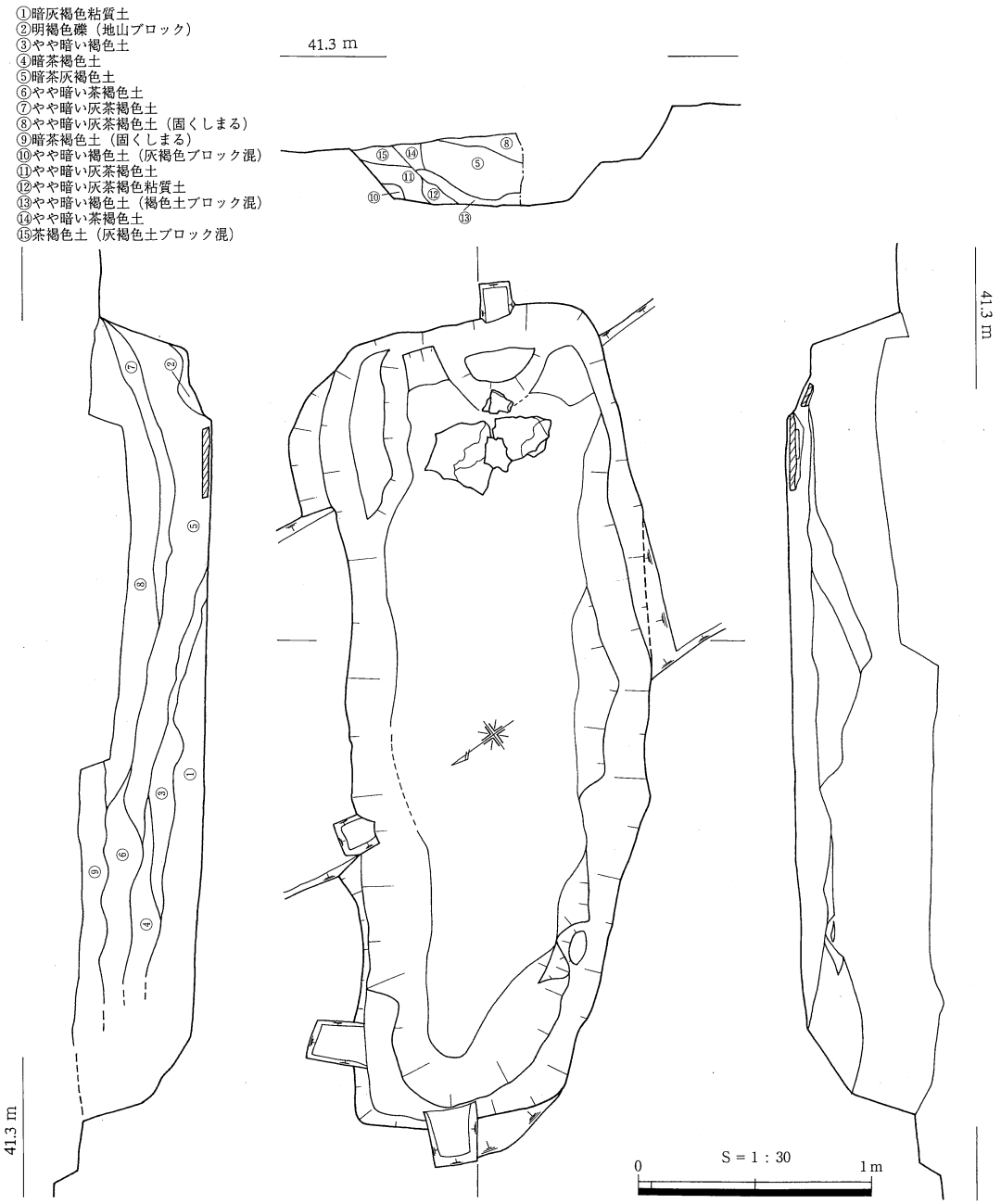


Fig. 60　13号墳埋葬施設遺構図

ＳＸ５（Fig. 62、PL. 20―３）

12号墳の南側の斜面部に立地する。

墓壙は、二段堀りである。上段は、底面において直径0.8m程度の楕円形を呈する。上段のほぼ中央に底面の直径が約0.3mの楕円形の土壙が掘られている。

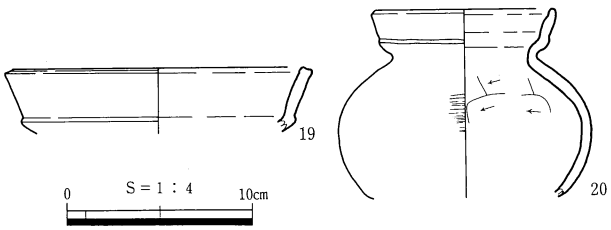


Fig. 61　SX５出土遺物実測図

番号	Fig. PL.	遺構名	出土位置	器　種	法量(cm)	特　　徴	胎　土	色　調	備　考
19	Fig. 60	SX５	土壙内	土師器、甕	口径※16.2	内外面ヨコナデ。	砂粒混	黄橙色 10YR7/4	底部、口径部一部残存
20	Fig. 60	SX５	土壙内	土師器、甕	口径※9.9	外面：口縁部ヨコナデ、胴部ハケメ。内面：口縁部ナデ、胴部左方向ケズリ。	砂粒混	黄橙色 10YR6/4	ほぼ完存

Tab. 10　SX５出土遺物観察表

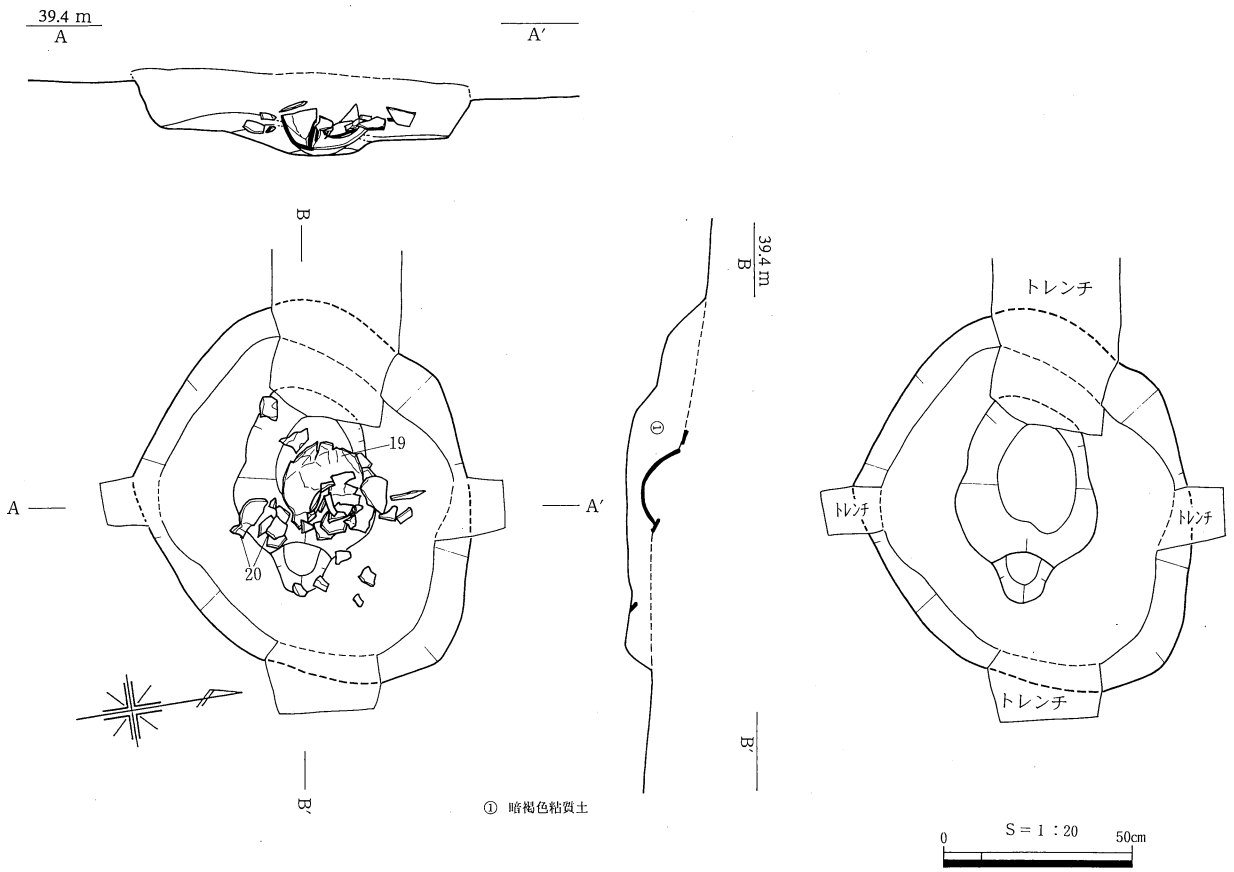


Fig. 62　SX 5 平面・立面図

土壙内から土師器の甕19、小型丸底壷20が出土した。甕の底部を残して破損しており、破片が散乱していた。甕は、墓壙底部から３～４cm浮いた状態である。掘削した墓壙内に若干の土を入れ、土器底面の安定を図ったのであろう。本来は正位の状態で置かれていたものと考えられる。小型丸底壷は、甕の東側で口縁部を南東側に向けて出土した。土壙内に埋置する形態から、土器棺と考えられる。棺内から遺物は出土しなかった。

出土土器から、天神川編年の天神川Ⅶ～Ⅷ期（古墳時代中期後葉）の所産と考えられ、北側の７号墳より若干新しく、南側の13号墳とはほぼ同時期の築造とみられる。

ＳＤ１（Fig. 63, 64）

７号墳の北西側テラス上に位置する。検出した幅は、底面で10～25cm、長さ2.2mで西側の調査区外へ続く。先端部が北側に屈曲しており、本来は古墳の周溝であった可能性がある。７号墳の築造に伴うテラス造成の際に削平されたものであろう。底部より杯部のみの高坏21が出土した。

高坏の杯部が皿状を呈することから、天神川編年の天神川Ⅳ期（古墳時代前期後葉）の所産と考えられる。

Fig. 63　SD１出土遺物実測図

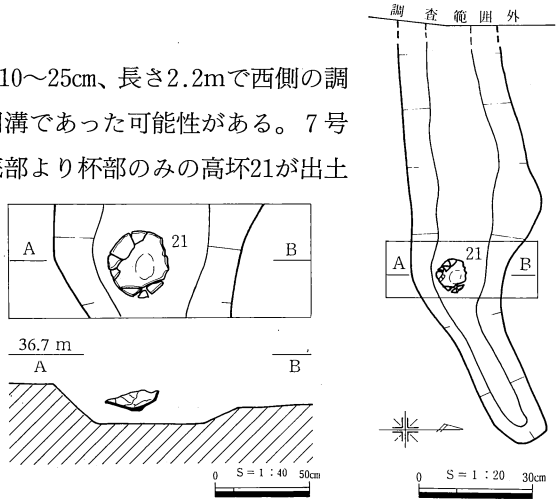


Fig. 64　SD１遺構図・遺物出土状況図

番号	Fig. PL.	遺構名	出土位置	器　種	法量(cm)	特　　徴	胎　土	色　調	備　考
21	Fig. 62	SD１	溝埋土中	高坏	口径17.1	内外面：ミガキ	砂粒混	橙色 5YR6/8	脚部欠損

Tab. 11　SD１出土遺物観察表

第４章　米里三ノ嵜遺跡の調査

１．調査地の概要

米里三ノ嵜遺跡は、北条平野の北西端部に位置する。東向きに舌状に突き出した丘陵の先端部に標高17～18mの平坦地があり、調査地はこの平坦地および周辺の斜面に位置する。北側の平野部の標高は約８ｍで、遺構の集中する平坦地との比高差は９～10mである。

調査の結果、弥生時代後期末から古墳時代前期初頭の竪穴住居跡２棟、古墳時代中期の竪穴住居跡１棟、袋状土坑８基、土坑３基、時期不明の土坑２基を確認した。ＳＩ１は南谷大山III～IV期（弥生時代後期中葉～後葉）、ＳＩ２は南谷大山IV期（弥生時代後期後葉）の所産である。貯蔵穴は、これらの住居跡とほぼ同時期で、住居の周辺に分布する。天神川Ｖ～VI期（古墳時代中期前葉～中葉）にはＳＩ３が、ＳＩ２とほぼ重なる形で１棟のみ建てられたものと考えられる。

出土遺物は弥生土器と土師器が中心で、その他に石包丁１点、石鏃１点、鉄片３点が出土した。須恵器は出土しなかった。ＳＩ３廃絶後は、古墳時代後期以降に下る遺物がわずかに出土している。

調査区全体では、遺構が集中していたのは平坦地付近の住居および貯蔵穴の周辺で、北側斜面には遺構は確認できなかった。調査区の南側には狭いテラス状の平坦面が続いているが、土坑が２基確認できた程度で、遺構の密度は低くなっている。

２．発掘調査の成果

(1)　住 居 跡

ＳＩ１（Fig.３～７、Tab.１・２、PL.28－１、30－３、31）

最低１回以上の建て替えがあると考えられる。土層の観察から、中央付近に⑱～㉓に炭化物や焼土が入り込んでいた。以下調査の順序毎に、貼床検出時（上層）の住居をＳＩ１－１、貼り床除去後（下層）の住居をＳＩ１－２として記述する。

ＳＩ１－１

平面はやや不整な六角形で、Ｐ１～Ｐ６の６本が主柱穴と考えられる。床面規模は、東西5.5m、南北5.4mを測り、床面積は29.7㎡である。床面はＳＫ３の上面を除きほぼ平坦で、厚さ約４㎝程度の貼床が全面に敷かれていた。貼床は⑩～⑫層で、茶褐色または黄褐色系の粘質土が使用されており、焼土や炭化物も含まれていた。

中央ピットはＰ７で、埋土には多量に炭化物が混入していた。また、壁面にＰ12を検出したが、入口の施設にともなうものかは不明である。

壁溝は、住居の西側の一部のみで検出した。深さは最大で４㎝を測る。

番号	規　模	遺　物	番号	規　模	遺　物	番号	規　模	遺　物	番号	規　模	遺　物
Ｐ１	(54　×47－66)	1	Ｐ６	(60×64－77)	－	Ｐ11	(29　×28－12)	－	Ｐ16	(28×27－12)	－
Ｐ２	(30　×26－32)	－	Ｐ７	(43×24－31)	弥生土器	Ｐ12	(35↑×37－61)	－	Ｐ17	(25×24－27)	－
Ｐ３	(45　×35－91)	－	Ｐ８	(51×50－73)	－	Ｐ13	(43　×42－46)	－	Ｐ18	(20×18－29)	－
Ｐ４	(45　×45－44)	弥生土器	Ｐ９	(41×34－76)	－	Ｐ14	(54↑×45－12)	－	Ｐ19	(29×28－37)	－
Ｐ５	(46↑×45－72)	－	Ｐ10	(52×47－47)	－	Ｐ15	(22　×21－15)	－	Ｐ20	(29×19－10)	－

Tab.１　ＳＩ１柱穴規模一覧表

Fig. 1　調査前地形測量図

Fig. 2　遺構全体図

ＳＫ１は、平面は隅丸長方形で、検出面での規模は、長軸133cm、短軸85cm、床面からの深さは最大で16cm、底面規模は長軸108cm、短軸66cmを測る。

床面上から遺物は出土しなかった。図化した土器はいずれも埋土上層からの出土で、小片が多く接合したものは少ない。比較的まとまった出土状況を示すのは甕14である。埋土下層からの出土である。

遺物の時期は、概ね南谷大山Ⅲ～Ⅴ期（弥生時代後期中葉～古墳時代前期前葉）のものが出土している。埋土上層のものも含めるとほぼ在地産と考えられるが、甕20については外面が赤彩され胎土が異なり、調整もミガキが中心で、他の土器とは異なる要素をもつ。

遺構の時期については、床面直上からの出土遺物がないため断定はできないが、下層のＳＩ１－２が南谷大山Ⅲ（弥生時代後期中葉）の所産であることから、概ね南谷大山Ⅳ期（弥生時代後期後葉）頃と考えられる。

ＳＩ１－２

ＳＩ１－１の貼床除去後に、柱穴Ｐ13～20および土坑ＳＫ２・３を確認した。壁溝は検出できなかったものの、平面形はＳＩ１－１と同様、やや不整な六角形を呈すると考えられる。主柱穴は特定できなかった。中央ピットはＰ13で、Ｐ７の東隣にある。床面は全て平坦ではなく、ピットの南西側がやや高く、この部分は地山を意図的に削り出したものと考えられる。

住居の床面を精査したところ、中央やや北西部にＳＫ２、南壁付近でＳＫ３を確認した。いずれも形状から貯蔵穴と考えられる。土層の堆積は平坦をなし、かたくしまっていることから、貼床を施す際に、意図的に埋められたのであろう。

ＳＫ２の検出面での規模は、長軸127cm、短軸95cm、底面からの深さは最大で102cm、底面規模は長軸152cm、短軸115cmを測り、底面はほぼ平坦である。断面形は袋状を呈している。

ＳＫ３の検出面での規模は、長軸129cm、短軸97cm、深さは最大で68cm、底面規模は長軸142cm、短軸86cmを測る。断面形は袋状であるが、底面は中央付近がやや深くなる。

貼床内およびＳＫ２掘り下げ中に弥生土器の小片が出土したが図化できなかった。ＳＫ３からは、掘り下げ中に甕４、器台６が、底面から20cm程浮いた状態で甕５が出土した。

ＳＫ２・３から出土した遺物の時期は、いずれも南谷大山Ⅲ期（弥生時代後期中葉）に該当する。甕の口縁部に横方向の平行沈線をもつもの、ヨコナデを施すものがある。ＳＫ２・３の上に貼床がなされていることから、南谷大山Ⅲ期（弥生時代後期中葉）と考えられる。

ＳＩ２（Fig.８・９、Tab.３・４、PL.29、30－３、31）

平面は隅丸方形で、Ｐ１～Ｐ５の５本が主柱穴と考えられる。床面規模は、北西－南東方向が5.2m、北西－南東方向が5.8m、床面積は30.2m²を測る。入口は不明である。

Fig.３　ＳＩ１内ＳＫ３土層断面（西から）

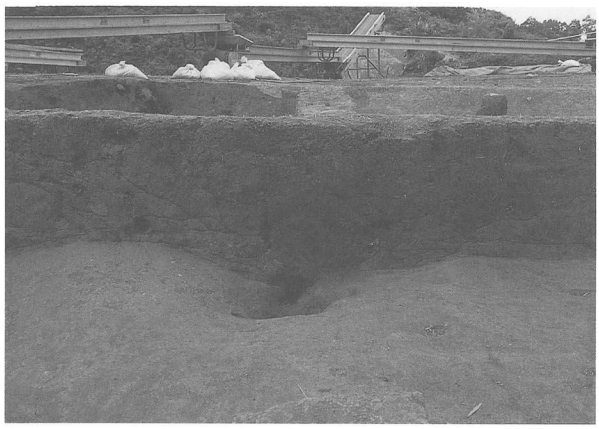
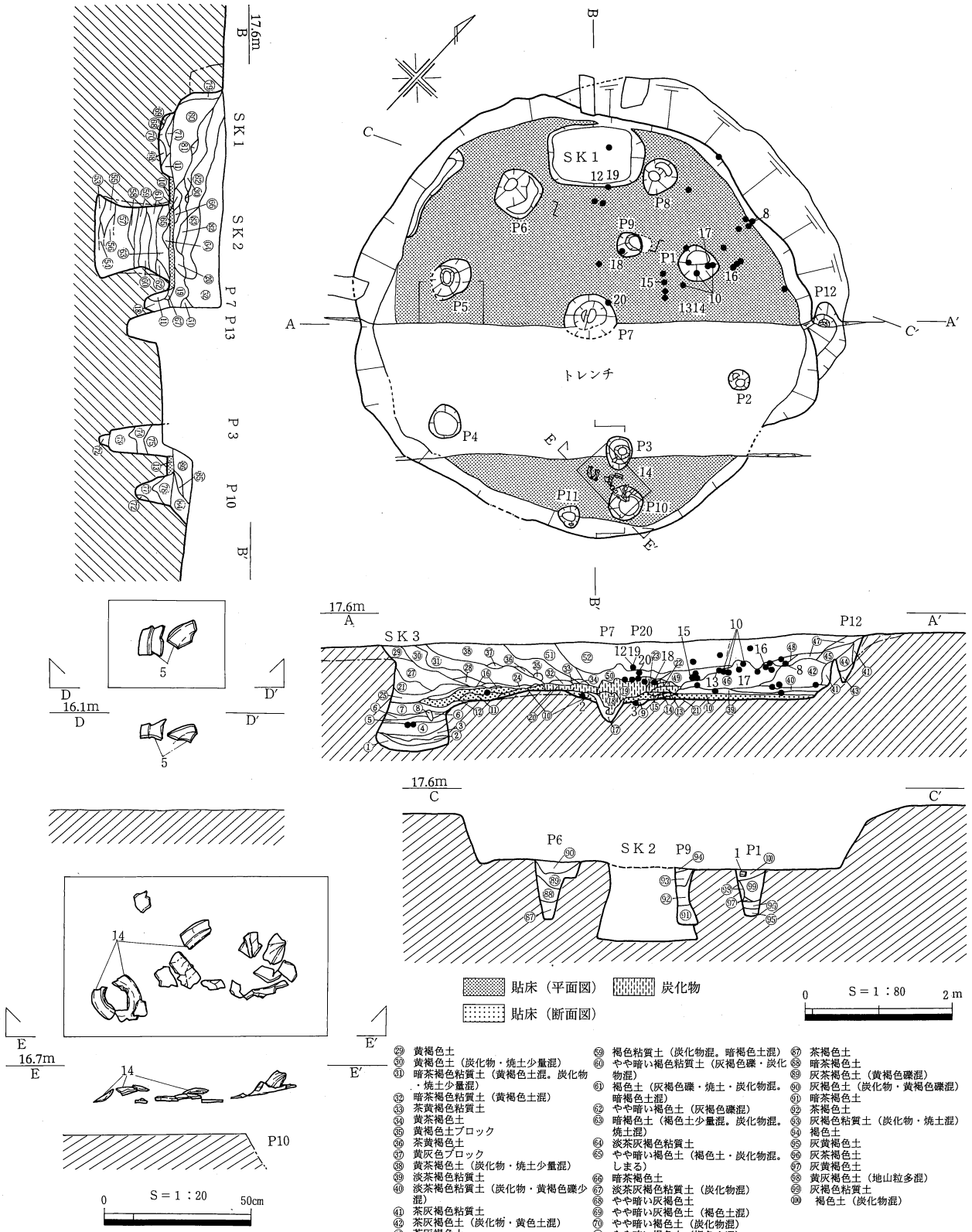
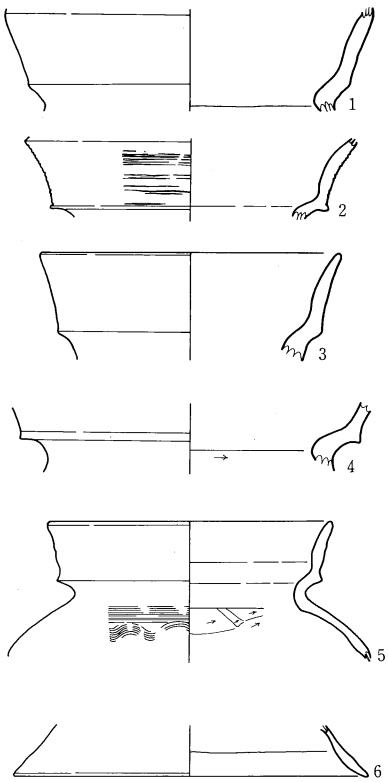


Fig.４　ＳＩ１、Ｐ７付近土層断面（東から）



① 黄茶褐色土（地山土多混）
② 黄茶褐色土（地山土混）
③ 暗灰褐色土
④ 茶灰褐色土（炭化物・焼土少混）
⑤ 暗茶灰褐色土
⑥ 暗茶灰褐色土（黄茶褐色土混）
⑦ 淡暗茶褐色粘質土
⑧ 茶褐色土（やわらかい）
⑨ 褐色土
⑩ 淡茶褐色粘質土（焼土混。貼床）
⑪ 黄褐色粘質土
⑫ 暗淡茶褐色（炭化物混。貼床）
⑬ 黄褐色粘質土（貼床）
⑭ 黒色土（炭化物混。貼床）
⑮ 暗茶灰褐色粘質土（貼床）
⑯ 黄色土
⑰ 暗褐色土
⑱ 黒褐色土（礫混。しまる。炭化物多混）
⑲ 黒褐色土（炭化物多混）
⑳ 茶灰褐色土（炭化物多混。しまる）
㉑ 黄色土（炭化物混）
㉒ 灰褐色粘質土（炭化物混）
㉓ 茶灰褐色土（炭化物混）
㉔ 淡茶褐色粘質土
㉕ 淡茶褐色粘質土
㉖ 暗茶褐色土（しまる）
㉗ 明暗茶褐色土（炭化物・焼土混）
㉘ 暗茶褐色土（黄褐色土少混）
㉙ 黄褐色土
㉚ 黄褐色土（炭化物・焼土少量混）
㉛ 暗茶褐色粘質土（黄褐色土混。炭化物・焼土少量混）
㉜ 暗茶褐色粘質土（黄褐色土混）
㉝ 茶黄褐色粘質土
㉞ 黄茶褐色土
㉟ 黄褐色土ブロック
㊱ 茶黄褐色土
㊲ 黄灰色ブロック
㊳ 黄茶褐色土（炭化物・焼土少量混）
㊴ 淡茶褐色粘質土
㊵ 淡茶褐色粘質土（炭化物・黄褐色礫少混）
㊶ 茶灰褐色粘質土
㊷ 茶灰褐色土（炭化物・黄色土混）
㊸ 茶灰褐色土
㊹ 明茶灰褐色土
㊺ 明茶灰褐色土（炭化物少混。しまる）
㊻ 灰茶褐色土（炭化物・黄色土少混）
㊼ 明茶褐色土（しまる）
㊽ 茶褐色土（炭化物少混）
㊾ 茶灰褐色土
㊿ 暗灰茶褐色土（炭化物少量混）
(51) 褐色土（しまる）
(52) 茶褐色土
(53) 暗灰褐色土（炭化物・灰褐色礫多混）
(54) 暗灰褐色土（炭化物・灰褐色礫少混）
(55) 暗灰褐色土（炭化物混）
(56) 暗灰褐色土
(57) 暗灰褐色粘質土
(58) 褐色粘質土（しまる）
(59) 褐色粘質土（炭化物混。暗褐色土混）
(60) やや暗い褐色粘質土（灰褐色礫・炭化物混）
(61) 褐色土（灰褐色礫・焼土・炭化物混。暗褐色土混）
(62) やや暗い褐色土（灰褐色礫混）
(63) 暗褐色土（褐色土少量混。炭化物混。焼土混）
(64) 淡茶灰褐色粘質土
(65) やや暗い褐色土（褐色土・炭化物混。しまる）
(66) 暗茶褐色土
(67) 淡茶灰褐色粘質土（炭化物混）
(68) やや暗い灰褐色土
(69) やや暗い灰褐色土（褐色土混）
(70) やや暗い褐色土（炭化物混）
(71) やや暗い褐色土（褐色土混）
(72) 茶灰褐色土
(73) やや暗い茶灰褐色土
(74) 茶褐色土
(75) 暗褐色土（炭化物混）
(76) 灰黄茶褐色土（しまる）
(77) 灰茶褐色土（炭化物少量混）
(78) 褐色土（炭化物少量混）
(79) 淡茶褐色粘質土
(80) 暗茶灰褐色土（炭化物・焼土混）
(81) 茶灰褐色土
(82) 暗黄褐色土
(83) 暗灰褐色土（炭化物・焼土混）
(84) 暗褐色土（炭化物少量混）
(85) 暗褐色土
(86) 黒褐色土（炭化物混）
(87) 茶褐色土
(88) 暗茶褐色土
(89) 灰茶褐色土（黄褐色礫混）
(90) 灰褐色土（炭化物・黄褐色礫混）
(91) 暗茶褐色土
(92) 茶褐色土
(93) 灰褐色粘質土（炭化物・焼土混）
(94) 褐色土
(95) 灰黄褐色土
(96) 灰茶褐色土
(97) 灰黄褐色土
(98) 黄灰褐色土（地山粒多混）
(99) 灰褐色粘質土
(100) 褐色土（炭化物混）

Fig. 5　ＳＩ１遺構図(1)



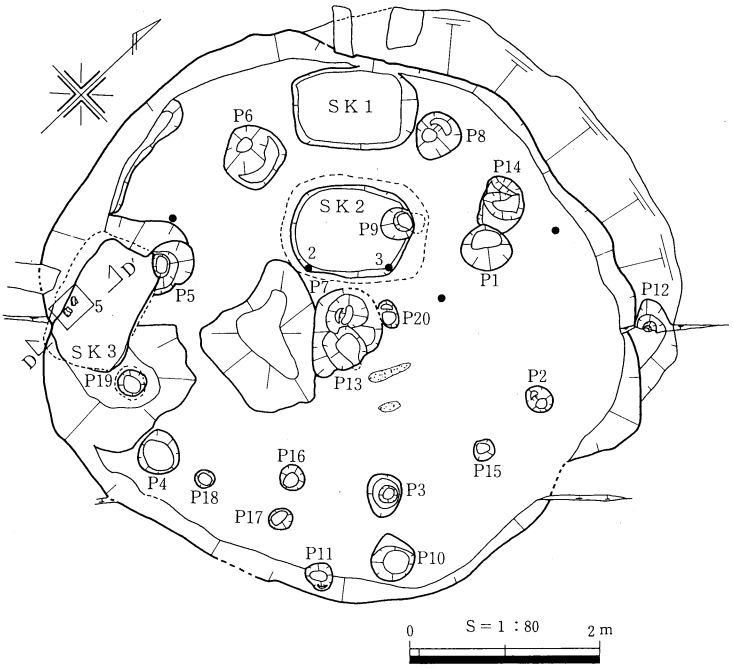


Fig. 6　ＳＩ１遺構図(2)

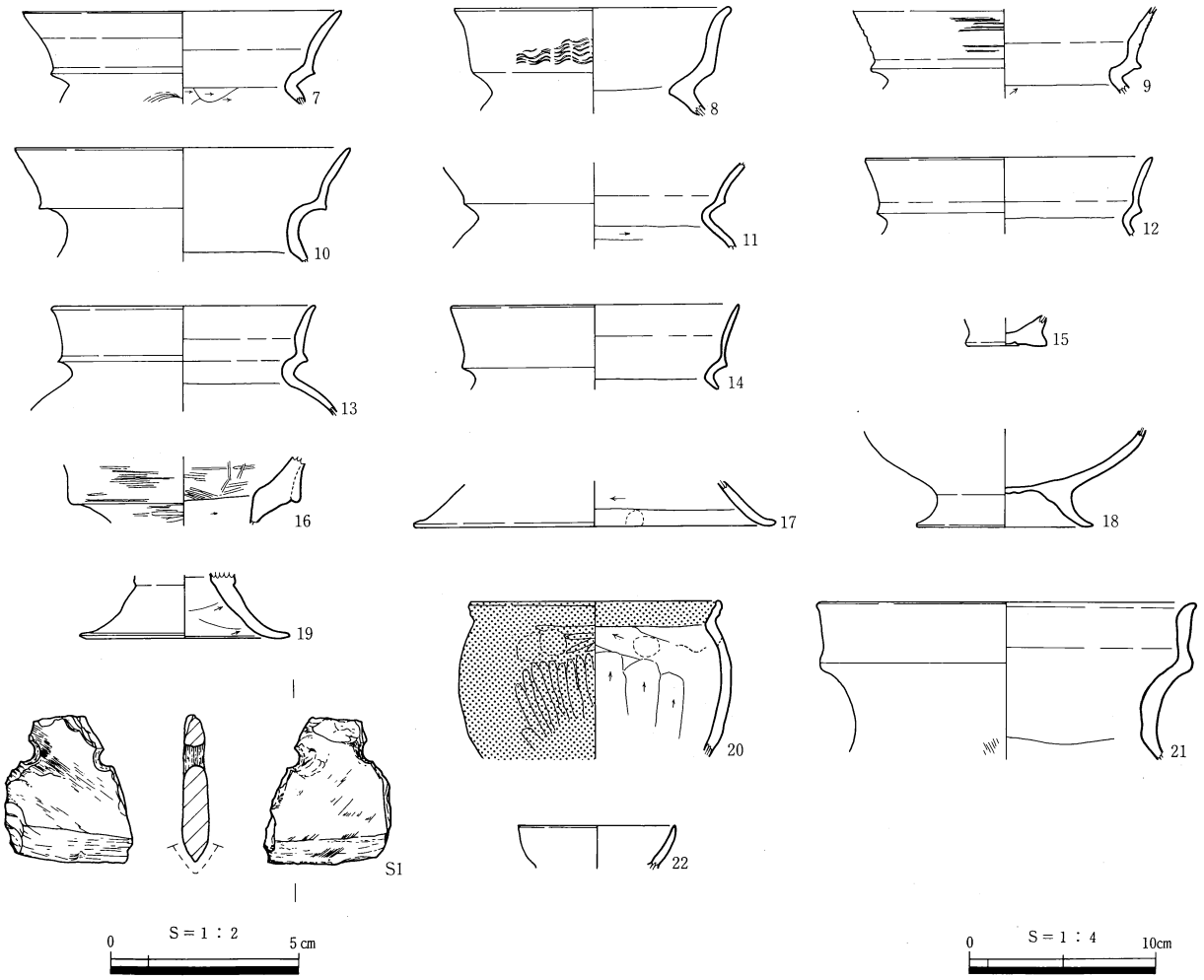


Fig. 7　ＳＩ１出土遺物実測図

スクリーントーン：赤彩

遺物番号	Fig. PL.	遺構名	出土位置	器種	法量	特徴	胎土	色調	備考
1	Fig. 7 PL.31	ＳＩ１ Ｐ１	埋土上層	弥生土器 甕口縁部	器高 △ 5.4	口縁部外面は剝落が著しく調整不明瞭。内面ヨコナデか。頸部以下ケズリ。	２～３㎜程度の石英を含む。	にぶい黄橙色10YR7/3～黄灰色2.5Y6/1	1/12以下残存
2	Fig. 7 PL.31	ＳＩ１内 ＳＫ２	埋土上層	弥生土器 甕口縁部	器高 △ 4.2	口縁部外面は横方向の平行沈線。内面ヨコナデ。	１㎜程度の砂粒を含む。	灰白色7.5YR8/1～浅黄橙色7.5YR8/4	1/12以下残存
3	Fig. 7 PL.31	ＳＩ１内 ＳＫ２	埋土上層	弥生土器 甕口縁部	口径 ※15.6 器高 △ 5.9	内外面ともに剝落が著しく調整不明瞭。	１～２㎜大の砂粒を含む。	浅黄橙色10YR8/4～にぶい黄橙色10YR7/4	1/12以下残存
4	Fig. 7 PL.31	ＳＩ１内 ＳＫ３	埋土中	弥生土器 甕頸部	器高 △ 4.0	口縁部は内外面ともにヨコナデ。内面頸部以下右方向のケズリ。	１～３㎜大の砂歴を含む。	浅黄橙色10YR8/4	約1/6残存
5	Fig. 7 PL.31	ＳＩ１内 ＳＫ３	埋土上層	弥生土器 甕口縁部	口径 ※16.6 器高 △ 7.2	口縁部は内外面ともにヨコナデ。外面肩部横方向のハケ目・波状文、内面頸部以下右方向のケズリ。	２㎜程度の石英、砂粒を含む。	浅橙色10YR8/3	約1/6残存
6	Fig. 7 —	ＳＩ１内 ＳＫ３	埋土中	弥生土器 器台台部	器高 △ 9.3 底径 ※ 2.7	外面ヨコナデ。内面ケズリ、端部付近はヨコナデ。	１㎜程度の砂粒を含む。	灰白色10YR8/2	約1/12残存
7	Fig. 7 —	ＳＩ１	埋土中	弥生土器 甕口縁部	口径 ※16.8 器高 △ 6.0	口縁部は内外面ともにヨコナデ。外面頸部下波状のハケ目あり。内面頸部屈曲部以下ケズリ。外面口縁部に煤付着。	砂粒を少量含む。	外）浅黄橙色7.5YR8/3 内）浅黄橙色7.5YR8/4～灰褐色7.5YR6/2	約5/12残存
8	Fig. 7 PL.31	ＳＩ１	埋土上層	弥生土器 甕口縁部	口径 ※14.4 器高 △ 5.4	口縁部外面波状文。内面剝落が著しく調整不明瞭。頸部以下ケズリ。外面口縁部に煤付着。	１～２㎜程度の石英・砂粒を含む。	にぶい黄橙色10YR6/4～にぶい橙色5YR7/4	約1/12残存
9	Fig. 7 PL.31	ＳＩ１	ベルト中	弥生土器 甕口縁部	器高 △ 4.5	口縁部外面平行沈線後中央付近横方向のナデ。内面口縁部ヨコナデ。頸部以下右方向のケズリ。	砂粒少量混。	にぶい黄橙色10YR6/4	約1/6残存
10	Fig. 7 —	ＳＩ１	埋土上層	弥生土器 壺口縁部	口径 ※18.0 器高 △ 6.0	口縁部は内外面ともにヨコナデ。内面頸部以下ケズリ。	１～２㎜程度の石英を含む。	外）黄橙色7.5YR8/8 内）黄橙色10YR8/8	約1/12残存
11	Fig. 7 PL.31	ＳＩ１	検出中	弥生土器 甕口縁部	口径 ※12.6 器高 △ 4.6	口縁部は内外面ともにヨコナデ。頸部以下右方向のケズリ。	１～２㎜程度の石英・砂粒を含む。	橙色5YR6/6	約1/6残存
12	Fig. 7 PL.31	ＳＩ１	埋土上層	弥生土器 甕口縁部	口径 ※15.5 器高 △ 4.2	口縁部は内外面ともにヨコナデ。内面頸部以下ケズリ。	１～２㎜程度の石英・砂粒を含む。	黄橙色10YR8/6	約1/12残存
13	Fig. 7 PL.31	ＳＩ１	埋土上層	弥生土器 甕口縁部	口径 ※13.9 器高 △ 5.7	口縁部は内外面ともにヨコナデ。内面頸部以下ケズリ。	１～２㎜程度の石英・砂粒を含む。	黄褐色10YR8/6	約1/12残存
14	Fig. 7 PL.31	ＳＩ１	埋土上層	弥生土器 甕口縁部	口径 ※15.4 器高 △ 4.6	口縁部は内外面ともにヨコナデ。内面頸部以下ケズリ。	１～２㎜大の石英・砂粒を含む。	黄橙色10YR8/6	口縁部1/4、体部1/3残存
15	Fig. 7 —	ＳＩ１	埋土上層	弥生土器 底部	器高 △ 1.5 底径 4.2	外面ナデ。内面指頭圧痕。	２㎜程度の石英・砂粒を含む。	外）浅黄橙色10YR8/3 内）浅黄色2.5Y7/3～灰色7.5Y5/1	底部完存
16	Fig. 7 PL.31	ＳＩ１	埋土上層	弥生土器 器台台部	器高 △ 4.2	外面ヨコナデ。内面脚柱部左方向のケズリ。裾部右方向のケズリ後ナデ。	１～３㎜程度の石英・砂粒を含む。	にぶい橙色7.5YR7/4	約1/12残存
17	Fig. 7 PL.31	ＳＩ１	埋土上層	弥生土器 器台口縁部	器高 △ 2.3 底径 ※ 9.6	外面ナデ。内面左方向ケズリ。端部付近ヨコナデ。指頭圧痕あり。	１㎜程度の砂粒を含む。	外）灰白色7.5YR8/2～橙色7.5YR7/6 内）にぶい橙色7.5YR7/4	約1/6残存
18	Fig. 7 PL.30	ＳＩ１	埋土上層	弥生土器 低脚坏脚部	器高 △ 5.2 底径 ※ 5.2	剝落が著しく調整不明瞭。ヨコナデか。	２～３㎜程度の砂粒を含む。	橙色7.5YR7/6	脚部ほぼ完存
19	Fig. 7 —	ＳＩ１	埋土上層	弥生土器 低脚坏脚部	器高 ※11.2 底径 △ 3.4	外面は剝落が著しく調整不明瞭。内面は右方向のケズリ。	２～３㎜程度の砂粒を含む。	浅黄橙色7.5YR8/4～灰白色7.5YR8/2	脚部1/12残存
20	Fig. 7 PL.31	ＳＩ１	埋土上層	弥生土器 甕口縁部	口径 ※13.4 器高 △ 8.4 最大胴径※14.6	口縁部内外面ともにヨコナデ。外面横または縦方向のミガキ。指頭圧痕あり。内面上または左上方向のケズリ。指頭圧痕あり。外面および内面口縁部に赤彩。	１㎜程度の砂粒を含む。	外）にぶい赤褐色5YR6/4 内）橙色5YR6/6～にぶい橙色5YR6/4	約1/6残存
21	Fig. 7 PL.31	ＳＩ１	埋土中	弥生土器 壺口縁部	口径 ※20.4 器高 △ 8.5	端部は口縁部は内外面ともにヨコナデ。外面頸部下にわずかに縦方向のハケ目痕あり。内面頸部以下ケズリ。	１～３㎜大の石英を含む。	黄橙色10YR8/6	約1/4残存
22	Fig. 7 PL.31	ＳＩ１	埋土中	弥生土器 小型壺口縁部	口径 ※ 8.4 器高 △ 2.3	口縁部は内外面ともにヨコナデ。	２㎜程度の砂粒を含む。	橙色7.5YR7/6	約1/4残存
Ｓ１	Fig. 7 PL.31	ＳＩ１	埋土中	石包丁	最大長△ 3.3 最大幅△ 3.9 最大厚 0.7 重さ △14.6	刃部を両側からつくる。２つの穿孔あり。両側から穿孔する。	石材：結晶片岩	灰白色7.5Y8/2	約1/4残存

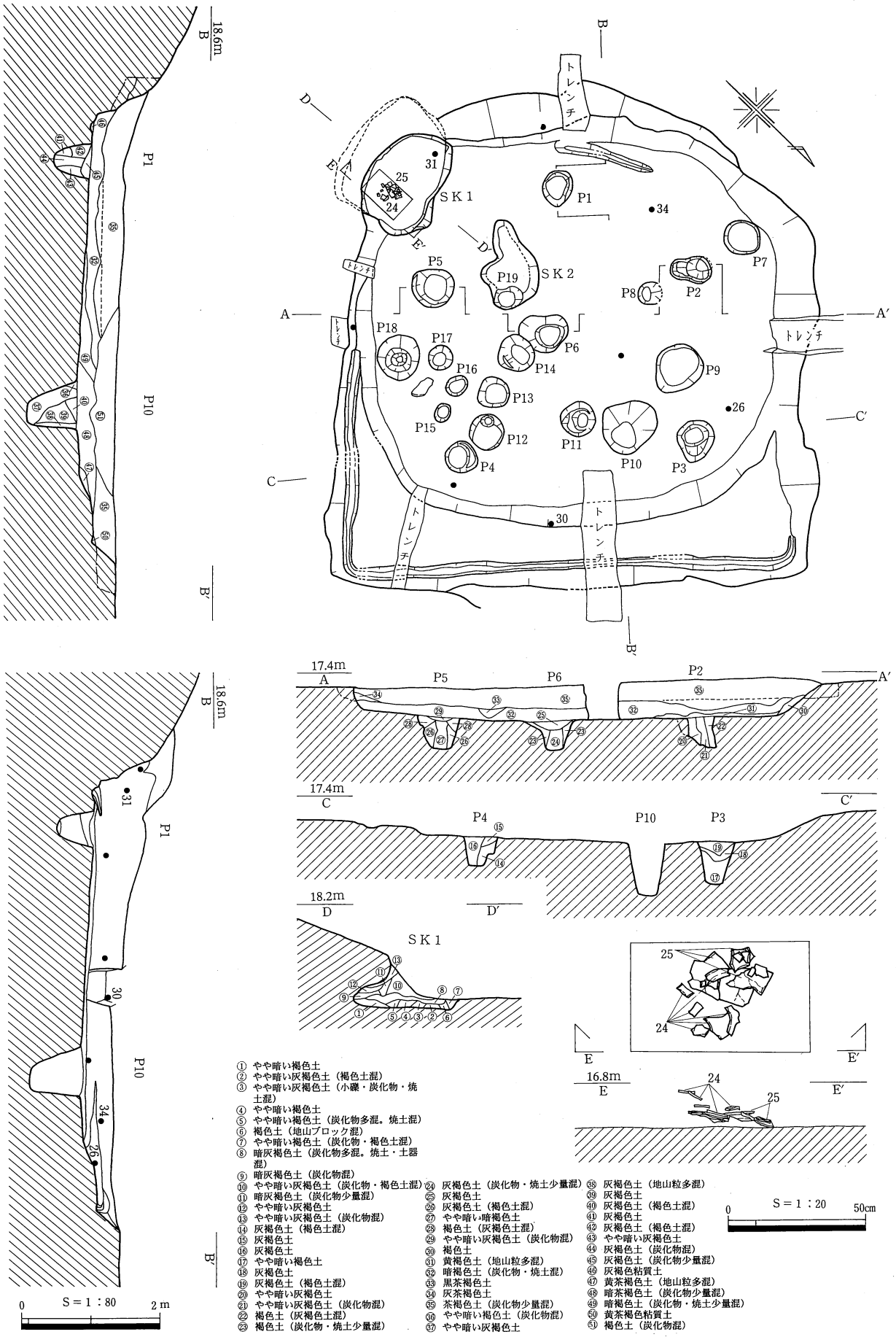
Tab. 2　ＳＩ１出土遺物観察表

西壁付近でわずかながら壁溝を確認した。深さは最大で４cmを測る。ただし住居の壁とは多少向きを異にしており、建て替えが行われた可能性がある。中央ピットの可能性のあるのはＰ６で、㉓・㉔層には焼土および炭化物が少量含まれていた。

底面ではＳＫ１・２を検出した。このうちＳＫ１は袋状をなす断面形態から貯蔵穴とみられ、住居の南隅の壁面をトンネル状に掘り込む。平面は不整な方形で、底から天井までの高さは最大で92cm、底面規模は長軸180cm、短軸130cmを測る。

床面上から出土したのは壺26である。甕24、底部25はＳＫ１の底面付近からの出土である。埋土中から出土した遺物の量は少なく、図化できたものはわずかである。ＳＫ２からは遺物は出土していない。

甕25の底部がわずかに平底をなすことなどから、南谷大山Ⅳ～Ⅴ期（弥生時代後期後葉～古墳時代前期前葉）と考えられる。ＳＩ１－１とほぼ同時期の所産であるが、併存していたかは分からない。



① やや暗い褐色土
② やや暗い灰褐色土（褐色土混）
③ やや暗い灰褐色土（小礫・炭化物・焼土混）
④ やや暗い褐色土
⑤ やや暗い褐色土（炭化物多混。焼土混）
⑥ 褐色土（地山ブロック混）
⑦ やや暗い褐色土（炭化物・褐色土混）
⑧ 暗灰褐色土（炭化物多混。焼土・土器混）
⑨ 暗灰褐色土（炭化物混）
⑩ やや暗い灰褐色土（炭化物・褐色土混）
⑪ 暗灰褐色土（炭化物少量混）
⑫ やや暗い灰褐色土
⑬ やや暗い灰褐色土（炭化物混）
⑭ 灰褐色土（褐色土混）
⑮ 灰褐色土
⑯ 灰褐色土
⑰ やや暗い褐色土
⑱ 灰褐色土
⑲ 灰褐色土（褐色土混）
⑳ やや暗い灰褐色土
㉑ やや暗い灰褐色土（炭化物混）
㉒ 褐色土（灰褐色土混）
㉓ 褐色土（炭化物・焼土少量混）
㉔ 灰褐色土（炭化物・焼土少量混）
㉕ 灰褐色土
㉖ 灰褐色土（褐色土混）
㉗ やや暗い暗褐色土
㉘ 褐色土（灰褐色土混）
㉙ やや暗い灰褐色土（炭化物混）
㉚ 褐色土
㉛ 黄褐色土（地山粒多混）
㉜ 暗褐色土（炭化物・焼土混）
㉝ 黒茶褐色土
㉞ 灰茶褐色土
㉟ 茶褐色土（炭化物少量混）
㊱ やや暗い褐色土（炭化物混）
㊲ やや暗い灰褐色土
㊳ 灰褐色土（地山粒多混）
㊴ 灰褐色土
㊵ 灰褐色土（褐色土混）
㊶ 灰褐色土
㊷ 灰褐色土（褐色土混）
㊸ やや暗い灰褐色土
㊹ 灰褐色土（炭化物混）
㊺ 灰褐色土（炭化物少量混）
㊻ 灰褐色粘質土
㊼ 黄茶褐色土（地山粒多混）
㊽ 暗茶褐色土（炭化物少量混）
㊾ 暗褐色土（炭化物・焼土少量混）
㊿ 黄茶褐色粘質土
(51) 褐色土（炭化物混）

Fig. 8　ＳＩ２・３遺構図

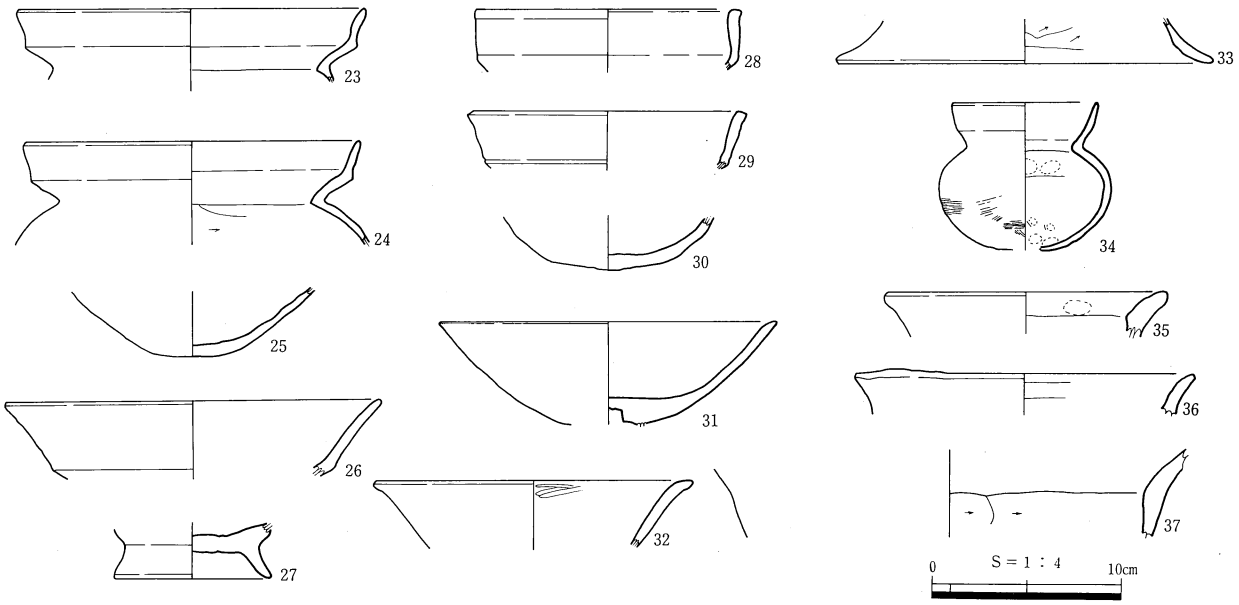


Fig. 9　ＳＩ２・３出土遺物実測図

遺物番号	Fig. PL.	遺構名	出土位置	器種	法量	特徴	胎土	色調	備考
23	Fig. 9 PL.31	ＳＩ２内 ＳＫ１	埋土中	弥生土器 甕口縁部	口径 ※18.4 器高 △ 3.7	口縁部は内外面ともにヨコナデ。内面頸部以下ケズリ。外面口縁部に煤付着。	２～４㎜程度の石英を含む。	外）灰白色5Y8/1～灰色5Y5/1 内）灰白色5Y8/1	約1/4残存
24	Fig. 9 PL.31	ＳＩ２内 ＳＫ１	底面上	弥生土器 甕口縁部	口径 ※19.8 器高 △ 5.4	口縁部は内外面ともにヨコナデ。内面頸部以下右方向のケズリ。	２～４㎜程度の石英を含む。	灰白色2.5Y8/2	約1/6約残存
25	Fig. 9 —	ＳＩ２内 ＳＫ１	底面上	弥生土器 底部	器高 △ 3.6	外面はナデ。内面剝落著しく調整不明瞭。ナデか。外面に煤付着。	２～３㎜程度の石英を含む。	灰白色2.5Y8/2	底部ほぼ完存
26	Fig. 9 PL.31	ＳＩ２	底面上	弥生土器 壺口縁部	口径 ※10.0 器高 △ 4.1	内外面ともに横ナデ。	１～２㎜程度の石英・砂粒を含む。	浅黄橙色10YR8/3～明黄褐色10YR7/6	約1/12残存
27	Fig. 9 —	ＳＩ２	埋土中	弥生土器 脚部	器高 △ 2.7 底径 ※ 8.2	脚部は内外面ともにヨコナデ。内底部輪状にナデ。外底部不定方向のナデ。	１㎜程度の砂粒少量混。	橙色5YR7/6	底部完存 脚部1/12残存
28	Fig. 9 PL.31	ＳＩ３	埋土中	土師器 甕口縁部	口径 ※14.1 器高 △ 3.3	内外面ともにヨコナデ。	１～２㎜大の石英を含む。	外）にぶい黄橙色10YR7/4 内）浅黄橙色10YR8/3	約1/12残存
29	Fig. 9 PL.31	ＳＩ３	埋土中	土師器 甕口縁部	口径 ※ 7.4 器高 △ 3.0	口縁部外面ヨコナデ。内面剝落により調整不明瞭。	３㎜程度の石英と砂粒を含む。	外）浅黄橙～黄灰色2.5Y4/1 内）黄灰色2.5Y4/1	約1/12残存
30	Fig. 9 —	ＳＩ３	埋土上層	土師器 底部	器高 △ 2.8	外面は剝落により調整不明瞭。内面ナデ。	１㎜程度の砂粒を含む。	外）橙色7.5YR7/6～浅黄橙色10YR8/4 内）橙色7.5YR6/6	約1/2残存
31	Fig. 9 —	ＳＩ３	埋土下層	土師器 高坏坏部	口径 ※17.9 器高 △ 5.5	口縁部内外面ともに剝落により調整不明瞭。	１～３㎜程度の石英を含む。	橙色7.5YR7/6	約1/3残存 口縁部1/12残存
32	Fig. 9 PL.31	ＳＩ３	埋土中	土師器 器台受部	器高 △ 3.6 底径 ※19.0	外面ヨコナデ。内面ヨコナデ。横方向のミガキ。	２㎜程度の石英・砂粒を含む。	浅黄橙色7.5YR8/6	約1/6残存
33	Fig. 9 PL.31	ＳＩ３	埋土中	土師器 器台台部	器高 △ 2.3 底径 ※10.0	外面ヨコナデ。内面右方向のケズリ。端部付近ヨコナデ。	１㎜程度の石英・砂粒を含む。	浅黄橙色10YR8/4～明黄褐色10YR7/6	約1/12残存
34	Fig. 9 PL.30	ＳＩ３	埋土下層	土師器 小型丸底壺	口径 ※ 7.6 器高 7.9 最大胴径 9.1	外面体部中位以上ヨコナデ、以下横方向のハケ目。内面口縁部ヨコナデ、頸部以下ケズリ。底部および肩部に指頭圧混。	１㎜程度の石英を含む。５㎜大の石英あり。	橙色5YR7/6	口縁部1/3残存 体部2/3残存
35	Fig. 9 —	ＳＩ３	トレンチ内	土師器 甕口縁部	口径 ※14.6 器高 △ 2.4	口縁部は内外面ともにヨコナデ。内面屈曲部以下ケズリ。外面にわずかに煤付着。	３㎜程度の石英・砂粒を含む。	外）明赤褐色5YR5/6 内）橙色5YR6/8	約1/12残存
36	Fig. 9 PL.31	ＳＩ３	埋土中	土師器 甕口縁部	口径 ※17.8 器高 △ 2.2	内外面ともに横または斜め方向のナデ。外面にわずかに煤付着。	１～２㎜程度の石英・砂粒を含む。	外）にぶい赤褐色5YR5/4 内）明赤褐色5YR5/6	約1/12残存
37	Fig. 9 PL.31	ＳＩ３	埋土中	土師器 甕口縁部	器高 △ 4.6	外面ナデ。内面口縁部ナデ。屈曲部以下右方向のケズリ。	１～２㎜程度の石英を含む。	外）にぶい赤褐色5YR5/4 内）赤褐色5YR5/6	約1/6残存

Tab. 3　ＳＩ２・３出土遺物観察表

番号	規模	遺物	番号	規模	遺物	番号	規模	遺物	番号	規模	遺物
Ｐ１	(53×40－46)	—	Ｐ６	(70 ×58－42)	—	Ｐ11	(53×50－60)	—	Ｐ16	(34×28－23)	—
Ｐ２	(57×38－50)	—	Ｐ７	(56 ×52－13)	—	Ｐ12	(54×50－63)	—	Ｐ17	(36×35－37)	—
Ｐ３	(62×54－62)	—	Ｐ８	(30↑×33－31)	—	Ｐ13	(45×44－21)	—	Ｐ18	(66×60－82)	—
Ｐ４	(48×47－42)	—	Ｐ９	(74 ×69－40)	—	Ｐ14	(55×53－39)	—			
Ｐ５	(64×63－51)	—	Ｐ10	(83 ×74－78)	—	Ｐ15	(27×20－25)	—			

Tab. 4　ＳＩ２柱穴規模一覧表

ＳＩ３（Fig.８・９、Tab.３、PL.29－１、31）

ＳＩ２と重なるが、ＳＩ１の南西端を切っている。平面は方形と考えられる。規模は北西－南東方向が6.3m、北東－南西は最大３ｍを測る。

主柱穴は確認できなかった。四方に壁溝を有していたと考えられる。床面での規模は、幅が概ね10～20cm、深さは最大で４cmを測る。

埋土中から出土した土師器はわずかで、図化できたのは甕28・29、底部30、高坏31、器台32・33、小型丸底壺34である。高坏31・小型丸底壺34は床面付近からの出土と考えられ、いずれも遺存状態はよい。

高坏31・小型丸底壺34は天神川Ｖ～Ⅵ期（古墳時代中期前葉～中葉）で、これが遺構の時期と考えられる。

甕35～37は「く」の字状を呈しており器壁が厚く、胎土もにぶい赤褐色で他の土師器とは異なることから、古墳時代後期以降のものと考えられる。

(2)　袋状土坑

ＳＫ１（Fig.10・11、Tab.５、PL.32）

検出面および床面は不整な楕円形状を呈する。検出面での規模は、長軸131cm、短軸113cm、深さは最大で141cm、底面規模は長軸84cm、短軸79cmを測る。断面はいったんくびれた後、袋状に大きく開く。

土層の堆積は、自然堆積によるものと判断できる。

埋土中から土器片が出土した。甕38・石鏃Ｓ２を図化した。甕38は埋土下層からの出土である。Ｓ２は黒曜石の石鏃で、上層から出土している。遺構の時期は、南谷大山Ⅳ～Ｖ期（弥生時代後期後葉～古墳時代前期前葉）の所産と考えられる。

ＳＫ３（Fig.12・13、Tab.６、PL.32）

検出面および底面は不整形を呈する。検出面での規模は、長軸214cm、短軸205cm、深さは最大で170cmである。底面は平坦でなく、中央付近が深く土坑状に掘り下げられる。周辺のテラス部からの深さは最大で37cmを測る。

底面の周辺は灰色礫を多く含む地山である。変則的な断面形態などから、中央付近のみ深く掘り下げた後、何らかの事由で掘削を中止した可能性がある。

土層には、炭化物が含まれている層やよくしまる層がある。黄褐色の地山粒が含まれており、自然堆積もしくは壁面の崩落によるものであろう。

出土した遺物は④～⑥層からで、いずれも小片である。図化できたのは甕39である。南谷大山Ⅳ～Ｖ期（弥生時代後期後葉～古墳時代前期前葉）の所産である。底面からの出土ではないが、遺構の時期に近いものと推定する。

ＳＫ４・10（Fig.14・15、Tab.７、PL.28－２、30－３、32）

切り合い関係は、ＳＫ10がＳＫ４を切っている。以下、ＳＫ４、ＳＫ10の順で記述する。

ＳＫ４

検出面および底面は不整な円形である。検出面での規模は、長軸84cm、短軸約120cm、深さは最大で114cmを測る。底面はほぼ平坦で、規模は長軸114cm以上、短軸189cmである。断面は袋状を呈する。

土層は、水平方向を基本としており、炭化物が含まれている層もみられた。①層には小片ながら土器片が多く混入していた。

遺物は底面上の中央付近から脚部43、北隅から脚部44が出土した。南谷Ⅳ～Ｖ期（弥生時代後期後葉～古墳時代前期前葉）で、これが遺構の時期と考えられる。45はいわゆる布留系の甕で、検出面上から出土した。口縁部は内湾し、口縁端部は平坦面をもつ。南谷大山Ｖ～Ⅵ期（古墳時代中期前葉～中葉）で、ＳＩ３と同時期にあたる。

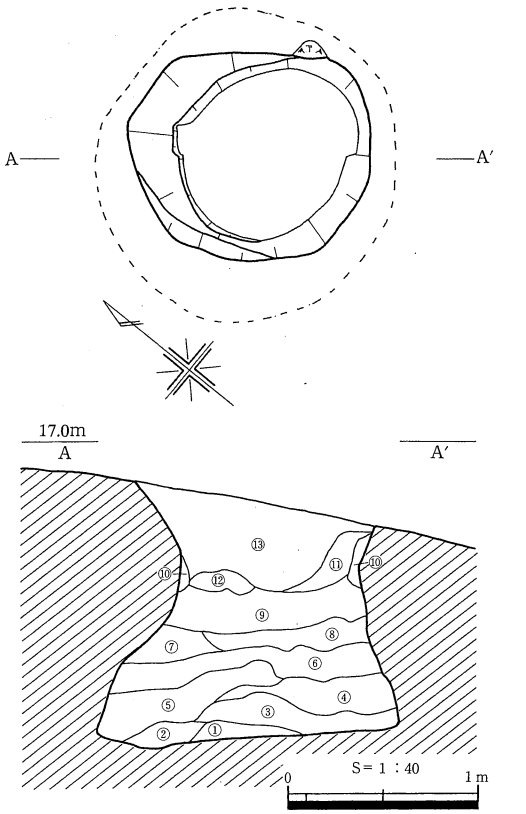


Fig. 10　ＳＫ１遺構図

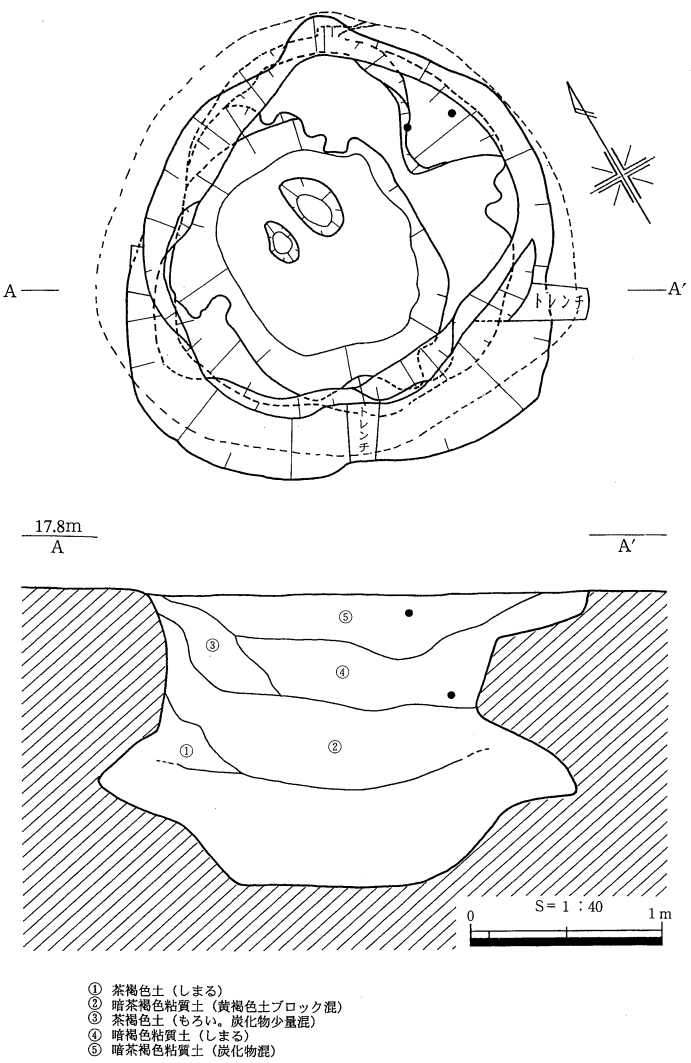


Fig. 12　ＳＫ３遺構図

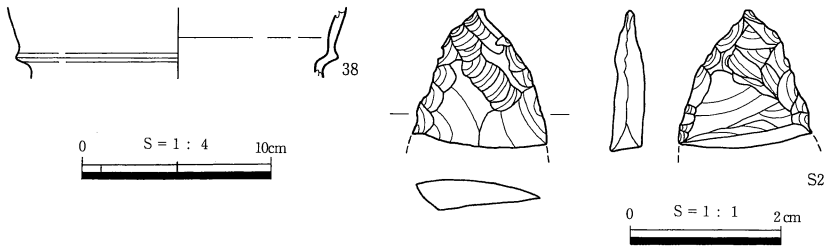


Fig. 11　ＳＫ１出土遺物実測図

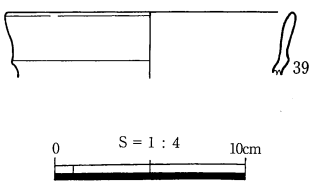


Fig. 13　ＳＫ３出土遺物実測図

遺物番号	Fig. PL.	遺構名	出土位置	器　種	法　量	特　　徴	胎　土	色　調	備　考
38	Fig.11 PL.32	ＳＫ１	底面直上	弥生土器 甕口縁部	器高　△3.7	口縁部は内外面ともにヨコナデ。	１㎜程度の砂粒を含む。	外）にぶい黄橙色10YR7/4 内）暗灰黄色2.5Y5/2	1/12以下残存
Ｓ２	Fig.11 —	ＳＫ１	埋土中	石鏃	最大長 △1.8 最大幅 △1.7 最大厚 0.5 重さ △1.3	左面はほぼ連続する細部調整、右面は非連続の調整を施す。	石材：黒曜石		基部欠損

Tab. 5　ＳＫ１出土遺物観察表

遺物番号	Fig. PL.	遺構名	出土位置	器　種	法　量	特　　徴	胎　土	色　調	備　考
39	Fig.13 PL.32	ＳＫ３	埋土中	弥生土器 甕口縁部	口径 ※15.0 器高 △ 3.6	内外面ともにヨコナデ。	１～２㎜程度の石英を含む。	橙色7.5YR7/6	約1/12残存

Tab. 6　ＳＫ３出土遺物観察表

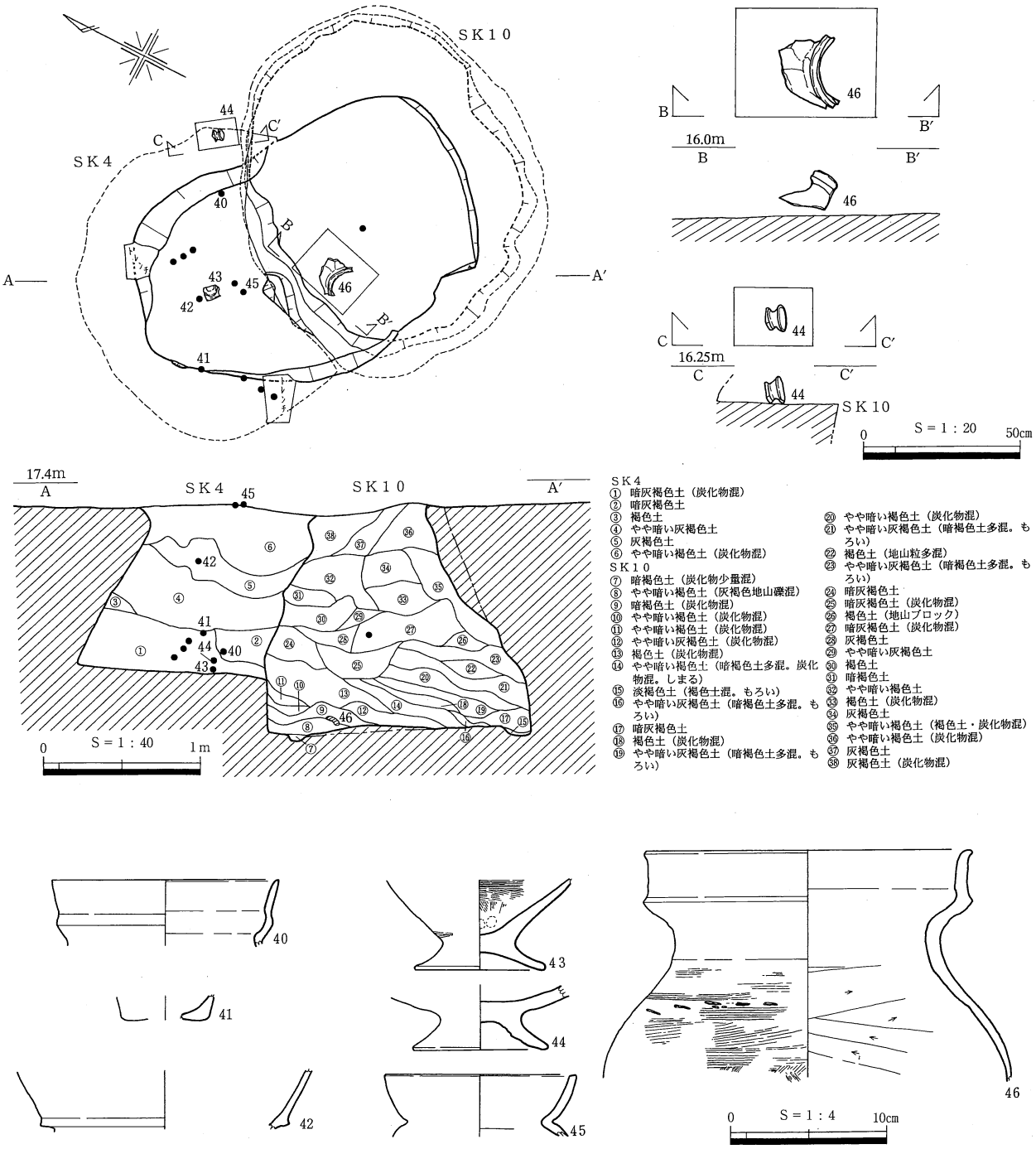


Fig. 15　ＳＫ４・10出土遺物実測図

遺物番号	Fig. PL.	遺構名	出土位置	器　種	法　量	特　　徴	胎　土	色　調	備　考
40	Fig.15 PL.32	ＳＫ４	埋土下層	弥生土器 甕口縁部	口径　※14.4 器高　△ 4.5	内外面ともにヨコナデ。	１㎜程度の砂粒を含む。	にぶい黄橙色10YR7/3	約1/12残存
41	Fig.15 —	ＳＫ４	埋土下層	弥生土器 底部	器高　△ 1.6 底径　※ 5.6	内外面ともに調整不明瞭。ナデか。	１～２㎜程度の砂粒を含む。	外）橙色2.5YR6/6 内）にぶい黄橙色10YR7/3	約1/2残存
42	Fig.15 PL.32	ＳＫ４	埋土中層	弥生土器 器台受部	器高　△ 3.3	内外面ともにヨコナデ。	１～３㎜程度の石英を含む。	浅黄橙色10YR8/4	約1/12残存
43	Fig.15 PL.30	ＳＫ４	底面直上	弥生土器 脚部	器高　△ 5.8 底径　　8.4	外面屈曲部付近横方向のミガキ。内面横方向のハケ目。底部指頭圧痕。	１～４㎜大の石英を含む。	浅黄橙色10YR8/3	脚部2/3残存
44	Fig.15 PL.30	ＳＫ４	底面直上	弥生土器 低脚坏脚部	器高　※ 3.6 底径　△ 4.0	脚部は内外面ともにヨコナデ。坏底部内面は不定方向のナデ。	１㎜程度の砂粒を含む。	外）浅黄橙色10YR8/4 内）明黄褐色10YR7/6	脚部1/2残存
45	Fig.15 PL.32	ＳＫ４	検出面上	土師器 甕口縁部	口径　※12.2 器高　△ 4.0	口縁部は内外面ともにヨコナデ。内面頸部以下ケズリ。	１～２㎜程度の砂粒を含む。	橙色7.5YR7/6	約1/4残存
46	Fig.15 PL.30	ＳＫ10	底面直上	弥生土器 壺口縁部	口径　※21.0 器高　△14.6	口縁部は内外面ともにヨコナデ。外面肩部以下横方向のハケ目。ヘラによる刺突文あり。内面肩部以下右または左方向ケズリ。	１～３㎜の長石を含む。	浅黄橙色10YR8/4	約1/2残存

Tab. 7　ＳＫ４・10出土遺物観察表

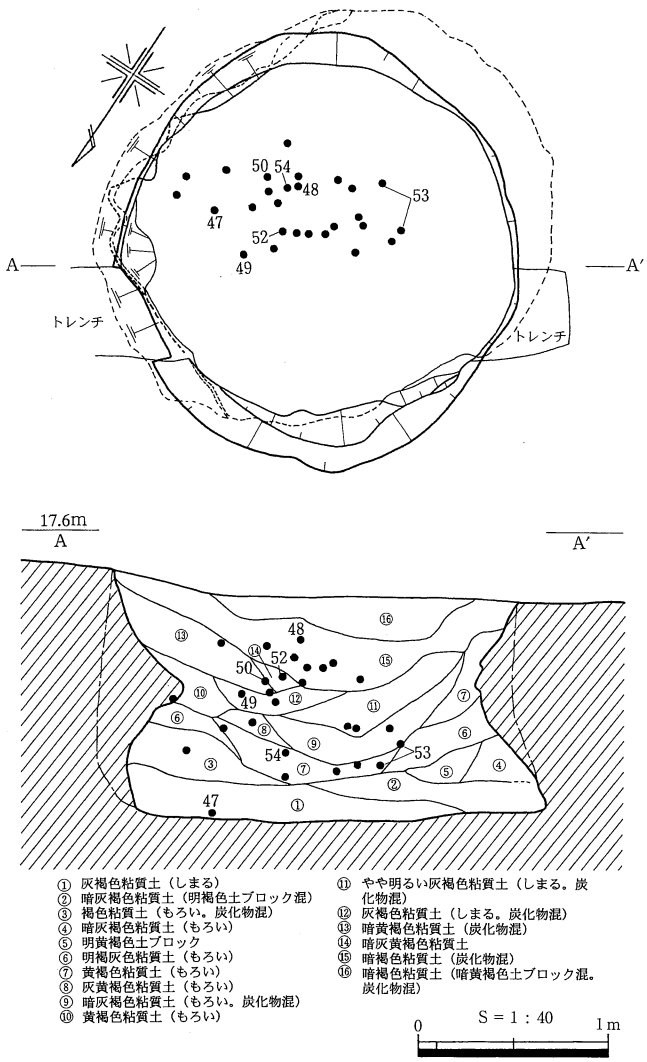


Fig. 16　ＳＫ６遺構図

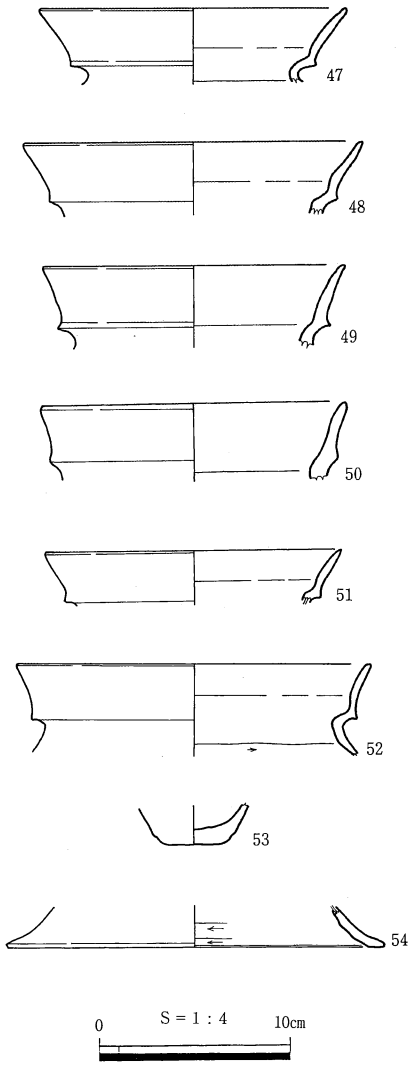


Fig. 17　ＳＫ６出土遺物実測図

遺物番号	Fig. PL.	遺構名	出土位置	器　種	法　量	特　徴	胎　土	色　調	備　考
47	Fig.17 PL.32	ＳＫ６	底面直上	弥生土器 甕口縁部	口径 ※16.0 器高 △ 4.1	口縁部は内外面ともにヨコナデ。内面頸部以下ケズリ。	１～２㎜の砂粒を含む。	外）浅黄橙色10YR8/4 内）明黄褐色10YR7/6	約1/4残存
48	Fig.17 PL.32	ＳＫ６	埋土上層	弥生土器 甕口縁部	口径 ※17.8 器高 △ 3.9	口縁部は内外面ともにヨコナデ。	１～２㎜程度の砂粒を含む。	にぶい黄橙色10YR7/4	約1/6残存
49	Fig.17 PL.32	ＳＫ６	埋土中層	弥生土器 甕口縁部	口径 ※16.0 器高 △ 4.4	口縁部は内外面ともにヨコナデ。	１～３㎜程度の石英を含む。	にぶい黄橙色10YR7/3	1/12以下残存
50	Fig.17 PL.32	ＳＫ６	埋土中層	弥生土器 甕口縁部	口径 ※16.2 器高 △ 8.2	口縁部は内外面ともにヨコナデ。内面頸部以下ケズリ。口縁部外面に煤付着。	１～４㎜の石英を多く含む。	にぶい黄橙色10YR8/6～7/4	1/12以下残存
51	Fig.17 PL.32	ＳＫ６	埋土中	弥生土器 甕口縁部	口径 ※15.6 器高 △ 2.8	口縁部は内外面ともにヨコナデ。	２㎜程度の石英・砂粒を含む。	明褐色10YR6/6～黄灰色2.5Y6/1	1/12以下残存
52	Fig.17 PL.32	ＳＫ６	埋土上層	弥生土器 甕口縁部	口径 ※18.8 器高 △ 4.9	口縁部は内外面ともにヨコナデ。内面頸部以下右方向のケズリ。	１～２㎜大の石英を含む。	浅黄橙色10YR8/4～黄橙色10YR8/6	約1/12残存
53	Fig.17 —	ＳＫ６	埋土下層	弥生土器 底部	器高 △ 2.1 底径 3.0	内外面ともに不定方向のナデ。	１～２㎜程度の石英を含む。	灰色7.5YR6/1	約1/4残存
54	Fig.17 PL.32	ＳＫ６	埋土下層	弥生土器 器台台部	器高 △ 2.1 底径 ※20.0	外面ヨコナデ。内面左方向のケズリ。端部付近ヨコナデ。	３㎜以下の砂粒を含む。	外）浅黄橙色10YR8/3 内）灰白色10YR8/2	約1/12残存

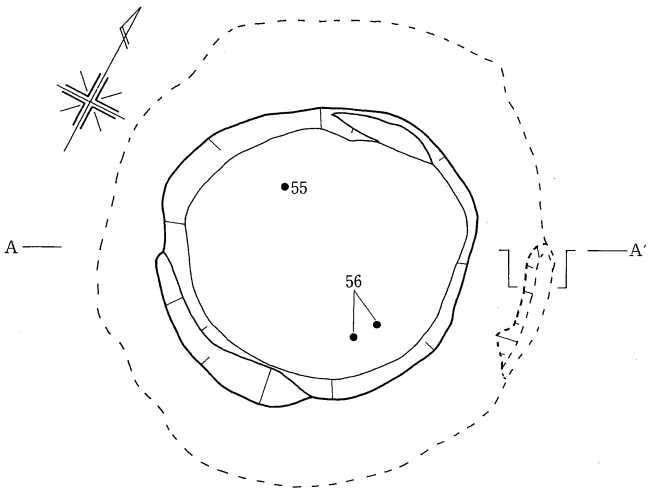
Tab. 8　ＳＫ６出土遺物観察表

ＳＫ10

検出面および底面は不整な円形を呈する。検出面での規模は、長軸144cm、短軸140cm、底面からの深さは最大155cmで、ＳＫ４の底よりも41cm深い。底面は不整な楕円形状で、規模は長軸215cm、短軸192cmを測る。外縁に幅12～25cm、最大の深さ５cmの溝を設ける。断面は、くびれは目立たないが緩やかに広がる袋状となる。

土層は、埋土下層は細かなすじ状の堆積を基本としており、不自然な状況である。また、炭化物や地山ブロックが層の上下に関わらず混入している。

中央やや西側の底面上から壺46が出土した。比較的大きな破片で、口縁部の３分の１程度は遺存している。南



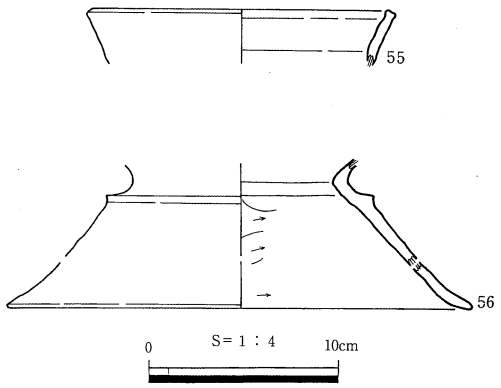
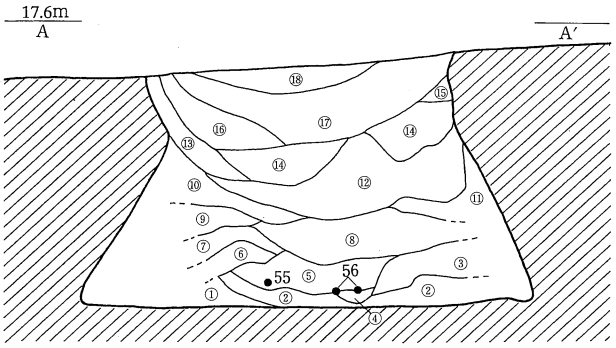


Fig. 19　ＳＫ７出土遺物実測図



① やや暗い褐色土（地山ブロック混）
② やや暗い褐色土（地山ブロック多混）
③ 暗灰褐色粘質土
④ 暗灰褐色土（炭化物混。地山ブロック混）
⑤ 暗灰褐色粘質土（炭化物混）
⑥ やや暗い灰褐色粘質土
⑦ やや暗い褐色土（地山ブロック多混）
⑧ 暗灰褐色土（炭化物混）
⑨ 暗灰褐色土（炭化物を少混）
⑩ やや暗い灰褐色土（褐色土混）
⑪ やや暗い褐色土（もろい）
⑫ やや暗い灰褐色土（褐色土・炭化物混）
⑬ やや暗い灰褐色土（炭化物混）
⑭ やや暗い褐色土（褐色土・炭化物混）
⑮ やや暗い褐色土
⑯ やや暗い褐色土（褐色土・炭化物混）
⑰ 暗褐色土（褐色土混）
⑱ やや暗い褐色土

0　S＝１：40　1 m

Fig. 18　ＳＫ７遺構図

遺物番号	Fig. PL.	遺構名	出土位置	器　種	法　量	特　　徴	胎　土	色　調	備　考
55	Fig.19 PL.32	ＳＫ７	底面直上	弥生土器 甕口縁部	口径　※2.9 器高　△8.0	口縁先端部はわずかに内側に突出する。内外面ともにヨコナデ。	１㎜程度の砂粒を含む。	にぶい黄橙色10YR7/4～明黄褐色10YR7/6	約1/12残存
56	Fig.19 PL.32	ＳＫ７	底面直上	弥生土器 器台台部	器高　△5.9	外面ヨコナデ。内面右方向ケズリ。	２～４㎜程度の石英、小石を含む。	浅黄橙色10YR8/3	約1/12残存

Tab. 9　ＳＫ７出土遺物観察表

谷大山Ⅳ～Ⅴ期（弥生時代後期後葉～古墳時代前期前葉）で、これが遺構の時期にあたる。

ＳＫ６（Fig.16・17、Tab. 8、PL.32）

検出面および底面は不整な円形を呈する。西側の断面は袋状を呈す。検出面での規模は、長軸220cm、短軸212cm、深さは最大で134cmを測る。底面はほぼ平坦で、長軸230cm、短軸229cmである。

土層には壁の崩落にともなう明褐色土がブロック状に混入する。

埋土中から土器小片が出土した。図化できた遺物は、甕47～52、底部53、器台54である。底面出土の甕47から判断して、南谷大山Ⅳ～Ⅴ期（弥生時代後期後葉～古墳時代前期前葉）の所産と考えられる。

ＳＫ７（Fig.18・19、Tab. 9、PL.32）

検出面および底面は不整な円形を呈する。検出面での規模は、長軸171cm、短軸154cm、深さは最大で135cmを測る。底面はほぼ平坦で、長軸250cm、短軸234cmである。底部の東端には幅13～18cm、最大の深さ３cmの溝が掘られている。断面はフラスコ状を呈する。

土層は自然堆積とみられる。地山ブロックを含む層がみられる。

出土した遺物は、いずれも小片である。図化できたのは甕55・器台56で、埋土下層からの出土である。ともに南谷大山Ⅳ～Ⅴ期（弥生時代後期後葉～古墳時代前期前葉）の所産と考えられる。

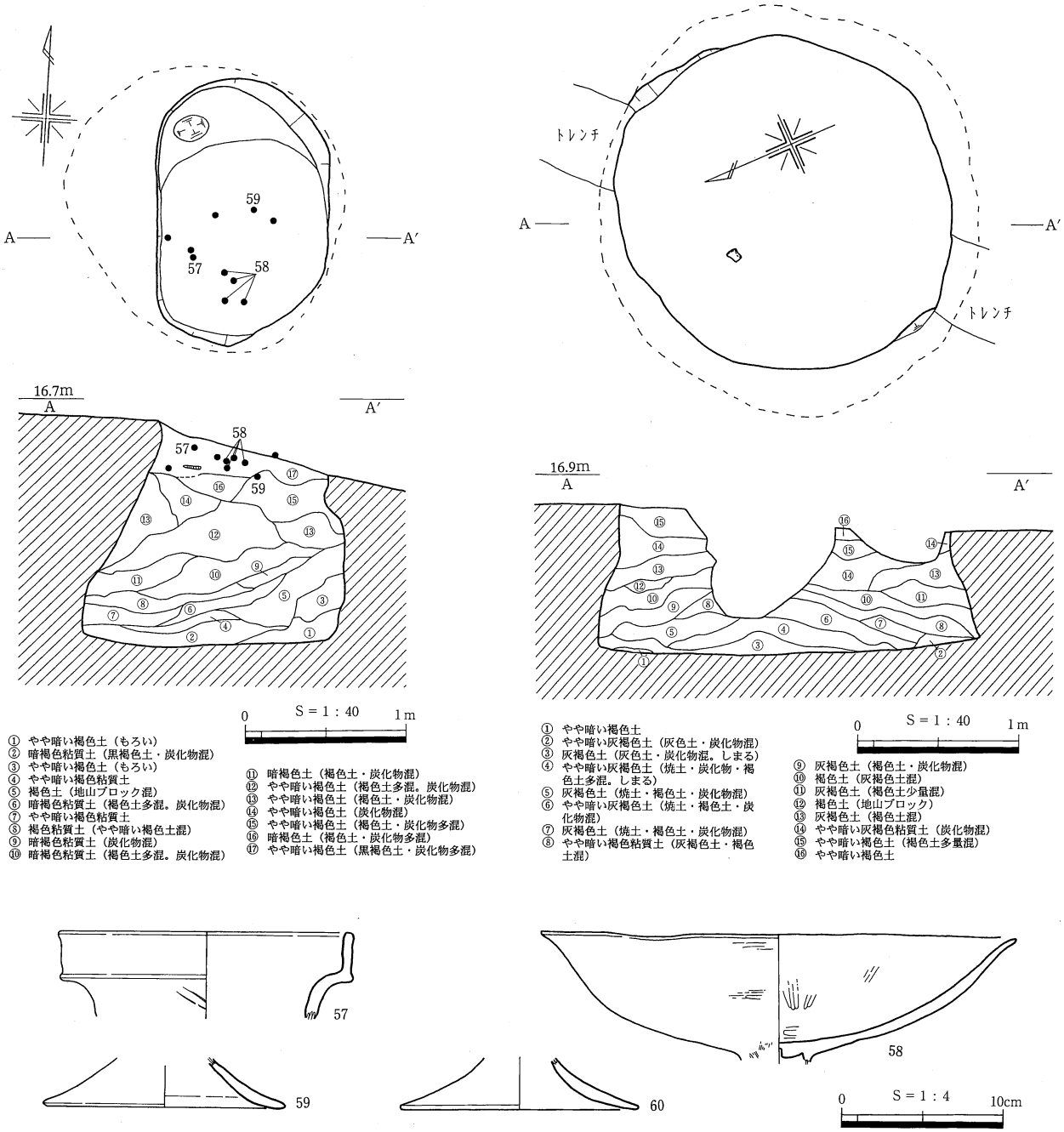


Fig. 22　ＳＫ８出土遺物実測図

遺物番号	Fig. PL.	遺構名	出土位置	器　種	法　量	特　　徴	胎　土	色　調	備　考
57	Fig.22 PL.32	ＳＫ８	埋土上層	弥生土器 壺口縁部	口径　※18.4 器高　△ 5.4	口縁部は内外面ともにヨコナデ。外面頸部に刺突文。	１～２㎜程度の石英を含む。	にぶい黄橙色10YR7/3	約1/6残存
58	Fig.22 —	ＳＫ８	埋土上層	弥生土器 高坏坏部	器高　△ 7.9 底径　29.5	外面口縁部横方向のミガキ。接合部付近縦方向のハケメ。内面口縁部縦方向のミガキ。	１～４㎜の長石を多く含む。	外）橙色7.5YR7/6 内）橙色5YR6/8	坏部完存
59	Fig.22 PL.32	ＳＫ８	埋土上層	弥生土器 高坏脚部	器高　△ 3.2 底径　※14.8	外面ヨコナデ。内面剝落により調整不明瞭。	１～２㎜程度の砂粒を含む。	浅黄橙色10YR8/3	約1/6残存
60	Fig.22 PL.32	ＳＫ８	埋土中	弥生土器 高坏脚部	器高　△ 2.9 底径　※15.0	内外面ともにヨコナデ。	１～２㎜程度の石英を含む。	にぶい黄橙色10YR7/4	1/12以下残存

Tab. 10　ＳＫ８出土遺物観察表

ＳＫ８ (Fig.20・22、Tab.10、PL.32)

検出面および底面は不整な楕円形である。検出面での規模は、長軸157cm、短軸107cm、深さは最大で142cmを測る。底面はほぼ平坦で、長軸182cm、短軸162cmを測る。断面は袋状を呈する。

土層は、東側から堆積した様子がみられる。全般的に炭化物が含まれており、⑰層からは土器が出土している。

図化した遺物は壺57、高坏58～60で、南谷Ⅳ～Ⅴ期（弥生時代後期後葉～古墳時代前期前葉）のものと考えられる。底面からの出土ではないが、他の貯蔵穴と大きな時期差はないであろう。

ＳＫ12（Fig.21）

ＳＩ２の床面上の北東隅付近で検出した。位置や形状から、遺構上側はＳＩ２に切られていると考えられる。

検出面および底面は検出面・底面ともに円形で、検出面での規模は、長軸227cm、短軸220cm、深さは最大で91cmを測る。底面はほぼ平坦で、規模は長軸256cm、短軸231cmである。断面は袋状を呈するものと考えられる。

土層断面のうち、下層は中央部分が盛り上がるように堆積しており、上層はほぼ水平となる。自然堆積とは考えにくく、ＳＩ２掘削の際に意図的に埋められた可能性がある。

遺構内から土器片は出土しているが、図化できない。時期は切り合い関係から、ＳＩ２よりも古く、南谷大山Ⅳ期（弥生時代後期後葉）以前の所産である。

(3) 土　　坑

ＳＫ２（Fig.23・25、Tab.11、PL.32）

検出面および平面は不整な楕円形である。検出面での規模は、長軸418cm、短軸275cm、土坑状の部分は、長軸220cm、短軸143cm、周辺からの深さは最大で50cmを測る。土層断面から、自然堆積と考えられる。

遺物は、遺構周辺にも散在していた。図化できたものは甕61・62である。南谷大山Ⅲ～Ⅳ期（弥生時代後期中葉～後葉）の所産と考えられる。

ＳＫ５（Fig.24・26、Tab.12、PL.32）

検出面および底面は不整な三角形状を呈する。検出面での規模は、長軸126cm、短軸99cmを測る。

埋土には炭化物を多く含み、土器片が混入していた。図化できたのは甕63・64である。

63は南谷大山Ⅲ～Ⅳ期（弥生時代後期中葉～後葉）、64は南谷大山Ⅳ～Ⅴ期（弥生時代後期後葉～古墳時代前期前葉）で、甕64が遺構の時期と考えられる。

ＳＫ９（Fig.27・30、Tab.13、PL.32）

検出面および底面は、検出面、底面ともに方形を呈する。底面規模は長軸182cm、短軸120cmを測る。

土層断面から、自然堆積の様相がうかがえる。

図化できた遺物は甕65で、埋土下層からの出土である。土師器の器台台部片で、径が16cmである。南谷大山Ⅳ～Ⅴ期（弥生時代後期後葉～古墳時代前期前葉）の所産であろう。

ＳＫ11（Fig.28）

検出面および底面は不整な円形である。検出面での規模は、長軸138cm、短軸137cm、断面は浅い皿状を呈する。

埋土は単層で、地山ブロックが混入していた。

遺物は出土しておらず、時期は不明である。

ＳＫ13（Fig.29）

検出面および底面は円形を呈す。検出面での規模は長軸103cm、短軸101cm、深さは最大で109cmを測る。

土層は、基本的には斜面の上、北側からの堆積で、概ね赤褐色を呈する地山ブロックを含んでいる。自然堆積とは考え難く、人為的に埋めたものと考えられる。

遺物は出土しておらず、時期は不明である。

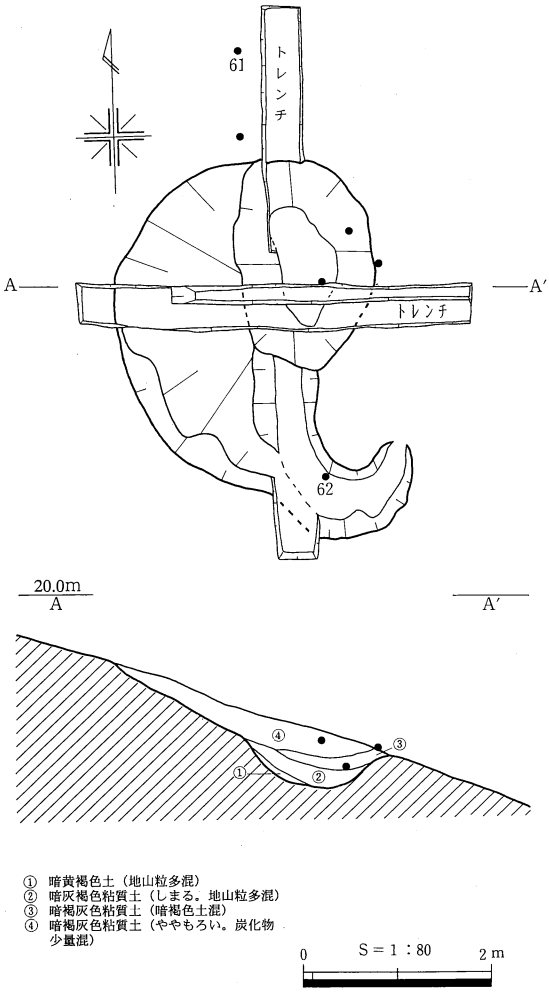


Fig. 23 ＳＫ２遺構図

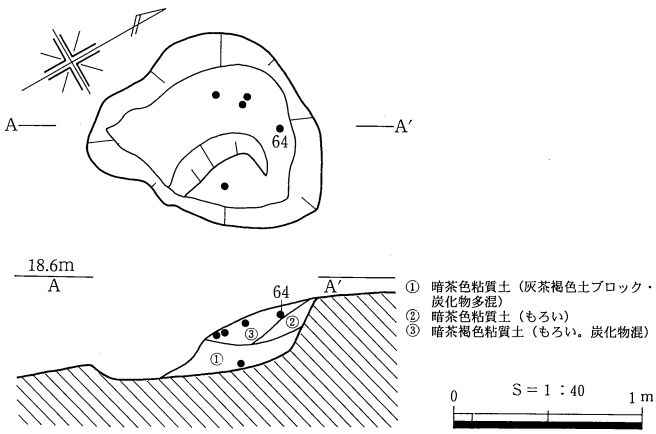


Fig. 24 ＳＫ５遺構図

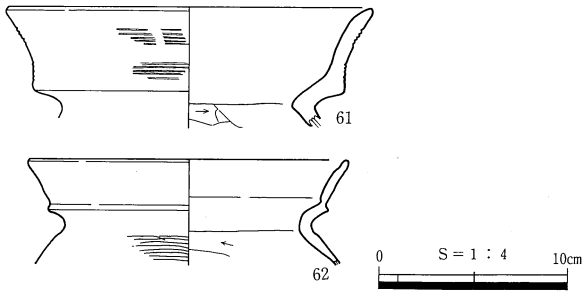


Fig. 25 ＳＫ２出土遺物実測図

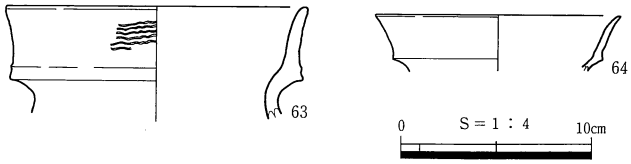


Fig. 26 ＳＫ５出土遺物実測図

遺物番号	Fig. PL.	遺構名	出土位置	器種	法量	特徴	胎土	色調	備考
61	Fig.25 PL.32	ＳＫ２付近	検出面上	弥生土器 甕口縁部	口径 ※19.2 器高 △ 6.3	口縁部外面横方向の平行沈線。中央付近ナデ消しか。口縁部内面ヨコナデ、頸部以下右方向のケズリ。	２～３㎜程度の砂粒を含む。	外）浅黄橙色7.5YR8/4 内）浅黄橙色7.5YR8/4～10YR8/3	約1/6残存
62	Fig.25 PL.32	ＳＫ２	検出面上	弥生土器 甕口縁部	口径 ※16.2 器高 △ 5.6	口縁部は内外面ともにヨコナデ。内面口縁端部付近に幅約２㎜程のやや強いナデあり。外面肩部横方向のハケ目。内面頸部以下右方向のケズリ。外面口縁部に煤付着。	１～２㎜程度の砂粒を含む。	にぶい黄橙色10YR7/4	約1/12残存

Tab. 11 ＳＫ２出土遺物観察表

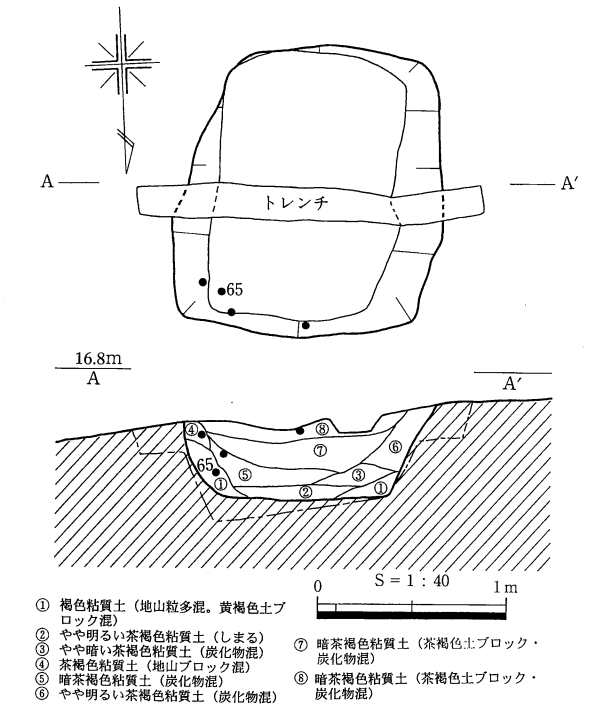
遺物番号	Fig. PL.	遺構名	出土位置	器種	法量	特徴	胎土	色調	備考
63	Fig.26 PL.32	ＳＫ５	埋土中	弥生土器 甕口縁部	口径 ※16.0 器高 △ 6.1	口縁部外面横方向の平行沈線。中央付近ナデ消しか。口縁部内面ヨコナデ、頸部以下右方向のケズリ。	１㎜以下の砂粒を含む。	外）にぶい黄橙色10YR7/4～灰黄褐色10YR6/2 内）にぶい黄橙色10YR7/3	1/12以下残存
64	Fig.26 PL.32	ＳＫ５	埋土上層	弥生土器 甕口縁部	口径 ※13.0 器高 △ 3.0	内外面ともにヨコナデ。	１～２㎜程度の砂粒を含む。	にぶい黄橙色10YR6/4	1/12以下残存

Tab. 12 ＳＫ５出土遺物観察表

(4) 遺構外出土遺物（Fig.31、Tab.14、PL.32）

３点を図化した。小型壺66は、調査区北側の斜面から出土した。甕67・68は、貯蔵穴ＳＫ１・８の東側の斜面下から出土した。

時期は、概ね南谷大山Ⅳ～Ⅴ期（弥生時代後期後葉～古墳時代前期前葉）で、周辺の遺構の時期と矛盾しない。



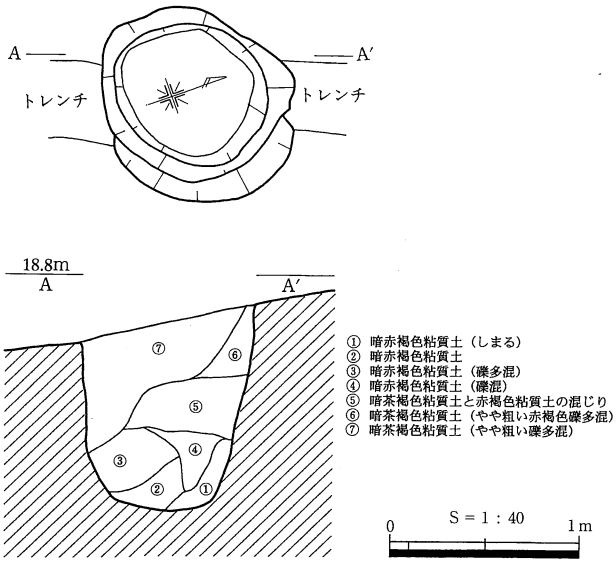


Fig. 29　ＳＫ13遺構図

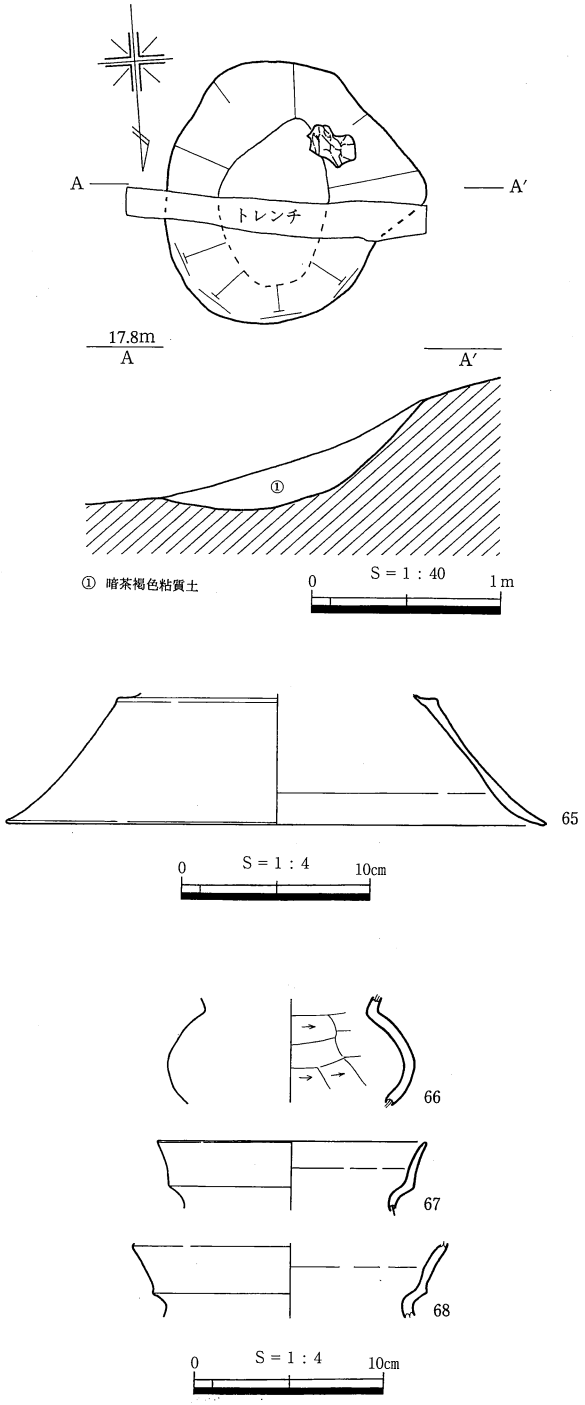


Fig. 31　遺構外出土遺物実測図

遺物番号	Fig. PL.	遺構名	出土位置	器　種	法　量	特　　徴	胎　土	色　調	備　考
65	Fig.30 PL.32	ＳＫ９	埋土中～下　層	弥生土器 甕口縁部	口径　※16.0 器高　△ 4.1	口縁部は内外面ともにヨコナデ。内面頸部以下ケズリ。	１～２㎜の砂粒を含む。	黄橙色10YR8/6	約1/6残存

Tab. 13　ＳＫ９出土遺物観察表

遺物番号	Fig. PL.	遺構名	出土位置	器　種	法　量	特　　徴	胎　土	色　調	備　考
66	Fig.31 PL.32	遺構外	ｇ８ グリッド	弥生土器 小型壺	器高　△ 5.5 最大胴径※13.0	体部外面はナデ。内面は右方向のケズリ。	２㎜程度の石英を含む。	浅黄橙色10YR8/3～にぶい黄橙色10YR6/4	体部約1/6残存
67	Fig.31 PL.32	遺構外	ｈ９ グリッド	弥生土器 甕口縁部	口径　※14.0 器高　△ 3.7	口縁部は内外面ともにヨコナデ。	２㎜大の石英、４㎜大の砂礫あり。	浅黄橙色10YR8/3	約1/12残存
68	Fig.31 PL.32	遺構外	ｈ９ グリッド	弥生土器 甕口縁部	器高　△ 3.9	口縁部は内外面ともにヨコナデ。	１㎜大の砂粒を含む。	にぶい黄橙色7.5YR7/4～6/4	1/12以下残存

Tab. 14　遺構外出土遺物観察表

第５章　北尾釜谷遺跡（北尾古墳群）の調査

１．北尾古墳群の概要

北尾古墳群は、島古墳群の北側、曲古墳群の東側の丘陵上に立地する。丘陵規模は、南北6.5km、東西5.5kmである。最も高い八幡神社付近の標高約62mから南側へ伸びる尾根、および周辺の丘陵平坦地に築造されている。丘陵上の大部分は梨栽培や畑として利用されており、周辺地域の状況からみても、本来は相当数の古墳が築造されていたものと考えられる。

現在27基が確認されており、このうち今回の調査を含めて23･24～27号墳の５基が調査されている。古墳時代前期中葉の方墳である25号墳を除くと、大部分は古墳時代中期から後期にかけて築造された円墳と考えられる。多くは周辺の古墳群同様、板状の安山岩を利用した箱式石棺を内部主体にもつとみられる。また、12号墳の如く大型の板状安山岩を使用した横穴式石室をもつものもある。曲古墳群や土下古墳群と同様、６世紀後半以降の横穴式石室の普及後は、石材確保の容易さもありこの種の石室が採用されたと考えられる。２号墳も詳細は不明だが、露出している角礫石材の状況から横穴式石室と想定される。

今回の調査では、４基の古墳を新たに確認した。25号墳は、一辺14mの方墳で前期中葉の築造である。24･26･27号墳は、小型の箱式石棺を内部主体とする。調査地内には、墳丘を有しない箱式石棺、石蓋土壙墓などの埋葬施設もあり、周辺が埋葬地として認識されていたものと考えられる。

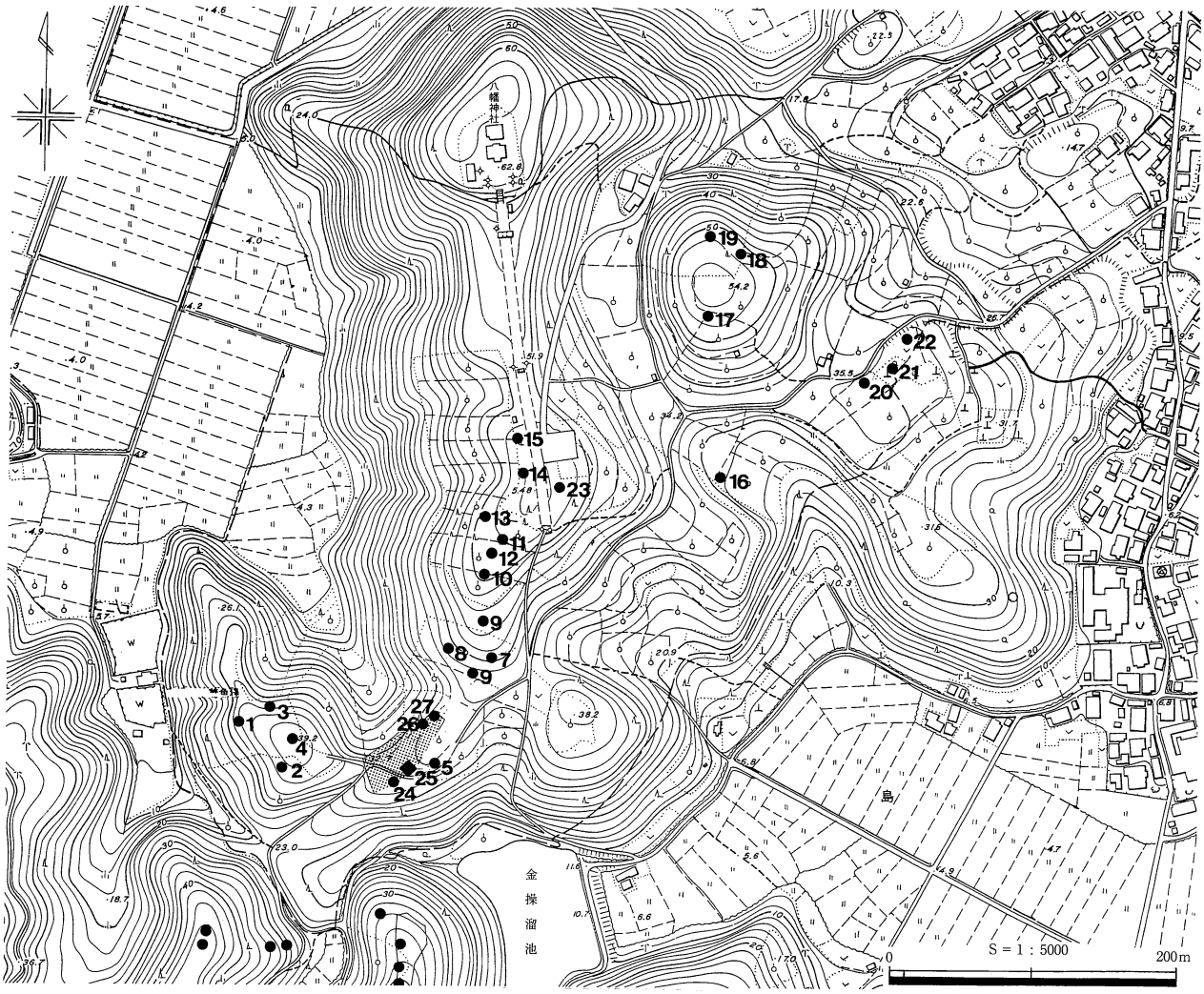


Fig. 1　北尾古墳群分布図

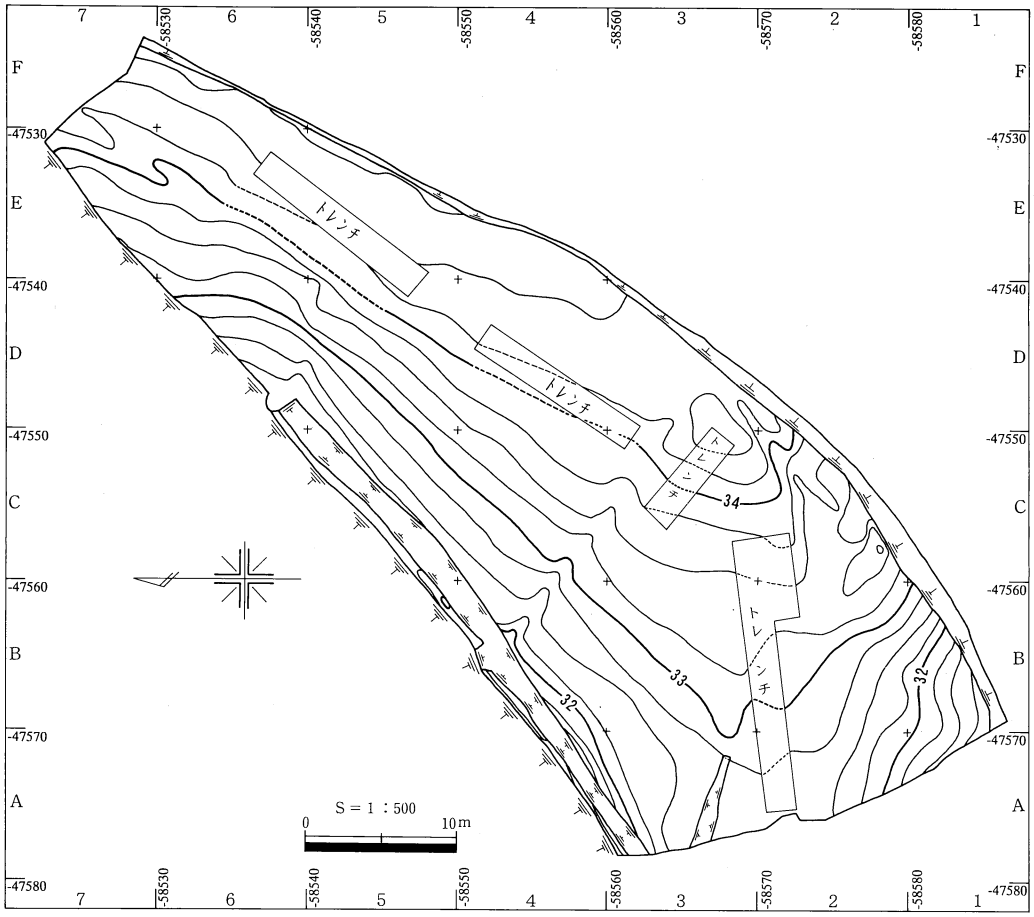


Fig. 2　北尾釜谷遺跡調査前平面図

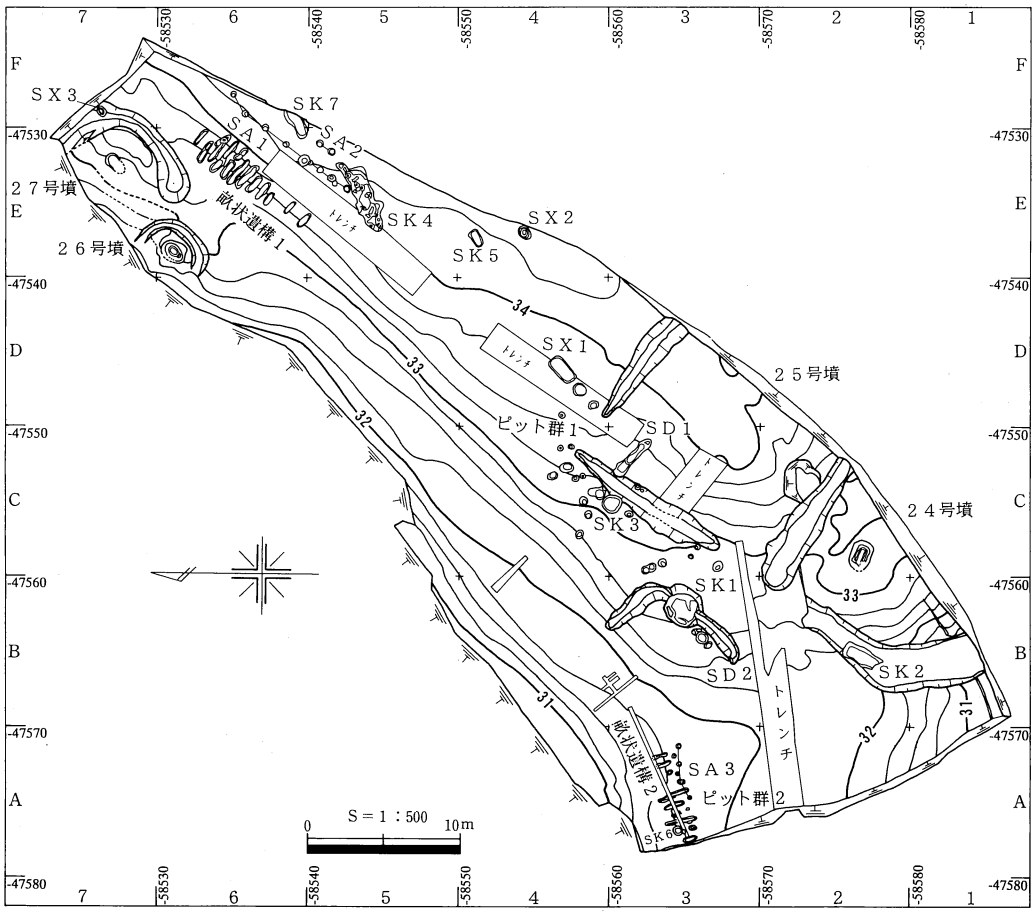


Fig. 3　北尾釜谷遺跡遺構全体平面図

2．発掘調査の成果

(1) 古　　墳

24号墳 (Fig. 4、5、17、PL.34)

北東から南西方向へ緩やかに下る尾根上に位置する。調査区の南西端にあたる。調査前は杉が植林されていた。南側は農道により削平されるが、僅かな高まりがみられ、古墳の存在が想定された。

墳丘の南東側は農道により削平されており、全体の約1/2が残存する。表土直下には褐色の地山を検出し、盛土は残存していない。墳丘の南西側から西側にかけては周溝が掘削されている。幅は周溝底部において１～2.3m、残存する深さは最大27cmである。北東側に隣接する25号墳の周溝付近まで掘削されている可能性はある。

墳頂部よりやや北東側の地点で墓壙１基を検出した。埋土中に安山岩の板石状石材を含むことから本来的には箱式石棺を有していたものと考えられるが、石材は全て抜き取られており、埋土もほとんどが撹乱を受けた状態であった。墓壙の規模は、長軸4.0m、短軸2.7mである。本来は内法が長さ2.2m、幅0.8～0.9m程度の石棺を内包していたものと推察される。本来は粘土の目張りが施されていたと考えられる。

周溝埋土中より須恵器片１が出土し、陶邑編年のＴＫ10型式併行（６世紀中葉）前後の所産と考えられる。

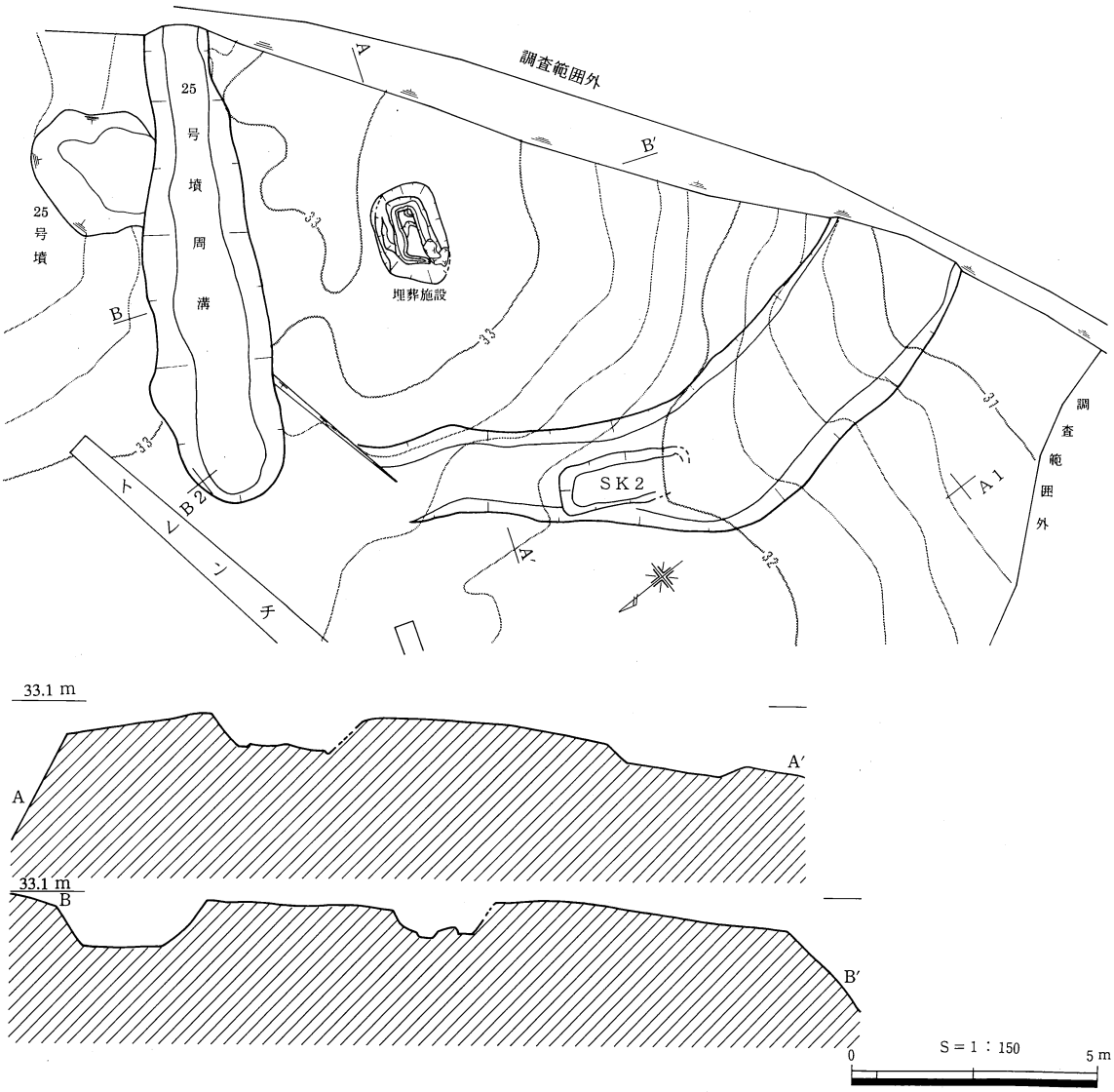


Fig. 4　24号墳遺構図

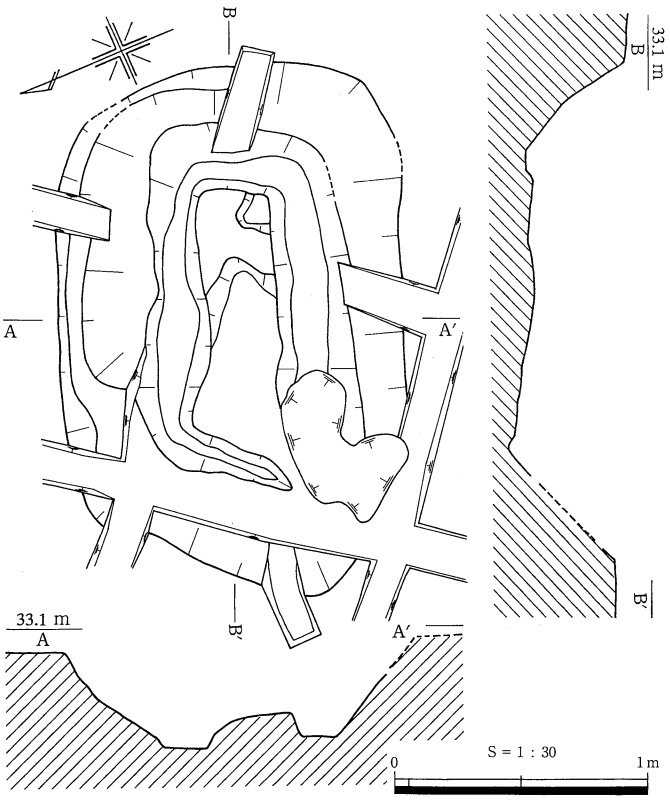


Fig. 5　24号墳埋葬施設墓壙平面図

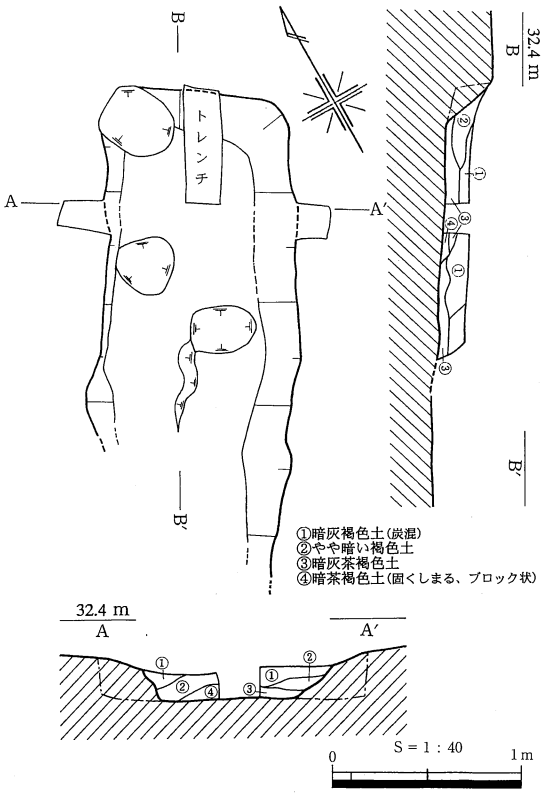


Fig. 6　SK２遺構図

番号	Fig、PL	遺構名	出土位置	器種	法量(cm)	特　　徴	胎土	色調	備考
1	Fig. 7	24号墳	周溝埋土中	須恵器、坏身	※12.4	外面：立ち上がり部ヨコナデ。底部約1/2回転ヘラケズリ。 内面：ヨコナデ。	良。砂粒混。	灰白色 ５Y7/1	口縁1/8残存

Tab. 1　24号墳出土遺物観察表

ＳＫ２（Fig. 6）

24号墳の北西側周溝底部より土壙１基を検出した。規模は、長さ2.4m以上、幅約1.0mの平面方形を呈する。床面での標高は、約32.00mである。埋土は黒褐色系を主とする。埋葬施設であるとすれば土壙墓とみられる。

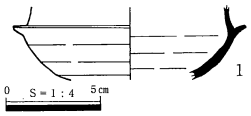


Fig. 7　24号墳出土遺物実測図

25号墳（Fig. 8、9、10、PL.35、36―１・２、41）

24号墳の北東側に位置し、北西から南東方向へ下る尾根上に位置する。調査前には杉が植林されていた。マウンド状の高まりは見られず、古墳として認識できなかった。

墳丘南東側の一部は、農道により破壊されている。四隅を除いた各辺に直線状に溝が掘られており、方墳と判断した。墳丘規模は、北東―南西方向が約14.0m、北西―南東方向は破壊されていて明らかではないが10m以上である。墳頂部における標高は、約34mである。周溝の幅は、上端において0.5～2.5m、底面において0.5～1.5m、埋土はいずれも黒褐色系を呈する。

盛土は全く残存しない。地山を整形した痕跡は窺えないことから、元来地形のやや高い部分を選地し、周囲に周溝を掘削して形成したと考えられる。埋葬施設は確認できない。南北の周溝下層より長軸40～60cm、短軸30～40cm程度の安山岩が５個体出土した。形態から自然石と思われるが、埋葬施設の一部に使用されていた可能性がある。

南西側周溝下層より、土師器の壷２、器台７・８、高坏５・６、直口壷４が出土した。大型の器台７は、周溝底より８cm程度浮いており、南西側へやや傾いた状態で出土した。器台の上部は欠損する。壷２は口縁部を下に

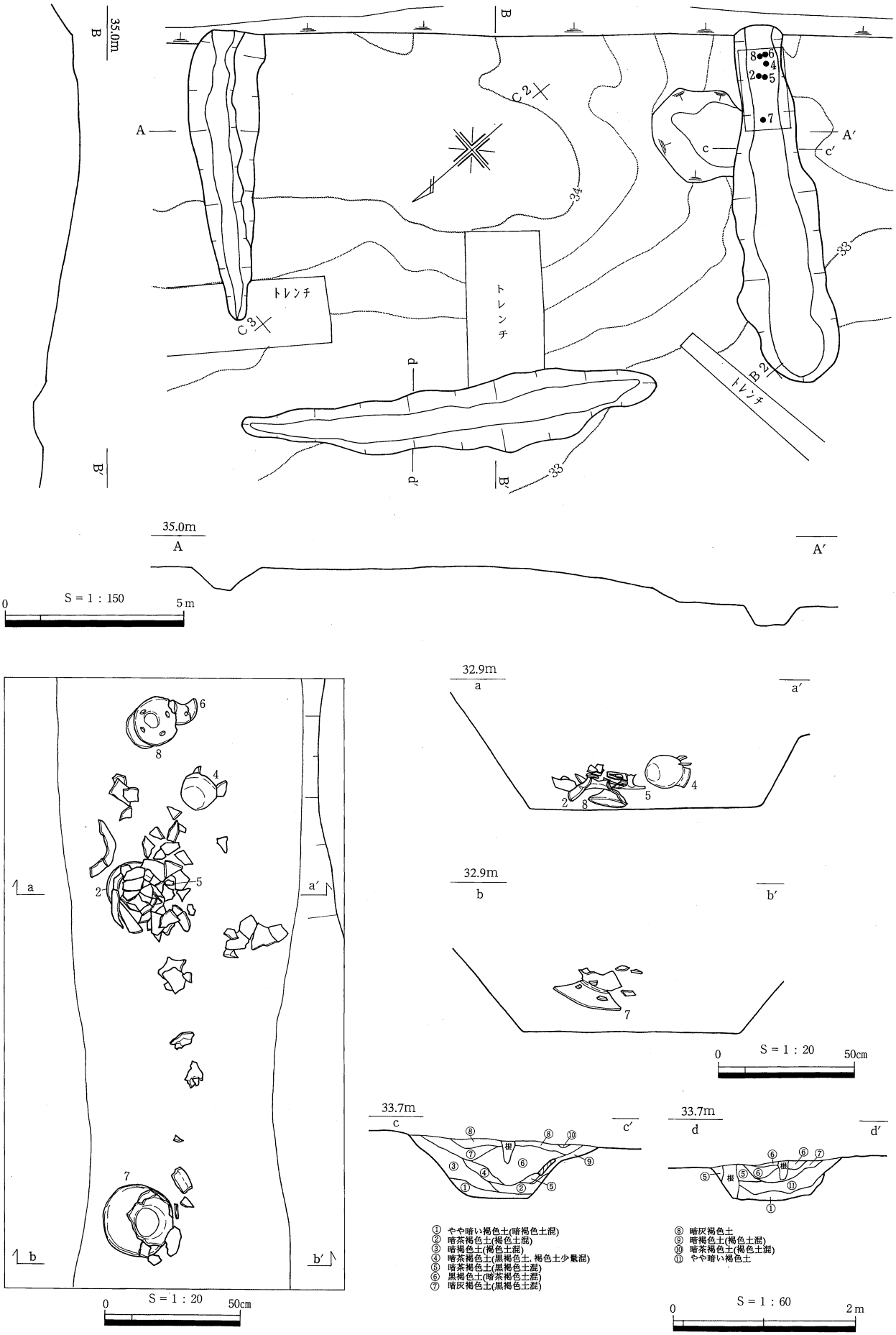


Fig. 9　25号墳遺物出土状況・土層断面図

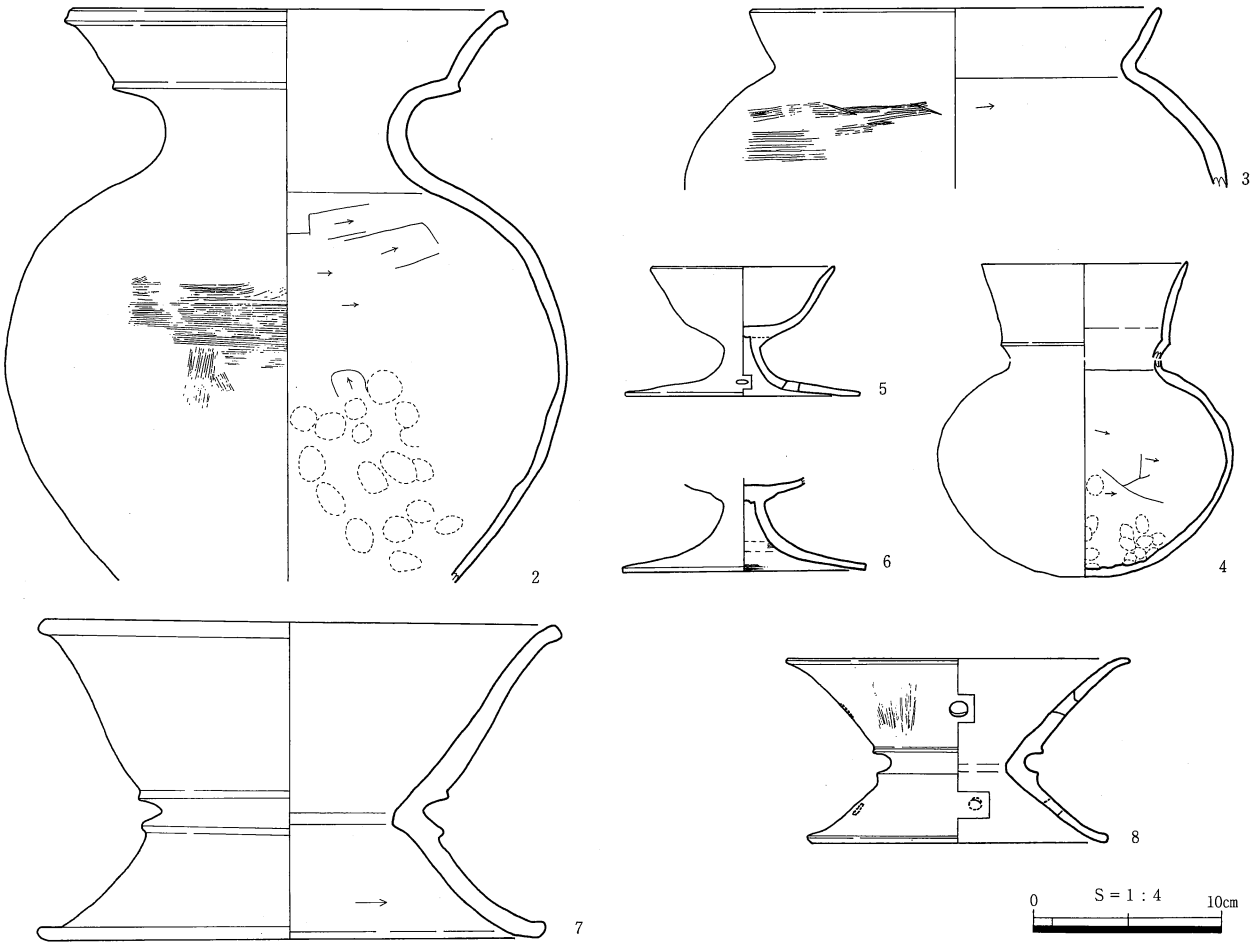


Fig.10　25号墳周溝内出土遺物実測図

番号	Fig、PL	遺構名	出土位置	器種	法量(cm)	特　　徴	胎土	色調	備考
2	Fig.10 PL.41	25号墳	周溝埋土下層	土師器、壷	口径23.4 高さ△30.4	外面：口縁部から頸部はヨコナデ。胴部中位以下はハケメ。内面：胴部上位は右方向ケズリ。中位以下は指頭圧痕。	砂粒やや多く混。	浅黄橙色 7.5YR8/4	口縁2/3残存
3	Fig.10 PL.41	25号墳	周溝埋土上層	土師器、甕	口径※21.8	外面：口縁部ヨコナデ。肩部以下ヨコハケメ。肩部に刺突文。	良。砂粒混。	浅黄橙色 10YR8/3	口縁1/4残存
4	Fig.10 PL.41	25号墳	周溝埋土下層	土師器、直口壷	口径11 高さ16.5	外面：口縁部ヨコナデ。頸部以下不明。内面：胴部中位右方向ケズリ。下位指頭圧痕。	良。砂粒混。	浅黄橙色 7.5YR8/4	ほぼ完存
5	Fig.10 PL.41	25号墳	周溝埋土下層	土師器、高坏	口径9.4 高さ6.9	摩滅により調整不明	良。砂粒混。	浅黄橙色 5YR8/4	ほぼ完存
6	Fig.10 PL.41	25号墳	周溝埋土下層	土師器、高坏	口径9.4 高さ6.9	摩滅により調整不明	良。砂粒混。	橙色 2.5YR6/6	杯部欠損
7	Fig.10 PL.41	25号墳	周溝埋土下層	土師器、器台	口径27.6 高さ17.1	外面：調整不明。内面：受部調整不明、脚部右方向ケズリ。	良。砂粒混。	浅橙色 7.5YR8/4	受部のみ3/4欠損。
8	Fig.10 PL.41	25号墳	周溝埋土下層	土師器、器台	口径18.2 高さ9.8	外面：調整不明。内面：受部調整不明、脚部右方向ケズリ。受部,脚部四方に透し穴。	良。砂粒混。	淡橙色 5YR8/4	ほぼ完存

Tab.2　25号墳出土遺物観察表

向け胴部がつぶれた状態で、破片が散乱していた。口縁部は、やや南西方向へ傾く。全体の約2/3が復元できた。ほぼ完形で出土した直口壷４は、口縁を南側へ向けて倒れた状態で出土した。最も南東側に位置する器台８もほぼ完形で、やや南東側に傾いた状態である。この器台に接して出土した高坏６は杯部が欠損する。

これらの土器は、いずれも床面から７～９cm程度浮いて出土した。配列が乱雑で欠損した個体も多い。以上の所見から、当初は墳丘上に置かれていたものが、築造からしばらくの後に周溝内へ転落した蓋然性が高い。

周溝内出土の遺物からみて、天神川Ⅲ期（古墳時代前期中葉）の所産と考えられる。

26号墳（Fig.11～14、Tab.3、PL.36―3、37、42）

調査区の北西隅で、27号墳の南隣に位置する。周辺は西向きの斜面である。古墳の西側約3分の1程度は流失し、残存していない。

斜面上方に周溝を掘削している。規模は、検出面上で幅約50～95cm、深さは最大で11cmを測る。周溝の南側は遺存状態状況が悪い。周溝から、直径約3.7mの円墳であると考えられる。

土層断面から、旧表土は確認できなかった。

埋葬施設は、組合式の箱式石棺で、西側2枚、東側1枚の側板で小口を挟み込む。蓋石に接する面は平坦に加工されている。石材は無斑晶安山岩である。蓋石は、長軸約120cm、短軸約80cmの石材一枚をつかい、塞ぎきれない部分を小板石で補う。粘土による目張りは確認できない。

石棺の内法は、長軸69cm、短軸30cmを測る。主軸はN-49°-Eである。石棺内には土が流入していた。

石枕は小型の石材二枚を断面「V」字状に組み合わせる。北東方向を枕としている。

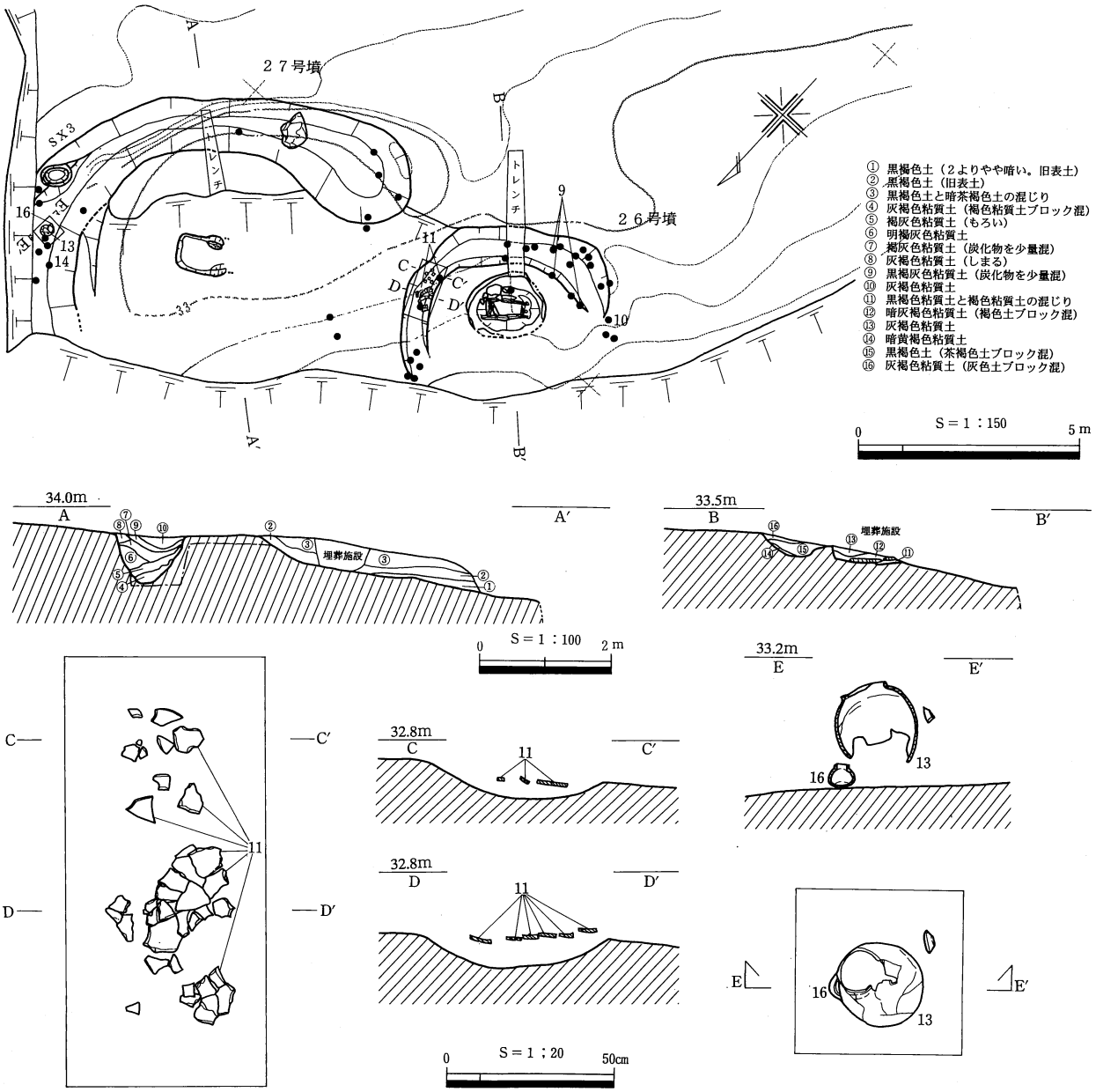


Fig. 11　26・27号墳、SX3遺構図

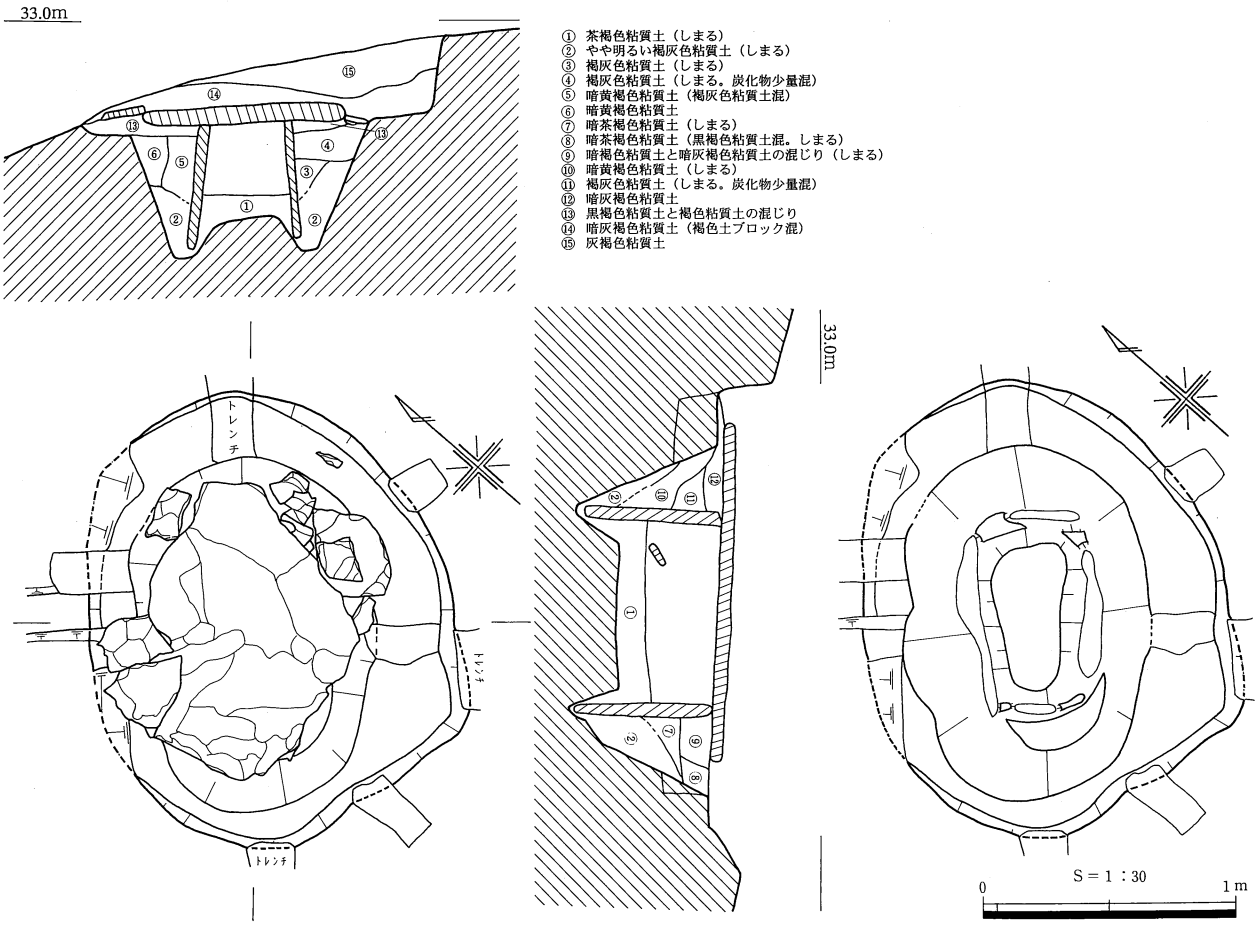


Fig. 12　26号墳埋葬施設遺構図①

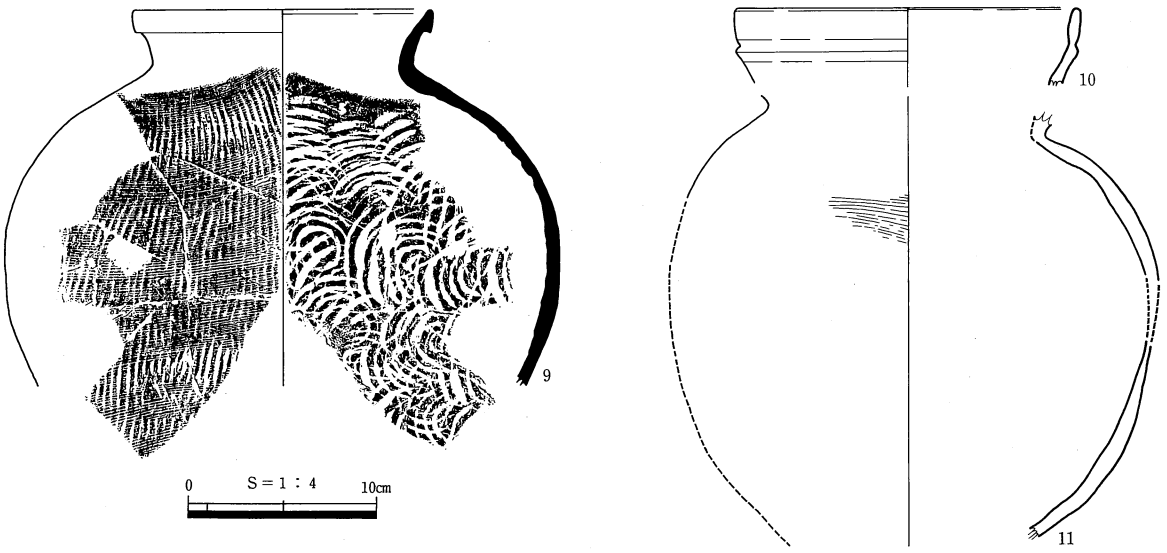


Fig. 13　26号墳出土遺物実測図

遺物番号	Fig. PL.	遺構名	出土位置	器　種	法　量	特　　徴	胎　　土	色　　調	備　　考
9	Fig.13 PL.42	26号墳	検出面上 周 溝 内	須恵器 甕	口径　※15.6 器高　△20.2 最大胴径※29.3	口縁部は玉縁状で、体部はやや扁平。外面タタキ、内面青海波状の当て具痕。	1～2㎜の砂粒を含む。	外）灰白色7.5Y7/1 内）灰 白 色7.5Y7/1～白色N5/0	口縁部1/12残存 体部2/3残存
10	Fig.13 PL.42	26号墳	検出面上	土師器 甕口縁部	口径　※18.0 器高　△ 4.2	口縁部内外面ともにヨコナデ。	2～3㎜程度の石英・砂粒あり。	外）にぶい黄橙色10YR7/2 内）にぶい黄橙色10YR7/3	約1/12残存
11	Fig.13 PL.42	26号墳周溝	底 面 上	土師器 甕体部	器高　△22.0	外面体部横方向のハケ目。内面剝落により調整不明瞭。外面体部上半に黒斑。下半に煤付着。	1～4㎜の石英を多く含む。	外）橙色7.5YR6/6～赤褐色2.5YR4/6 内）橙色7.5YR6/6	胴部ほぼ完存 底部欠損

Tab. 3　26号墳出土遺物観察表

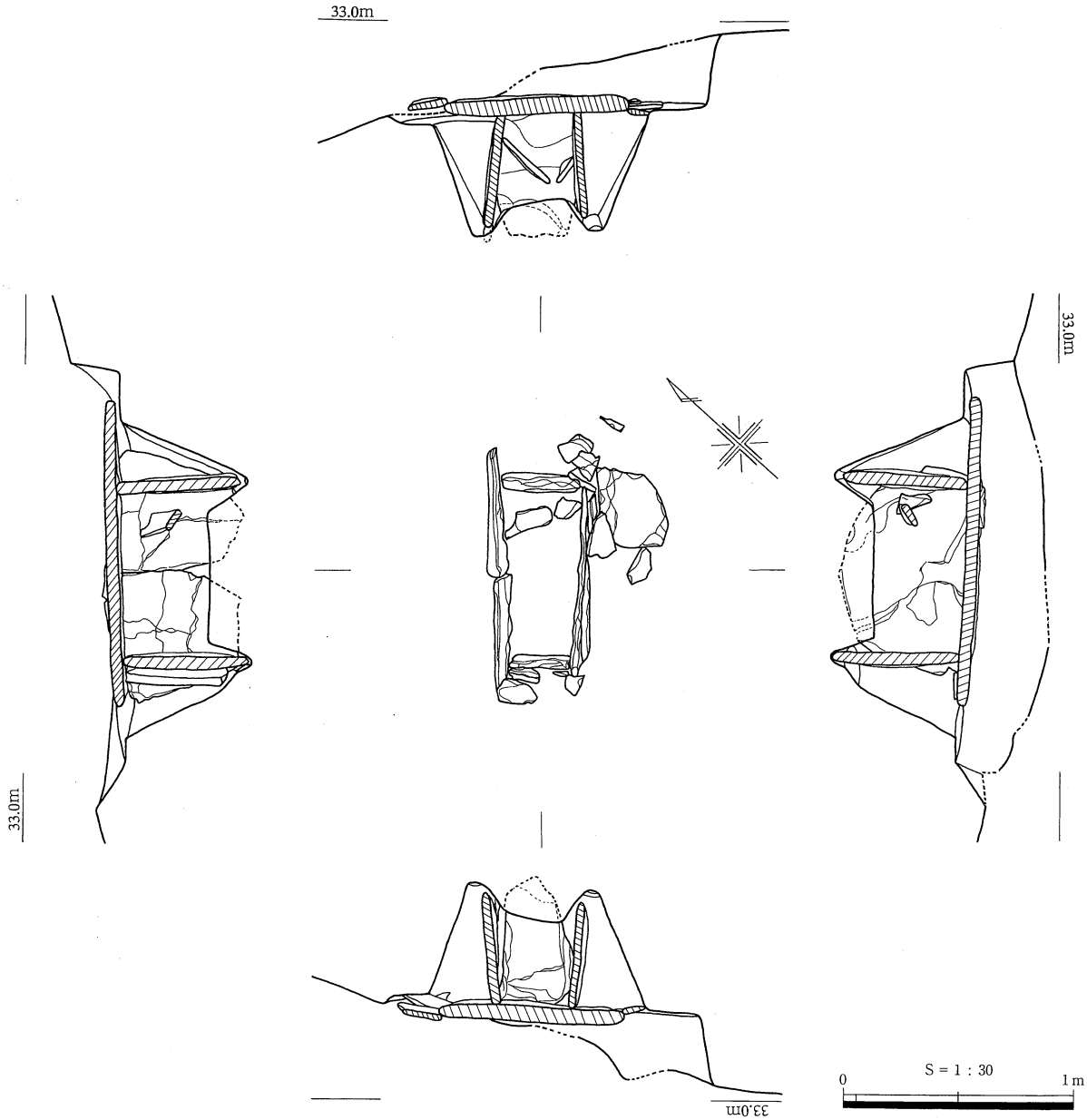


Fig. 14　26号墳埋葬施設遺構図②

石棺内から遺物は出土しなかったが、北側の周溝底面から８cm程浮いた状態で、11が出土した。また墳丘の検出面付近から須恵器甕９、土師器甕10・11が出土した。９は須恵器の甕で、口縁部が玉縁状になり、焼成はやや軟質である。10は土師器の甕で、10は二重口縁が退化しつつある。

築造時期は、これらの遺物から天神川IX期（古墳時代後期前葉）と考えられる。

27号墳（Fig.11・15・17・18、Tab.４、PL.38―１・２、42―３、43―１・２）

調査区の北西隅で、26号墳の北隣に位置する。周辺は西向きの斜面である。周溝と埋葬施設、周溝内埋葬１基を検出した。

古墳の西側約３分の１程は流失し、残存していない。周溝から、直径約6.2mの円墳であると考えられる。

土層断面から、黒褐色系の層が西に向かい下っている。これが旧表土と考えられる。③層は墳丘の盛土である。

斜面の上側に周溝を掘削している。周溝は南側で終わっており、完周しない。規模は、検出面上で100～212cm、深さは最大で65cmを測る。

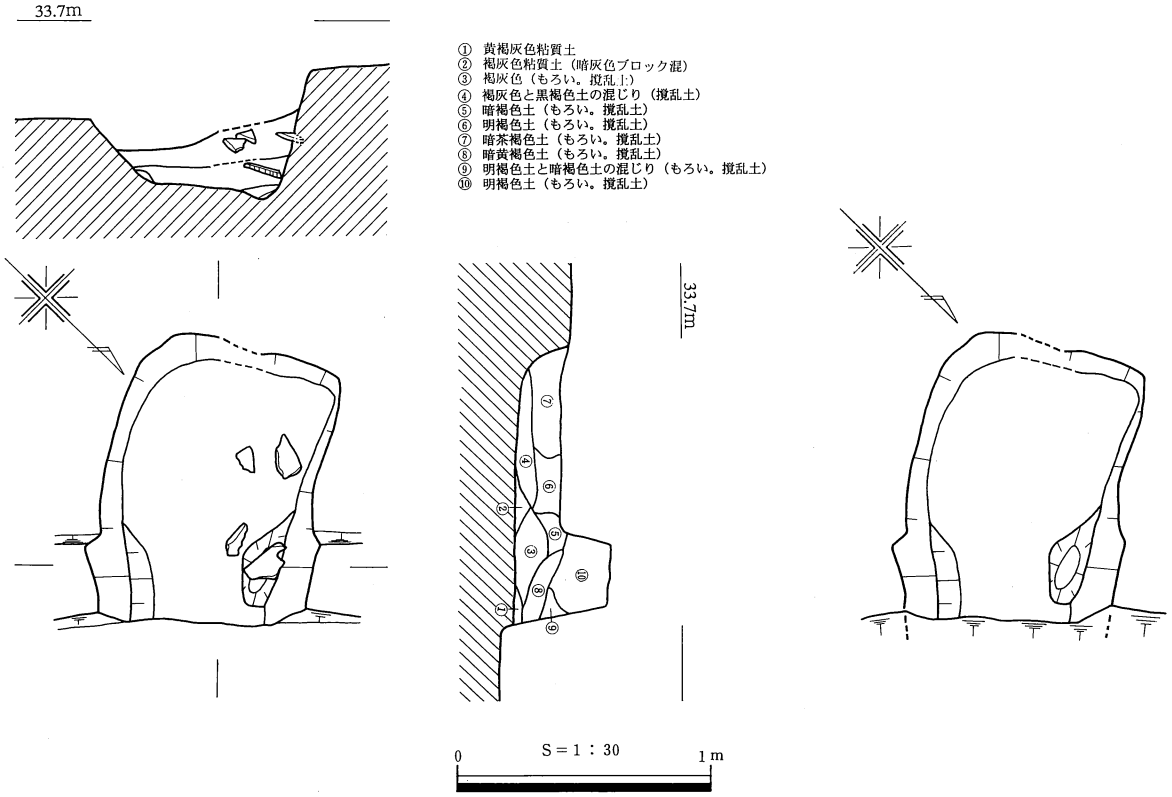


Fig. 15　27号墳埋葬施設遺構図

埋葬施設は、古墳の中央付近にあり、本来は箱式石棺を有していたものと考えられる。主軸はN-44°-Eである。すでに攪乱を受けており、この土壙から安山岩系の石材片が出土した。

埋葬施設内から遺物は出土しなかったが、周溝内から安山岩系の板石が東側の周溝底面から約20cm浮いた状態で出土した。したがって埋葬施設は周溝がある程度堆積した段階で破壊されたのであろう。

北側周溝底面から土師器甕13と土師器小型壺16が出土した。隣接して出土したことから、原位置を保持するものと判断できる。13は底部がなく、打ち欠かれたとみられる。13は周溝底面より７cm浮いており、16を置いた後に土を盛るなどして置いたと考えられる。

その他、周溝の北および南東部の埋土中から土師器片が出土した。図化し得たものは、土師器壺12、甕14・15である。

築造時期は、13から天神川Ⅶ期（古墳時代中期後葉）とみられる。

ＳＸ３（Fig.11･16）

27号墳周溝内の北東隅付近にある。

長さ59cm、幅46cmの安山岩系の板石を蓋とする石蓋土壙墓である。27号墳にともなう周溝内埋葬施設と推定する。

墓壙の平面は楕円形、掘り方は二段掘りである。規模は、長軸49cm、短軸36cm、深さは18cmを測る。主軸はN-26°-Wである。

土層から、周溝壁面を抉るように掘り下げて平坦面をつくり、この部分を掘り下げて墓壙をなしている。土壙内には土が流入していた。

墓壙内から遺物は出土しなかった。時期は不明である。

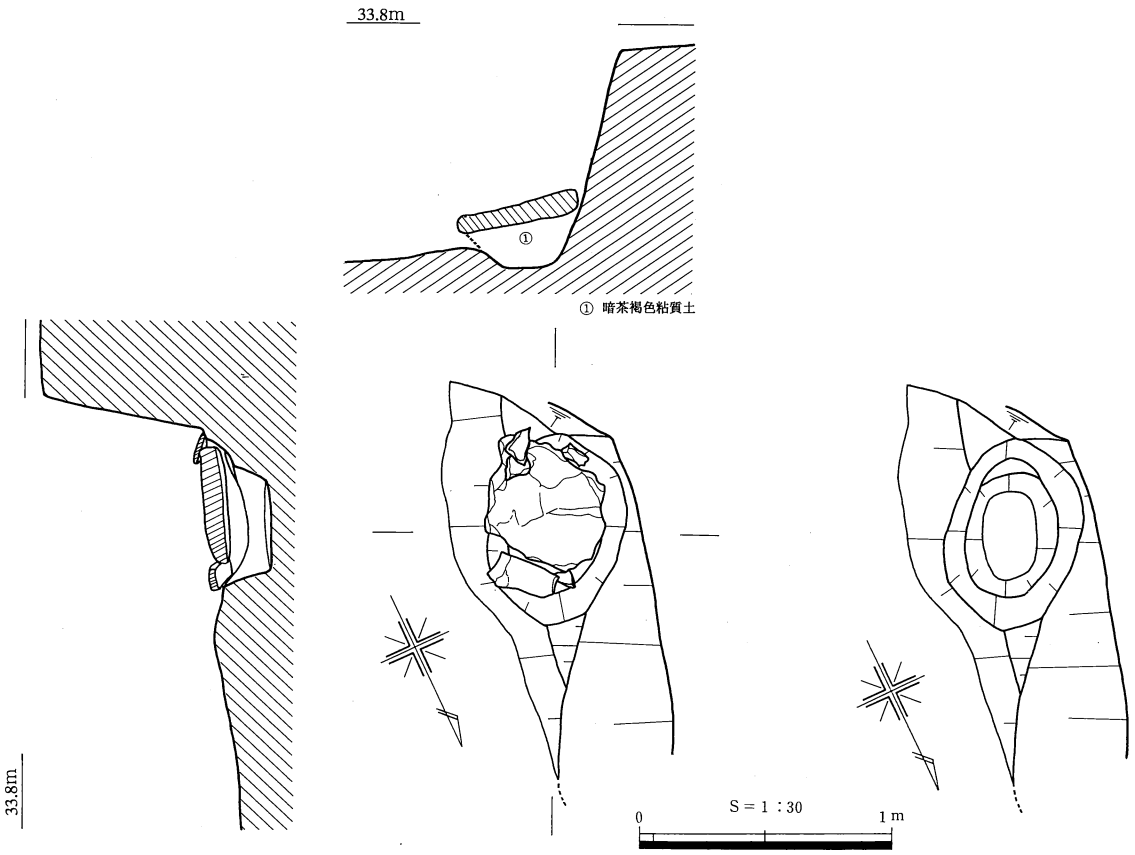


Fig. 16　ＳＸ３遺構図

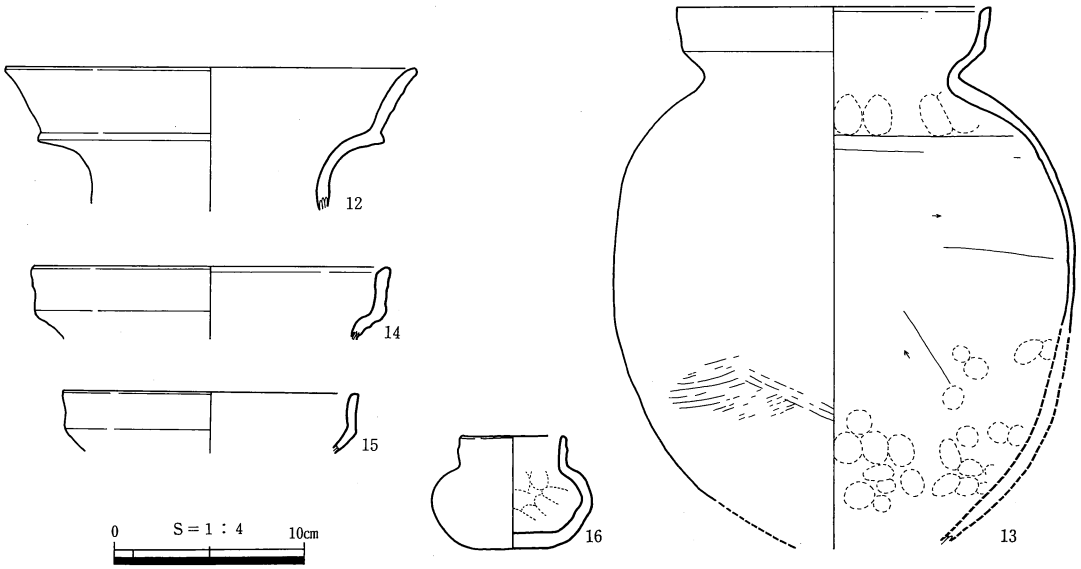


Fig. 17　27号墳出土遺物実測図

遺物番号	Fig. PL.	遺構名	出土位置	器　種	法　量	特　　徴	胎　土	色　調	備　考
12	Fig.17 PL.42	27号墳	検出面上	土師器 壺口縁部	口径 ※21.6 器高 △ 7.4	内外面ともにヨコナデ。	2～3㎜程度の石英・砂粒を含む。	灰白色2.5Y8/2～淡黄色2.5Y8/3	約1/12残存
13	Fig.17 PL.43	27号墳周溝	底面直上	土師器 甕	口径 ※16.6 器高 △28.8 最大胴径※24.4	口縁部は内外面ともにヨコナデ。外面体部下半横または斜め方向のハケ目。内面頸部下指頭圧痕。体部右または左上方向のケズリ。底部付近指頭圧痕。	1～4㎜の石英を多く含む。	浅黄橙色10YR8/3	体部下半に煤付着。底部欠損
14	Fig.17 PL.42	27号墳	埋土中層	土師器 甕口縁部	口径 ※18.6 器高 △ 3.9	内外面ともにヨコナデ。	2～3㎜程度の石英・砂粒を含む。	浅黄橙色10YR8/3	約1/12残存
15	Fig.17 PL.42	27号墳	埋土中一括	土師器 甕口縁部	口径 ※15.6 器高 △ 3.2	内外面ともにヨコナデ。	1㎜程度の砂粒を含む。	浅黄橙色10YR8/3	約1/12残存
16	Fig.17 PL.43	27号墳周溝	底面直上	土師器 小型壺	口径 5.7 器高 4.0 底径 6.0	外面は剝落が著しく調整不明瞭。ナデか。内面体部指頭圧痕あり。	1～3㎜大の砂粒を含む。	外）橙色5YR7/6 内）橙色7.5YR7/6	完存

Tab. 4　27号墳出土遺物観察表

(2)　古墳以外の埋葬施設

ＳＸ１（Fig.20、PL.38－３）

調査区中央付近の25号墳北方向に位置する。試掘トレンチの際に石材が確認されていたため、埋葬施設の存在が推定されていた。

平面は長方形で、検出面で長軸189cm、短軸88cm、深さは最大で22cmを測る。底面は平坦で、長軸182cm、短軸81cmを測る。主軸はＮ-42°-Ｗである。攪乱により墓壙中央付近に安山岩系の石材片が散乱している。

遺物は出土しておらず、時期は不明である。

ＳＸ２（Fig.21、PL.39－３・４）

調査区中央東端付近の25号墳の北方向に位置する。

石蓋土壙墓で、長軸64cm、短軸30cmの石材一枚のほか、隙間を小型の石材で補完している。

平面は楕円形、掘り方は二段掘りである。検出面での規模は、長軸86cm、短軸72cm、深さは最大で22cmを測る。

土層は、墓壙内に木の根による攪乱を受けていた。

墓壙の内法は、長軸70cm、短軸41cm、一段目からの深さは最大22cmを測る。主軸はＮ-83°-Ｅである。

石枕は小型の板石を「Ｖ」の字状に組み合わせる。東方向を枕としている。

遺物は出土しておらず、時期は不明である。

(3)　土　　坑

ＳＫ１（Fig.22、Tab.５、PL.42－３）

検出面および底面は不整な円形である。検出面での規模は、長軸255cm、短軸246cm、深さは最大で80cmを測る。断面は不整な「Ｕ」字状を呈する。

土層は、自然堆積と考えられる。地山である茶黄褐色土も多く混入している。

埋土から土師器片・須恵器片が出土した。図化できた遺物は、土師器甕の口縁部17である。

時期は、天神川Ⅶ期（古墳時代後期後葉）と考えられる。

ＳＫ３（Fig.23）

検出面および底面は不整な方形である。検出面での規模は、長軸125cm、短軸113cm、深さは最大で21cmを測る。底面は平坦で、規模は長軸94cm、短軸87cmである。

Fig. 18　27号墳埋葬施設（南から）

Fig. 19　ＳＫ６遺物出土状況（南から）

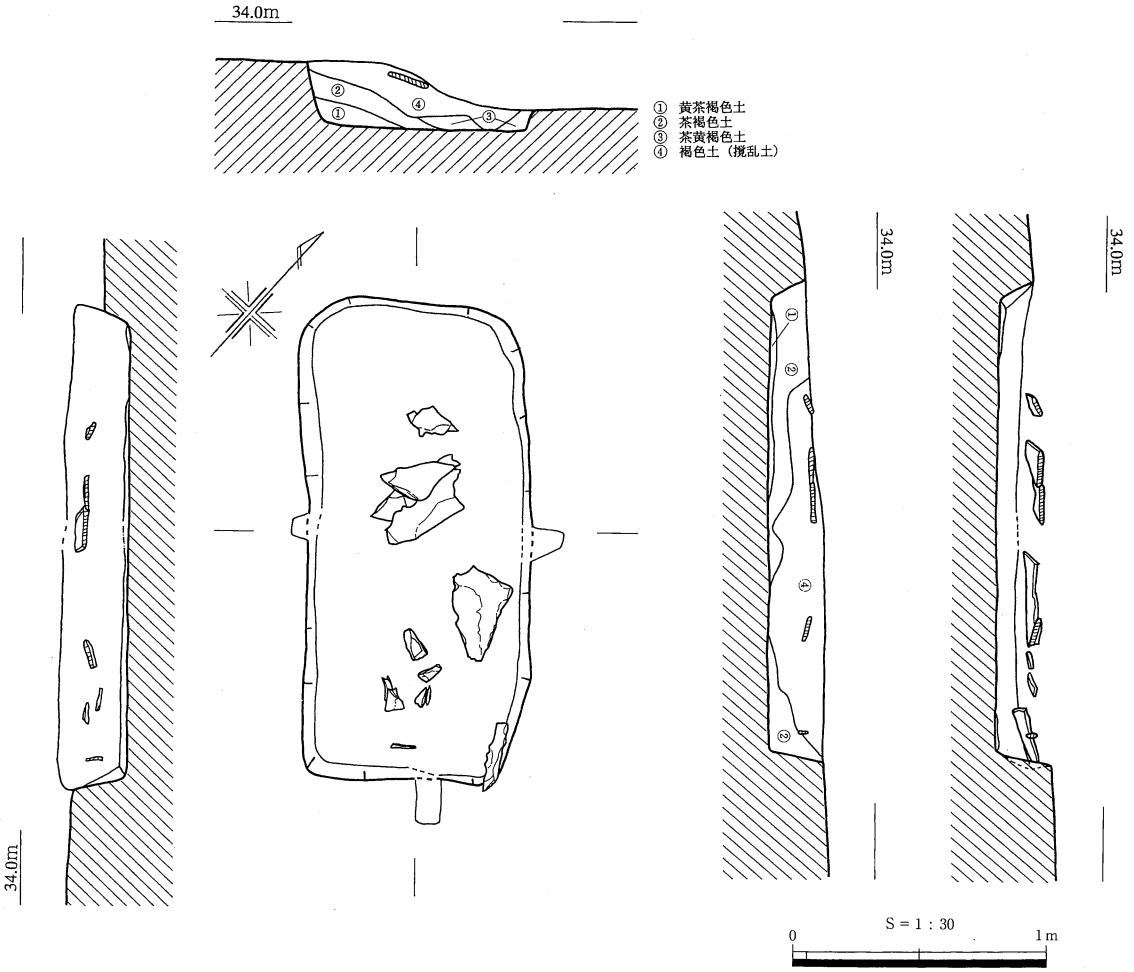


Fig. 20　ＳＸ１遺構図

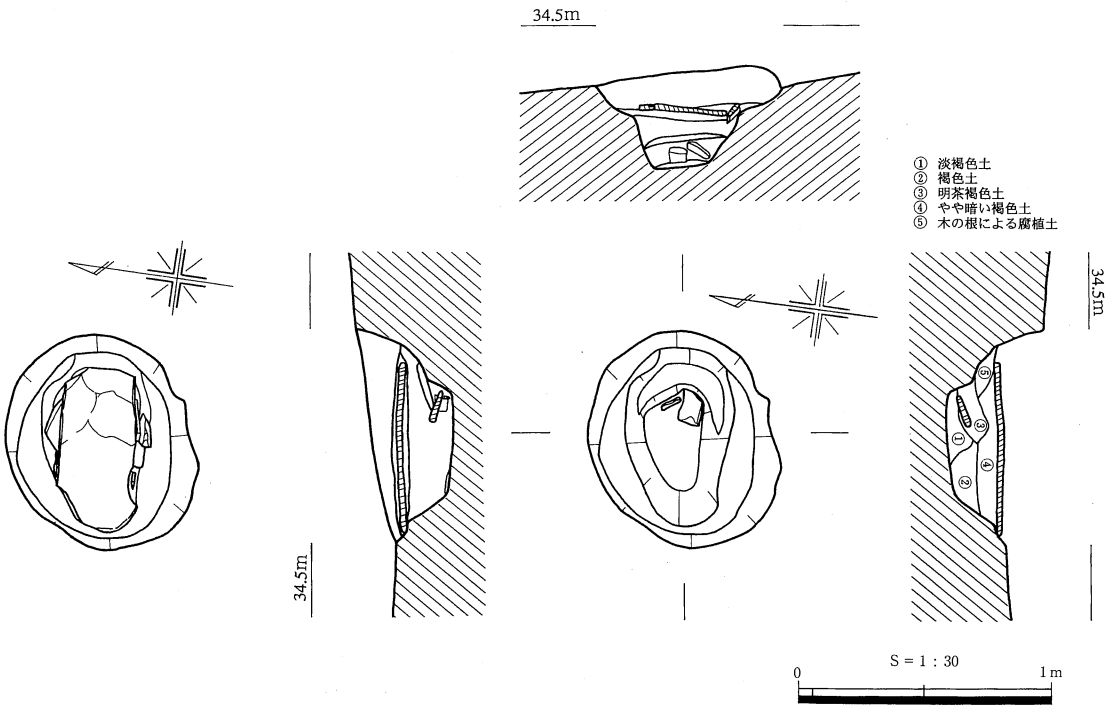


Fig. 21　ＳＸ２遺構図

土層には、地山ブロックである褐色土を多く含んでいる。

遺物は出土せず、時期は不明である。

ＳＫ４（Fig.25･26、Tab.６、PL.39－１、42－３）

検出面および底面は不整な楕円形を呈す。検出面での規模は、長軸522cm、短軸115～145cm、深さは最大で65cmを測る。断面は逆台形である。底面には６個のピット状の掘り込みがある。底に石が入れられたものがあり、柱の根石として使用されたと考えられる。ただし対応する遺構は確認できなかった。

土層断面には⑮・⑲のように柱が抜き取られた堆積を示すものがみられる。

埋土上層から土師器片が出土した。図化できたのは18である。

時期は天神川Ⅶ期（古墳時代中期後葉）で、遺構の時期も概ねこれに該当すると考えられる。

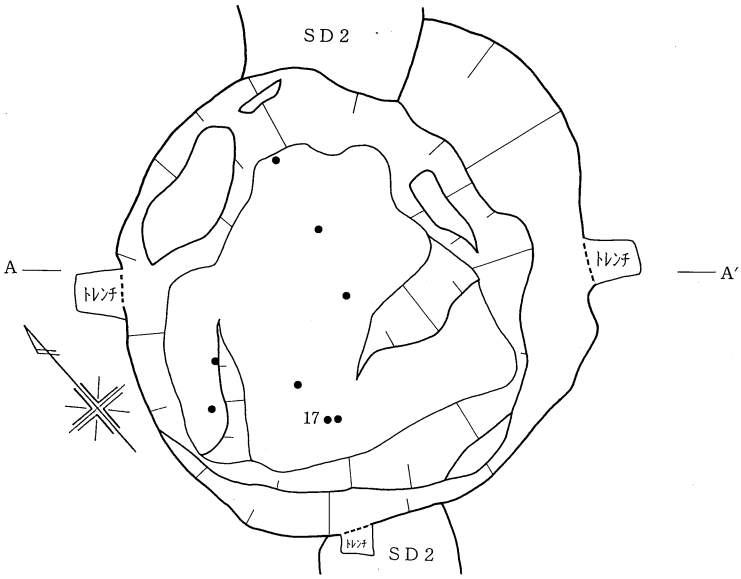


Fig. 22　ＳＫ１遺構図

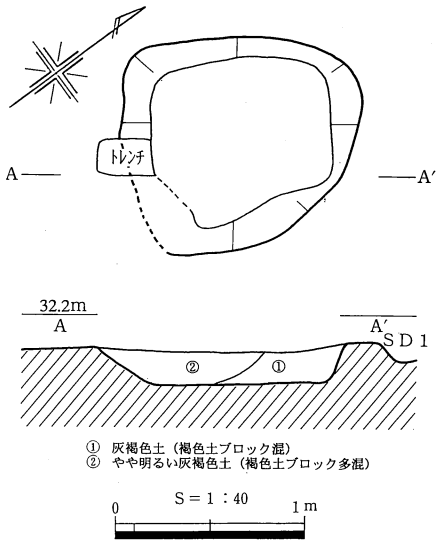


Fig. 23　ＳＫ３遺構図

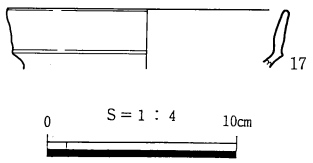


Fig. 24　ＳＫ１出土遺物実測図

遺物番号	Fig. PL.	遺構名	出土位置	器　種	法　量	特　　徴	胎　土	色　調	備　考
17	Fig.24 PL.42	ＳＫ１	埋土中層	土師器 甕口縁部	口径　※15.0 器高　△ 2.8	内外面ともにヨコナデ。	１㎜以下の砂粒を含む。	外）橙色5YR6/8 内）橙色7.5YR6/8	1/12以下残存

Tab. 5　ＳＫ１出土遺物観察表

遺物番号	Fig. PL.	遺構名	出土位置	器　種	法　量	特　　徴	胎　土	色　調	備　考
18	Fig.26 PL.42	ＳＫ４	埋土上層	土師器 甕口縁部	口径　※14.0 器高　△ 3.3	内外面ともにヨコナデ。	１～２㎜大の石英・砂粒を含む。	浅黄橙色10YR8/3～8/4	1/12以下残存

Tab. 6　ＳＫ４出土遺物観察表

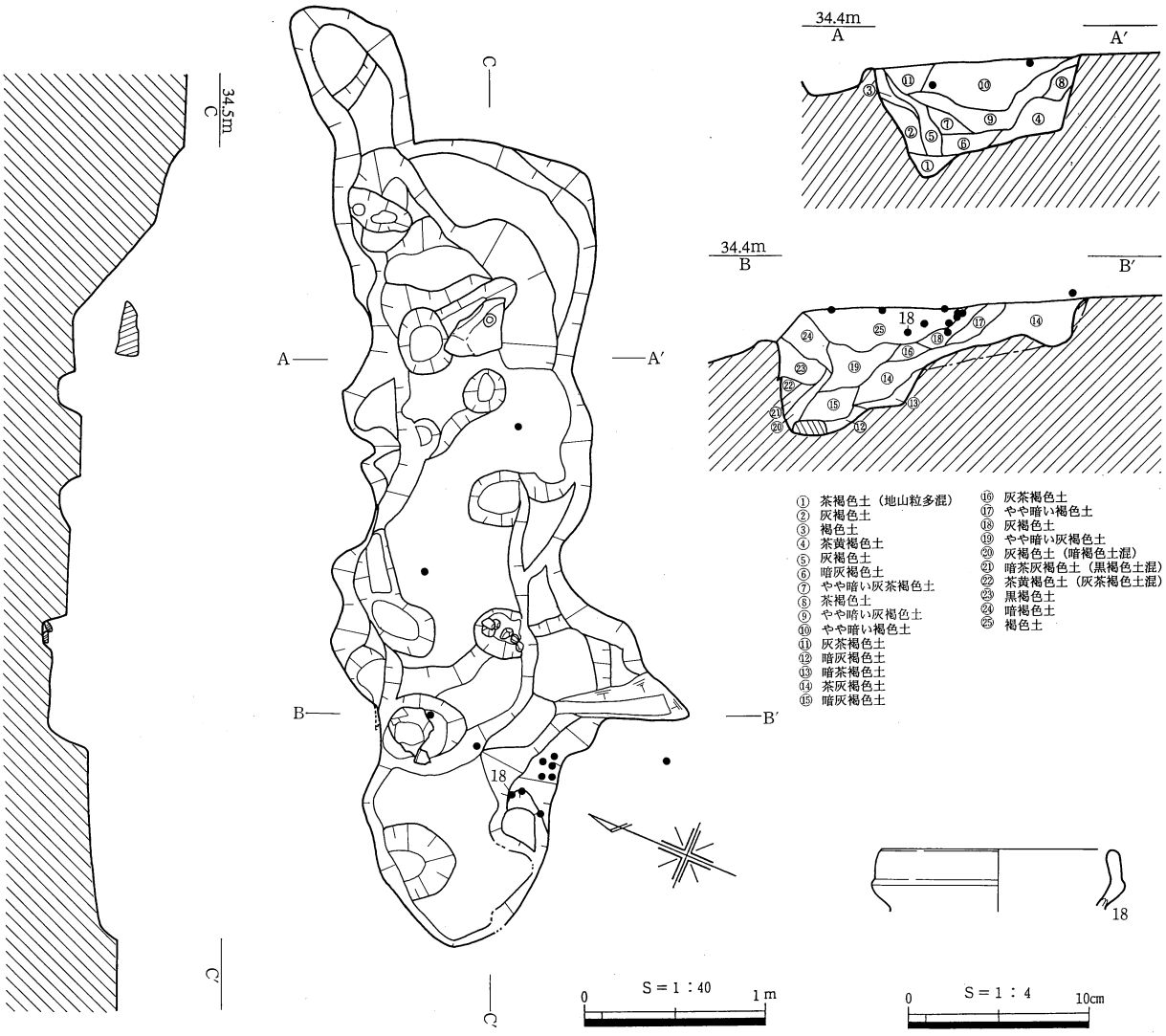


Fig. 25　ＳＫ４遺構図

Fig. 26　ＳＫ４出土遺物実測図

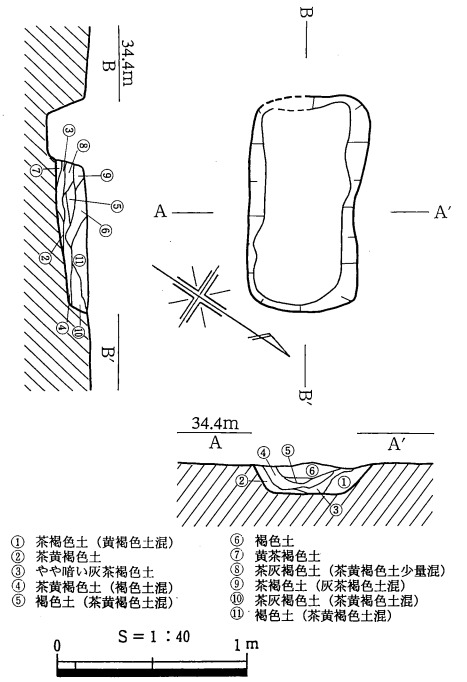


Fig. 27　ＳＫ５遺構図

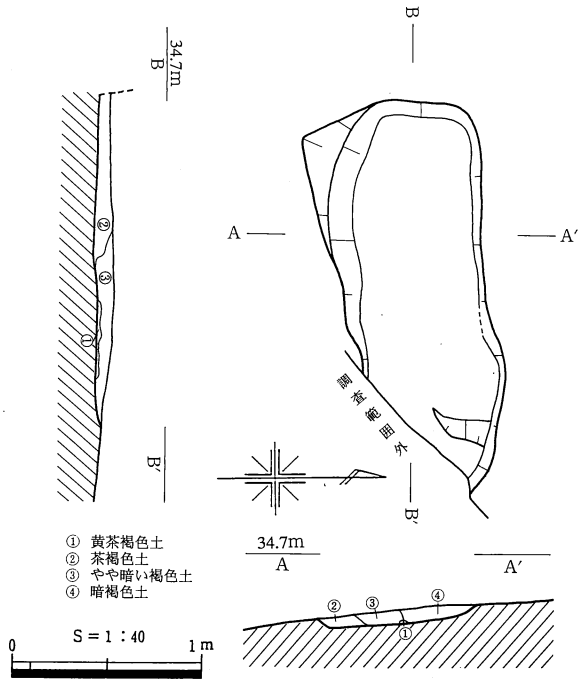


Fig. 28　ＳＫ７遺構図

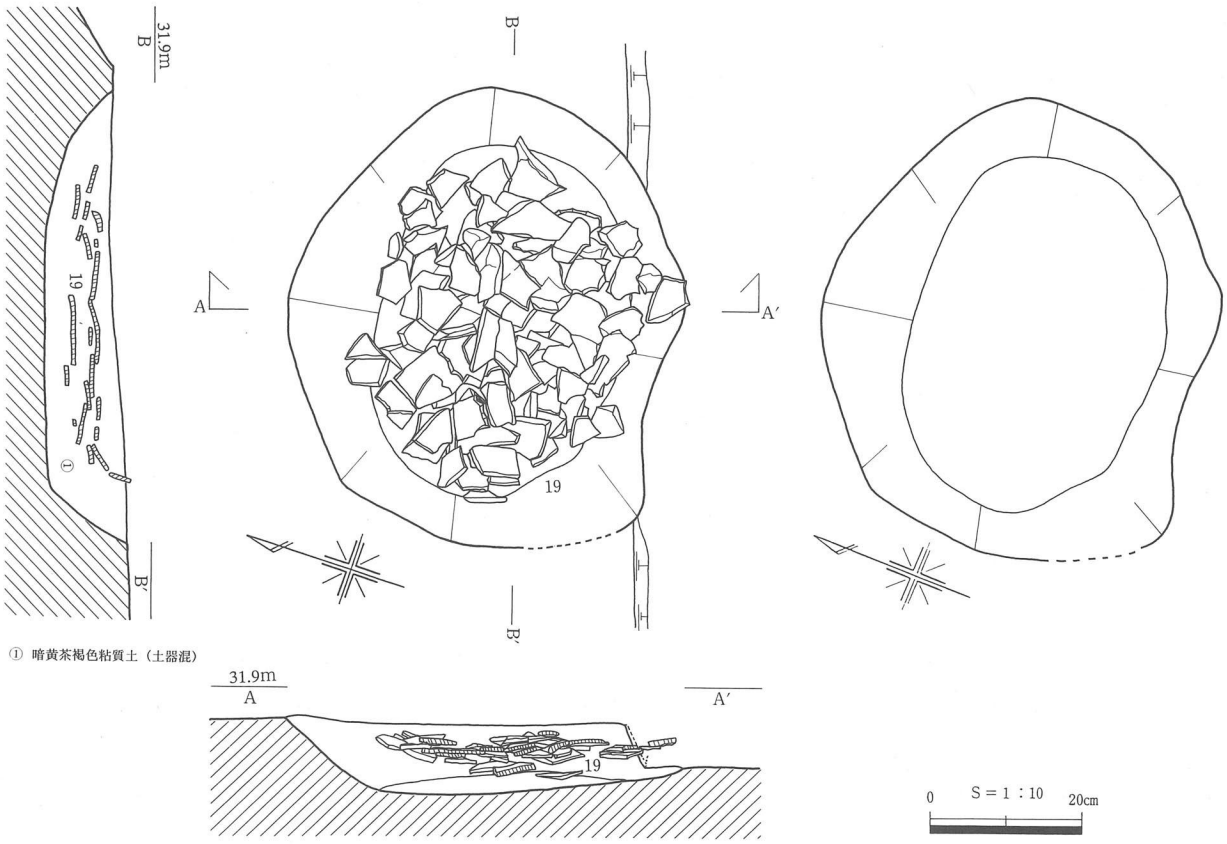


Fig. 29　ＳＫ６遺構図

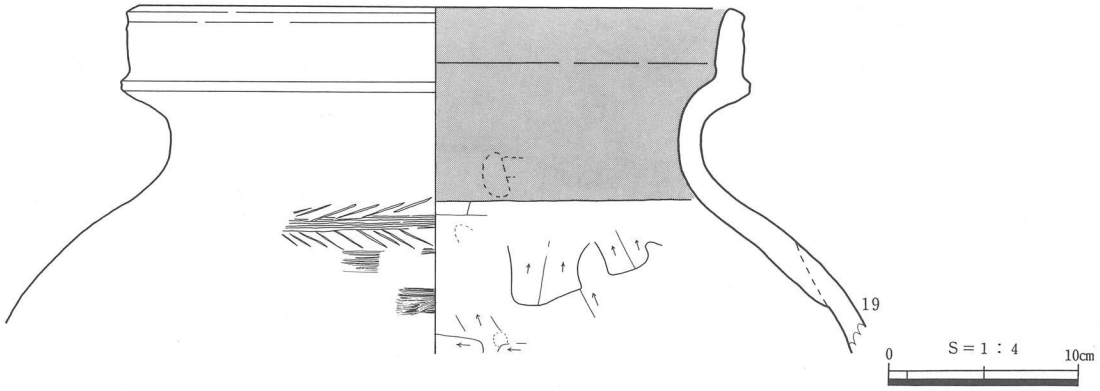


Fig. 30　ＳＫ６出土遺物実測図

スクリーントーン：黒色付着物質

遺物番号	Fig. PL.	遺構名	出土位置	器　種	法　量	特　　徴	胎　土	色　調	備　考
19	Fig.30 PL.43	ＳＫ６	埋 土 中	土師器 壺口縁部	口径　※32.8 器高　△18.4	口縁部は内外面ともにヨコナデ。胴部横方向のハケ目。外面肩部に７条の平行沈線および羽状文あり。内面頸部以下上または左方向のケズリ。部分的に指頭圧痕あり。内面頸部～口縁部に黒色物質付着。	１～２㎜大の砂粒を多く含む。５㎜大の砂礫あり。	外）にぶい黄橙色 10YR7/2～7/4～浅黄橙色10YR8/3～8/4 内）にぶい黄橙色 10YR7/4～浅黄橙色 10YR8/3～8/4	1/4残存

Tab. 7　ＳＫ６出土遺物観察表

ＳＫ５（Fig.27）

検出面および底面は不整な長方形を呈す。検出面での規模は、長軸114cm、短軸62cm、深さは最大で16cmを測る。底面は平坦で、長軸103cm、短軸45cmである。

土層は自然堆積の様相がうかがえる。

遺物は出土しておらず、時期は不明である。

ＳＫ６（Fig.19•29•30、Tab.７、PL.43—３・４）

検出面および底面は不整な楕円形を呈す。検出面での規模は、長軸61cm、短軸52cm、底面からの深さは最大で10cmを測る。断面は舟底状で、規模は長軸47cm、短軸34cmである。

土層は単層でしまりがない。

遺構内に土器小片が乱雑に混入していた。乱雑な出土状況から、土器を破砕した後に土坑内に充塡したと考えられる。19の内面口縁部から頸部にかけて黒色の付着物質を確認した。この物質についての分析を、奈良国立文化財研究所の佐藤昌憲氏に依頼した。その結果、酸化鉄の可能性があるという結果が得られた。

時期は、天神川Ｖ～Ⅵ期（古墳時代中期前葉～中葉）頃と考えられる。

ＳＫ７（Fig.28）

検出面および底面は不整な長方形を呈す。検出面での規模は、長軸205cm以上、短軸80cm、深さは最大で11cmを測る。底面はほぼ平坦で、規模は長軸188cm以上、短軸63cmである。

遺物は出土しておらず、時期は不明である。

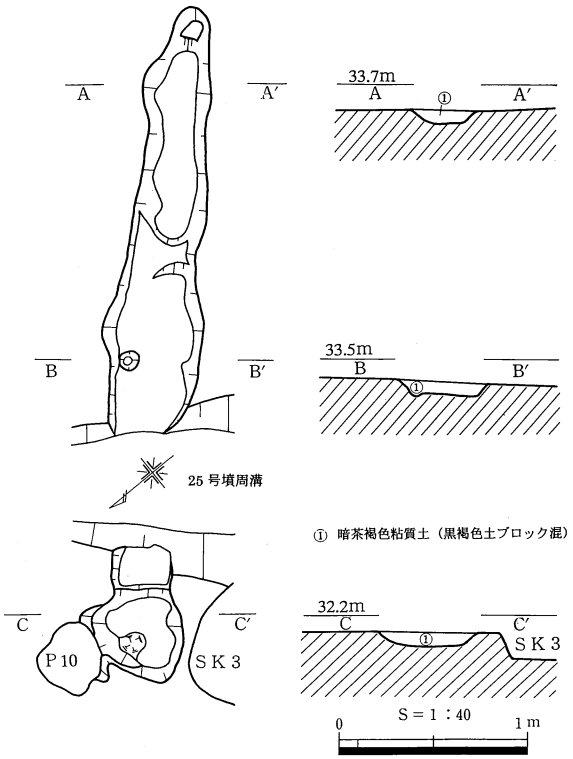


Fig. 31　ＳＤ１遺構図

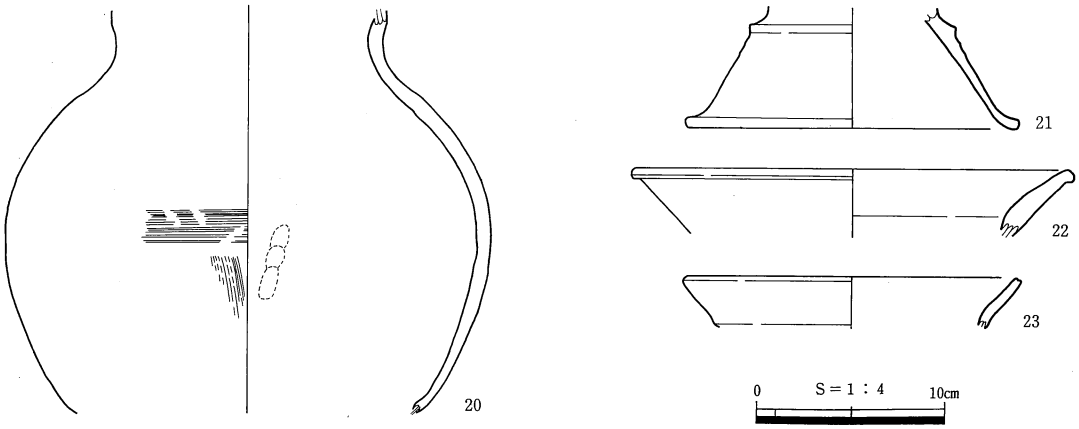


Fig. 32　ＳＤ２出土遺物実測図

遺物番号	Fig. PL.	遺構名	出土位置	器　種	法　量	特　　徴	胎　土	色　調	備　考
20	Fig.32 PL.42	ＳＤ２	埋土上層	土師器 甕体部	器高　△21.4 最大胴径※25.7	外面体部縦または横方向のハケ目。内面指頭圧痕。	３㎜程度の石英を含む。	外）橙色5YR6/6～灰褐色5YR6/2 内）橙色5YR6/6	約1/4残存
21	Fig.32 PL.42	ＳＤ２	埋土上層	土師器 器台台部	口径　※17.8 器高　△ 6.4	外面ヨコナデ。内面剝落が著しく調整不明瞭。	１㎜大の砂粒を含む。	淡黄色2.5Y8/3～2.5Y8/4、一部黄灰色2.5Y4/1	約1/3残存
22	Fig.32 PL.42	ＳＤ２	埋土上層	土師器 器台受部	口径　※23.0 器高　△ 3.5	内外面ともにヨコナデ。	３㎜程度の石英を含む。	外）橙色5YR6/6～灰褐色5YR6/2 内）橙色5YR6/6	約1/6残存
23	Fig.32 PL.42	ＳＤ２	埋土上層	土師器 甕口縁部	口径　※18.0 器高　△ 2.5	内外面ともにヨコナデ。口縁端部中央付近がわずかにくぼむ。	１㎜程度の砂粒を含む。	外）橙色7.5YR7/6 内）にぶい黄橙色10YR6/4	約1/6残存

Tab. 8　ＳＤ２出土遺物観察表

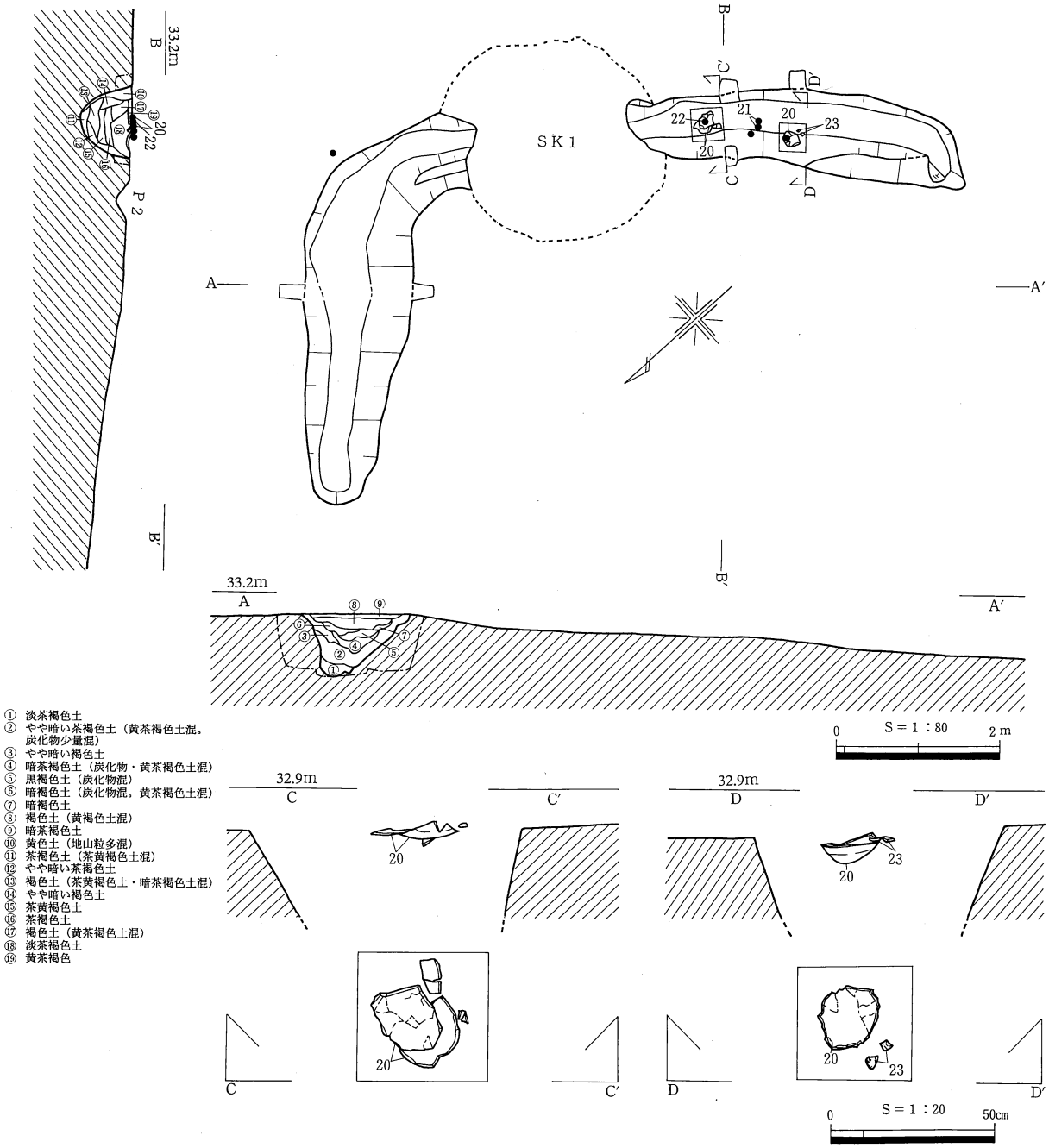


Fig. 33　ＳＤ２遺構図

(4)　溝状遺構

ＳＤ１（Fig.31）

検出面での規模は、検出面上で長さ3.6m、幅53cm、深さは最大で９cmである。

主軸はN-38°-Wを測る。

遺物は出土せず、時期は不明である。

ＳＤ２（Fig.32･33、Tab.８、PL.40―３、42―３）

平面は「Ｌ」字状の溝で、東側に隅をもつ。

北西―南東の溝は、検出面での規模は、長軸約4.2m、短軸1.3m、底からの深さは最大で70cmを測る。

北東―南西の溝は、中央部付近がＳＫ１に切られる。検出面での規模は、長軸約7.7m、短軸1.0m、底面からの

深さは最大68cmを測る。

断面形は「U」字状であるが、外壁は垂直にちかく掘り込まれている。底面のレベルは一定していたものの、端に向かい、検出面の標高が下がるために浅くなっている。形態から周溝墓や古墳の可能性がある。

埋土は黒褐色系を呈し、自然堆積と考えられる。

遺構の埋土上層から土器が出土した。半分に割れたような甕の体部が2箇所で出土した。同一個体と考えられる。また検出面上で、土師器片が出土した。21～23を図化した。

遺物の時期は天神川Ⅳ～Ⅴ期（古墳時代前期後葉～中期前葉）であるが、下層からの出土遺物がないため、底面近くから出土した炭化物により炭素年代測定を行った。その結果、1750±40という値が得られた。

(5) 畝状遺構（Fig.34～36、Tab.9・10・13、PL.40－1・2）

畝状遺構1は、斜面に対して直行する向きに、長さ103～227cm、幅20～65cm、深さ4～12cm程度の溝状遺構が並んでいる。埋土には地山である褐色系ブロックを含んでいた。土師器片が出土したが、図化できなかった。

その他、遺跡の北端から土師器杯底部片が出土した。概ね平安時代後半から鎌倉時代頃のものと考えられる。

畝状遺構2は、斜面に対しては直行する方向に、長さ50～214cm、幅25～44cm、深さ6～12cm程度の溝状遺構が平行している。遺物は出土せず、時期は不明である。

(6) 柵　跡（Fig.36・37、Tab.11・12、PL.39－2）

ＳＡ1は、直径31～48cm、深さ14～20cmの柱穴が並ぶ。主軸はN-38°-Eを測る。Ｐ2－Ｐ9直線状に並ぶが、Ｐ1－Ｐ2は向きが異なる。

ＳＡ2は、直径37～40cm、深さ17・14cmの柱穴が2本並ぶ。主軸はN-38°-Eである。

番号	規　模	遺物	番号	規　模	遺物	番号	規　模	遺物	番号	規　模	遺物
ＳＤ1	(134×20－6)	－	ＳＤ4	(265×50－6)	－	ＳＤ7	(219×46－9)	－	ＳＤ10	(148×38－7)	－
ＳＤ2	(173×39－9)	－	ＳＤ5	(95×33－7)	－	ＳＤ8	(202×47－12)	土師器	ＳＤ11	(103×35－6)	－
ＳＤ3	(227×65－7)	土師器	ＳＤ6	(80×48－6)	－	ＳＤ9	(138×38－6)	－	ＳＤ12	(103×26－4)	－
									ＳＤ13	(119×45－7)	－

Tab. 9　畝状遺構1規模一覧表

番号	規　模	遺物	番号	規　模	遺物	番号	規　模	遺物	番号	規　模	遺物
ＳＤ1	(91↑×30－12)	－	ＳＤ3	(214×28－6)	－	ＳＤ5	(65×33－9)	－	ＳＤ7	(50×25－10)	－
ＳＤ2	(90　×29－6)	－	ＳＤ4	(143×32－7)	－	ＳＤ6	(232×44－9)	－	ＳＤ8	(92×29－12)	－

Tab. 10　畝状遺構2規模一覧表

番号	規　模	ピット間	番号	規　模	ピット間	番号	規　模	ピット間	番号	規　模	ピット間
Ｐ1	(37×35－14)	－	Ｐ4	(40×37－20)	P3－180	Ｐ7	(48×38－18)	P6－ 93	P10	(40×37－17)	－
Ｐ2	(42×36－19)	P1－150	Ｐ5	(35×34－14)	P4－203	Ｐ8	(31×26－19)	P7－ 45	P11	(38×37－14)	P10－98
Ｐ3	(42×38－15)	P2－165	Ｐ6	(43×42－14)	Ｐ5－ 80	Ｐ9	(47×42－17)	P8－98			

Tab. 11　ＳＡ1・2規模一覧表

番号	規　模	ピット間	番号	規　模	土層	番号	規　模	土層
Ｐ1	(30　×23－8)	－	Ｐ4	(27×21↑－9)	②	Ｐ7	(26×20－4)	②
Ｐ2	(29　×26－8)	P1－127	Ｐ5	(28×18　－6)	②	Ｐ8	(25×23－16)	②
Ｐ3	(30↑×29－16)	P2－120	Ｐ6	(39×27　－7)	②	Ｐ9	(28×19－3)	②

Tab. 12　ＳＡ3・ピット群2規模一覧表

遺物番号	Fig. PL.	遺構名	出土位置	器　種	法　量	特　　徴	胎　土	色　調	備　考
24	Fig.35 —	遺構外	F　6 グリッド	土師器 坏	器高　△2.0 底径　※3.0	内外面ともに回転ナデ。外面底部に回転糸切り痕。	1～2㎜大の砂粒を含む。	外）にぶい橙色 7.5YR6/4 内）にぶい黄橙色 10YR6/4	約1/4残存

Tab. 13　畝状遺構1周辺出土遺物観察表

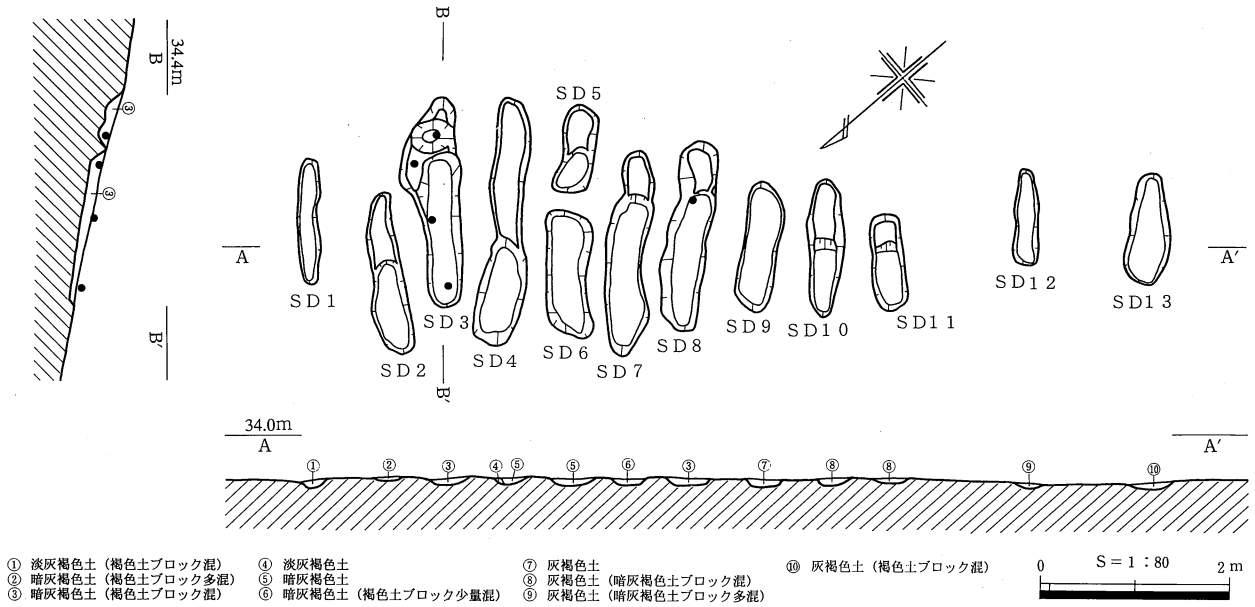


Fig. 34　畝状遺構１遺構図

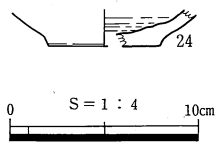


Fig. 35　畝状遺構１周辺出土遺物実測図

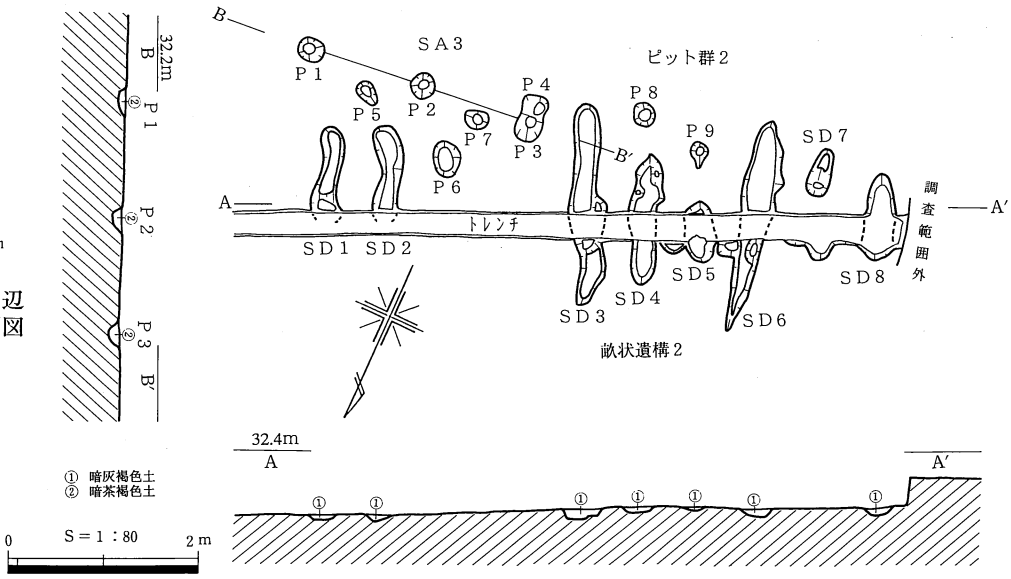


Fig. 36　畝状遺構２・ＳＡ２・ピット群２遺構図

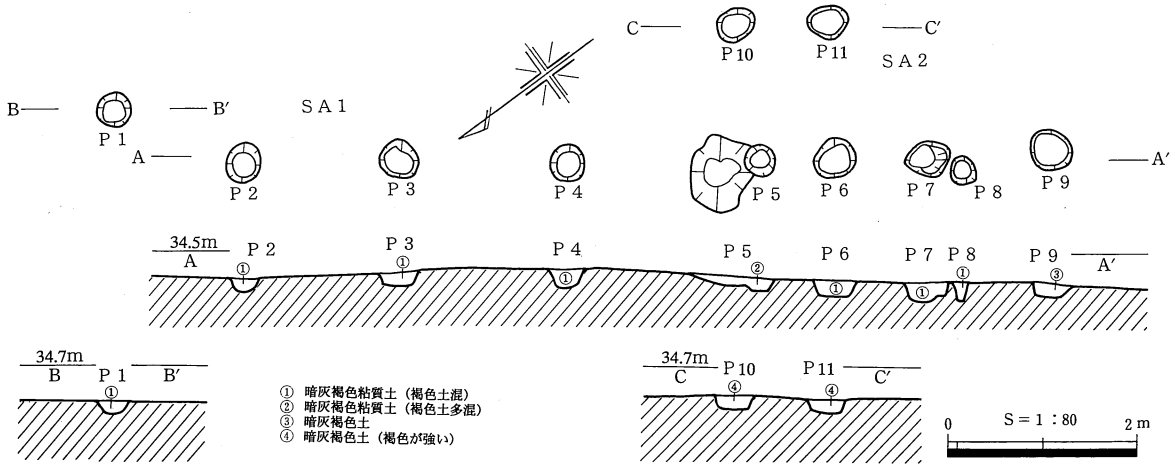


Fig. 37　ＳＡ１・２遺構図

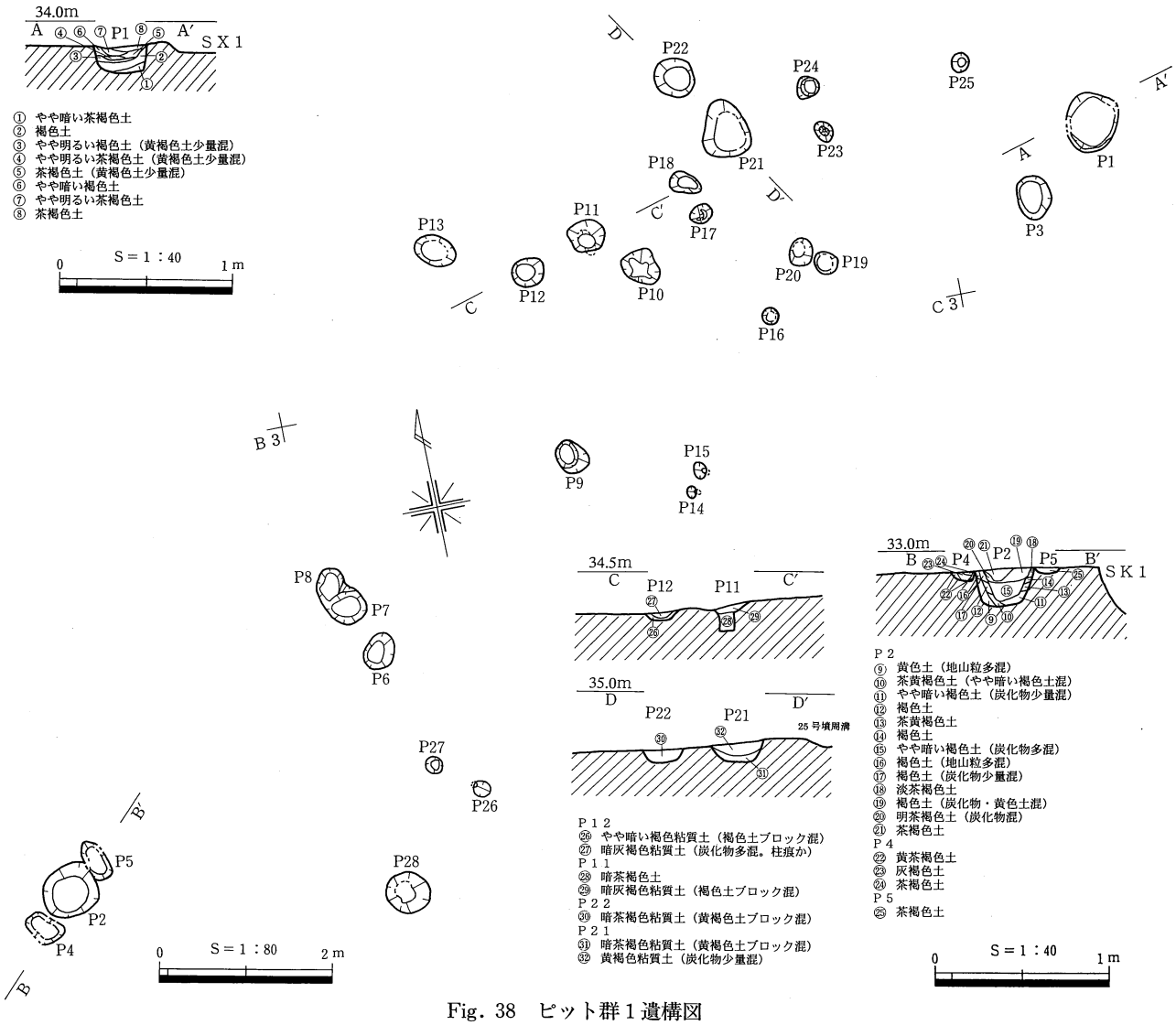


Fig. 38 ピット群１遺構図

番号	規　模	土　層	番号	規　模	土　層	番号	規　模	土　層
P 1	(84×75　−40)	挿図　参照	P11	(56×48−44)	挿図　参照	P21	(75×68−33)	挿図　参照
P 2	(83×76　−54)	挿図　参照	P12	(49×42−15)	挿図　参照	P22	(61×53−22)	挿図　参照
P 3	(65×50　−13)	灰褐色粘質土	P13	(61×44−18)	暗灰褐色粘質土	P23	(33×23−25)	暗褐色粘質土（褐色土ブロック混）
P 4	(56×39　−12)	挿図　参照	P14	(15×11−24)	暗茶褐色粘質土	P24	(35×32−50)	暗褐色粘質土（褐色土ブロック混）
P 5	(65×34　−10)	挿図　参照	P15	(24×19−35)	暗茶褐色粘質土	P25	(30×23−9)	暗灰褐色粘質土
P 6	(52×40　−21)	暗茶褐色粘質土	P16	(25×24−24)	灰褐色粘質土	P26	(25×23−20)	暗茶褐色粘質土（褐色土ブロック混）
P 7	(54×47　−17)	暗茶褐色粘質土（青灰色粘土・鉄分少混）	P17	(32×26−28)	暗灰褐色粘質土（褐色土ブロック混）	P27	(26×24−39)	暗茶褐色粘質土（褐色土ブロック混）
P 8	(50×36↑−10)	暗茶褐色粘質土（青灰色粘土・鉄分少混）	P18	(47×33−22)	暗灰褐色粘質土（褐色土ブロック混）	P28	(63×61−9)	暗茶褐色粘質土（褐色土ブロック混）
P 9	(50×44　−11)	暗灰褐色土（褐色土ブロック多混）	P19	(33×32−12)	暗茶褐色粘質土（褐色土ブロック混）			
P10	(50×49　−15)	暗茶褐色粘質土（褐色土ブロック混）	P20	(41×35−8)	暗茶褐色粘質土（褐色土ブロック混）			

Tab. 14 ピット群１規模一覧表

ＳＡ３は、直径23〜30cm、深さ８〜16cm程の柱穴が３本並ぶ。主軸はN-85°-Eを測る。

いずれの遺構からも遺物は出土せず、時期は不明である。

(7) ピット群 (Fig.38、Tab.14)

ピット群１は、直径15〜84cm、深さ８〜76cmのピットを28基確認した。Ｐ２からは大量に炭化物が出土した。

ピット群２は、調査区西端付近のうね状遺構２の南隣に位置する。直径18〜39cm、深さ３〜16cmのピットを６基確認した。

いずれの遺構からも遺物は出土せず、時期は不明である。

第6章　考　　察

1．鳥取県内における同棺複数埋葬について

1．はじめに

島古墳群7号墳では、一つの箱式石棺に二体を埋葬する埋葬形態がみられた。こうした同棺複数埋葬（合葬）は、西日本においては兵庫県以東の瀬戸内海沿岸や山陰東部、北部九州地域に分布することが知られている[16]。

かつて小林行雄は、横穴式石室と同棺複数埋葬を同系列上にあるものとして理解し、家族墓であるとした。その後、辻村純代は、東中国地方や北部九州地域の同棺複数埋葬における遺体配置や組み合わせの詳細な検討から、同棺複数埋葬の原理は父系制の表現であり、後の横穴式石室とは異なる性質の墓制であると考えた。辻村の研究は、箱式石棺内に遺存した人骨の検討により親族構造の解明を目指した点で高く評価されており、医学的所見を積極的に考古学的成果に導入した点でも注目される。ただ、論旨の性格上、形質学的検討が前提となっており、その結果を考古学的手法で検証することは困難である。

一方、古墳が社会的な産物である以上、棺内における遺体の検討と同時に、それを内包する棺の構造や墳丘の構築過程など、考古学的見地からの検討も必要と考えられる。本稿では、埋葬に伴う土器や、古墳構築過程の検討から、同棺複数埋葬の初葬から最終埋葬までの時間幅に注目して論を進めたい。

2．分布と時期

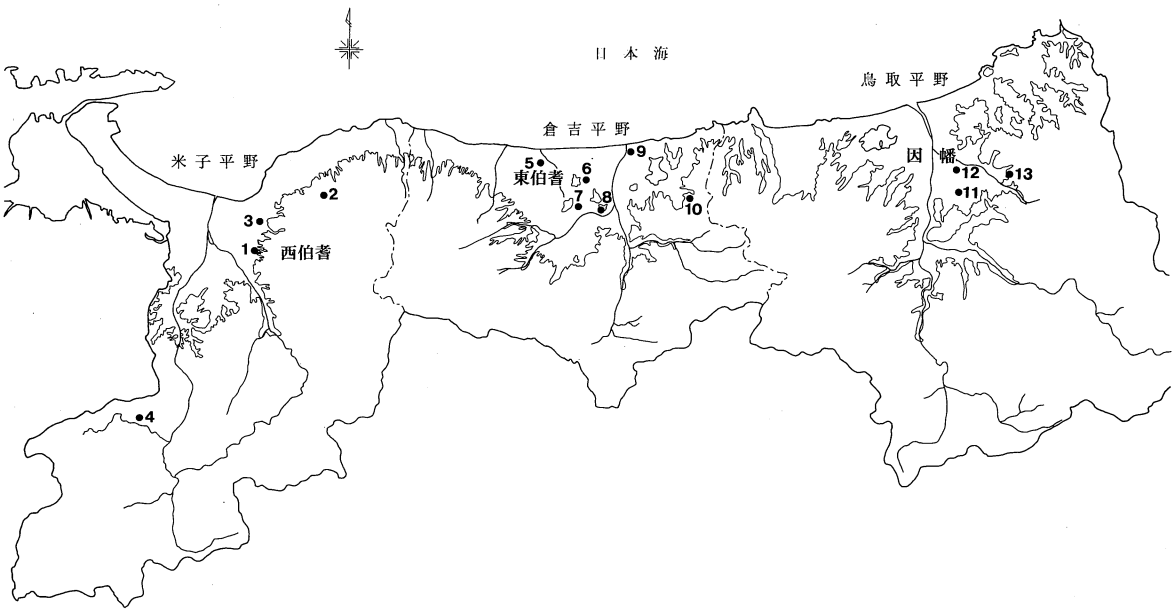
鳥取県内における同棺複数埋葬は24例を確認した。このうち人骨の遺存するものは14例である。人骨の遺存しないものについては、棺内に置かれた石枕もしくは土器枕の配置から複数埋葬を想定した[1]。

分布は、西伯耆4例、東伯耆11例、因幡10例であり、西伯耆において少ない。周辺地域では、兵庫県北部や東瀬戸内沿岸、さらには北部九州でも確認されている。すべてが同じ系譜上に位置するとは言えないが、同棺複数埋葬が偶発的な行為によるものではなく、それが墓制の一つとして存在したことは認められてよい。時期的には、弥生時代後期末を上限とし、古墳時代前期から中期にかけて盛行することは既に論じられている。県内では弥生時代に属する検出例はないが、古墳時代前期前葉[3]には広岡82号墳などで確認できる。前期中葉から後葉になると、検出例が増加し、因幡6例、東伯耆2例、西伯耆1例が認められ、中期前葉から中葉では、因幡2例、東伯耆3例となる。中期も後葉になると、東伯耆の1例のみとなる。5世紀後半代には認められないが、5世紀末から6世紀初頭の東伯耆、西伯耆において再び出現し、西伯耆では6世紀後半まで継続的に使用される。後述するが、6世紀代の西伯耆の例は、5世紀代のものとは異なる性質をもつとみられることからこれらを除くと、県内における同棺複数埋葬は、前期前葉の因幡を先駆とし、前期中葉から中期の中葉にかけて盛行した葬制とみることができる。

3．棺構造からの検討

棺の形態には、箱式石棺と木棺がある。箱式石棺が主流であり、25例中17例を占める。特異な形態として、島7号墳の如く、箱式石棺内に木棺をもつものもある。同棺複数埋葬に多用される箱式石棺は、その規模や構造からみて基本的に一人用である。多くの箱式石棺では、両小口のうち一方を幅広に作ることにより頭位方向を表現するが、この狭い埋葬空間に2体、ときには3～4体の遺体を合葬している[2]。この矛盾が同棺複数埋葬の最大の問題点である。県内の例では、小口側の一方が幅広に作られる場合、人骨の遺存するものについては初葬の頭位方向と一致している。したがって、棺構造は基本的に最初の被葬者に合わせて作られたとみてよい。

西伯耆の向原6号墳や百塚55号墳、日下12号墳では、石棺の幅が0.69～0.75mと通常の箱式石棺と比べて倍近くの広さ作られている。ここに4～7体という多数の遺体を埋葬している。これらはいずれも6世紀前半代の築造であり、6世紀末まで埋葬が継続されている。向原6号墳では、一方の小口側の蓋石を高く作ることで初葬の頭位を表現しているが、棺の規模からみて、棺の構築の段階から既に多人数の追葬が予定されていたとみて間違いない。その点では他の同棺複数埋葬例とはやや異なる性格を有すると考えられる。追葬が前提であるという点では、すでにこの時期の米子平野では初期の形態が導入されている横穴式石室や、さらに後に盛行する横穴墓との関係を言及すべきなのかもしれない。



S＝1：800000

図1　同棺複数埋葬分布図

	番号文献	古墳名	墳形	墳丘規模(m)	埋葬時期[3]	埋葬施設	棺の規模(内法)	埋葬人数	埋葬形態	埋葬順序	枕	構築方法	備考
西伯耆	1	日下12号墳	円墳	12.6	6c中～後半	第1主体・箱式石棺	1.76×0.71	7体	詳細不明	不明	須恵器枕	不明	
	2	向原6号墳	円墳？	不明	5c末～6c後半	1号埋葬施設・箱式石棺	1.9×0.69	6体	南東頭位：2体(①女:20～30歳、②男35～50)、北西頭位：2体(③男30～40歳、④男30～45)、不明：2体(⑤高年齢、⑥高年齢)	⑥→⑤→③→④→②→①	須恵器①坏蓋・坏身、②坏蓋③なし④坏身、⑤⑥なし	掘込墓壙a類	
	3	百塚55号墳	円墳	14	6c前葉～6c後半	箱式石棺	1.85×0.75	4体	東頭位：2体(①不明、②不明)、西頭位(③女・若年、④不明)	①or②→③or④	須恵器蓋坏①②④、③須恵器高坏杯部	不明	
	4	印賀6号墳	方墳？	7×7	青木VII(新)期	第1埋葬主体・箱式石棺	1.93×0.44	2体	北東頭位：2体(女・熟年①、男・熟年②)	不明	石枕(板石)	掘込墓壙c類	
東伯耆	5	瀬戸岩子山35号墳	円墳	18	不明	第1埋葬施設・箱式石棺	1.9×0.45	2体	南東頭位：1体(①女・壮年中期)、北西頭位(②男・壮年中期)	①→②	①②V字状石枕	掘込墓壙c類	交差埋葬
	6	島7号墳	円墳	20	天神川IV～V期	第一埋葬施設・箱式石棺(木棺を内包)	石棺：2.2×0.4～0.5、木棺：2×0.45～0.5	△2体	南頭位：1体①、北頭位：1体②	不明	①V字状石枕、②鼓形器台	不明	
		同上	同上	同上	天神川IV～V前後期	第二埋葬施設・箱式石棺	1.6×0.38	△2体	東頭位：1体(①女・壮年)、西頭位：1体(②女・熟年)	不明	なし	不明	交差埋葬
	7	イザ原6号墳	円墳	14	天神川VI～VII期	箱式石棺	1.8×0.45	△2体	北頭位：1体①、南頭位：1体②	不明	①②V字状石枕	不明	
	8	夏谷3号墳	円墳	18.2	天神川III～IV期	1号埋葬施設・箱式石棺	1.9×0.55	3体	南頭位：2体(①男・青年②男・壮年中期)、北頭位：1頭位(③女・壮年中期)	②→③→①	①②③V字状石枕	掘込墓壙a類	
		同上	同上	同上	1号埋葬施設より後出	3号埋葬施設・箱式石棺	1.6×0.49	2体	南頭位：1体(①男・壮年前期)、北頭位：1体(②女・壮年前期)	不明	①②V字状石枕	掘込墓壙a類	
	9	長瀬高浜遺跡SX49	—	—	不明	箱式石棺	0.91×0.21	2体	頭位不明：2体(①男・成人、②不明・幼児)	不明	なし	—	
		長瀬高浜遺跡SX52	—	—	天神川IV～V期	箱式石棺	1.86×0.59	△2体	東頭位：2体(①不明②不明)	不明	①②V字状石枕	—	
		長瀬高浜遺跡88号墳	不明	不明	5c末～6c初	第1埋葬施設・箱式石棺	1.77×0.46	2体	北東頭位：1体(①不明)、南西頭位：(②性別不明・青年後期～壮年前半)	不明	①②V字状石枕	不明	
	10	川上83号墳	円墳	23	天神川III期	1号墓・木棺	4.4×0.6	△2体	東頭位：1体①、西頭位：1体②	不明	鼓形器台・高坏杯部	不明	
		同上	不整円形	23	不明	5号墓・箱式石棺	1.9×0.3	3体	東頭位：2体(①女、②男)、西頭位：1体(③女)	①or②→③	①②③V字状石枕	不明	
因幡	11	広岡76号墳	方墳	10×12	岩吉VI(新)期	第1主体部・木棺墓	2×約0.45	△2体	東頭位：1体①、西頭位：1体②	不明	①②鼓形器台	不明	
		広岡77号墳	方墳	12×11	岩吉VI(新)期	主体部・木棺墓	2.2×0.53	△2体	南東頭位：1体①、北西頭位：1体②	不明	①②鼓形器台	不明	
		広岡78号墳	方墳	13×11	岩吉VI(新)期	主体部・木棺墓	1.9×0.35	△2体	南東頭位：1体①、北西頭位：1体②	不明	①②鼓形器台	不明	
		広岡79号墳	円墳	12	岩吉VI(新)期	第1主体部、木棺墓	2.5×0.4	△2体	東頭位：1体①、西頭位：1体②	不明	①高坏、②鼓形器台	不明	
		広岡81号墳	円墳	11	岩吉VI(新)期	第2主体部・木棺墓	2.27×0.45	△2体	東頭位：1体①、西頭位：1体②	不明	①②鼓形器台	不明	
		広岡82号墳	円墳	11	岩吉VI期	第1主体部・木棺墓	2.50×0.50	△2体	東頭位：1体①、西頭位：1体②	不明	①壺口縁部、②鼓形器台	不明	
	12	面影山33号墳	円墳	15	岩吉VI(新)期	第1主体部・箱式石棺	1.88×0.53	3体	南東頭位：2体(①女・20代後半、②男・30代前半)、北西頭位：1体(③壮年前期)	①or②→③	甕口縁部(東頭位の一体)	掘込墓壙a類	交差埋葬
	13	糸谷3号墳	方墳	20×18	岩吉VII(古)期	1号石棺墓・箱式石棺	1.83×0.5	3体	北西頭位：2体(①男・若年、②女・壮年後半)、南東頭位：1体(③性別不明・8歳前後)	②or③→①	②壺口縁部、①板石(西頭位)	不明	
		同上	同上	同上	不明	2号石棺墓・箱式石棺	1.82×0.4	3体	南東頭位：2体(①男・壮年～熟年、②男・壮年後半)、北西頭位：1体(③男・壮年後半)	②or③→①	①②円礫	不明	
		同上	同上	同上	岩吉VII(古)期	3号石棺墓・箱式石棺	1.73×0.49	4体	北西頭位：2体(①男・熟年、②女・熟年)、南東頭位：2体(③男・壮年、④女・壮年～熟年)	①→③→②or④	①高坏杯部、②高坏脚部、③板石、④円礫	不明	

表1　同棺複数埋葬古墳一覧表

4．構築過程からの検討

古墳は、宗教的かつ政治的な構造物とみられており、古墳構築過程の検討は、古墳を読み解く重要な鍵の一つといえる。墓壙の構築法については、墳丘と墓壙を平行して構築する構築墓壙と、墳丘の完成後墓壙を掘削する掘込墓壙、さらに墓壙をもたない無墓壙に大別されている。

最も一般的にみられる掘込墓壙のうち、墳丘基盤面に墓壙を掘削し、その後盛土を構築するタイプは掘込墓壙c類とされている。これは、完全に埋葬が終了した後に盛土でパックされた状態であり、盛土完成後の追葬はありえない。

注目されるのは、墓壙が掘込墓壙c類で構築されているにもかかわらず、同棺複数埋葬されていることである。印賀6号墳や瀬戸35号墳がこれにあたる。これらは、同時に埋葬されたか、もしくは追葬が終了するのを待って盛土を形成したかのいずれかである。さらに、両者とも棺内からは2体の人骨が確認されているが、瀬戸35号墳では下肢を交差させて埋葬する交差埋葬が指摘されている。掘込墓壙c類で構築された古墳は、極めて短期間に埋葬が行われたことは間違いない。

5．埋葬の時間幅

初葬から最終埋葬までの時間幅について考えてみたい。この際に指標となるのは、棺内において枕として使用された土器である。5世紀後葉以前では、土師器の鼓形器台が多くを占め、まれに土師器の壷や甕の口縁部、高坏の杯部などが使用される。

複数の遺体に土器枕が伴う例として鳥取市の広岡古墳群がある。県内では最も早い前期前葉から中葉にかけて同棺複数埋葬が行われている。調査された7基の古墳に作られた主体部12基のうち6基で同棺複数埋葬が確認されたことになり、一つの古墳群における出現頻度が極めて高い点で注目される。木棺であるため、人骨は遺存しないが、両小口に口縁打ち欠きのある鼓形器台などを置く形態から、全て対置埋葬の形態をとるものと想定できる。同じ棺から出土した土器同士の型式差を検討してみると、82号墳第1主体部出土の鼓形器台と壷は、一型式程度の時期差を認めてもよいのかもしれないが、他の5基についてはほぼ同型式の所産と考えられる。この時期における一つの土器型式のもつ時間幅は30～50年程度と想定されているから、この時間幅の中で追葬が行われたと考えられる。

ここで注目されるのは、広岡古墳群をはじめ、島古墳群7号墳、川上83号墳では棺材として木棺が使用されていることである。木棺に2体以上を埋葬する例は全国的にみても極めてまれである。地域は異なるが、千葉県石神二号墳（5世紀中葉）では、長さ6.9mの木棺内から対置埋葬されたとみられる状態で石枕2個体が出土している。追葬が困難な粘土槨であることから、同時に埋葬されたものと考えられる。地中に埋設した木棺がどの程度の期間で追葬不能な状態まで腐朽するのかは判然としない。棺の材質、厚さなどにもよるだろうが、埋葬後30～50年もの期間を経たものを再び開棺して追葬に耐えるとは考えにくい。推測にすぎないが、追葬である限り、最終埋葬までの時間幅は10年以内とみるのが自然であろう。木棺を使用する同棺複数埋葬は、同時埋葬か、もしくは長く見積もっても10年を越えない程度の追葬によるものと考えられる。

さらに、箱式石棺でも極めて短期間に合葬されたとみられる例がある。瀬戸岩子山35号墳1号埋葬施設、島7号墳第二埋葬施設、面影山33号墳第1主体部では、対置の状態で埋葬された2体は、互いに下肢を交差させた状態であった。骨の配列はほぼ原位置を保持するものとみられることから、同時埋葬かもしくは極めて近い時期の追葬とみられる。

一方、西伯耆の向原6号墳、百塚55号墳、日下12号墳は、やや時期の下る5世紀末～6世紀前葉の築造とみられる。須恵器の蓋坏が枕に使用されており、その型式から埋葬の時間幅が推察できる。向原6号墳では、5世紀末～6世紀後葉、百塚55号墳では6世紀前葉～6世紀後葉、日下12号墳では6世紀中葉から後葉に相当する須恵器が出土している。約40～80年程度の時間幅を持つことになり、先述の箱式石棺の例と比べて長期である。棺内からは4～7体分の人骨が出土しており、このことからも相当な時間幅をもって追葬が行われたものと考えられる。先述した棺構造の点や、追葬期間の長さからみて、6世紀代と5世紀代の同棺複数埋葬は区別してよかろう。

6．まとめ

同棺複数埋葬という墓制を、棺構造や古墳の構築過程、埋葬の時間幅などに注目して検討してきた。簡単にまとめると次のようになる。

1）同棺複数埋葬は、偶発的な結果ではなく一つの墓制として存在し、県内では古墳時代前期中葉から中期中葉にかけて盛行した。

2）棺構造や古墳の構築方法の検討から、同棺複数埋葬の初葬から最終追葬までの時間幅は極めて短期間に行われたものと考えられ、中には同時に埋葬されたものが存在すると考えられる。

3）棺構造や埋葬の時間幅からみて、6世紀代に築造されたものは5世紀代のものとは原理的に異なる可能性がある。

県内での例をもとに考察したが、少数の例から得た結論を他の多数に敷衍したきらいは否めない。以上の結論は、さらに検出例を待って再度検証されるべきである。

日本列島における墓制の歴史において、一つの棺に複数の遺体を埋葬することが広く行われたのは古墳時代に限定される。墓制が社会において大きな意味を持ったと考えられる時代にあって、一人用として構築された石棺に複数の遺体を埋葬することを単なる偶然としては理解しにくい。今後、周辺地域も含めた考古学的な検討が必要である。また、墳丘上における複数埋葬との関係や、本論ではほとんど触れなかったが、人骨の検討による親族関係のさらなる検討など課題は多い。

（岡野雅則）

註

(1) 人骨の遺存しない例については、枕の有無により以下の基準で抽出した。

県内の石枕は板石2枚を断面V字状に組み合わせた形態が主流であることから、棺内の小口側両端にこれが設置されているものについて複数埋葬と判断した。

県内の土器枕には、一般に鼓形器台、高坏、壷や甕の口縁部が使用され、設置される際には口縁部に打ち欠きが認められる例が多い。人骨の遺存する例から、棺内小口側中央に置かれており、かつ枕として不自然でないものを土器枕と判断し、両小口にこれがみられる場合、複数埋葬と判断した。

(2) 埋葬形態には、先葬者と頭位方向を同じくする並置と、先葬者とは逆の小口方向に頭位を向ける対置があることは、既に辻村純代の指摘するところである。辻村は、頭位方向に社会的な意味を持たせ、頭位方向の差違が父系同族か非父系同族かを表現したものと考えた。

(3) 埋葬時期の判定に際して、土師器については、各地域で提示されている編年案のうち古墳時代を網羅するものを使用した。おおよその併行関係を表に示す。なお、時期区分については、今後流動的であることを付け加えておく。須恵器については、陶邑古窯跡群の田辺編年を使用した。

<table>
<tr><td rowspan="2"></td><td>西伯耆</td><td>東伯耆</td><td>因幡</td></tr>
<tr><td>青木編年[19]</td><td>天神川下流域編年[20]</td><td>岩吉編年[21]</td></tr>
<tr><td rowspan="2">弥生時代後期末～
古墳時代前期前葉</td><td>V・VI(新)期</td><td>天神川Ⅰ期</td><td>V(新)期</td></tr>
<tr><td>VII(古)</td><td>天神川Ⅱ期</td><td>VI(古)期</td></tr>
<tr><td>前期中葉</td><td rowspan="2">VII(新)</td><td>天神川Ⅲ期</td><td rowspan="2">VI(新)期</td></tr>
<tr><td>前期後葉</td><td>天神川Ⅳ期</td></tr>
<tr><td>中期前葉</td><td>VIII(古)</td><td>天神川Ⅴ期</td><td rowspan="2">VII(古)期</td></tr>
<tr><td>中期中葉</td><td>VIII(新)</td><td>天神川VI期</td><td>VII(新)期</td></tr>
<tr><td>中期後葉</td><td>IX(古)</td><td>天神川VII期</td><td>VIII(古)期</td></tr>
</table>

表2　編年対照表

参考文献

1．米子市1999『新修米子市史』（第7巻資料編）
2．大山町教育委員会1982『向原古墳群』
3．佐々木古代文化研究室1960『ひすい』71号
4．日南町教育委員会1992『印賀古墳群』
5．大栄町教育委員会1998『瀬戸岩子山遺跡発掘調査報告書』
6．本報告書
7．倉吉市教育委員会1983『イザ原・小林古墳群発掘調査報告書』
8．倉吉市教育委員会1996『夏谷遺跡発掘調査報告書』
9．鳥取県教育文化財団1983『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書Ⅴ』
10．鳥取県教育文化財団1983『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書VI』
11．東郷町教育委員会1993『川上83号墳調査報告書』
12．鳥取市教育福祉振興会1996『面影山古墳群発掘調査報告書』
13．鳥取市遺跡調査団1989『広岡古墳群発掘調査概要報告書』
14．同志社大学文学部文化学科1994『糸谷古墳群』
15．和田晴吾1989「葬制の変遷」『古墳時代の王と民衆』（古代史復元第6巻）
16．辻村純代「東中国地方における箱式石棺の同棺複数埋葬」『季刊人類学』14巻2号
17．辻村純代1988「古墳時代の親族構造について」『考古学研究』35巻1号
18．田中良之1995『古墳時代親族構造の研究』
19．鳥取県教育委員会1978『青木遺跡発掘調査報告書III』
20．牧本哲雄1999「古墳時代の土器について」鳥取県教育文化財団『長瀬高浜遺跡III、園第6遺跡』
21．谷口恭子1991「土器」『岩吉遺跡III』鳥取市教育委員会

2．弥生時代の集落内における貯蔵穴の役割 ―東伯耆を中心として―

今回調査を行った米里三ノ嵜遺跡で断面が袋状を呈する土坑が検出されたが、このような例は山陰東部においては倉吉平野や米子平野を中心に、中国山地を挟んで岡山県側にもみられる。弥生時代前期では、同様な形状を有する土坑は袋状竪穴と呼称され、北部九州では弥生時代前期から中期初頭にかけて分布[1]する。これらの袋状竪穴と断面袋状を呈する土坑の系譜がつながるかは明らかではないが、調査地の位置する倉吉平野を中心に、集落における袋状土坑（貯蔵穴）の役割について考えてみたい。

貯蔵穴の定義

弥生時代の貯蔵施設に関する研究は袋状竪穴について乙益重隆氏[2]が、住居など周辺施設との関係において石野博信氏[3]や宮本長二郎氏[4]らにより研究がなされてきた。宮本氏は鳥取県の弥生時代の貯蔵穴について中央ピットなども含め統計処理を行い、検討を加えている。石野氏は、弥生時代中期中葉以降の貯蔵施設について中国山地を例にあげ、中期中葉の岡山県野田と後葉の津山市沼など、屋外土坑、屋内小土坑、高床倉庫を併せ持つ集落が完掘されているとしている。

石野氏のいう屋外土坑について、現在までの呼称は、袋状竪穴、袋状土坑(壙)、袋状ピットで、貯蔵を前提としては、袋状貯蔵穴、食料貯蔵穴、屋外貯蔵穴、あるいは単に貯蔵穴と呼ばれている。また屋内小土坑は、屋外（住居内）貯蔵穴、あるいは単にピット、土坑（壙）と呼称されている。本稿では貯蔵に関するとみられる袋状の土坑を中心に、弥生時代中期中葉から古墳時代前期前葉までの、住居外に設けられたものを貯蔵穴、住居内にみられる断面袋状の土坑を住居内（屋内）貯蔵穴として論をすすめたい。

まず貯蔵穴であるが、貯蔵穴の平面は円形、楕円形、方形、断面は袋（フラスコ）状、垂直に近いもの、横穴状を呈するもの[5]や、底面中央にピット状の掘り込みをもつもの[6]、底面の周囲に溝をもつもの[7]、平面長方形で両短辺にピットをもつもの[8]、その他[9]がある。これらを貯蔵穴とみなす根拠としては、①袋状土坑から炭化米や粟が出土している例がある。②底面の周縁に溝をもち、防湿を意識したとみられるものがある。③底面や壁面に貼床（壁）を施したもの[10]がある。④廃棄用の土坑に転用され、土器の出土状況も廃棄[11]あるいは流れ込みが多数で、放棄されるまでは空間を利用していた[12]と考えられる。⑤同時期の墓は集団埋葬による墓域あるいは墳丘墓があり、住居内あるいは住居内または隣接した墓が確認されていないことなどがあげられる。ただしこれとは逆に断面形が袋状を呈しない土坑（壙）の全てが貯蔵以外の目的に使用されたとは断言できない。そのため、断面形のみで貯蔵穴とするのでなく、住居あるいは集落の中での総合的な判断が必要になる。

住居内（屋内）貯蔵穴[13]は平面形は方形または長方形で、竪穴住居の壁面に接するものは少なく、やや中央寄りか柱穴の間などに位置することが多い。他に竪穴住居の壁面を袋状に掘り込んだもの[14]もある。

貯蔵物および貯蔵容器

丸山遺跡の袋状土壙15では底面の端から土器が出土している。この土壙は底面中央にピット状の掘り込みがあり、周囲に溝をもつ。土器は貯蔵されたままか片づけられたものかは不明だが、いずれも貯蔵用の器と考えられる。内訳は台付無頸壺１、頸部以上が欠損した長頸壺１、脚付長頸壺１である。時期は弥生時代中期後半である。

猫山遺跡[15]には火災を受け放棄されたとみられる貯蔵穴がある。３号貯蔵穴は土器とともに貯蔵物が炭化した状態で出土した。土器はいずれも原位置を保持するとみられ、床面付近から横たわった状態で出土した。内訳は甕（大中小）計４、壺１、鉢１、器台１、高坏１で炭化米（穂付き）が出土した。10号貯蔵穴も焼失した貯蔵穴で炭化した粟が出土した。下に「ソウキ」があり、これは縁が木、中は竹状の繊維で格子状に編んでいる。台付鉢が２点出土した。時期はいずれも弥生時代後期末と考えられる。

このように貯蔵用の土器に、本来の貯蔵用器である壺以外、煮炊具である甕や鉢、その他の土器が含まれている。弥生時代前期は壺と甕が明確に区別され、壺は貯蔵用、甕は煮炊用と区別されており、特に壺は弥生土器の中でも特別な存在であったと思われる。貯蔵穴出土の土器をみると、中期には壺が主体であったものが、後期にかけて甕や鉢などの壺以外の土器が増加する。これは壺にも煤痕をもつものがあらわれるように、壺と甕の区別

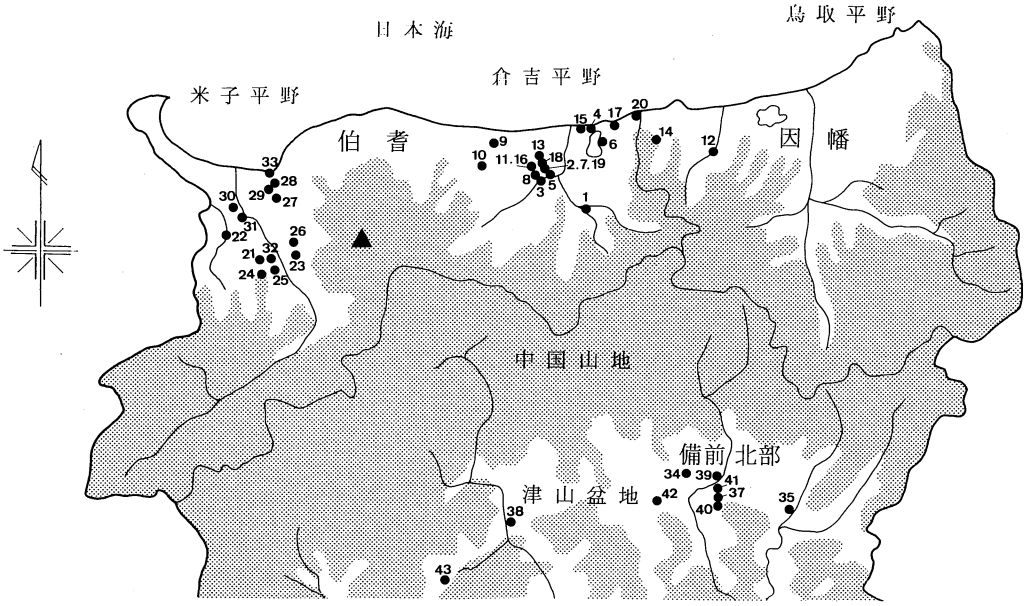


Fig. 1　山陰東部・備前北部の貯蔵穴出土遺跡位置略図

伯耆東部（因幡）

	遺跡名	弥生時代中期		弥生時代後期		古墳時代前期		備　考
1	丸山遺跡	—○	—○	—○	—○	—○	—	底面中央にピット、側溝
2	西前遺跡		—	—	—○	—○	—	長期間の集落
3	中尾遺跡		—	—○				住居内２ヶ所に横穴状の貯蔵穴
4	南谷大山遺跡			—○h	—○h	—○h	—	拠点的な集落
5	夏谷遺跡				—○h			拠点的な集落
6	宮内遺跡				—○			平面方形で側溝、底面にピット６基
7	上神宮ノ前遺跡				—○			平面長方形の貯蔵穴
8	両長谷遺跡				—○			土器出土
9	東高江遺跡				—○	—○		平面長方形貯蔵穴
10	上種第５遺跡				—○	—○	—	平面方形で両短辺にピット
11	大山遺跡				—○h	—○h		平面方形で二段掘り
12	柄杓目遺跡II（因幡）				—○h	—○h		掘立柱建物と切り合う
13	米里三ノ嵜遺跡				—○	—○		住居２棟に８基の貯蔵穴
14	大口遺跡(因幡)				—○	—○		貯蔵穴が群在する
15	南谷ヒジリ遺跡				—○	—		底面から角礫出土
16	コザンコウ遺跡				—○h			住居・掘立柱建物・貯蔵穴×３組
17	宇谷第１遺跡				—○h			住居・掘立柱・貯蔵穴
18	沢べり遺跡２次				—○			大小の貯蔵穴が隣在
19	猫山遺跡				—○	—		米、粟、容器（土器を含む）が遺存する
20	石脇第３遺跡 操り地区				—○			土器出土

伯耆西部

	遺跡名	弥生時代中期		弥生時代後期		古墳時代前期		備　考
21	宮前遺跡	—○						土器出土
22	清水谷遺跡	—○						環濠あり
23	下山南通遺跡	—◎h	—○h		—			大小の貯蔵穴か 廃棄土壙
24	天王原遺跡	—○H	—◎H	— H	— h	— h	— h	拠点的な集落 底面中央にピット、側溝
25	越敷山遺跡	—	—◎h	＝○h	—	＝○h		拠点的な集落
26	林原遺跡		—◎H			—		掘立柱建物を切る
27	尾高城址		—○					底面に側溝
28	百塚遺跡群II		—○					底面にピット４
29	百塚第７遺跡		—○					土器多数出土
30	東宗像遺跡		—○h		—			土器、磨製石斧出土
31	青木遺跡		＝○H	＝○H	—	—	—	拠点的な集落 掘立柱建物が多い
32	田住松尾平遺跡				—○			住居の隅に貯蔵穴
33	百塚第１遺跡				—○			土器出土

備前北部（南部）

	遺跡名	弥生時代中期		弥生時代後期		古墳時代前期		備　考
34	大田十二社遺跡		—○	—○	—○	—○		群在傾向あり
35	高本遺跡		—○					土器出土
36	奥坂遺跡(南部)		— h	—○h	—◎	—○	—	備前の拠点集落
37	且山遺跡（群）		—	—◎	—◎			拠点的な集落
38	西吉田北遺跡		—	—◎	—○			貯蔵穴が急激に増加
39	野村高尾遺跡		—	—○				大小の貯蔵穴
40	小原遺跡			—○				横穴状の貯蔵穴
41	天神原遺跡				—○			住居内土壙あり
42	二宮遺跡				—○	—◎		一括土器多数出土
43	桃山遺跡				—	—○	—	土器出土

Tab. 1　山陰東部・備前北部の貯蔵穴出土遺跡一覧表

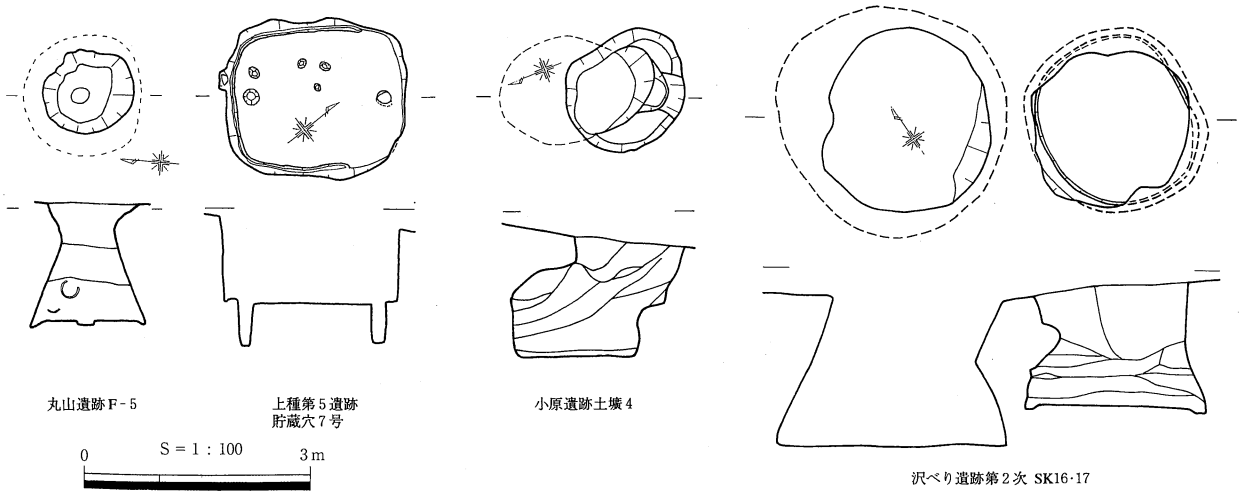


Fig. 2　貯蔵穴平面・断面図（一部改変・再トレース）

が曖昧になり、次第に壺としての役割が形骸化したと解釈したい。

集落の中での貯蔵穴の変遷

倉吉平野での貯蔵穴を有する遺跡の分布についてまとまたのがFig．2である。―・＝・〓は竪穴住居、○・◎は貯蔵穴、ｈ・Ｈは掘立柱建物である。弥生時代中期・後期、古墳時代前期を各２分割[16]した。

東伯耆では、貯蔵穴をもつ弥生時代の遺跡は倉吉平野の中にある低丘陵上に分布している。時期毎にみると弥生時代中期は中国山地との境に丸山遺跡があるが、全体に調査数が少ないため様相は不明瞭である。後期になると海岸近くに位置する南谷大山遺跡のように古墳時代前期まで続く遺跡が増加する。このような遺跡は人手状にのびる低丘陵の尾根にそれぞれの住居群を形成し、それらがまとまることによりさらに規模の大きな住居群を成している。弥生時代後期後半になるとこれらの住居群の周辺に、丘陵単位のまとまりをもたず、住居・掘立柱建物、貯蔵穴などを有する集落が多数形成される。ここでは前者を拠点的な集落、後者を小規模な集落と仮定して、集落の構成について考えてみたい。

ａ．拠点的な集落

南谷大山遺跡は弥生時代中期中葉から古墳時代後期まで続く集落である。Ｂ区を例にすると南谷大山II～III期（弥生時代後期前葉～中葉頃）に住居は丘陵背上に約10～15m間隔で建てられ、貯蔵穴の多くは１～２基単位で散在する。報告では規則性がみられないため共同管理されたとしている。南谷大山IV（弥生時代後期後葉）になると貯蔵穴は住居群よりも高い位置にまとまる傾向がみられる。この時期の遺構の構成は、竪穴住居５棟、住居状の遺構が３棟、貯蔵穴６基である。南谷大山Ｖ期（古墳時代前期前葉頃）になると貯蔵穴は消滅し、掘立柱建物が３棟程みられる。

夏谷遺跡は弥生時代後期にはじまる集落であるが、弥生時代終末期に一時断絶する。遺構の遺存状態は非常によい。Ｃ地区では、夏谷Ｉ期（阿弥大寺III期・弥生時代後期後半）には南側の住居群、北側に貯蔵穴群が集中するようにみえる。貯蔵穴は斜面の上側をカットされたテラス状遺構に付随している。夏谷II期（弥生時代終末期）には貯蔵穴の付近にも住居が建てられる。掘立柱建物の時期は明瞭な出土遺物がない。またそれぞれの時期に住居状遺構があるが、いずれも柱穴がみられないことから恒常的な建造物のあった可能性は低く、作業的な空間が想定できる。

ｂ．小規模な集落

米里三ノ嵜遺跡は、舌状に張り出す丘陵の先端部に位置する集落である。南谷大山III期並行（弥生時代後期中葉）にはＳＩ１－２が建てられ、屋内貯蔵穴を２基もつ。南谷大山IV～Ｖ期並行（後期後葉～古墳時代前期前葉頃）になると屋内貯蔵穴が埋められて貼床が施され、ＳＩ１－１となり、南北西の３方向に貯蔵穴が造られる。北～西側の貯蔵穴群は、ＳＫ３・４・10・12が一列となる。次にＳＩ２が建てられ、南西壁にトンネル状の屋内貯蔵穴を造る。ある程度の規模をもつ住居が同時期に隣接することは少ないと考えられるため、ＳＩ１からＳＩ２移りその際にＳＫ12も埋められたと考えられる。これらの貯蔵穴はＳＩ１－１からＳＩ２まである程度の期間継続して使用されたと考えられる。周辺に住居や掘立柱建物はなく貯蔵穴は８基で、１棟あたり平均４基の貯蔵穴を使用していたことになる。これは、冬期や天候不順などの食料確保の不安定な要素を克服するための最小限の容量であろう。

コザンコウ遺跡[17]では、ほぼ平坦面をなす１つの丘陵に竪穴住居１棟、掘立柱建物１棟、貯蔵穴１基を単位とする３つのまとまりが想定されている。いずれも弥生時代後期に焼失している。掘立柱建物の周囲にはそれぞれ溝状遺構があり、明らかに水はけを意識していることから、貯蔵を目的とする建物であると考えられる。また住居を区切る柵跡もあり、１棟の住居で管理している範囲は１号住居址～２号間が18m、２号～３号間が41m、１号～３号間が40mである。住居間の距離は沖積地でも通常最低20m程度[18]と考えられており、竪穴住居間の距離としては適当で、１棟の生活空間および必要な施設を示すものであろう。上種第５遺跡においても中心となる住居18でも四方向に貯蔵穴が１ないし２基づつ存在し、住居の持つ空間は直径15～18mとなる。

宇谷第１遺跡[19]は、南北に細長い丘陵に位置する３棟で構成される集落である。時期は宇谷Ｉ期（弥生時代後

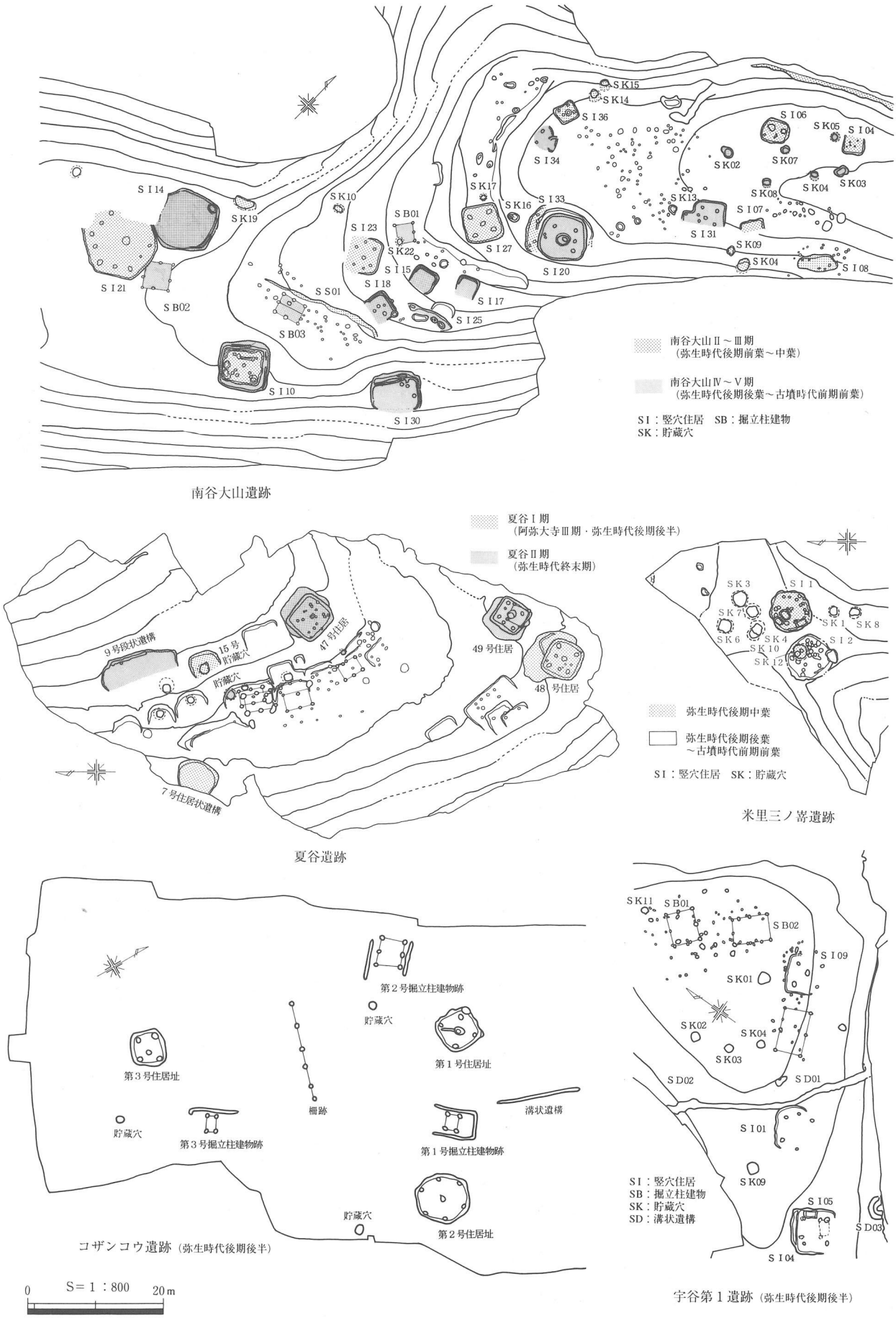


Fig. 3　東伯耆における貯蔵穴出土遺跡（一部改変・再トレース）

期後半）である。3棟の住居は丘陵の頂部をさけ8m・16mの間隔に建てられ、4基の貯蔵穴は住居よりやや高い位置に頂部に沿うように弧状に造られている。また貯蔵穴の反対方向に掘立柱建物が建てられる。頂部に貯蔵穴と掘立柱建物に囲まれるような空間があるが、この部分は広場あるいは作業場的な目的が想定できる。類似する遺跡が夏谷遺跡のD地区で、竪穴住居の南側に等高線に沿うように貯蔵穴3基と北側に1基があり、この間からは遺構は検出されていない。

両者を比較すると、拠点的な集落は、①集落の中に貯蔵穴が集中する場所がある。②貯蔵穴の位置の変化は個々の住居よりも集落全体に関わるとみられる。③住居は継続していても貯蔵穴は古墳時代前期頃に消滅することがわかる。ただし貯蔵穴から掘立柱建物へと貯蔵施設が移行したのかは掘立柱建物の時期が分かる例が少ない[20]ため、今後の検討課題であろう。一方小規模な集落は、①貯蔵穴の位置は作業的な場所と関わる。②掘立柱建物を持たない場合、貯蔵穴は1棟あたり4～5基あり、これが住居1棟の必要な貯蔵容量と考えられる。③貯蔵穴と掘立柱建物は機能的に補完している例がある。以上を想定したい。

東伯耆をとりまく状況

貯蔵穴は山陰東部および備前北部に分布するが、西伯耆、備前北部の様相を概観する。なお因幡については調査例が少ないこともあり、今後の課題とする。

西伯耆では弥生時代中期の集落は、日野川などの主要河川に沿うように位置する低丘陵上に分布する。東伯耆と異なるのは中期中葉の段階ですでに貯蔵穴は比較的多くの遺跡から確認されており、東伯耆に比べ貯蔵穴は導入された時期がはやいように見える。拠点的な集落をみると越敷山遺跡では古墳時代前期まで少数ながら貯蔵穴はみられるが、天王原遺跡では弥生時代中期後半にピークを向えるもののその後は消滅する。青木遺跡のように大規模な集落でありながら、貯蔵穴はわずか14基で、掘立柱建物が中心となる遺跡もある。弥生時代後期以降は貯蔵穴は造られるものの数は少ない。

備前北部では、貯蔵穴を有する遺跡は中国山地沿いの河川の際付近の低丘陵上に分布する。すでに弥生時代中期にもあるが、急激に増加するのは弥生時代後期である。大田十二社遺跡では貯蔵穴は群在し、旦山遺跡（群）では、遺跡により竪穴住居と貯蔵穴が近いものと遠いものに分けられるとしており、これは東伯耆でも同様の傾向である。貯蔵穴が消滅したのは古墳時代前期前葉であるが、直前まで貯蔵穴は頻繁に造られている。

ま と め

東伯耆では、拠点的な集落における貯蔵穴は基本的には広い区域を必要に応じて区画する共同管理の傾向がみられ、貯蔵穴は個々の住居の変遷よりも集落の盛衰に左右される。小規模な集落ではそれぞれの住居による管理で、貯蔵区域と作業区域がコンパクトにまとまめられ、地形に制約された狭い範囲を最大限に活用しようとしている意図が窺える。また貯蔵穴に依存するところの大きかった小規模な集落は、弥生時代後期末から古墳時代前期前葉にかけて相次いで姿を消していく。

このように弥生時代の集落における貯蔵穴は、東伯耆では古墳時代前期前葉を画期として消滅する。貯蔵穴の消滅する要因は今後の課題であるが、貯蔵方法の変化だけでなく集落そのものの変質も視野に入れて考えるべきであろう。

（八峠　興）

註・参考文献

(1) 『下関市綾羅木郷台地遺跡概報』第9報 下関市教育委員会 1976　鳥取県内で前期の貯蔵穴の可能性が指摘されているものは坂ノ上遺跡がある。『坂ノ上遺跡発掘調査報告書』淀江町教育委員会 1987　清水谷遺跡では、弥生時代前期末～中期前半の環濠の内側から断面袋状の土坑が確認されているが、環濠の内側に住居がなく、遺跡の性格ははっきりとしていない。『清水谷遺跡』西伯町教育委員会 1992　福成早里遺跡SK11は貯蔵穴のみの検出であるが、底面に周溝をもち、底面付近から弥生時代前期末～中期初頭の土器が出土している。『福成早里遺跡』財団法人 鳥取県教育文化財団 1998
(2) 乙益重隆「袋状竪穴考」『坂本太郎博士頌寿記念 日本史学論集』上巻 吉川弘文館 1983
(3) 石野博信「弥生時代の貯蔵施設」『関西大学考古学研究年報』1 1967　pp. 37-52
(4) 宮本長二郎『日本原始古代の住居建築』中央公論美術出版 1997
(5) 高本遺跡で、入口に段をもち出入りに関すると考えられている。「高本遺跡」中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査5

岡山県教育委員会 1975　屋内貯蔵穴ではあるが中尾遺跡もある。(Fig. 2)『中尾遺跡』倉吉市教育委員会 1992

(6)　大田十二社遺跡の袋状貯蔵穴13号『大田十二社遺跡』津山市教育委員会 1981や、丸山遺跡『丸山遺跡発掘調査報告書』鳥取県三朝町教育委員会 花園大学考古学研究室編 1974 (Fig. 2) にあり、中央のピットは湿気を除くためとしている。

(7)　防湿のためと考えられる。天王原遺跡では38基の土壙のうち側溝をもつのは4基で、『天王原遺跡発掘調査報告書』会見町教育委員会 1993、西吉田北遺跡では15基中2基『西吉田北遺跡』津山市教育委員会 1997、米里三ノ嵜遺跡では8基中1基、青木遺跡では14基中1基『青木遺跡発掘調査報告書Ⅰ～Ⅲ』鳥取県教育委員会 1976～1978、旦山遺跡では、袋状を呈する土壙約60基の内7基『旦山遺跡 惣台遺跡 野辺張遺跡 先旦山遺跡 旦山古墳群 奥田古墳 水神ケ峪遺跡』岡山県教育委員会 1999　でいずれも1割前後であるが、上種第5遺跡は13基中10基に側溝をもつ。『上種第5遺跡発掘調査報告』鳥取県東伯郡大栄町教育委員会 1985　また柄杓目遺跡ⅡのＥ区ＳＫ28・31は、中央にピットと、ピットから側溝まで溝を有する。『柄杓目遺跡Ⅱ』鳥取県気高郡鹿野町教育委員会 1990

(8)　上種第5遺跡では、掘り方は隅丸長方形で断面はほぼ垂直である。ピットは底面中央に1基あるものと、長方形の短辺中央に沿うように2基あるものとがある。(Fig. 2) 旦山遺跡の土壙113・209は長方形に壁が垂直に立ち上がり、四隅にピットをもつ。ピットの使用方法は、水抜き以外にも出入りに伴う丸木状の梯子跡や、複数のものは覆屋の可能性もあろう。

(9)　その他貯蔵穴自体の形状ではないが、段状(テラス状)遺構に貯蔵穴をもつものがある。野村高尾遺跡は、段状遺構の内側に大小の貯蔵穴が並ぶ。『野村高尾遺跡』津山市教育委員会 1995　夏谷遺跡のＣ地区14～16号貯蔵穴でも、テラス状にカットされた平坦面に貯蔵穴がつくられる。『夏谷遺跡発掘調査報告書』倉吉市教育委員会 1996　不入岡遺跡のＳＫ16・17は大小の貯蔵穴が並び小の貯蔵穴の底面に側溝をもつ。貯蔵物が異なる可能性がある。(Fig. 2)『不入岡遺跡』倉吉市教育委員会 1996

(10)　丸山遺跡がある。貼床はＦ－18・19・27・31、貼壁はＦ－32他。

(11)　袋状土坑から廃棄されたとみられる土器は多数の遺構でみられる。南谷大山遺跡Ｂ区ＳＫ04から廃棄されたとみられるヤマトシジミが出土している。『南谷大山遺跡 南谷ヒジリ遺跡 南谷22・24～28号墳』財団法人 鳥取県教育文化財団 建設省倉吉工事事務所 1993

(12)　土坑内に空間をもつものが、丸山遺跡Ｆ－３で、屋内貯蔵穴では中尾遺跡で確認されている。『中尾遺跡発掘調査報告書』倉吉市教育委員会 1992

(13)　丸山遺跡31号住居、天神原遺跡２・24号住居、天神原遺跡24号住居はいずれも１基である。「天神原遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査』4　岡山県教育委員会 1975　複数あるのは上種第６遺跡竪穴住居９号の２基、『上種第６遺跡発掘調査報告』鳥取県東伯郡大栄町教育委員会 1985、大田十二社遺跡の９号住居は５基、天神原遺跡５号住居では６基ある。二宮遺跡82号住居は、立て替えがあり20基程度の土坑を有する。『二宮遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 岡山県教育委員会 1978　米里三ノ嵜遺跡のＳＩ１内ＳＫ２・３は住居の改築に伴い埋められ、上面に貼床をなす。同様に天神原遺跡５号住居では、６基の貯蔵穴を埋め、上に貼床をなして生活空間を拡張している。

(14)　米里三ノ嵜遺跡のＳＩ２、南谷大山遺跡のＡ区ＳＩ04、田住松尾平遺跡のＳＩ－３がある。『田住松尾平遺跡発掘調査報告書』会見町教育委員会 1995　中尾遺跡では竪穴住居の西・南壁に２基の地下式横穴状の貯蔵穴をもつ特異な例である。１号住居の貯蔵穴は住居の壁面を斜め下方に掘り、報告では出入り口付近に木枠とその蓋の存在が想定されている。またこのような貯蔵穴をどのように掘削したかであるが、内部に掘削痕をもつものがある。南谷大山遺跡のＢ区ＳＫ02では、幅約３～７cmの工具痕が上から下に向かっている。中尾遺跡では１号住居内西側貯蔵穴の天井部に、幅約1.4cmの断面半円状の工具痕が報告されている。

(15)　『猫山遺跡―第３次発掘調査概報―』倉吉市教育委員会 1975 pp. 15-18

(16)　年代観は、弥生時代中期後半は東西伯耆とも青木０～１、後期前半は南谷大山遺跡Ⅱ～Ⅲ、青木遺跡２～３、大田十二社１、後期後半～古墳時代にかけて南谷大山遺跡Ⅲ～Ⅳ、青木遺跡３～４、大田十二社２～３、古墳時代前期前半は南谷大山Ⅴ～Ⅵ、青木５・６、大田十二社４～５である。また上記の編年以外に『弥生土器の様式と編年』山陽・山陰編　木耳社　1992　を参考にした。

　記号は、－・○・ｈは１～９程度、＝・◎・Ｈは10～20程度、〓は21以上を示す。掘立柱建物については、柱穴から出土した遺物は非常に少なく時期決定が困難であるため、原則として調査報告書の記載に準じた。したがって時期不明の建物跡やピット群は全て除外しており、確実に掘立柱建物がなかったとはいえない。

(17)　『コザンコウ遺跡・道祖神峰遺跡発掘調査報告書』倉吉市教育委員会 1986、『新編 倉吉市史』第一巻 古代編 新編倉吉市史編集委員会 1987　pp. 98

(18)　藤田憲司「単位集団の居住領域」『考古学研究122』1984　pp. 58-78

(19)　『宇谷第１遺跡 南谷大ナル遺跡』財団法人 鳥取県教育文化財団 建設省 倉吉工事事務所 1992

(20)　柄杓目遺跡Ⅱでは、貯蔵穴と掘立柱建物と重なり合う例があるが、概ね貯蔵穴よりも掘立柱建物は新しい。林ケ原遺跡では、掘立柱建物が貯蔵穴に切られることから一概に貯蔵穴→高床建物とはならないとしている。『久古第３遺跡・貝田原遺跡・林ケ原遺跡発掘調査報告書』財団法人 鳥取県教育文化財団 1984